

2006.2.3

企 画 局

金融環境の現状評価

（概 況）

企業金融を巡る環境は、総じて緩和の方向にある。CP・社債の発行環境は良好な状況にあるほか、民間銀行の貸出姿勢は緩和してきている。企業からみた金融機関の貸出態度も引き続き改善している。また、民間の資金需要は下げ止まりつつある。こうしたもとで、民間銀行貸出は増加幅が拡大しており、CP・社債の発行残高も前年を上回る水準で推移している。マネタリーベースの伸び率は前年比1%台で推移しており、マネーサプライは前年比2%程度の伸びで推移している。金融市場の動きをみると、日本銀行による潤沢な資金供給のもとで、短期金融市場ではきわめて緩和的な状況が続いている。為替・資本市場では、前月と比べ、長期金利および株価は上昇しているが、円の対ドル相場は下落している。

1. 貸出・資本市場調達

民間総資金調達をみると、マイナス幅がかなり縮小してきている（前年比：10月-0.4%→11月-0.4%→12月-0.1%、図表1）。

（1）銀行貸出

民間銀行貸出（特殊要因調整後）は、増加幅が拡大している（10月+0.9%

→11月+0.9%→12月+1.3%、図表1)。

資金需要面をみると、景気が着実に回復を続けている中で、企業のキャッシュフローは引き続き高水準にあるものの、設備投資などの支出が増加を続けていることから、民間の資金需要は下げ止まりつつある。

—— 「主要銀行貸出動向アンケート調査」(ローン・サーベイ)をみると、企業の資金需要(10~12月期)は、季節性の影響もあって引き続き改善し、既往ピークの水準となった(4~6月0→7~9月11→10~12月15、図表9)。

—— この間、同サーベイにより個人の資金需要をみると、横ばいで推移している(4~6月9→7~9月9→10~12月10、図表9)。

一方、銀行の貸出運営スタンスをみると、民間銀行は、全体として貸出姿勢を緩和してきている。

—— ローン・サーベイをみると、銀行の貸出運営スタンス(10~12月期)は、企業向けの「緩和」超幅がいずれの規模でも小幅拡大した(大企業向け：4~6月10→7~9月11→10~12月13、中小企業向け：4~6月26→7~9月33→10~12月34、図表9)。

—— 同サーベイにより、利鞘の設定姿勢を格付け別にみると、10~12月は、上・中位格付先では横ばいとなる一方、下位格付先については引き続き緩和方向の動きとなった。信用枠の設定姿勢は、各企業規模とも横ばい圏内で推移している。

▽ 企業の格付け別の利鞘設定姿勢(3か月間の変化)

(DI¹、%ポイント)

	04/4Q	05/1Q	2Q	3Q	4Q	(参考) 先行き見通し
上位格付先	-34	-22	-30	-24	-24	-2
中位格付先	-20	-12	-16	-16	-16	0
下位格付先	14	12	12	6	4	14

* 「拡大」 - 「縮小」(値が小さいほど緩和的)。

▽ 企業規模別の信用枠設定姿勢（3か月間の変化）

(DI^{*}、%ポイント)

	04/4Q	05/1Q	2Q	3Q	4Q	(参考) 先行き見通し
大企業	7	5	6	6	7	3
中堅企業	11	8	10	10	9	8
中小企業	10	5	8	7	8	10

* 「緩和」 + 0.5 × 「やや緩和」 - 0.5 × 「やや厳格化」 - 「厳格化」。

—— 一方、企業からみた金融機関の貸出態度判断について、零細企業を対象にした国民公庫の調査をみても、緩やかな改善傾向にある（図表8、10）。

企業の資金繰り判断は、引き続き改善傾向にある。

—— 中小公庫や国民公庫等の調査による資金繰り判断 DI をみると、振れを伴いつつも、引き続き改善傾向にある（図表8、10）。

貸出金利は、このところ弱含んでいる（図表12、13）。

—— 新規貸出約定平均金利は、月々の振れを均してみれば、幾分低下している。

(2) 資本市場調達

CP・社債の発行残高は、12月までの計数をみると、前年を上回る水準で推移している（10月+3.0%→11月+4.1%→12月+4.4%）。

—— CPについて、1月の対短国スプレッドをみると、金融機関の期越え物に対する引受スタンスが幾分慎重化していること等から3ヶ月物のスプレッドがやや上昇しているものの、全体としてみれば引き続き低水準で推移しており、良好な発行環境が続いている。

—— 社債の発行環境については、1月も発行スプレッドは低水準で推移しており、良好な状況となっている。社債の発行額は、一般債振替制度の導入もあって社債発行の様子見する先がみられたこと等を背景に、低水準に止まった。この間、社債発行残高は、引き続き前年を上回って推移している（11月+1.3%→12月+2.5%→1月+2.8%、図表6）。

▽ CP・社債の発行金利における信用スプレッド

(月平均、%)

		05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
CP	A1+格	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01
	A1格	0.05	0.05	0.05	0.04	0.05	0.07
	A2格	0.20	0.20	0.15	0.14	0.15	0.14
社債	AAA格	0.09	0.08	0.07	0.07	0.07	—
	AA格	0.09	0.12	0.11	0.10	0.07	0.15
	A格	0.25	0.26	0.27	0.26	0.25	0.29

(注) 1. CPの発行レートは、全ターム平均ベース。社債発行金利は、発行金利が相対的に高いノンバンク分等を除いたベース。また、いずれも銀行発行分は含まない。信用スプレッドは、CPは短国(3か月物)、社債は同年限の国債の流通利回りとの利回り格差の単純平均値。

2. CPのA2格は、スプレッドの厚い商社を除いたベース。

▽ 公募社債発行額

(月平均、億円)

	05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
公募社債発行額	4,827	4,973	4,607	6,920	1,300	1,450
うちBBB格 (シェア%)	783 (16.2)	1,173 (23.6)	667 (14.5)	900 (13.0)	100 (7.7)	700 (48.3)

(注) 起債日ベース。銀行債は含まない。

— エクイティファイナンスをみると、1月の増資は引き続き堅調に推移している。一方、転換社債は低水準に止まった。

▽ エクイティファイナンスの状況

(月平均、億円)

	05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
転換社債発行額	1,258	1,031	1,048	950	1,634	325
株式調達額	1,351	1,343	2,485	1,677	3,853	1,029

(注) 国内外市場の合計(株式調達額の06/1月は国内市場のみの値)。払込み日ベース。銀行の調達分は含まない。

2. マネー関連指標

(1) マネタリーベースの動向

マネタリーベースの伸び率は、前年比1%台で推移している(11月+1.5%→12月+1.0%→1月+1.4%、図表17)。

—— 銀行券発行残高の伸び率は、12月以降、前年比2%程度となっている(11月+1.1%→12月+1.9%→1月+1.9%)。

(2) マネーサプライの動向

マネーサプライ(M2+CD)は、前年比2%程度の伸びで推移している(10月+2.0%→11月+2.1%→12月+2.0%、図表17)。

3. 企業倒産

企業倒産件数は、12月は1,149件、前年比+3.6%となった(図表21)。

以 上

「金融環境の現状評価」参考計表

- | | |
|---------|------------------------|
| (図表 1) | クレジット関連指標 |
| (図表 2) | 民間部門資金調達 |
| (図表 3) | 民間銀行貸出 |
| (図表 4) | 民間銀行貸出の内訳 |
| (図表 5) | コミットメント・ライン等 |
| (図表 6) | 資本市場調達（CP・社債） |
| (図表 7) | 資本市場調達（株式） |
| (図表 8) | 企業金融関連指標 |
| (図表 9) | 主要銀行貸出動向アンケート調査 |
| (図表 10) | 企業の資金繰り・金融機関の貸出態度 |
| (図表 11) | 企業の資金過不足 |
| (図表 12) | 金利関連指標 |
| (図表 13) | 貸出金利 |
| (図表 14) | スプレッド貸出のスプレッド |
| (図表 15) | CP・社債の信用スプレッド |
| (図表 16) | インフレ予想 |
| (図表 17) | マネー関連指標 |
| (図表 18) | マネタリーベース |
| (図表 19) | マネーサプライ |
| (図表 20) | M2 + CD増減とバランスシート項目の対応 |
| (図表 21) | 企業倒産関連指標 |
| (図表 22) | 企業倒産 |
| (図表 23) | 資産保有状況 |

(図表1)

クレジット関連指標

(1) 銀行貸出残高

	— 前年比%						
	2005年	05/4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12
銀行計	-0.1 [-2.1]	-0.5 [-2.7]	0.2 [-2.1]	1.0 [-0.5]	0.9 [-0.7]	0.9 [-0.6]	1.3 [-0.2]
都銀等	-1.9	-2.3	-1.9	-0.7	-0.8	-0.8	-0.4
地銀・地銀Ⅱ計	2.1	1.8	2.7	3.1	3.0	3.0	3.3
地銀	3.2	3.2	4.1	3.0	3.0	2.9	3.3
地銀Ⅱ	-1.2	-2.7	-1.7	3.3	3.2	3.2	3.6

- (注) 1. 平残ベース。償却・為替・流動化要因調整後。[]内の計数は調整前。
2. 都銀等は都銀・長信銀・信託銀。

対外非公表

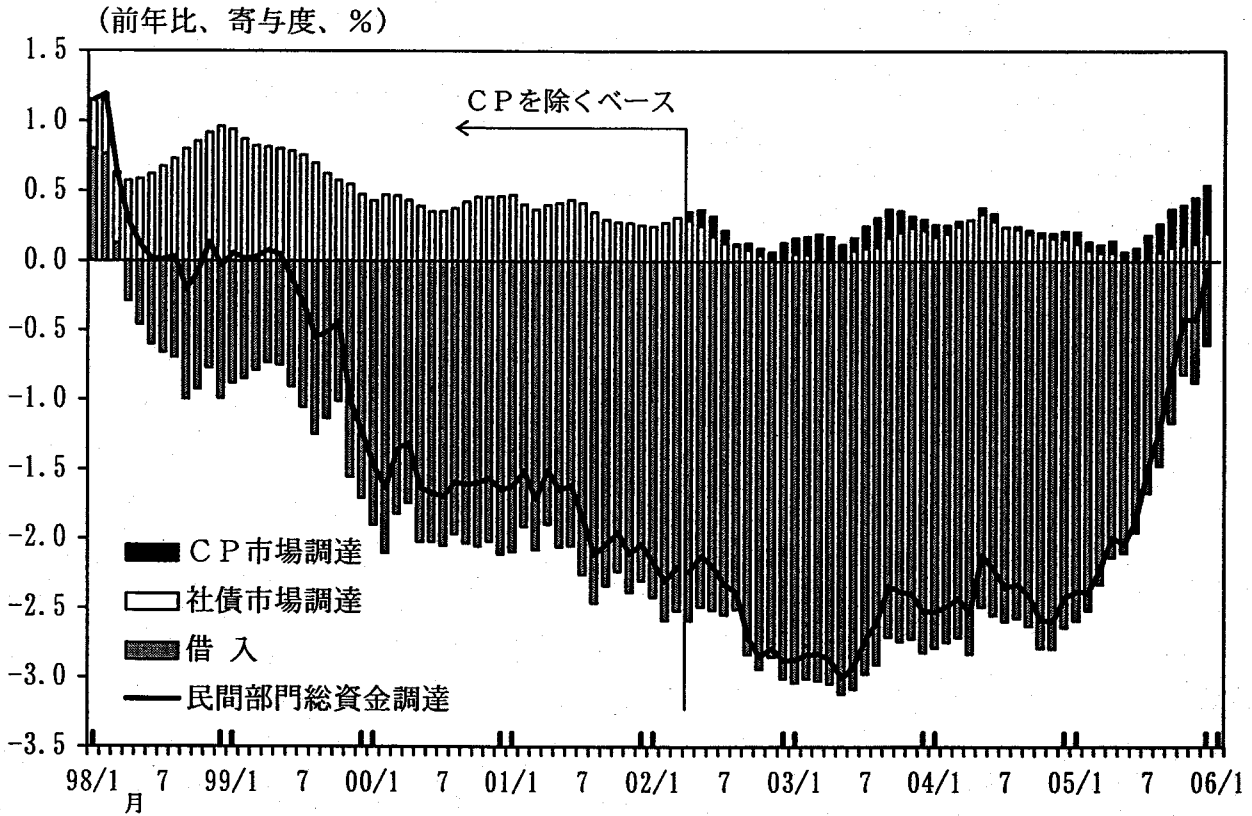
(2) 民間部門総資金調達

	— 平残前年比%、前年比寄与度%ポイント						
	2005年	05/4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12
民間部門総資金調達	-1.4	-2.0	-1.2	-0.3	-0.4	-0.4	-0.1
銀行・信金・外銀計	-0.2	-0.5	0.0	0.6	0.6	0.5	0.8
生保	-0.4	-0.5	-0.3	-0.2	-0.2	-0.2	-0.2
寄与度							
政府系	-1.1	-1.1	-1.1	-1.2	-1.2	-1.2	-1.2
3 公庫	-0.2	-0.2	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3
住宅公庫	-0.9	-0.8	-0.9	-0.9	-0.9	-0.9	-0.9
直接市場調達	0.2	0.1	0.3	0.5	0.4	0.5	0.5
C P	0.2	0.1	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3
社債	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2

- (注) 1. 償却・為替・流動化要因調整後。
2. 銀行・信金・外銀計は、都銀、長信銀、信託銀、地銀、第二地銀、外銀、信金の合計。
3. 当月の計数を把握できない場合には、前年比伸び率を前月比横這いと置いている。
4. 住宅公庫の当月の計数については、業務局財政収支Gの予測値を用いている。
5. 社債残高は日証協、アイ・エヌ情報センターのデータにより計算。前当月末残の平均を平残とした。
6. 今回、社債残高の計算の前提を変更した(図表6参照)ことから、計数が一部遡及改訂されている。

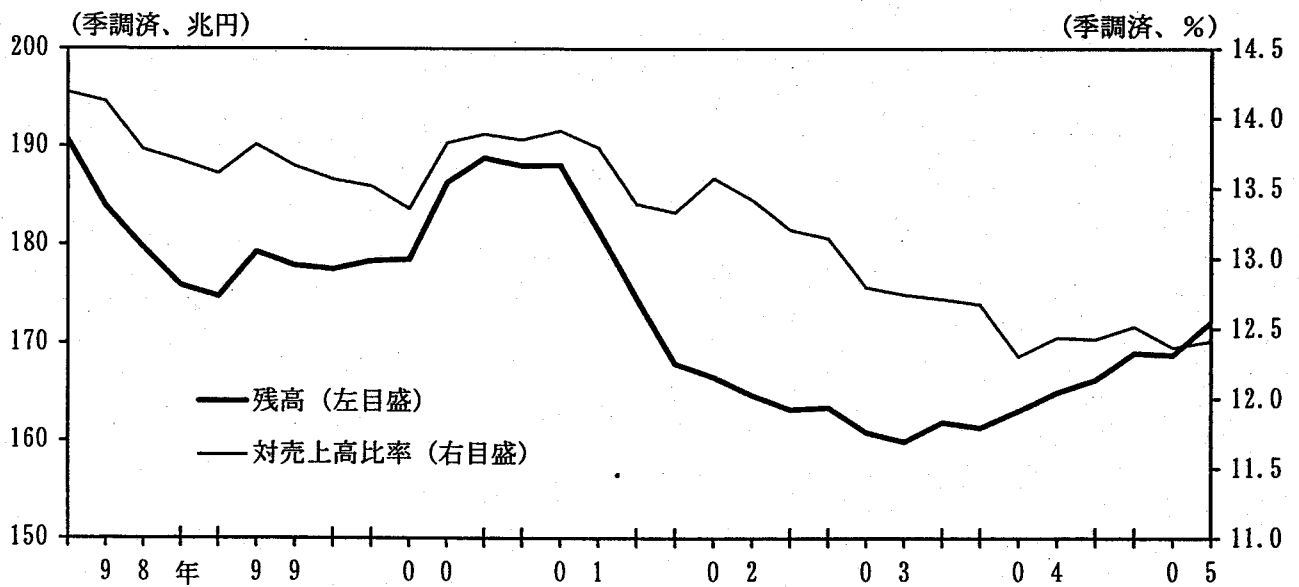
民間部門資金調達

対外非公表



(注) 1. 民間部門総資金調達およびその内訳の定義については図表1参照。
2. 償却・為替・流動化要因調整後。

(参考) 企業間信用



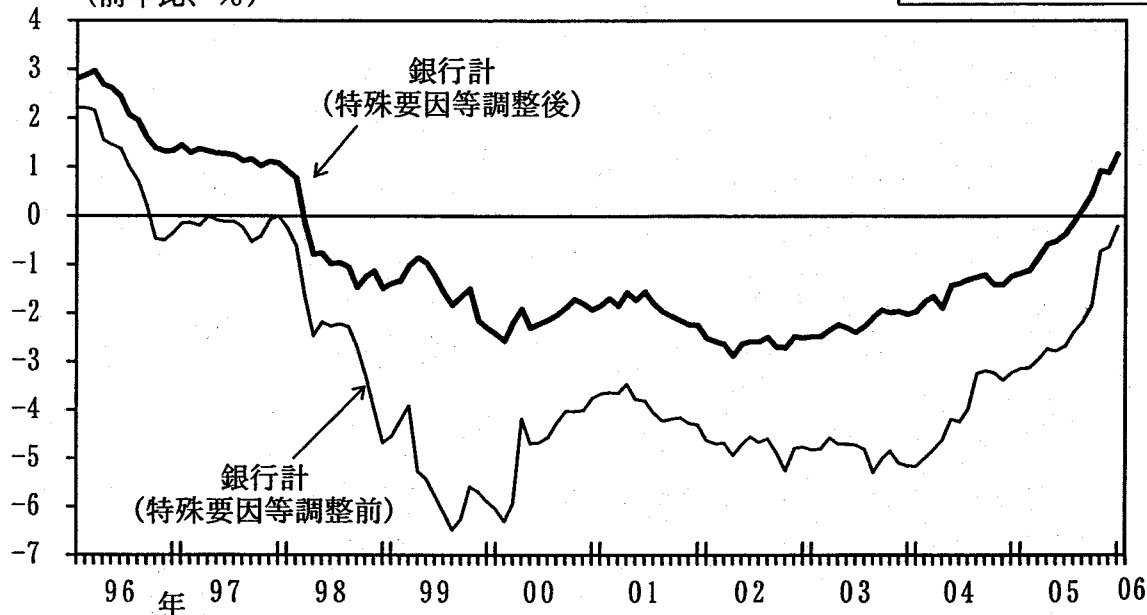
(注) 企業間信用 (買掛金+支払手形)、売上高 (年率換算値) とともに法人季報 (全産業・全規模計) ベース。

民間銀行貸出

(1) 民間銀行貸出

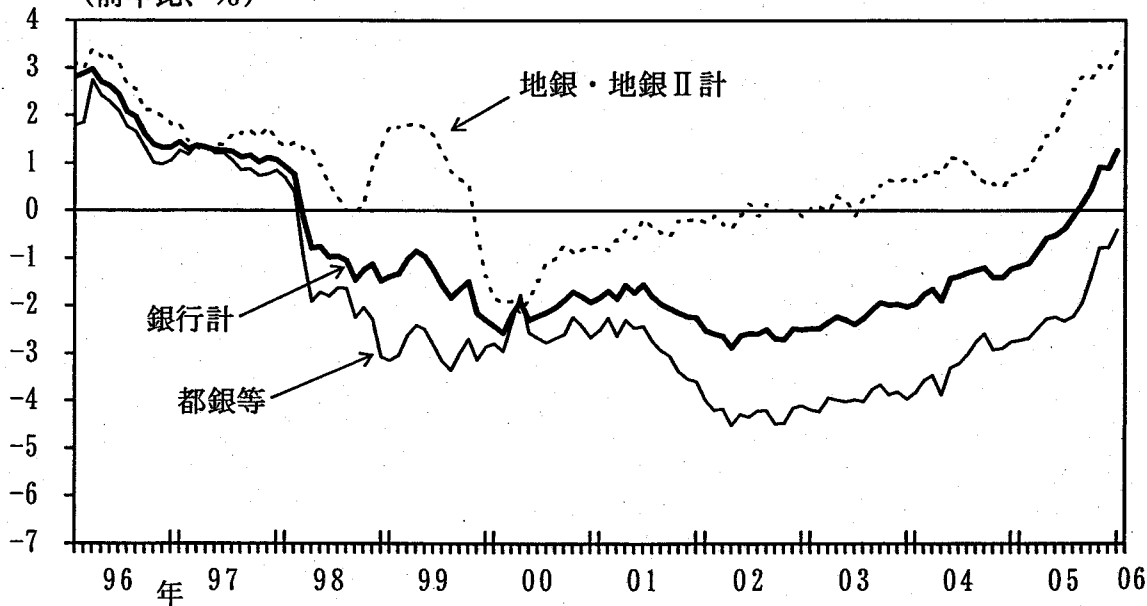
(前年比、%)

98/9月以前の
「特殊要因等調整後」
計数は対外非公表



(2) 業態別の動向 (特殊要因調整後)

(前年比、%)



(注) 1. 総貸出平残ベース。

2. 特殊要因等調整後計数は、貸出の実勢をみるため、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、③貸出債権の償却による変動分、④旧国鉄清算事業団向け貸出の一般会計への承継分、および⑤旧住宅金融債権管理機構向け貸出の整理回収機構への承継分を調整したもの。あくまでも種々の前提に基づく試算であり、試算結果については幅を持ってみる必要がある。

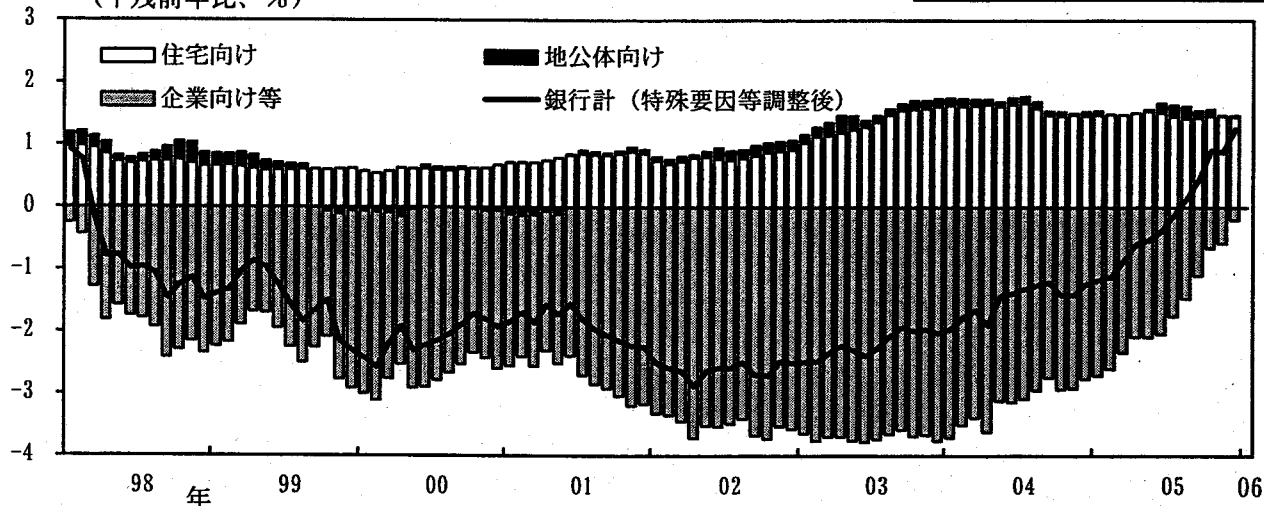
3. 銀行計は、都銀等、地銀、地銀IIの合計。

民間銀行貸出の内訳

(1) 借入主体別

(平残前年比、%)

内訳の計数および98/9月以前の銀行計は対外非公表

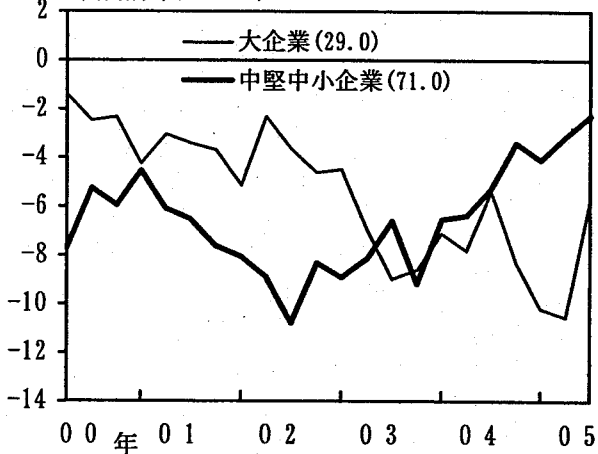


(注) 計数は5業態ベース。住宅ローン以外の個人向けは企業向け等に含まれる。

(2) 企業向け貸出の内訳

<企業規模別>

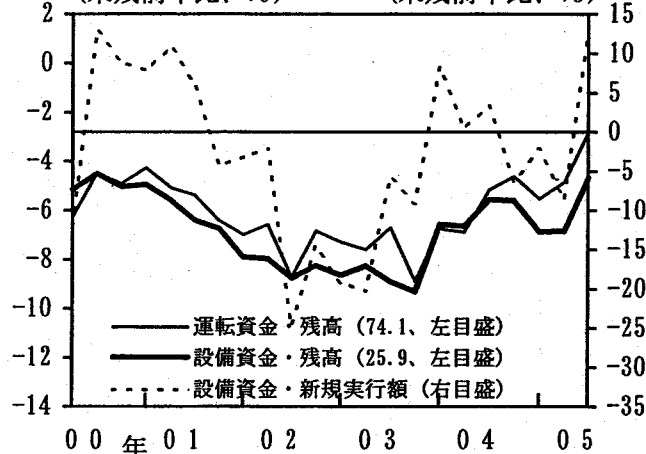
(末残前年比、%)



<資金使途別>

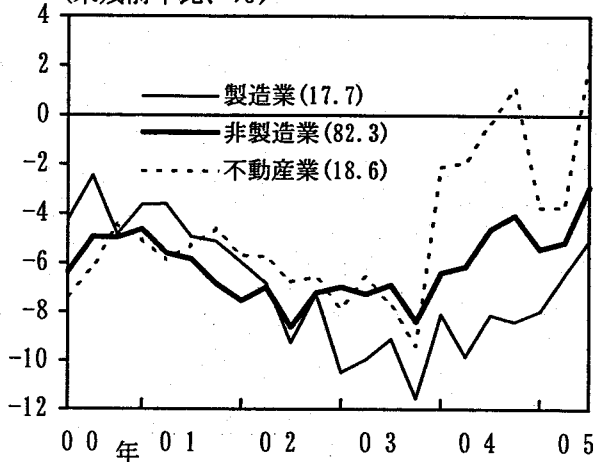
(末残前年比、%)

(末残前年比、%)



<業種別>

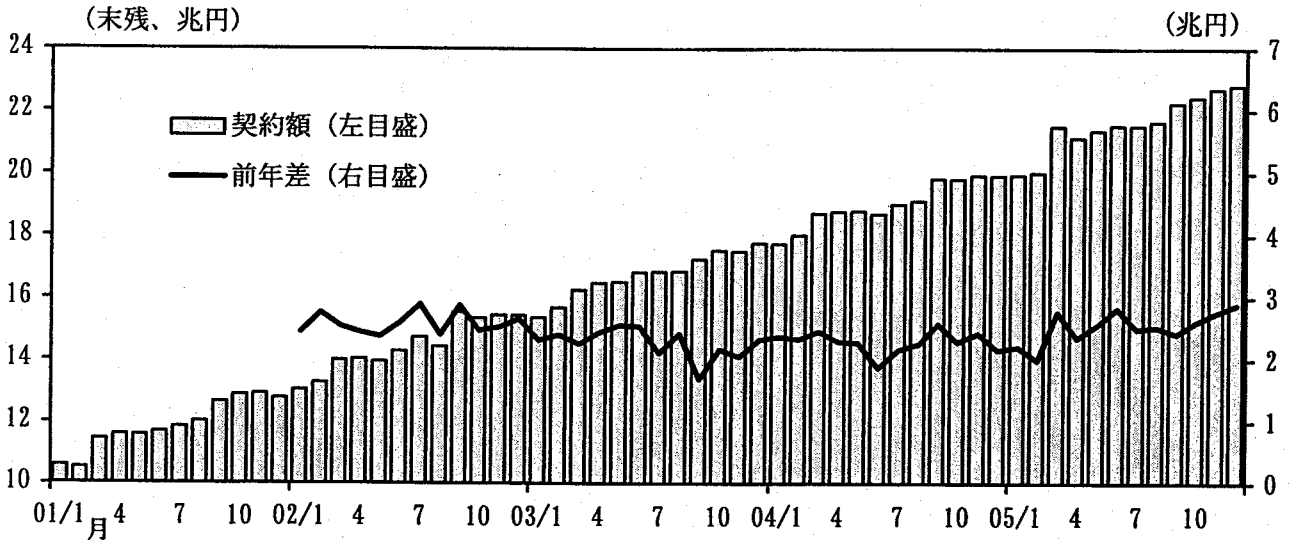
(末残前年比、%)



(注) 計数は国内銀行ベース、特殊要因等調整前。()内は直近(05/3Q)の企業向け貸出残高に占めるウェイト。

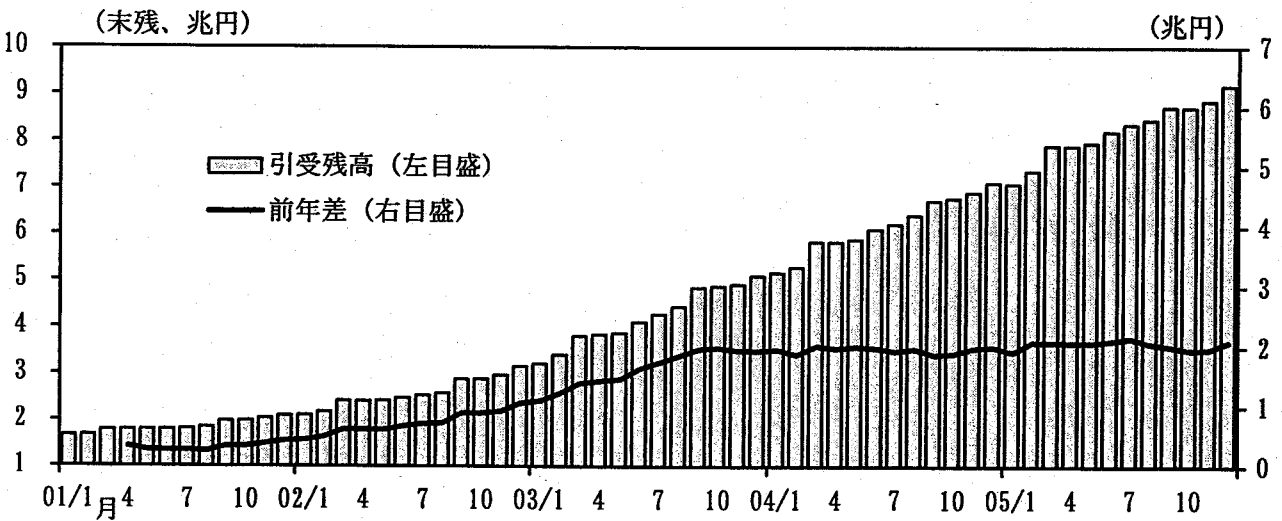
コミットメント・ライン等

(1) コミットメント・ライン契約額

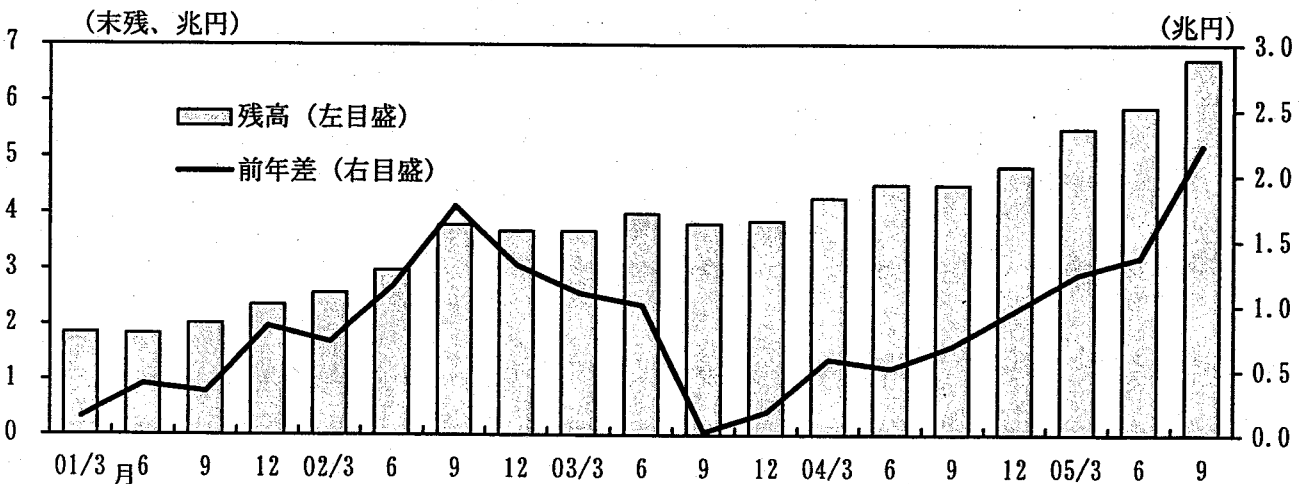


(2) 私募債引受残高 (都銀等分)

対外非公表



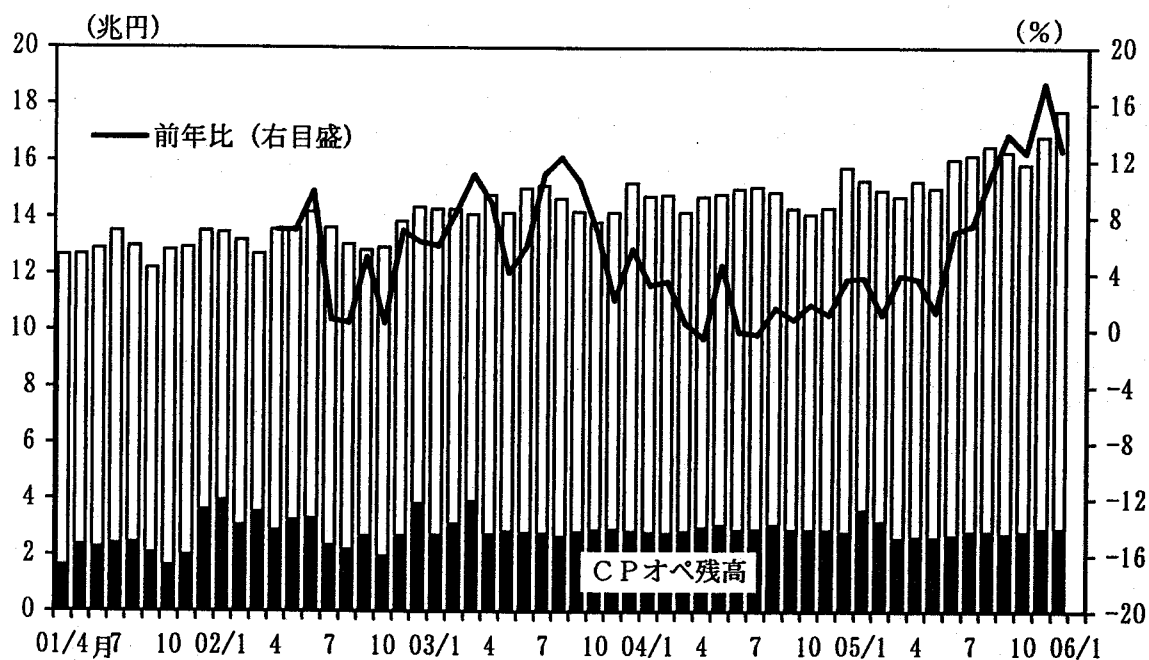
(3) 債権流動化関連商品残高



(注) 計数は資金循環による。

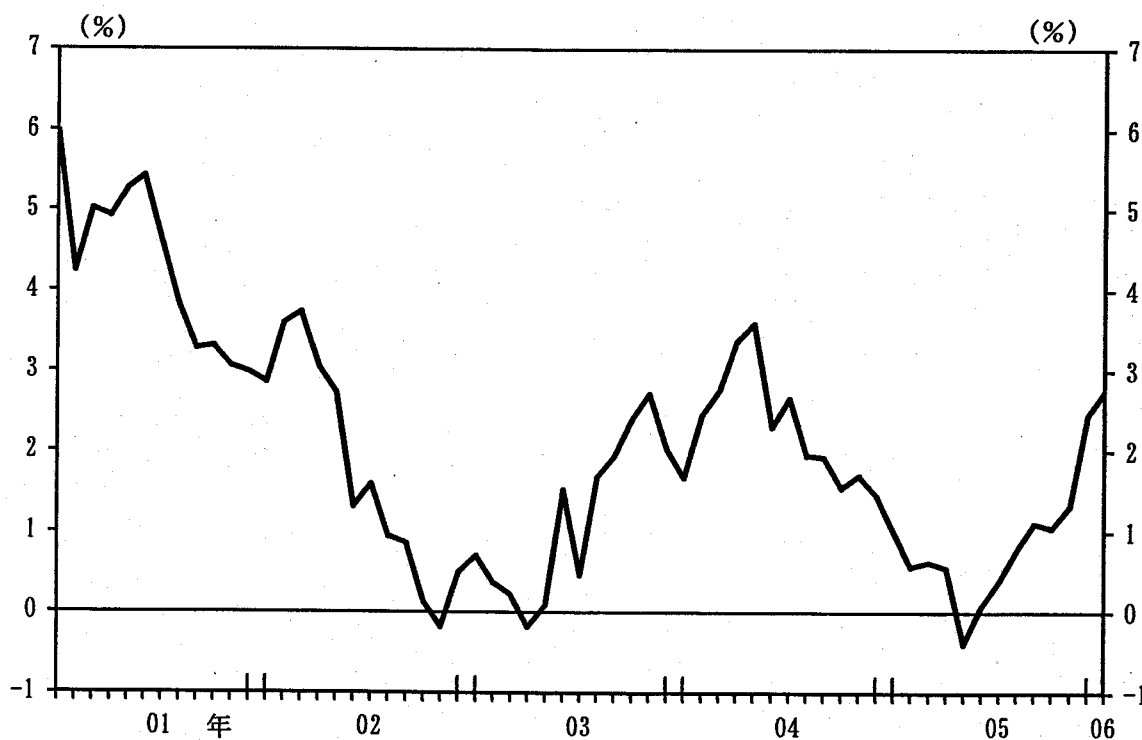
資本市場調達 (CP・社債)

(1) CP発行残高(末残)



- (注) 1. 日本銀行と当座勘定取引のある銀行・証券会社の引受けによるもの。
2. 銀行発行分を含まない。

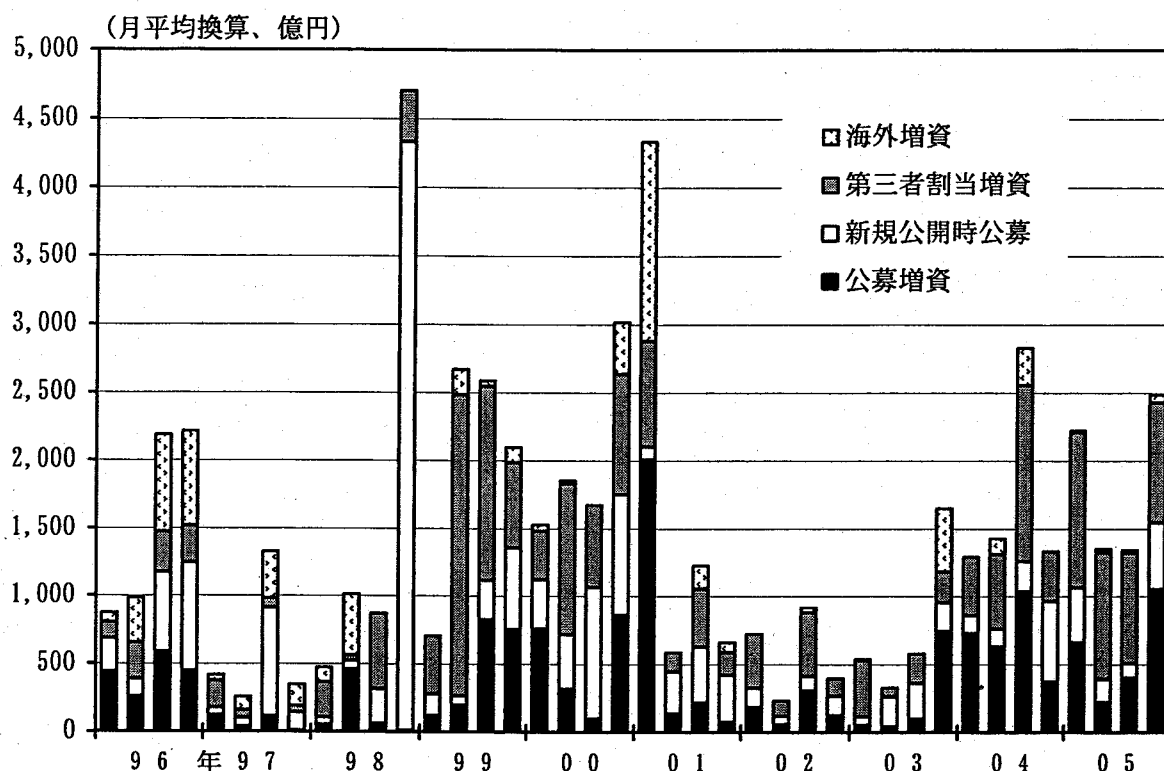
(2) 社債発行残高(末残前年比)



(注) 社債発行残高の前年比は以下の前提のもとで計算している。なお、今回、計数の確度をより高める観点から、計算の前提の見直しを行った。

- ① 国内、海外で発行された普通社債の合計値。
- ② 銀行発行分を含む。
- ③ 直近月分は、国内私募分に推定値を用いているなど、速報値。

資本市場調達 (株式)



(四半期は月平均換算、億円)

	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/11月	12	06/1
合計 (前年)	1,351 (1,428)	1,343 (2,828)	2,485 (1,334)	1,677 (1,907)	3,853 (1,463)	n. a. (726)
公募増資 (前年)	222 (626)	401 (1,034)	1,049 (370)	203 (388)	1,948 (519)	214 (107)
新規公開 (前年)	168 (132)	105 (222)	494 (592)	731 (1,254)	553 (259)	6 (0)
第三者割当 (前年)	932 (550)	812 (1,297)	885 (366)	573 (265)	1,352 (669)	808 (619)
海外増資 (前年)	29 (120)	25 (275)	57 (5)	170 (0)	0 (16)	n. a. (0)

(注) 1. 計数は銀行発行分を含まない。

2. 98/4Qの新規公開時公募の急増は、NTTドコモによるもの(10月、約1.2兆円)。

3. 01/1Qの公募増資、海外増資の急増は、NTTドコモによるもの(2月、合計約1.0兆円)。

4. データは、アイ・エヌ情報センターによる(ただし、海外増資は日本証券業協会)。

(図表8)

企業金融関連指標

＜資金繰りD.I.＞

							— %ポイント		
		04/ 10~12月	05/ 1~3	4~6	7~9	10~12	05/11月	12	06/1月
全国短観（全産業）	「楽である」 - 「苦しい」	3	3	6	6	6			
大企業		18	20	22	20	21			
中小企業		-5	-5	-4	-3	-2			
中小企業金融公庫	「余裕」 - 「窮屈」	-1.6	-0.5	-1.8	-0.6	0.7	0.1	1.7	-0.9
商工中金	「(前月比) 好転」 - 「(前月比) 悪化」	-0.8	-1.2	-1.2	-0.2	0.3	-0.2	0.3	-0.7
国民生活金融公庫	「(前期比) 好転」 - 「(前期比) 悪化」	-25.3	-28.6	-22.2	-24.0	-21.9			

(注) 中小企業金融公庫・商工中金の四半期データは、月次データの平均。

＜金融機関の貸出態度＞

							— %ポイント		
		04/ 10~12月	05/ 1~3	4~6	7~9	10~12	05/11月	12	06/1月
貸出態度判断D.I.									
全国短観（全産業）	「緩い」 - 「厳しい」	10	11	13	15	15			
大企業		19	22	23	24	25			
中小企業		5	7	8	9	11			
中小企業金融公庫	「緩和」 - 「厳しい」	35.5	40.3	40.7	46.2	45.1	45.9	44.9	45.2
国民生活金融公庫	「(前期比) 容易」 - 「(前期比) 困難」	-10.5	-9.5	-7.6	-7.0	-5.8			

貸出運営スタンス（主要銀行貸出動向アンケート調査）

大企業向け	「(積極化)+0.5×「やや積極化」 - 「(慎重化)+0.5×「やや慎重化」」	17	8	10	11	13			
中小企業向け		41	26	26	33	34			

(注) 中小企業金融公庫の四半期データは、月次データの平均。

＜企業債務の状況＞

	— 兆円、%						
	04/ 1~3	4~6	7~9	10~12	05/ 1~3	4~6	7~9
資金過不足額（-：不足）	4.7	7.6	4.1	0.9	1.8	0.6	-1.2
資金過不足額②（-：不足）	15.2	19.7	16.6	14.5	16.0	15.1	13.8
債務対売上高比率	26.9	26.1	25.8	25.0	24.7	23.2	22.7

(注) 1. 資金過不足額=キャッシュフロー-資金使途、1年間の累計額。

資金使途は、設備投資、運転資金増減、手許決済資金増減、配当金、自社株買い等の合計。

資金過不足額②は、資金使途を設備投資（除くソフトウェア投資）、運転資金増減、手許決済資金増減の合計としたもの。内訳項目も含めた資金過不足額の詳細な定義は図表11を参照。

2. 債務対売上高比率=債務/年換算売上高（債務=社債+長短借入+受取手形割引残高-現預金）、季調済。

主要銀行貸出動向アンケート調査

＜資金需要の動向＞

(D.I.、%ポイント)

	04/ 7-9月	10-12	05/1-3	4-6	7-9	10-12		
企業向け	1	5	-1	0	11	15	(15)	
	(5)	(5)	(1)	(-1)	(0)	(7)		
	大企業向け	3	0	-3	0	7		13
	中堅企業向け	4	1	-1	-3	8		11
中小企業向け	0	6	3	-4	9	13		
地公体向け	2	3	13	5	-1	10	(2)	
	(0)	(1)	(3)	(3)	(0)	(1)		
個人向け	14	10	7	9	9	10	(7)	
	(6)	(6)	(1)	(2)	(7)	(7)		

(注) 1. D.I. = (「増加」とした回答金融機関構成比 + 0.5 × 「やや増加」とした回答金融機関構成比) - (「減少」とした回答金融機関構成比 + 0.5 × 「やや減少」とした回答金融機関構成比)。

2. 3か月における変化。()内は、前回調査時点における今後3か月の見通し。

＜貸出運営スタンス＞

(D.I.、%ポイント)

	04/ 7-9月	10-12	05/1-3	4-6	7-9	10-12	
大企業向け	14	17	8	10	11	13	(8)
	(12)	(15)	(12)	(11)	(8)	(10)	
中堅企業向け	26	30	19	19	22	24	(24)
	(23)	(30)	(23)	(17)	(17)	(21)	
中小企業向け	35	41	26	26	33	34	(34)
	(35)	(42)	(35)	(27)	(28)	(33)	

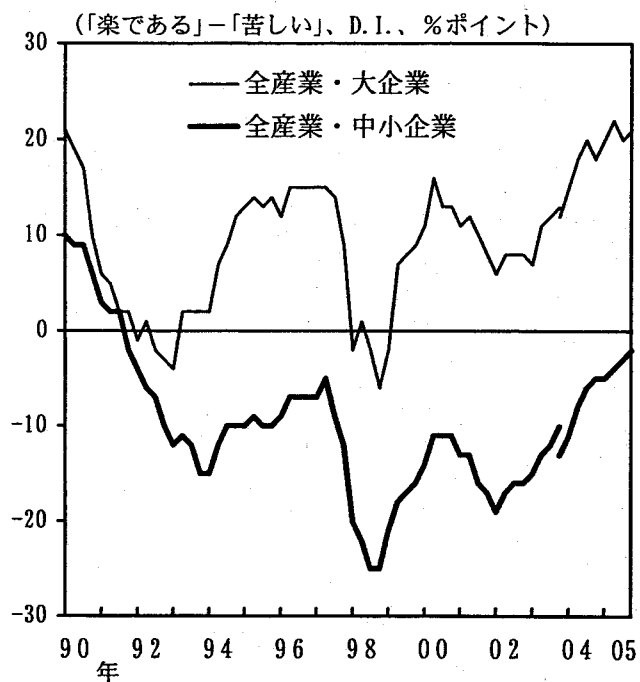
(注) 1. D.I. = (「積極化」とした回答金融機関構成比 + 0.5 × 「やや積極化」とした回答金融機関構成比) - (「慎重化」とした回答金融機関構成比 + 0.5 × 「やや慎重化」とした回答金融機関構成比)。

2. 3か月における変化。()内は、前回調査時点における今後3か月の見通し。

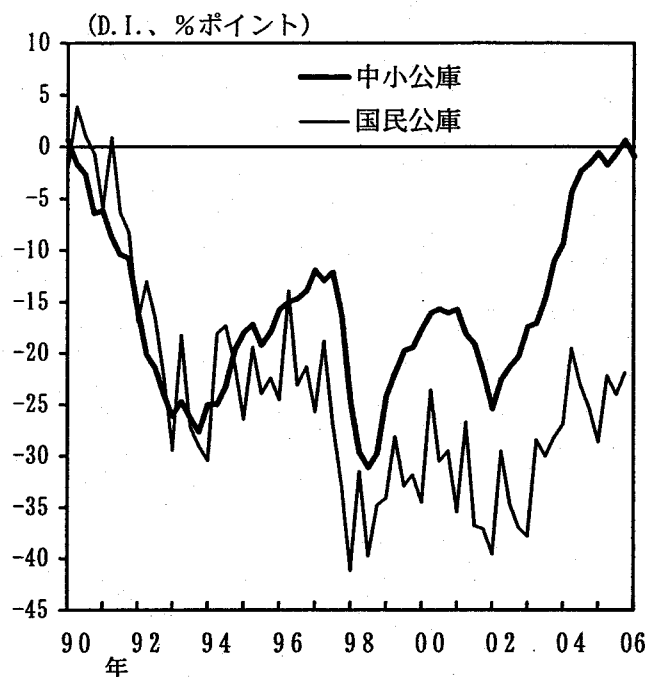
企業の資金繰り・金融機関の貸出態度

(1) 企業の資金繰り

<短観>



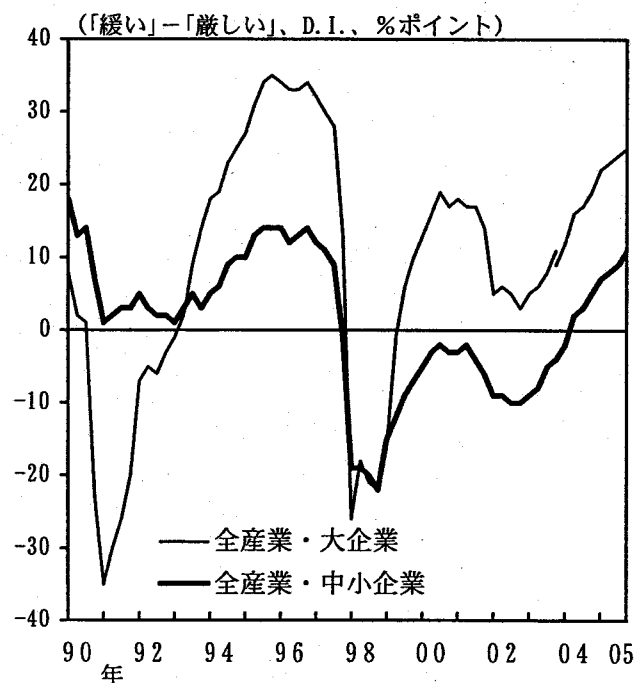
<中小公庫・国民公庫>



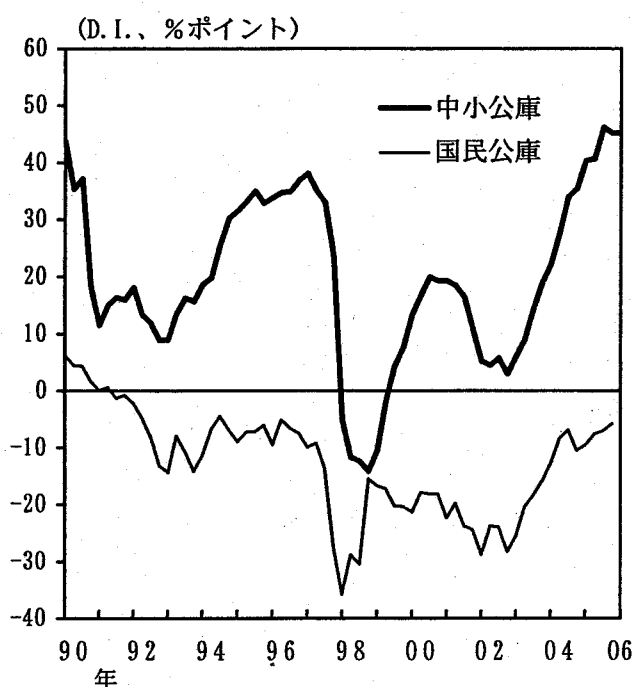
- (注) 1. 短観は04/3月調査より見直しを実施。旧ベースは03/12月調査まで、新ベースは03/12月調査から(下の(2)も同じ)。
 2. 中小公庫のD.I.は「余裕」-「窮屈」、国民公庫のD.I.は「好転」-「悪化」。調査対象は、それぞれの取引先の中小・零細企業(中小公庫の取引先は原則資本金3億円以下または従業員300人以下の企業、国民公庫の取引先は約9割が従業員9人以下の企業)。
 3. 中小公庫の計数は四半期平均値であり、06/1Qは1月の値(下の(2)も同じ)。

(2) 企業からみた金融機関の貸出態度

<短観>



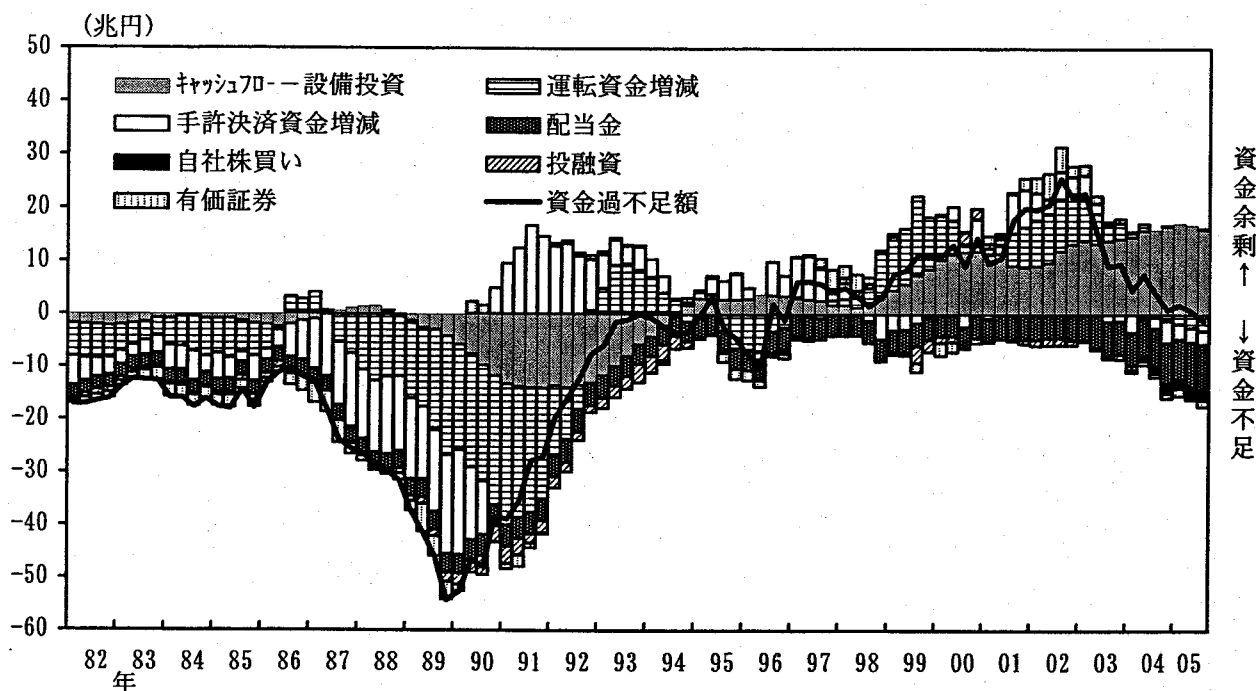
<中小公庫・国民公庫>



- (注) 中小公庫のD.I.は「緩和」-「厳しい」、国民公庫のD.I.は「容易になった」-「難しくなった」。

企業の資金過不足

(1) 企業の資金過不足額

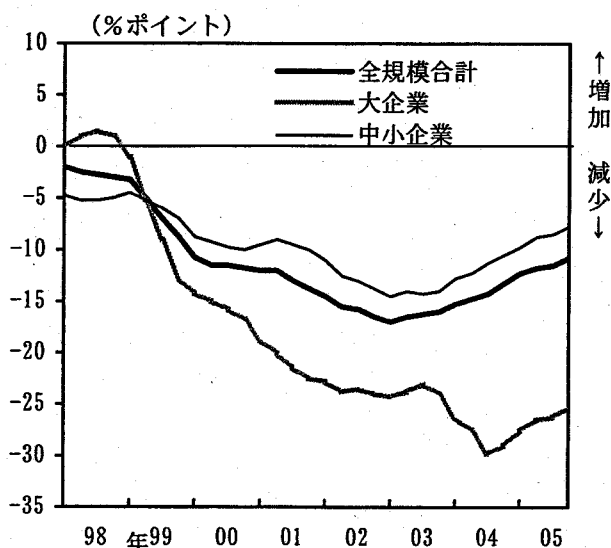
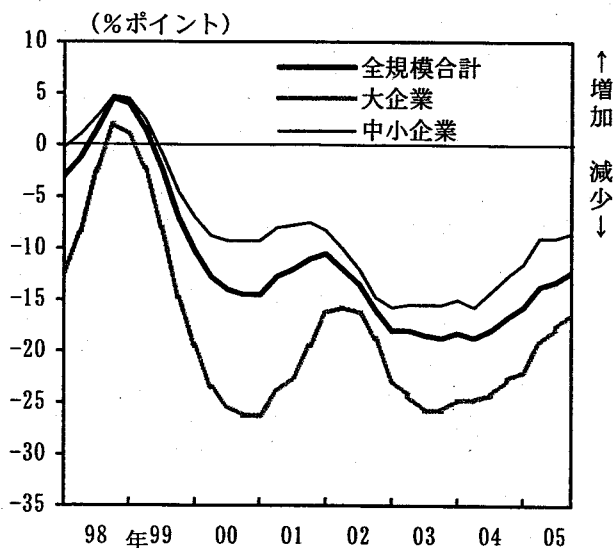


- (注) 1. 各計数はいずれも過去1年間の累計。主な定義は以下の通り。
 ① 資金過不足額=キャッシュフロー- (設備投資・運転資金等の資金使用の合計)
 ② キャッシュフロー=経常利益/2 + 減価償却費、③ 運転資金=在庫+売掛金-買掛金、
 ④ 手許決済資金=現金+預金
 2. 設備投資は01/7-9月期以降ソフトウェア投資を含み、自社株買いのデータ取得は04/4-6月期以降。
 このため、1年間の累計でみることができるのは、それぞれその3四半期後以降。
 3. 投融資と有価証券は株式を除く(近年、時価評価の影響で株式残高が見かけ上、大きく変動しているため)。
 4. 計数は法人季報ベース。但し、配当金は法人年報の資本金1千万円以上の企業の計数を用い、中間配当が10-12月期、年度末配当が翌年度4-6月期に支払われると仮定して計算している。

(2) 企業の有利子負債残高見通し (短観)

<製造業>

<非製造業>



- (注) 1. 3か月後の有利子負債残高の予測についての判断に関するD. I. .
 回答選択肢は、「増加」「横ばい」「減少」の3種類。
 2. データは後方4期移動平均。04/3月以降は、新ベースの変化幅を用いて、旧ベースの03/12月短観の値を延長したものを使用。

(図表12)

金利関連指標

交付税特会向けを除く貸出約定平均金利、
スプレッド貸出のスプレッドの計数は
対外非公表

＜企業の資金調達コスト＞

		05/ 1～3月	4～6	7～9	10～12	05/11月	12	06/1
短期プライムレート(末値)		1.375	1.375	1.375	1.375	1.375	1.375	1.375
長期プライムレート(末値)		1.65	1.45	1.55	1.85	1.90	1.85	1.80
貸出約定平均金利								
新 規	短期	1.410	1.377	1.380	1.298	1.235	1.355	—
	除く交付税特会向け	1.678	1.750	1.733	1.669	1.747	1.703	—
	長期	1.464	1.457	1.322	1.436	1.377	1.433	—
ス ト ック	総合	1.430	1.410	1.351	1.361	1.297	1.395	—
	短期	1.375	1.318	1.300	1.270	1.256	1.273	—
	長期	1.876	1.845	1.805	1.780	1.781	1.774	—
	総合	1.719	1.695	1.660	1.635	1.636	1.623	—
スプレッド貸出の	短期	0.67	0.58	0.52	—	0.55	—	—
スプレッド(3業態)	長期	0.98	0.94	0.81	—	0.74	—	—
CP発行レート(3ヶ月物) (A-1格またはJ-1格以上)		0.05	0.04	0.05	0.05	0.06	0.05	0.09
スプレッド	A-1+	+0.01	+0.01	+0.01	+0.01	+0.01	+0.02	+0.01
	A-1	+0.05	+0.05	+0.05	+0.05	+0.04	+0.05	+0.07
	A-2	+0.15	+0.20	+0.20	+0.15	+0.14	+0.15	+0.14
社債発行レート(AA格)		1.16	1.10	1.04	1.39	1.38	1.55	0.62
スプレッド	AAA	+0.08	+0.09	+0.08	+0.07	+0.07	+0.07	—
	AA	+0.14	+0.09	+0.12	+0.11	+0.10	+0.07	+0.15
	A	+0.24	+0.25	+0.26	+0.27	+0.26	+0.25	+0.29

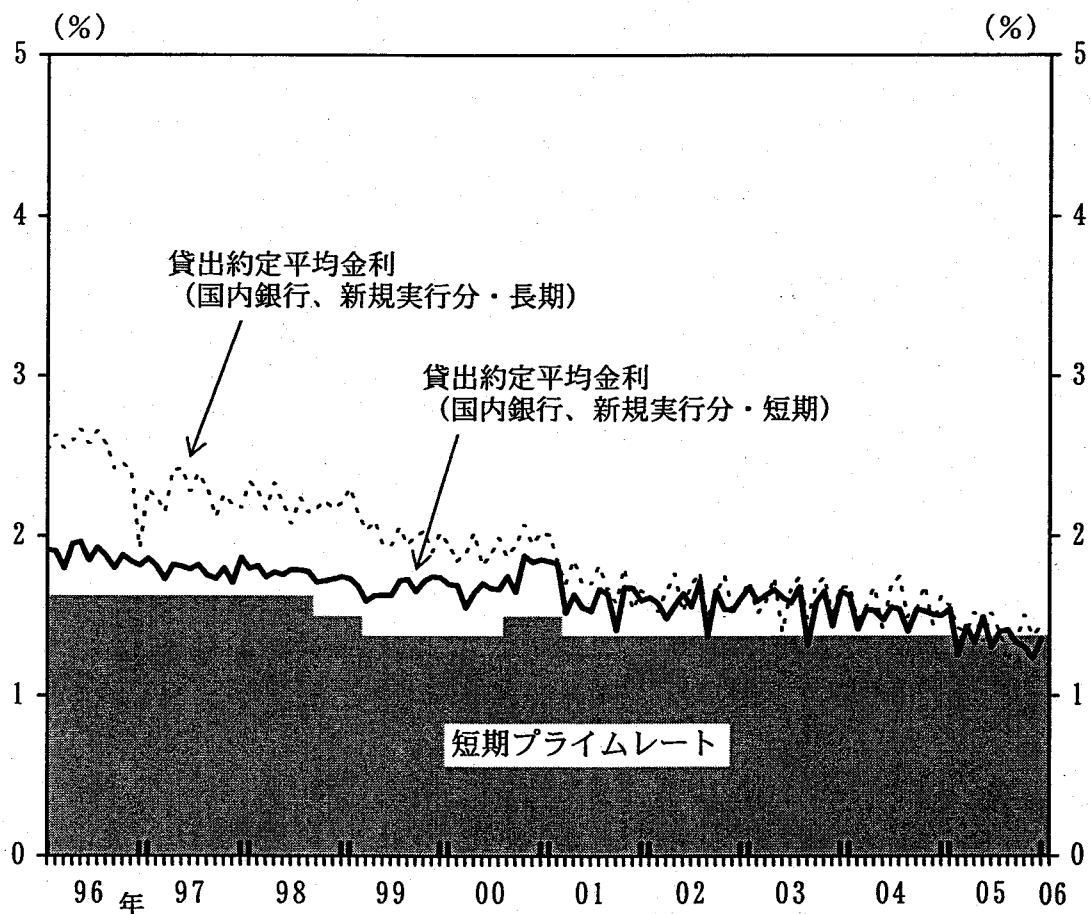
- (注) 1. CP発行レート、スプレッドは、月中平均値(オペ先29社ベース)。スプレッドは、全ターム平均の発行レートと短国3ヶ月物利回りとの格差。A-2格のスプレッドは、スプレッドの厚い商社を除くベース。
2. 社債発行レート、スプレッドは、銀行・ノンバンク分等を除く、月中平均値。発行レートは、全ターム平均ベース。スプレッドは、発行レートと同年限の国債流通利回りとの格差。
3. 短プラ、長プラの直近(2/3日)の値は、短プラは1.375%、長プラは1.80%。

＜預金金利＞

		05/ 1～3月	4～6	7～9	10～12	05/11月	12	06/1
普通預金		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
定期預金(1,000万円以上、6か月)		0.020	0.020	0.020	0.020	0.020	0.020	0.020

(注) 月末、四半期末を含む週の平均店頭表示金利。06/1月の普通預金および定期預金は直近週の値。

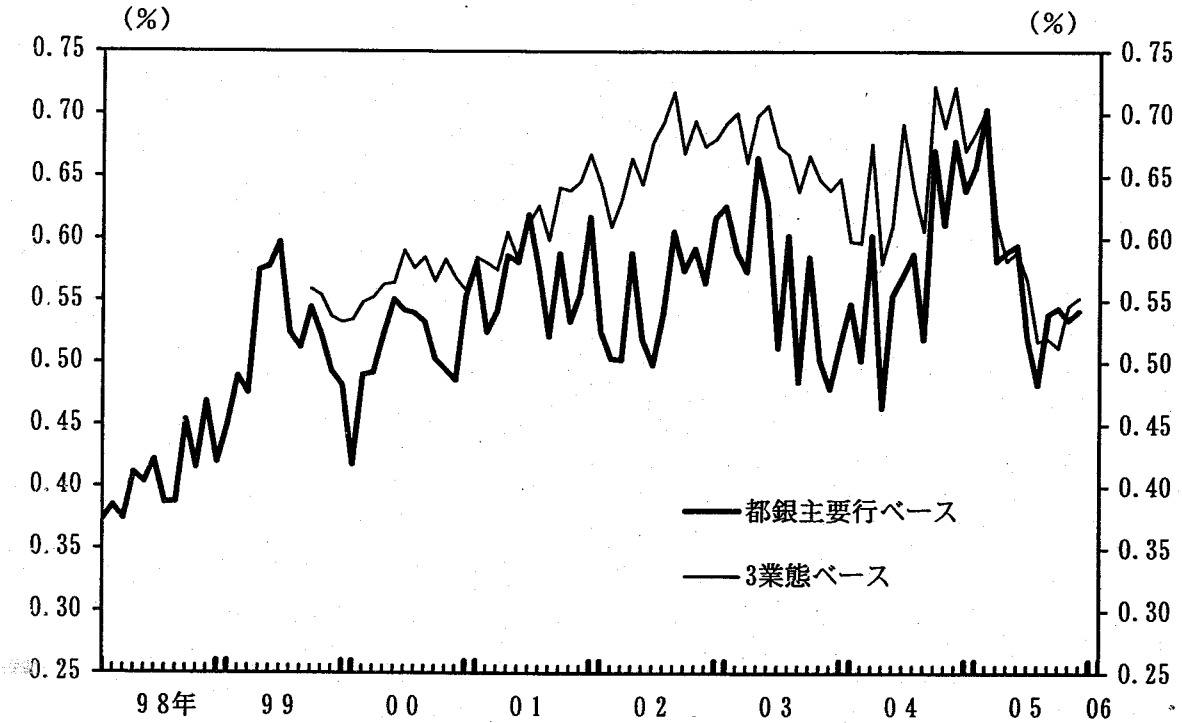
貸出金利



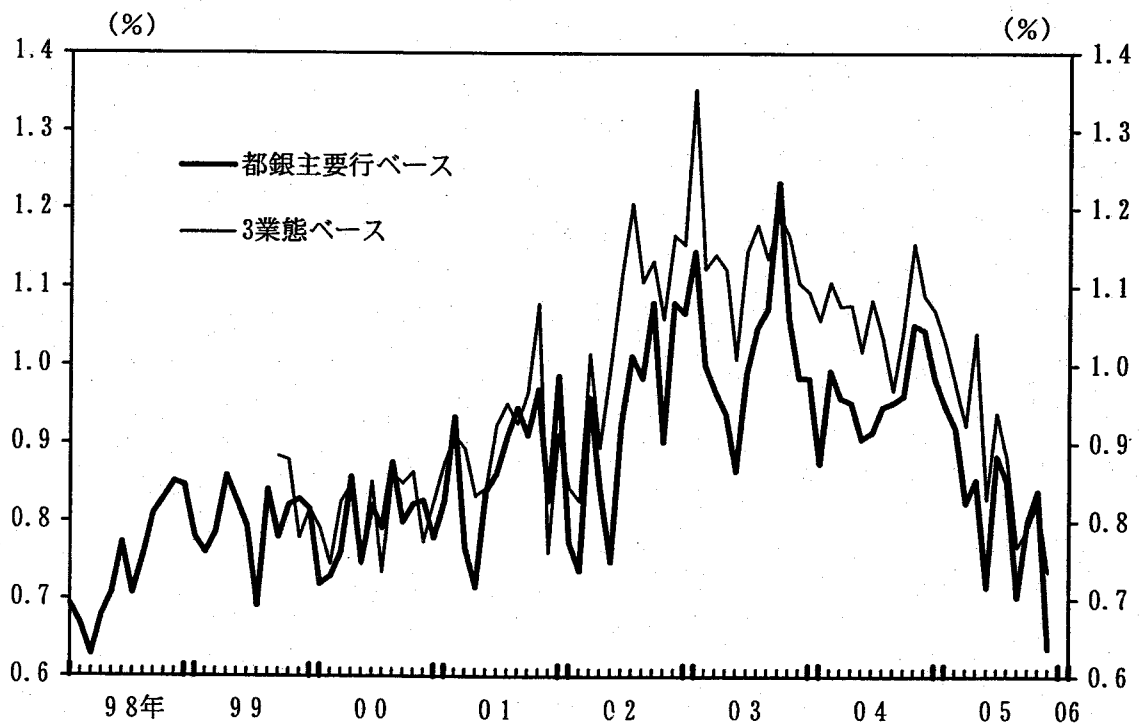
(注) 短期プライムレートは月末時点。

スプレッド貸出のスプレッド

(1) 短期

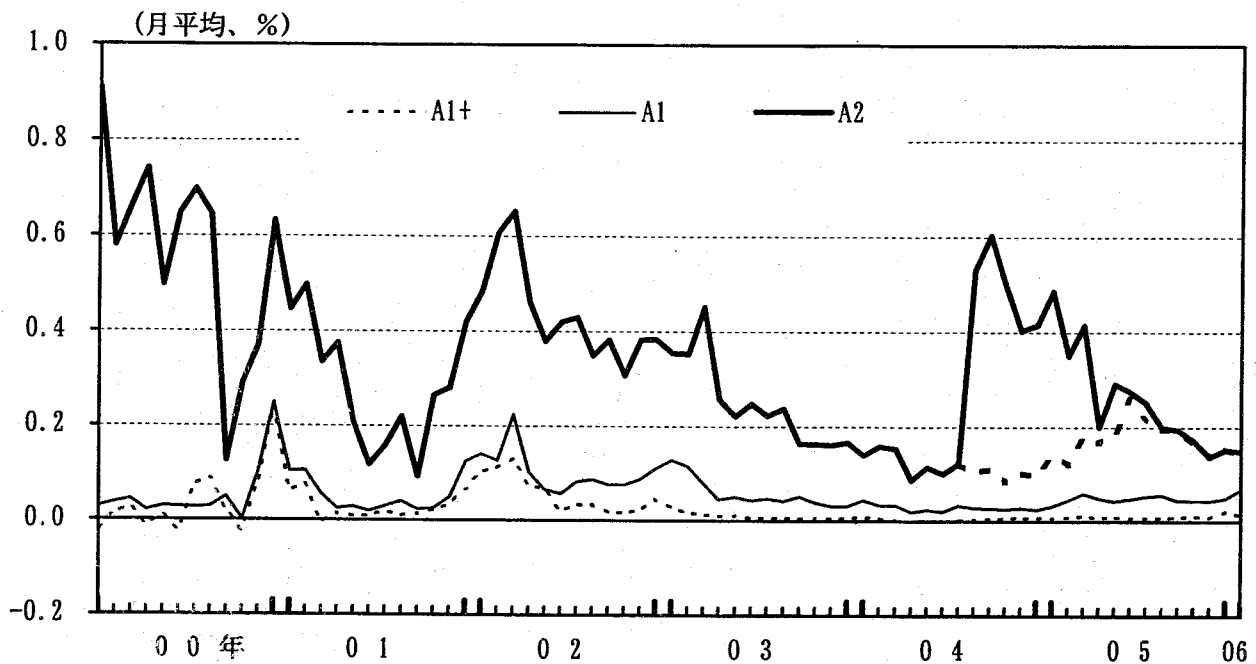


(2) 長期

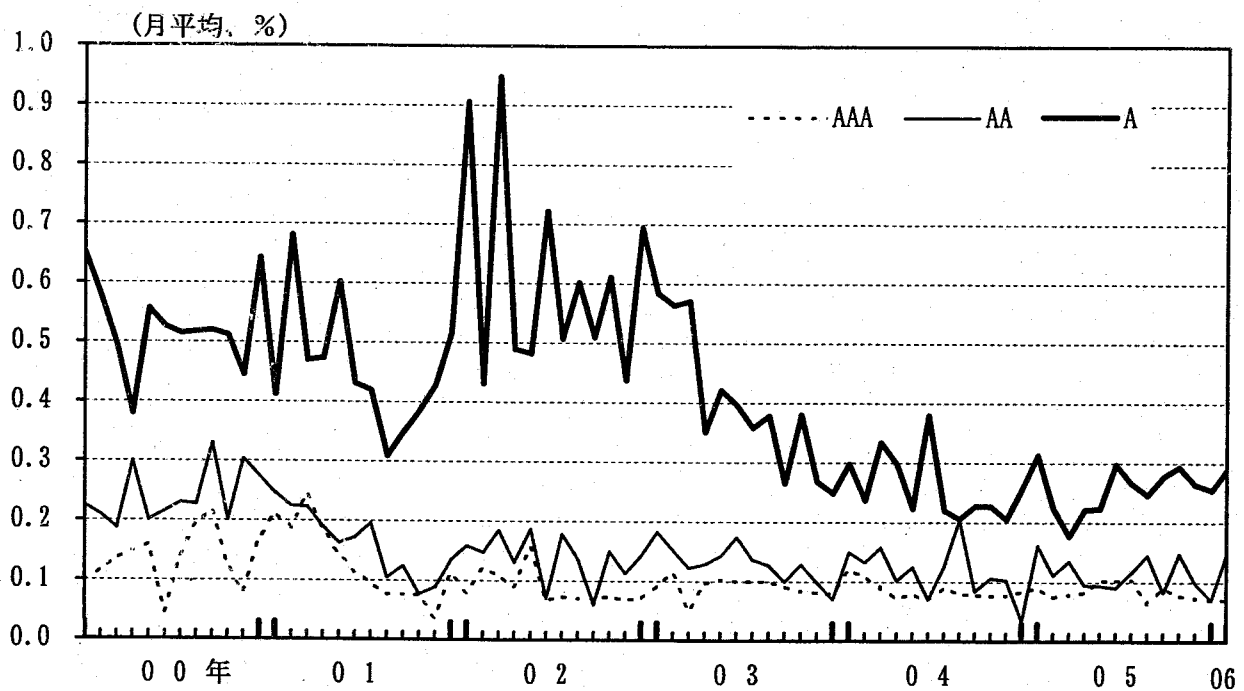


CP・社債の信用スプレッド

(1) CPの発行金利における信用スプレッド



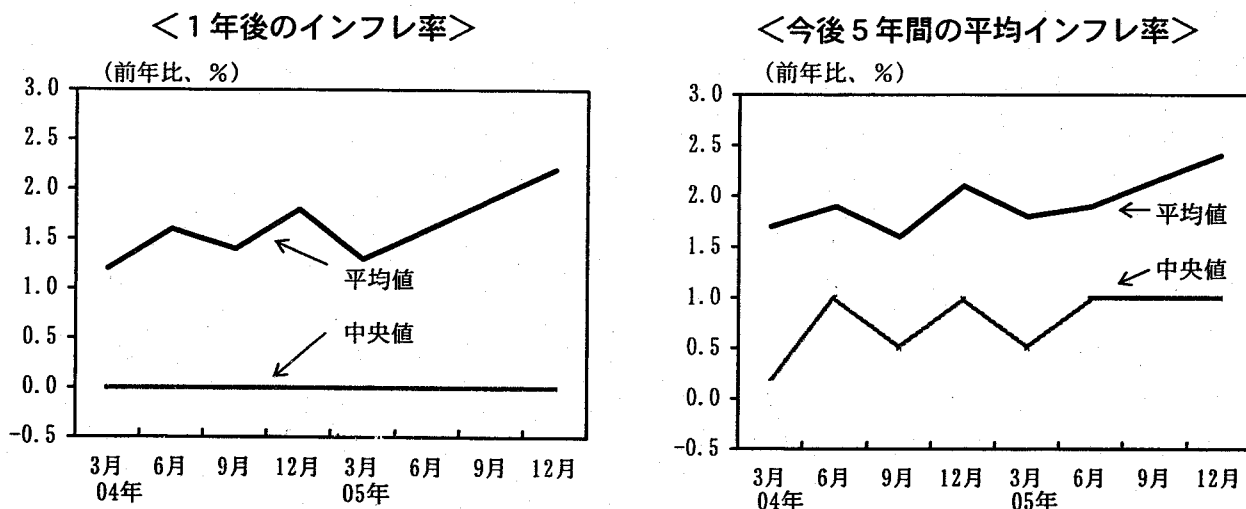
(2) 社債の発行金利における信用スプレッド



- (注) 1. CPは短期(3か月物)、社債は同年限の国債の流通利回りとの利回り格差の単純平均値(発行が無かった月は前後の月の平均値をプロット)。発行金利は、CPは全ターム平均ベース、社債は発行金利が相対的に高いノンバンク分等を除いたベース。
 2. CPのA2格の点線(04/8月以降)は、スプレッドの厚い商社を除いたベース。
 3. 社債は国内公募社債。01年までは払込日ベース。

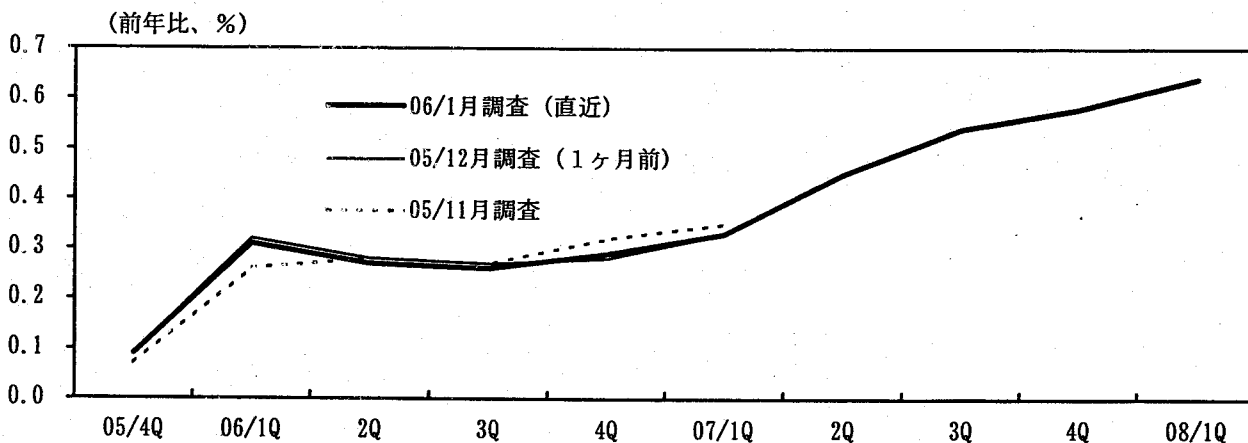
インフレ予想

(1) 家計のインフレ予想 (生活意識に関するアンケート調査)



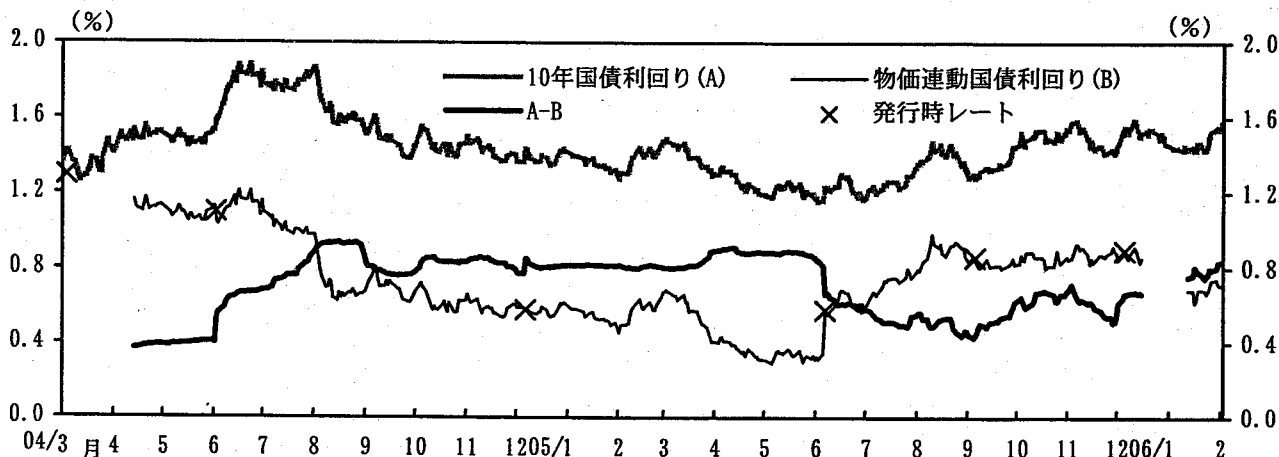
(注) 上下合計1%のサンプルを除いて計算した値。05/9月は線形補間している。

(2) エコノミストのCPI見通し (ESPフォーキャスト調査)



(注) 内外の調査機関・エコノミスト37先の予想の平均。

(3) 物価連動国債からみたインフレ予想



(注) 1. 物価連動国債利回りは最長期物、10年国債利回りは使用した物価連動国債と満期日が最も近い銘柄を使用。
 2. 発行時レートは、入札時の応募者利回り。
 3. 物価連動国債の足許の合計残高は2.5兆円。

マネー関連指標

<マネタリーベース>

— 平残前年比、%；残高、兆円

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/11月	12	06/1	2005年 平残
マネタリーベース (平残、兆円)	2.0	2.3 (110.7)	1.4 (110.1)	1.8 (111.7)	1.5 (111.0)	1.0 (113.0)	1.4 (114.1)	111
日本銀行券発行高	3.0	4.0	3.1	2.0	1.1	1.9	1.9	74
貨幣流通高	1.1	1.5	0.7	0.4	0.4	0.3	0.3	4
日銀当座預金	-0.1	-1.1	-2.0	1.5	2.5	-1.2	0.6	33
(参考)金融機関保有現金	5.6	12.9	5.0	-6.1	-12.8	-6.8	—	8

<マネーサプライ>

— 平残前年比、< >は季調済3か月前比年率、%；残高、兆円

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12	2005年 平残
M2+CD	1.9	1.7	1.8	2.0	2.0	2.1	2.0	705
	—	—	—	—	< 3.1 >	< 3.6 >	< 0.5 >	—
M1	4.7	4.4	4.7	5.5	5.4	5.5	5.5	376
現金通貨	2.6	2.8	2.7	2.8	2.7	2.9	2.9	70
預金通貨	5.2	4.7	5.1	6.1	6.0	6.1	6.1	306
準通貨	-1.5	-1.5	-1.6	-1.9	-1.6	-1.8	-2.2	307
CD	3.9	1.9	3.3	0.8	-3.0	3.0	2.5	22
広義流動性	3.1	2.9	2.7	2.6	2.4	2.6	2.8	1,405

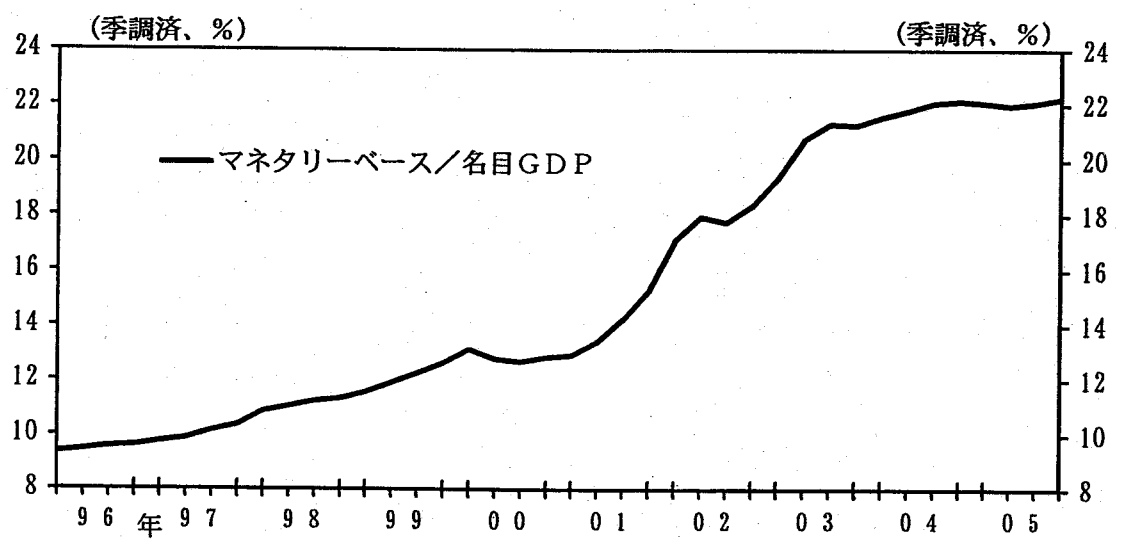
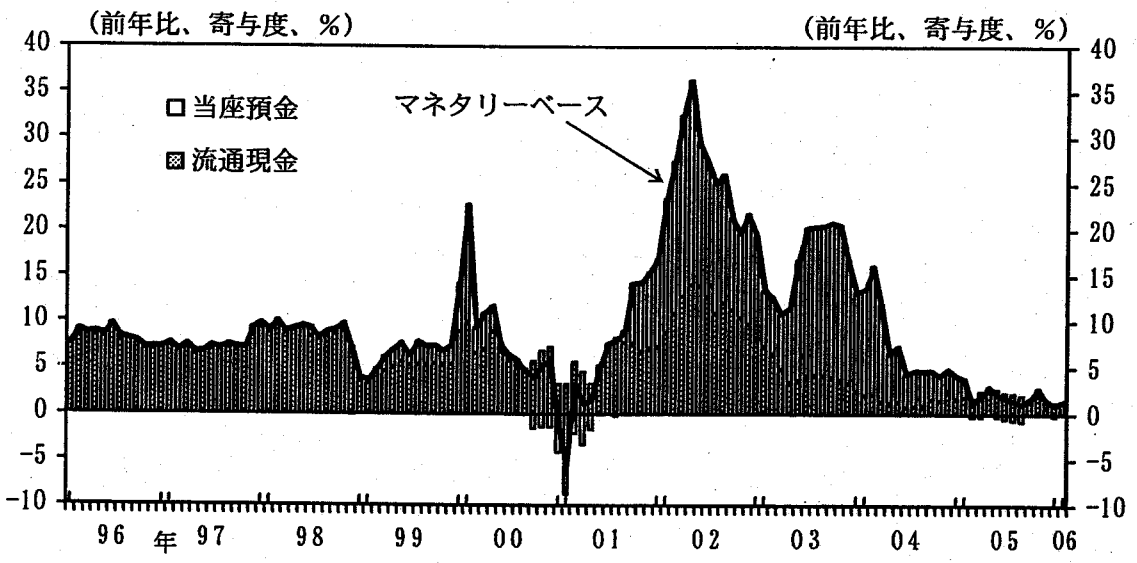
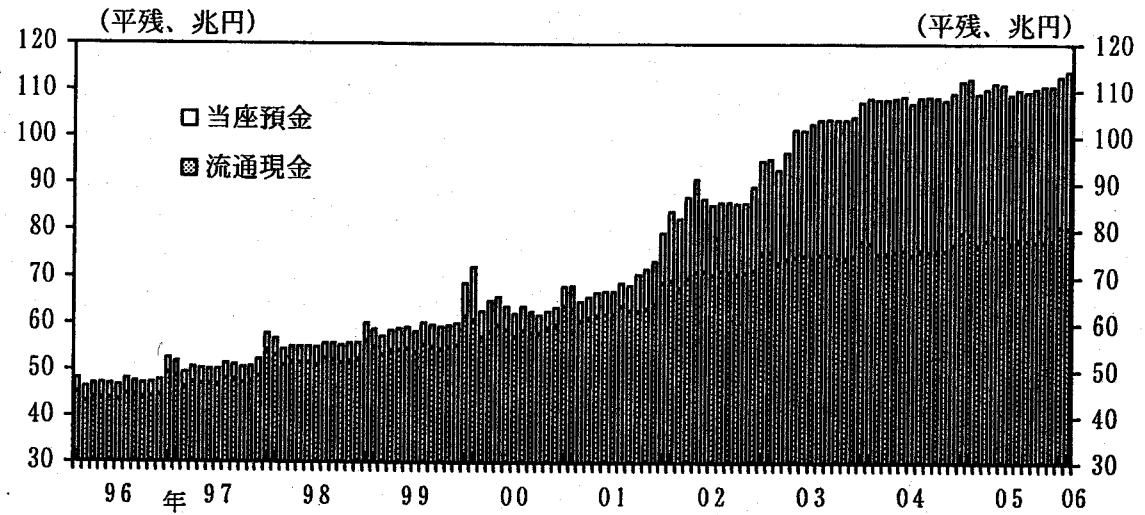
<主要金融商品の内訳 (広義流動性ベース) >

— 平残前年比、%；残高、兆円

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12	2005年 平残
郵便貯金	-5.7	-5.7	-6.2	-6.3	-6.2	-6.3	-6.4	217
金銭信託	10.2	11.0	8.8	6.8	7.3	6.8	6.5	106
その他預貯金	2.1	2.1	2.0	1.9	1.9	2.0	1.8	113
国債・FB・債券現先	18.5	20.1	15.8	10.0	10.8	9.1	10.0	158
投資信託	-1.8	-5.3	-1.3	3.7	0.7	4.2	6.2	33
株式投信	(18.0)	(18.9)	(17.0)	(18.7)	(17.4)	(18.9)	(19.7)	36
公社債投信	(-7.3)	(-14.3)	(-3.7)	(5.7)	(3.3)	(6.6)	(7.0)	13
金融債	-10.2	-10.0	-9.3	-10.0	-10.1	-10.0	-9.9	12
外債	16.6	13.9	16.9	27.3	20.4	27.8	33.8	54

(注) 投信の内訳を除き、Mベース(金融機関保有分は含まない)。投信の内訳は非Mベースで、未残の前年比(証券投資信託協会調べ)。

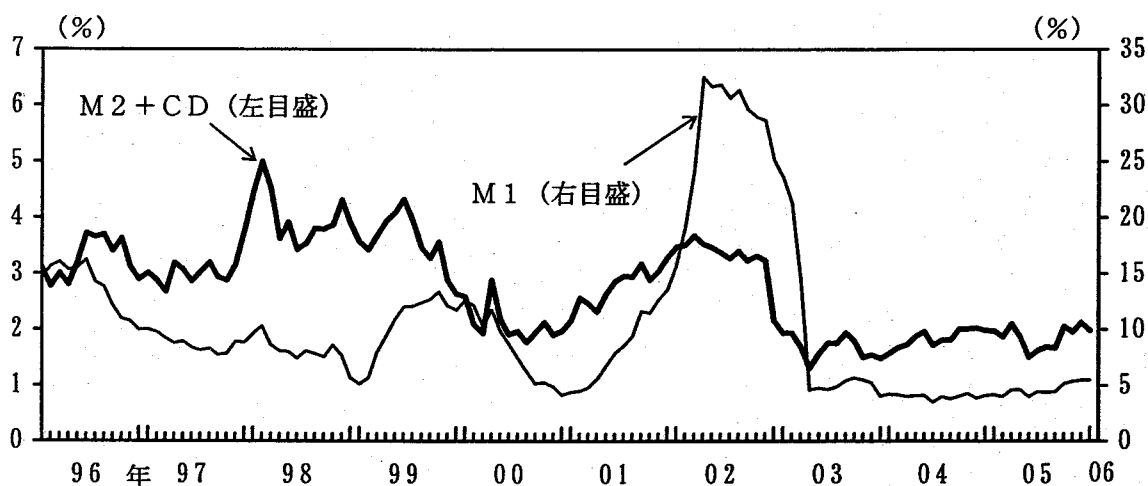
マネタリーベース



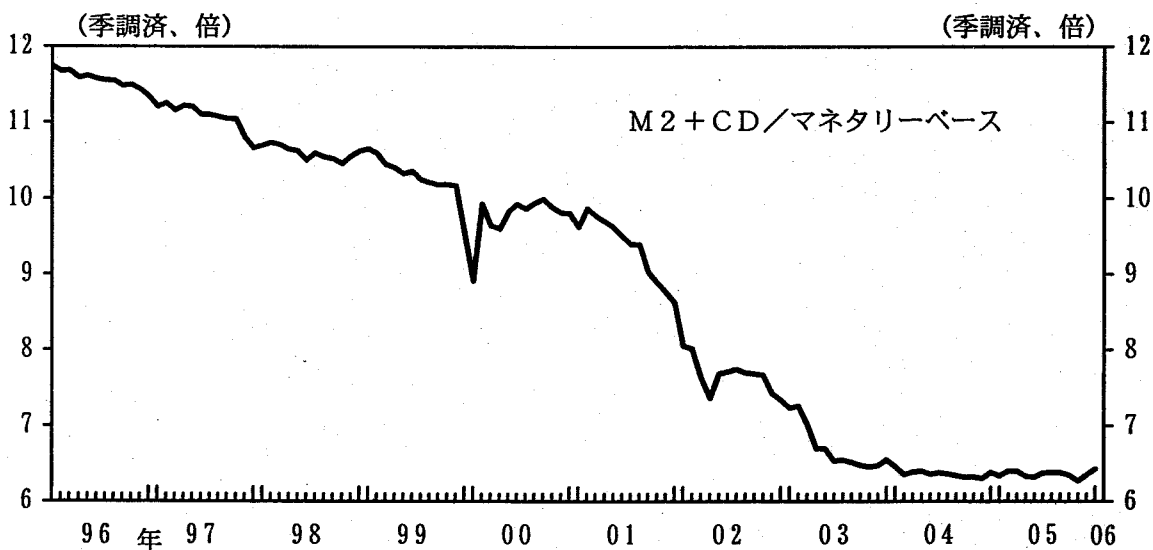
(注) 1. マネタリーベース=流通現金(銀行券および貨幣<ともに金融機関保有分を含む>)+日銀当座預金
2. 05/4Qの名目GDPは、05/3Qから横這いと仮定。

マネーサプライ (M1、M2+CD)

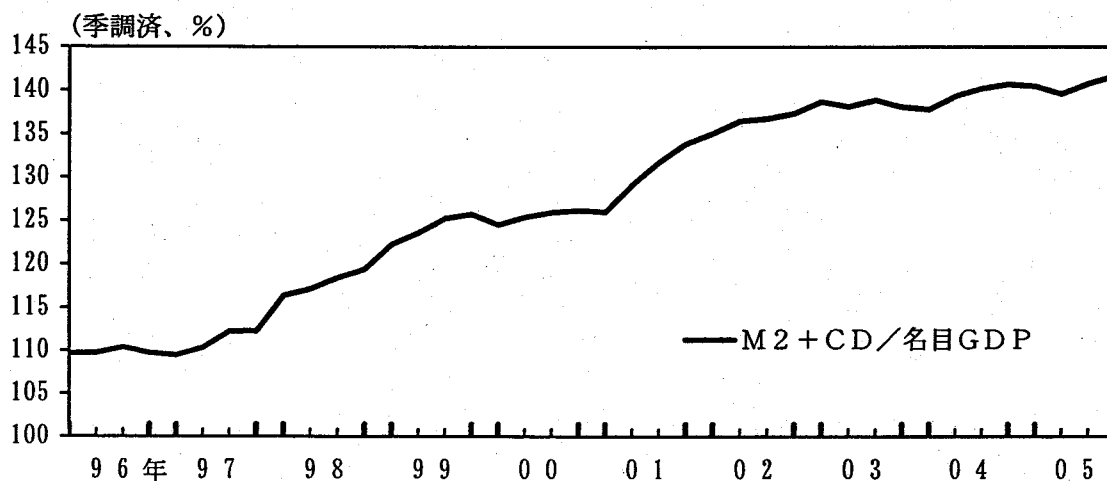
(1) 前年比



(2) 信用乗数 (=M2+CD/マネタリーベース)



(3) マーシャルのk (=マネーサプライ/名目GDP)



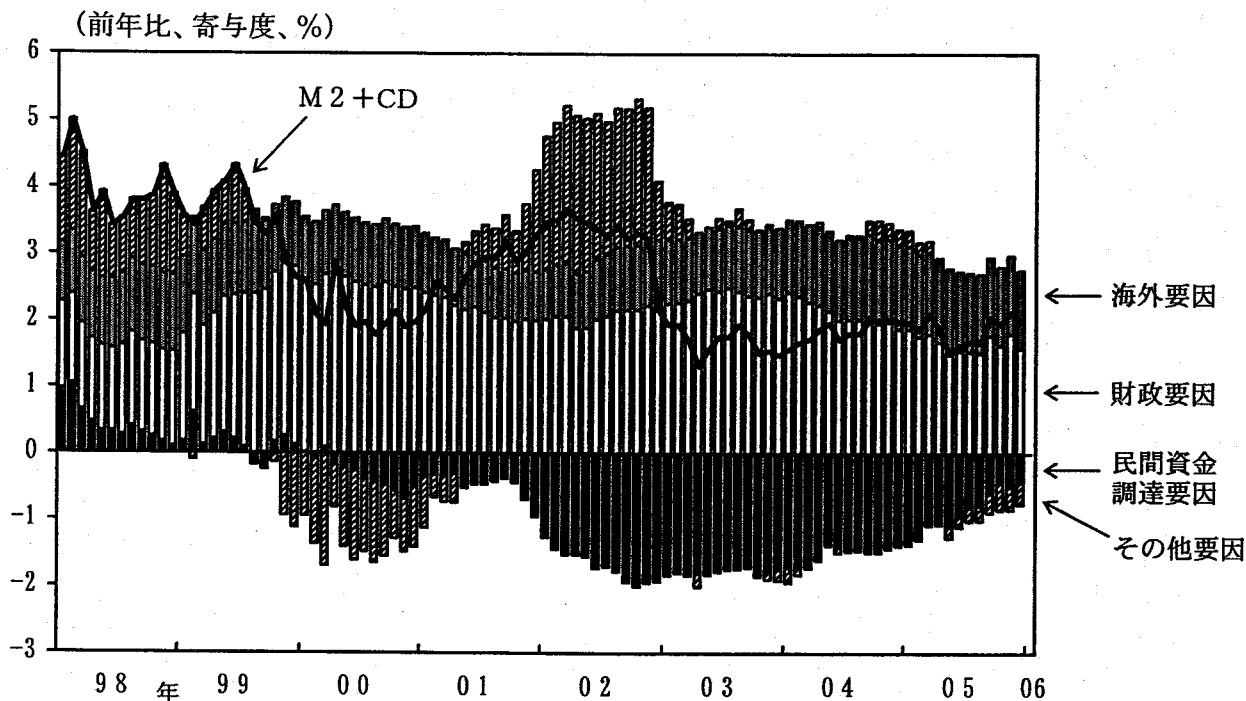
(注) 05/4Qの名目GDPは、05/3Qから横這いと仮定。

対外非公表

M2 + CD増減とバランスシート項目の対応

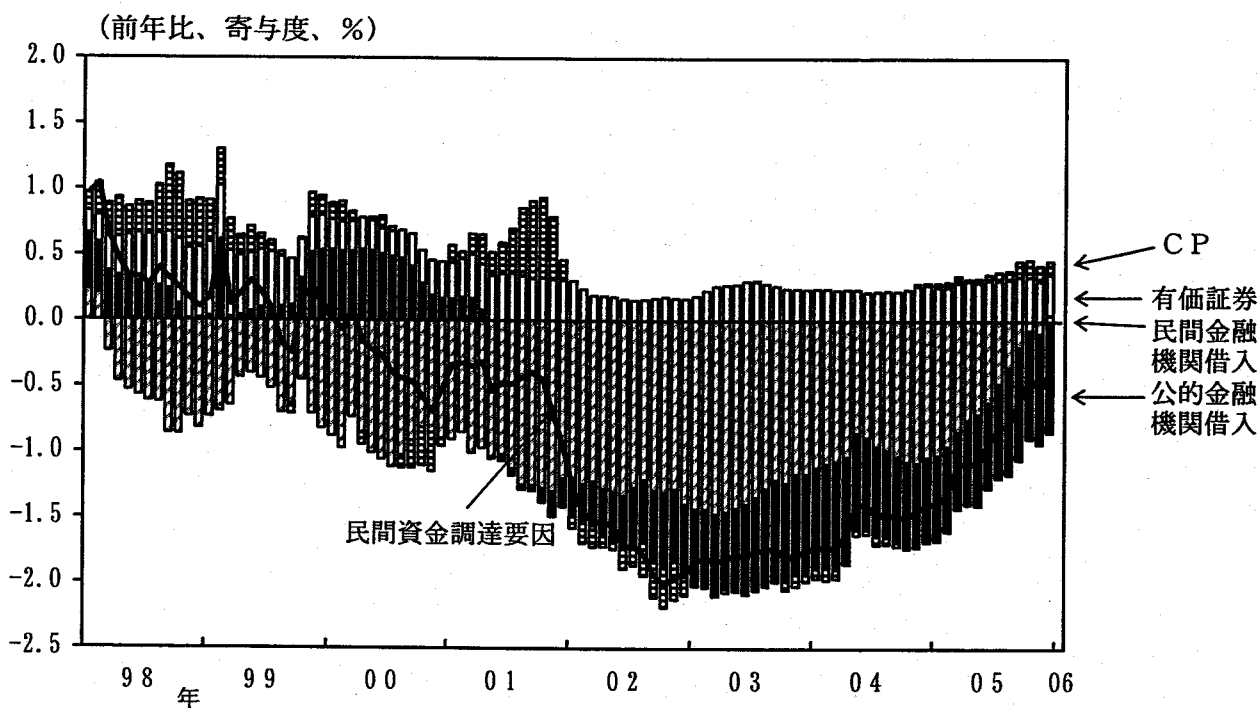
— マネー保有主体（民間非金融部門・地公体）の
バランスシート・アプローチによる。

(1) M2 + CD前年比の要因分解



(注) 「その他」は金融資産間の資金シフト要因と残差。

(2) 資金調達増減の寄与度分解



(注) CP、社債は金融機関保有ベース。

(図表21)

企業倒産関連指標

〈倒産件数・負債総額〉

— 件/月、億円、()内は前年比、%

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12
倒産件数	1,083 (-5.0)	1,075 (-5.2)	1,054 (-4.4)	1,145 (4.2)	1,171 (4.2)	1,114 (4.7)	1,149 (3.6)
〈季調値〉	—	1,067	1,070	1,142	1,080	1,155	1,190
負債総額	5,586 (-14.3)	5,015 (-7.2)	4,646 (-9.3)	6,059 (-14.1)	6,350 (-19.3)	8,083 (86.2)	3,744 (-58.2)
1件あたり負債額	5.2	4.7	4.4	5.3	5.4	7.3	3.3

〈資本金別内訳〉

— 件/月、[]内は構成比、%

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12
1億円以上	20 [1.9]	21 [2.0]	19 [1.8]	18 [1.6]	20 [1.7]	20 [1.8]	15 [1.3]
1千万円~1億円未満	547 [50.5]	556 [51.7]	530 [50.3]	549 [48.0]	569 [48.6]	517 [46.4]	561 [48.8]
1千万円未満	330 [30.5]	329 [30.6]	327 [31.0]	330 [28.8]	335 [28.6]	331 [29.7]	323 [28.1]
個人企業	186 [17.2]	169 [15.7]	178 [16.9]	248 [21.6]	247 [21.1]	246 [22.1]	250 [21.8]

〈業種別内訳〉

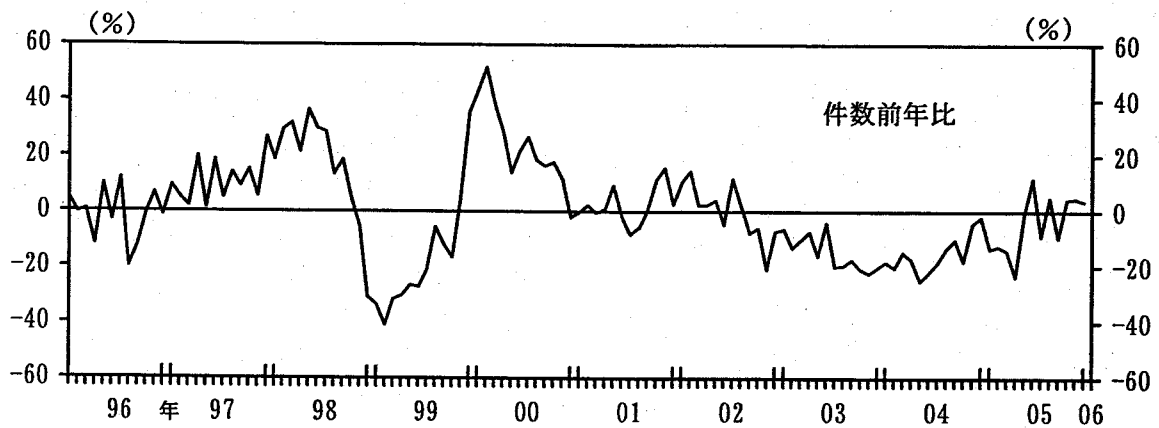
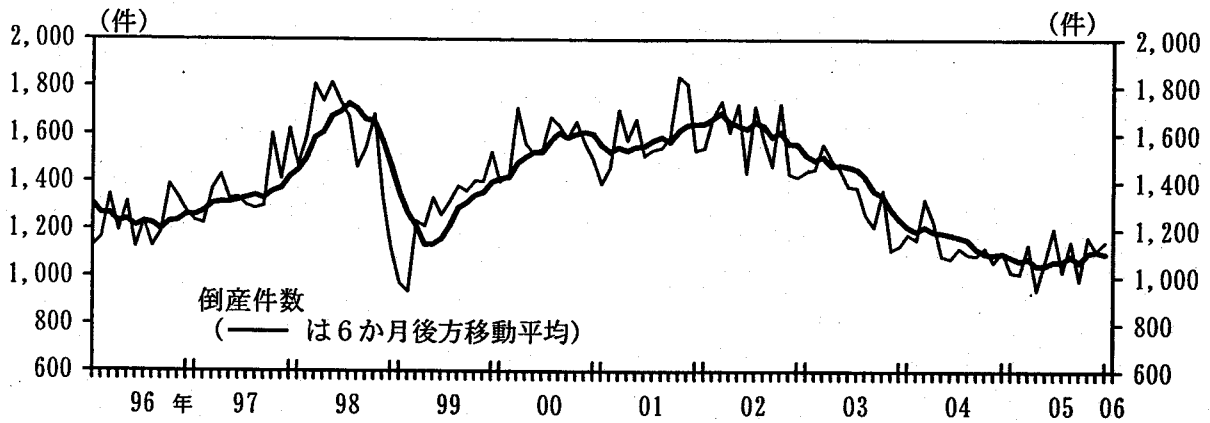
— 件/月、[]内は構成比、%

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/10月	11	12
建設業	315 [29.1]	321 [29.9]	308 [29.2]	333 [29.1]	328 [28.0]	336 [30.2]	336 [29.2]
製造業	164 [15.2]	162 [15.1]	157 [14.9]	168 [14.7]	171 [14.6]	182 [16.3]	151 [13.1]
卸売・小売業	293 [27.0]	287 [26.7]	288 [27.3]	290 [25.3]	312 [26.6]	259 [23.2]	299 [26.0]
金融・保険・不動産業	48 [4.5]	37 [3.4]	51 [4.8]	57 [5.0]	68 [5.8]	51 [4.6]	53 [4.6]
運輸業	39 [3.6]	43 [4.0]	33 [3.1]	41 [3.6]	46 [3.9]	30 [2.7]	47 [4.1]
サービス業	194 [17.9]	196 [18.3]	191 [18.1]	222 [19.4]	210 [17.9]	224 [20.1]	233 [20.3]

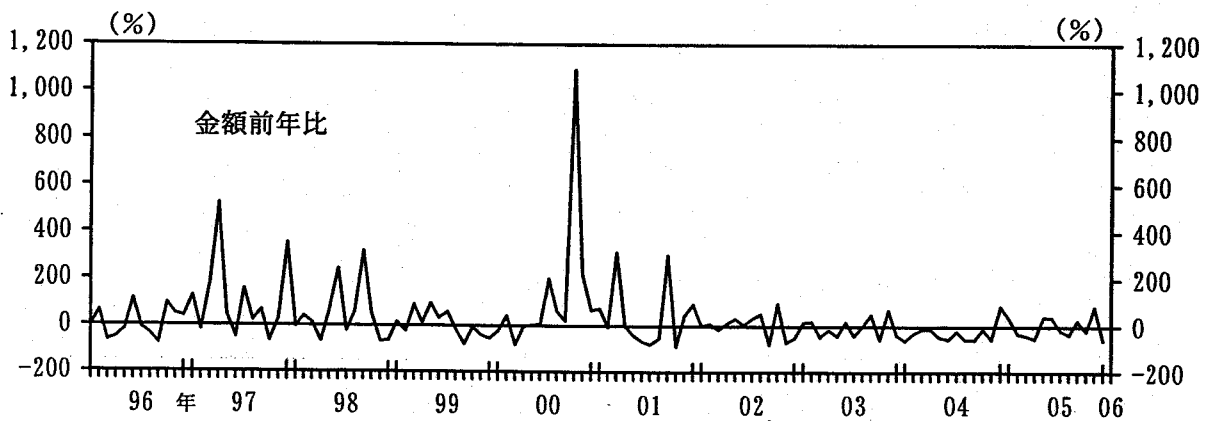
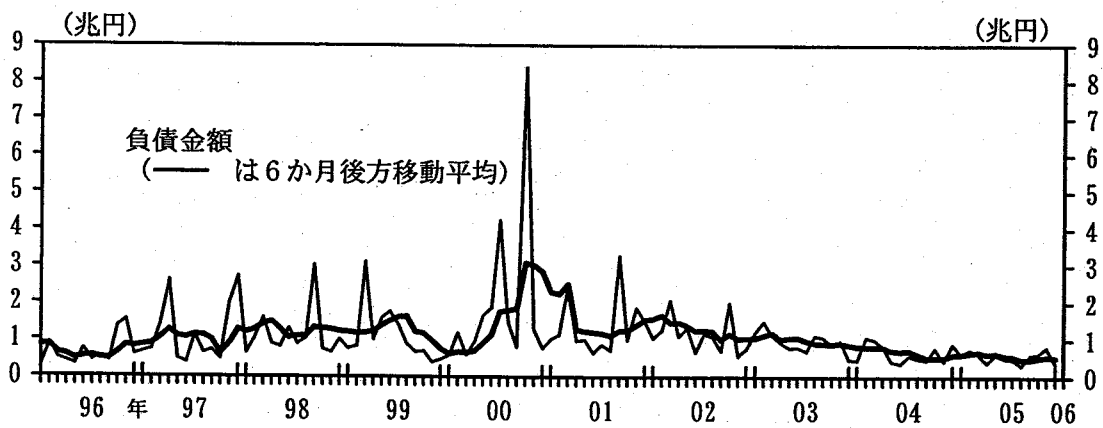
(注) 東京商工リサーチ調べ。

企業倒産

(1) 倒産件数 (東京商工リサーチ調べ)



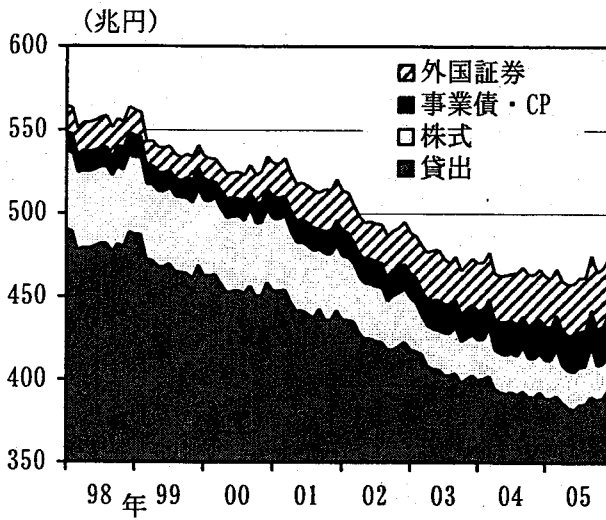
(2) 倒産企業負債総額 (東京商工リサーチ調べ)



資産保有状況 (1)

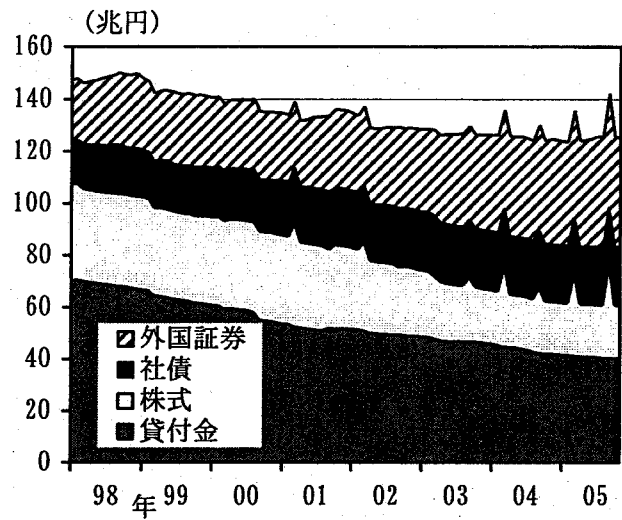
(1) 国内銀行

<リスクの高い資産>

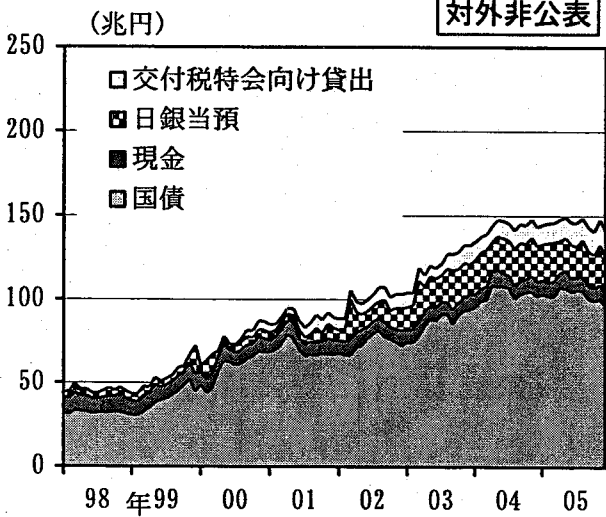


(2) 生命保険・損害保険会社

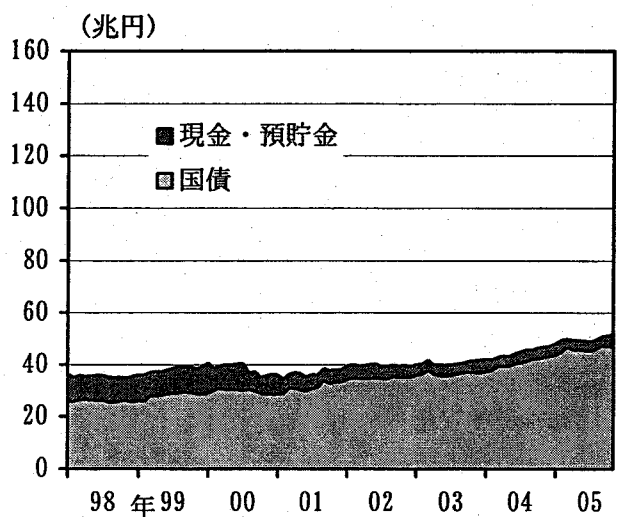
<リスクの高い資産>



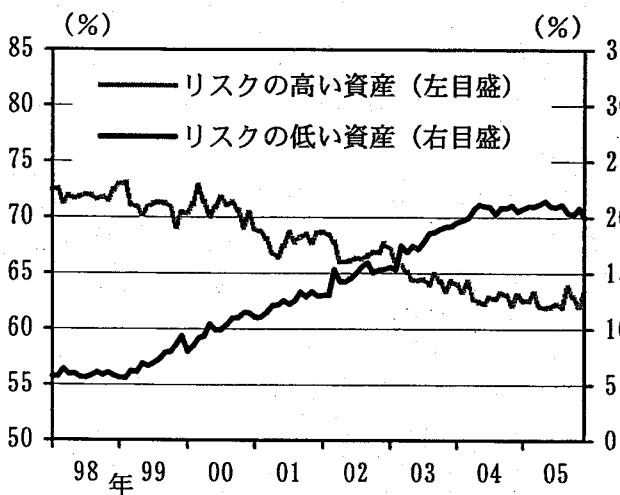
<リスクの低い資産>



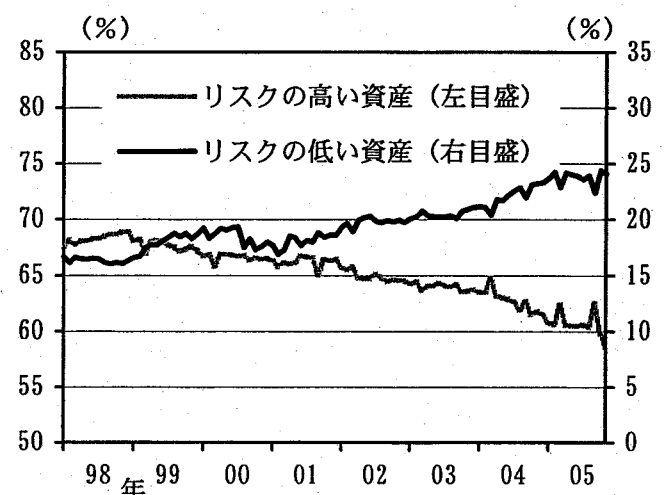
<リスクの低い資産>



<資産全体に対する比率>



<運用資産全体に対する比率>

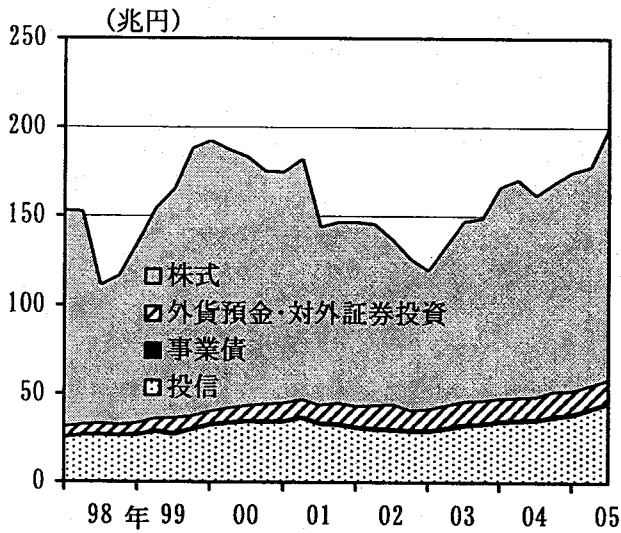


(注) 1. それぞれ国内銀行銀行勘定、生損保資産運用状況ベース。
2. 上図に含まれない資産は、国内銀行：コールローン、トレーディング勘定、外国為替等、生損保：コールローン等。

資産保有状況（２）

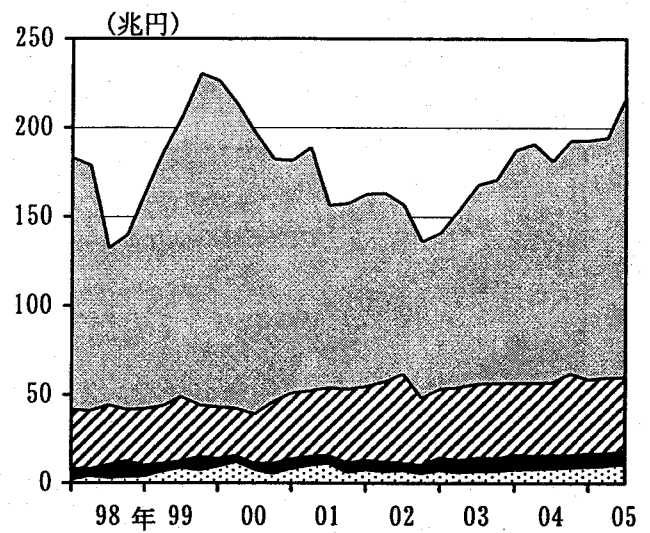
（３）家計

＜リスクの高い資産＞

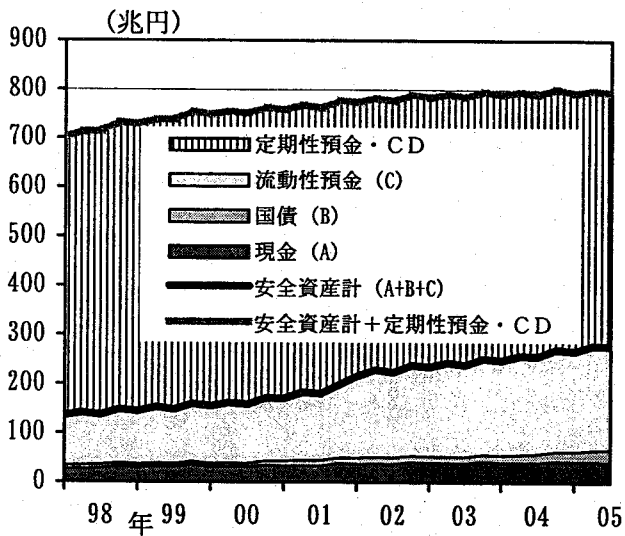


（４）民間非金融法人企業

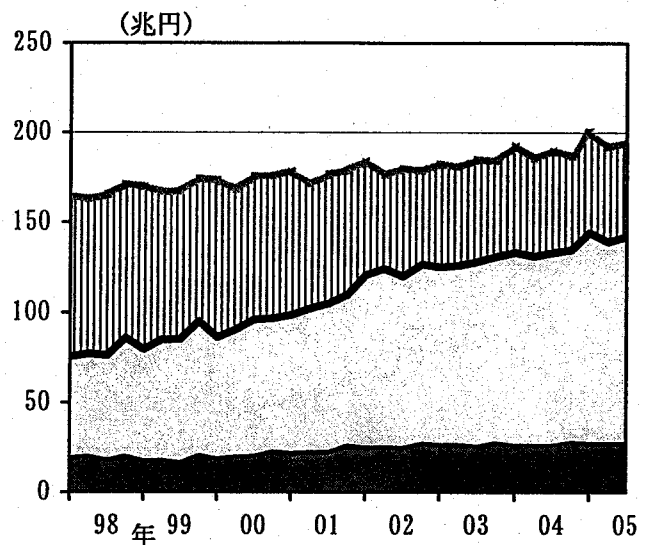
＜リスクの高い資産＞



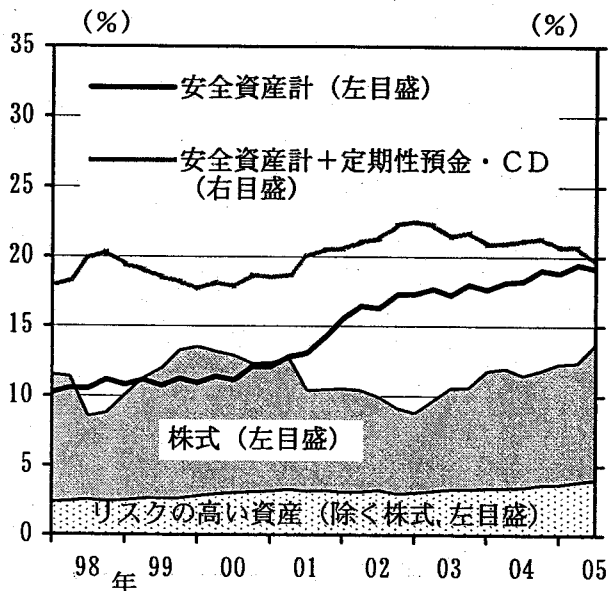
＜リスクの低い資産＞



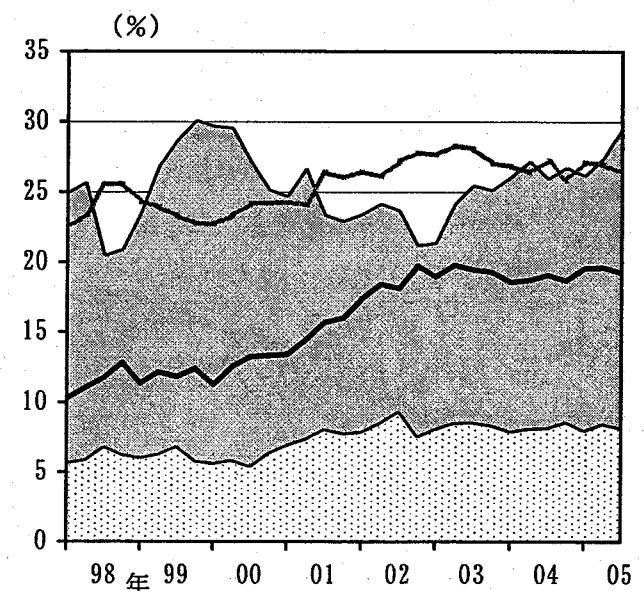
＜リスクの低い資産＞



＜金融資産全体に占める比率＞



＜金融資産全体に占める比率＞



(注) 1. 計数は資金循環統計ベース。株式は出資金を含み、民間非金融法人企業の事業債にはCPも含めている。
 2. 上図に含まれない金融資産は、家計：年金・保険準備金等、民間非金融法人企業：企業間信用等。

「金融環境の現状評価」参考計表

- (図表1) クレジット関連指標
- (図表2) 資本市場調達(1)
- (図表3) 資本市場調達(2)
- (図表4) 主要銀行貸出動向アンケート調査(1)
- (図表5) 主要銀行貸出動向アンケート調査(2)
- (図表6) 貸出態度・資金繰り判断DI
- (図表7) マネー関連指標

(図表1)

クレジット関連指標

(1) 銀行貸出残高

	— 前年比%						
	2005年	05/4~6月	7~9	10~12	05/11月	12	06/1
銀行計	-0.1 [-2.1]	-0.5 [-2.7]	0.2 [-2.1]	1.0 [-0.6]	0.9 [-0.6]	1.1 [-0.3]	1.3 [-0.0]
都銀等	-1.9	-2.3	-1.9	-0.7	-0.8	-0.6	-0.4
地銀・地銀Ⅱ計	2.1	1.8	2.7	3.1	3.0	3.3	3.3
地銀	3.2	3.2	4.1	3.0	2.9	3.2	3.3
地銀Ⅱ	-1.3	-2.7	-1.7	3.3	3.2	3.6	3.4

- (注) 1. 平残ベース。償却・為替・流動化要因調整後。[]内の計数は調整前。
2. 都銀等は都銀・長信銀・信託銀。

対外非公表

(2) 民間部門総資金調達

	— 平残前年比%、前年比寄与度%ポイント						
	2005年	05/4~6月	7~9	10~12	05/11月	12	06/1
民間部門総資金調達	-1.5	-2.0	-1.2	-0.3	-0.4	-0.1	-0.0
銀行・信金・外銀計	-0.2	-0.5	0.0	0.6	0.5	0.7	0.8
生保	-0.4	-0.5	-0.3	-0.2	-0.2	-0.2	-0.2
寄与度							
政府系	-1.1	-1.1	-1.1	-1.2	-1.2	-1.2	-1.3
3 公庫	-0.2	-0.2	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3
住宅公庫	-0.9	-0.8	-0.9	-0.9	-0.9	-1.0	-1.0
直接市場調達	0.2	0.1	0.3	0.5	0.5	0.5	0.6
C P	0.2	0.1	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3
社債	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.2	0.3

- (注) 1. 償却・為替・流動化要因調整後。
2. 銀行・信金・外銀計は、都銀、長信銀、信託銀、地銀、第二地銀、外銀、信金の合計。
3. 当月の計数を把握できない場合には、前年比伸び率を前月比横這いと置いている。
4. 住宅公庫の当月の計数については、業務局財政収支Gの予測値を用いている。
5. 社債残高はアイ・エヌ情報センターのデータ等を用いて推計。
6. 社債は前当月末の平均を平残としている。

資本市場調達(1)

(1) CP・社債の発行金利における信用スプレッド

(月平均、%)

		05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
CP	A1+格	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02	0.01
	A1格	0.05	0.05	0.05	0.04	0.05	0.07
	A2格	0.20	0.20	0.15	0.14	0.15	0.14
社債	AAA格	0.09	0.08	0.07	0.07	0.07	—
	AA格	0.09	0.12	0.11	0.10	0.07	0.15
	A格	0.25	0.26	0.27	0.26	0.25	0.29

(注) 1. CPの発行レートは、全ターム平均ベース。社債発行金利(国内公募普通社債)は、発行金利が相対的に高いノンバンク分等を除いたベース。また、いずれも銀行発行分は含まない。信用スプレッドは、CPは短国(3か月物)、社債は同年限の国債の流通利回りとの利回り格差の単純平均値。

2. CPのA2格は、スプレッドの厚い商社を除いたベース。

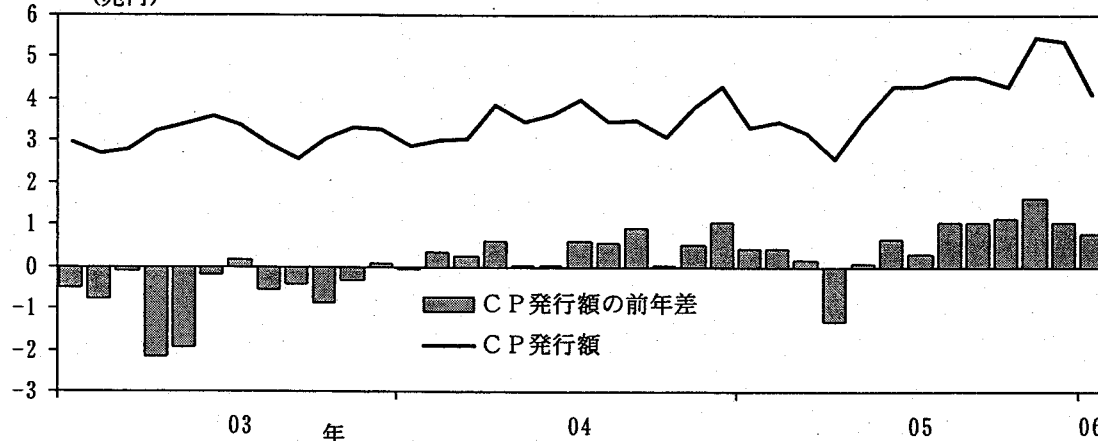
(参考) CP 3ヶ月物の発行金利における信用スプレッド

(月平均、%)

	05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
A1+格	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02
A1格	0.05	0.06	0.06	0.06	0.05	0.09

(2) CP発行金額

(兆円)



(注) オペ先ベース。銀行発行分は含まない。

資本市場調達(2)

(3) 公募社債発行額

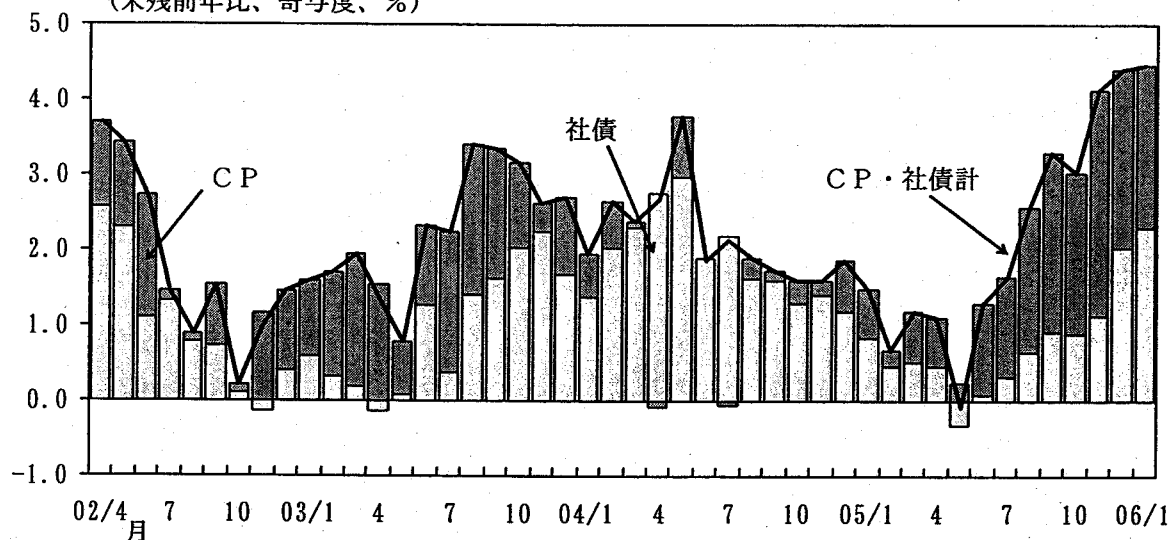
(月平均、億円)

	05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
公募社債発行額	4,827	4,973	4,607	6,920	1,300	1,450
うちBBB格 (シェア%)	783 (16.2)	1,173 (23.6)	667 (14.5)	900 (13.0)	100 (7.7)	700 (48.3)

(注) 起債日ベース。国内公募社債(普通社債、資産担保債券等)の集計値で、銀行債は含まない。

(4) CP・社債発行残高

(末残前年比、寄与度、%)



(注) 1. CPは、日本銀行と当座勘定取引のある銀行・証券会社の引受によるものの残高。銀行発行分は含まない。

2. 社債は、国内外で発行された普通社債(私募債を含む)の残高。銀行発行分を含む。

(5) エクイティファイナンス

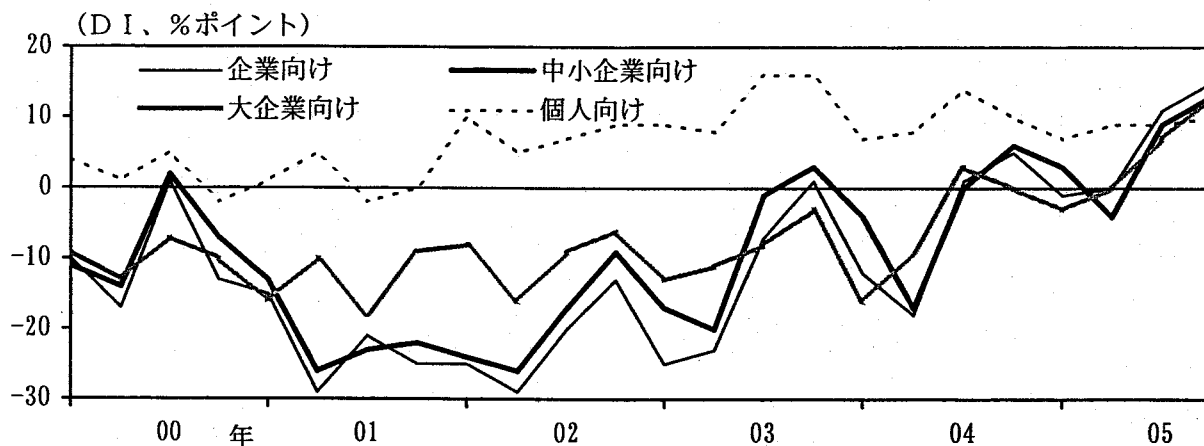
(月平均、億円)

	05/2Q	3Q	4Q	05/11月	12月	06/1月
転換社債発行額	1,258	1,031	1,048	950	1,634	325
株式調達額	1,351	1,343	2,485	1,677	3,853	1,029

(注) 国内外市場の合計(株式調達額の06/1月は国内市場のみの値)。払込み日ベース。銀行の調達分は含まない。

主要銀行貸出動向アンケート調査 (1)

(1) 資金需要DI

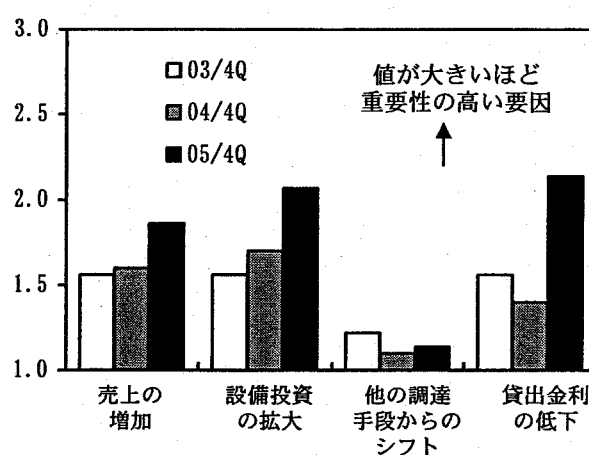
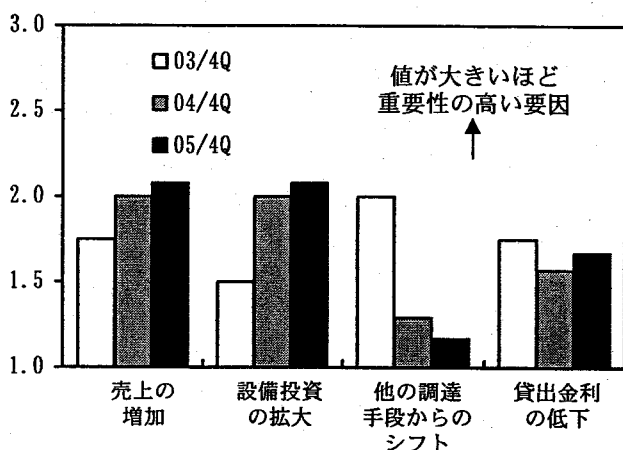


(注) 「増加」+0.5×「やや増加」-0.5×「やや減少」-「減少」、3ヶ月間の変化。

(2) 資金需要が増加した理由

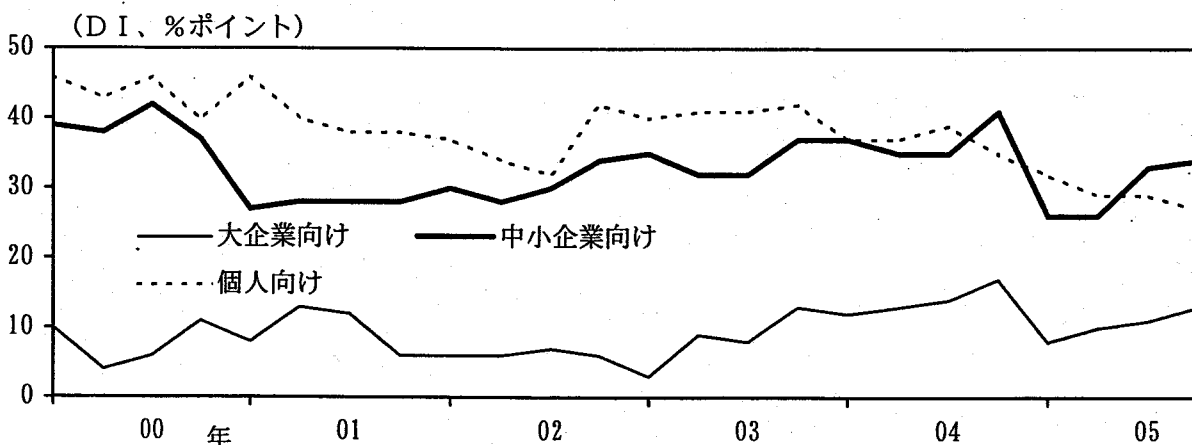
<大企業向け>

<中小企業向け>



(注) 各項目が資金需要増加の要因として、「重要：3、やや重要：2、重要でない：1」という形で調査を行い、回答の平均値を取ったもの。資金需要について「増加」または「やや増加」と回答した先に対してのみ調査している（このため毎回母集団が異なる）。

(3) 貸出運営スタンスDI



(注) 「積極化」+0.5×「やや積極化」-0.5×「やや慎重化」-「慎重化」、3ヶ月間の変化。

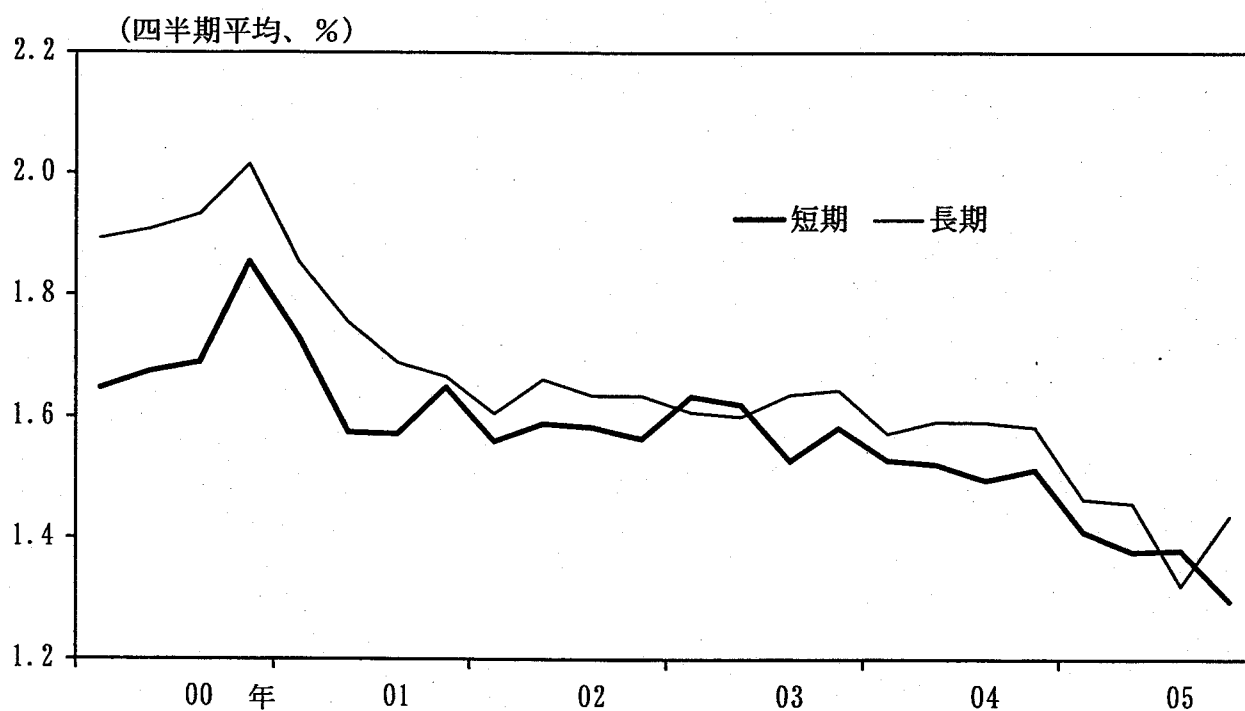
主要銀行貸出動向アンケート調査 (2)

(4) 企業の格付け別の利鞘設定スタンス



(注) 「拡大」 - 「縮小」、3ヶ月間の変化。

(5) 貸出約定平均金利 (新規)

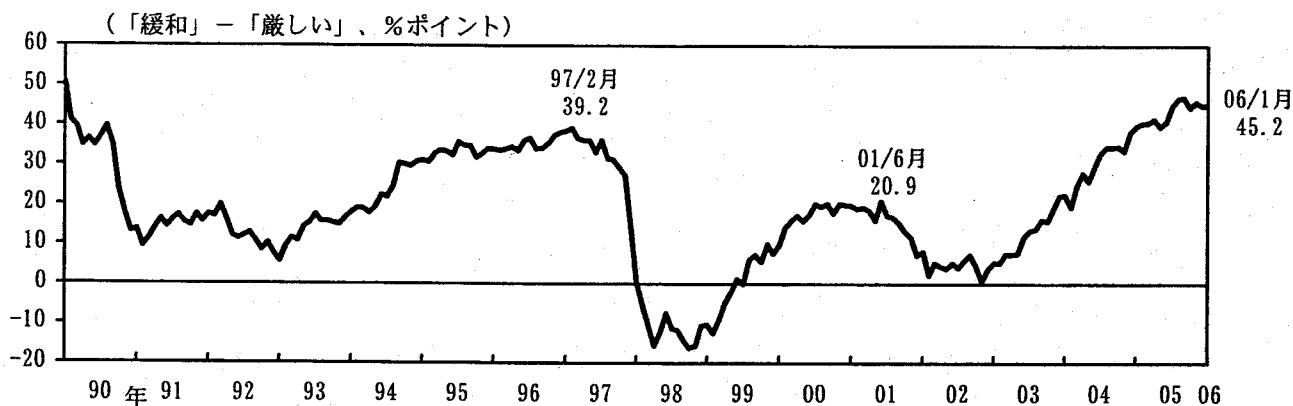


(注) 国内銀行ベース。

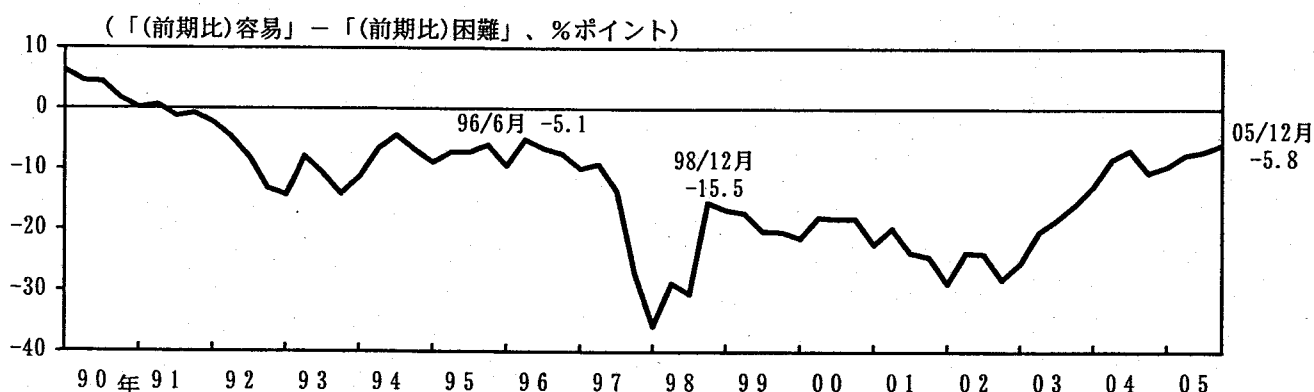
貸出態度・資金繰り判断D I

(1) 貸出態度判断D I

<中小公庫>

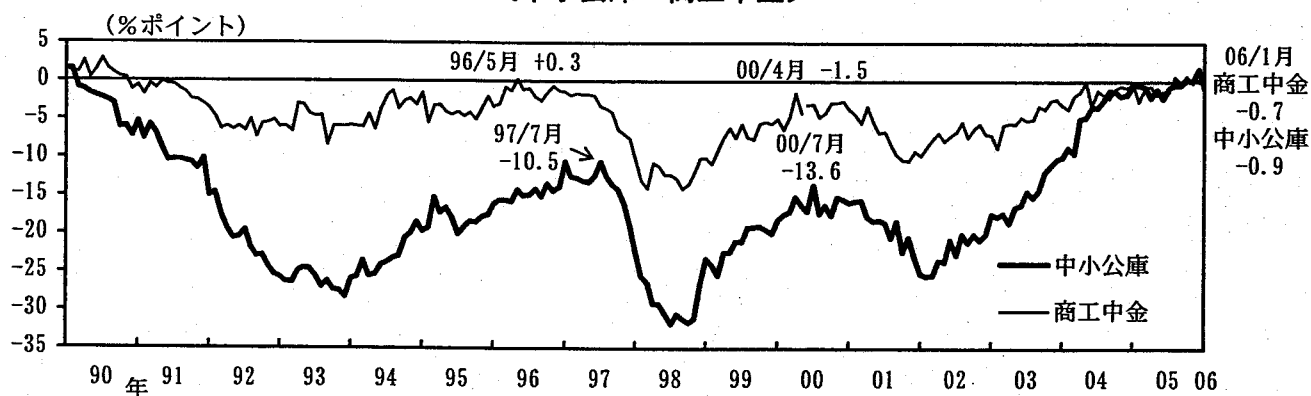


<国民公庫>



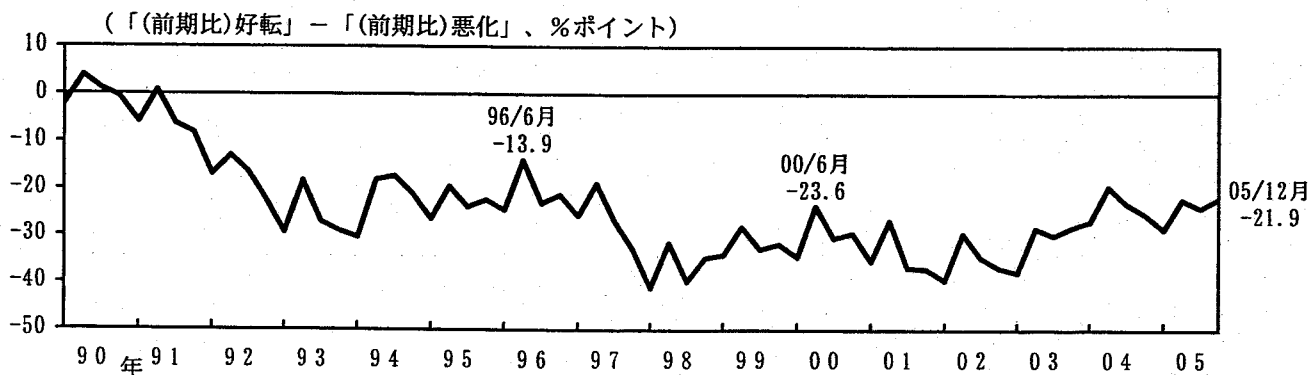
(2) 資金繰り判断D I

<中小公庫・商工中金>



- (注) 1. 中小公庫：「余裕」 - 「窮屈」、商工中金：「(前月比)好転」 - 「(前月比)悪化」
 2. 商工中金は00/5月以前は800社ベース、00/6月以降は1,000社ベース。

<国民公庫>



(図表7)

マネー関連指標

(1) マネタリーベース

—— 平残前年比、%

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/11月	12	06/1
マネタリーベース (平残、兆円)	2.0	2.3 (110.7)	1.4 (110.1)	1.8 (111.7)	1.5 (111.0)	1.0 (113.0)	1.4 (114.1)
日本銀行券発行高	3.0	4.0	3.1	2.0	1.1	1.9	1.9
貨幣流通高	1.1	1.5	0.7	0.4	0.4	0.3	0.3
日銀当座預金	-0.1	-1.1	-2.0	1.5	2.5	-1.2	0.6

(2) マネーサプライ

—— 平残前年比、< >は季調済3か月前比年率、%

	2005年	05/ 4~6月	7~9	10~12	05/11月	12	06/1
M2+CD	1.9	1.7	1.8	2.0	2.1	1.9	1.9
	—	—	—	—	< 3.6 >	< 0.3 >	< 1.2 >
M1	4.7	4.4	4.7	5.5	5.5	5.5	5.3
準通貨	-1.5	-1.5	-1.6	-1.9	-1.8	-2.3	-2.4
CD	3.8	1.9	3.3	0.3	3.0	0.8	5.6
広義流動性	3.1	2.9	2.7	2.5	2.6	2.6	2.3

2006.2.3
企 画 局

当面の金融政策運営上の検討ポイント

1. 金融経済情勢に関する検討ポイント

- (1) 景気情勢は、「わが国の景気は、着実に回復を続けている」という判断でよいか。
- (2) 景気の先行きについては、「景気は着実に回復を続けていくとみられる」という判断でよいか。
先行きの上振れ・下振れ要因として、①原油価格の動向、②米国をはじめとする海外経済の動向、③国内民間需要の動向、をどうみるか。
- (3) 上記のような景気の展望を踏まえ、物価の先行きをどうみるか。物価に固有のリスク要因をどうみるか。
- (4) 金融面では、①市況動向（短期金融市場はきわめて緩和的な状況。長期金利および株価は前月と比べ上昇しているが、円の対ドル相場は下落。）や、②金融機関の融資姿勢、③信用スプレッドの動向、④企業の資金繰り判断、⑤これらをあわせてみた企業金融環境、などをどう評価するか。
- (5) 量的金融指標の動きをどう評価するか。
- (6) 以上のような経済・物価動向について、展望レポート・中間評価の見通しとの関係でどう考えるか。

2. 当面の金融政策運営方針

(1) 現在の金融市場調節方針

日本銀行当座預金残高が 30～35 兆円程度となるよう金融市場調節を行う。なお、資金需要が急激に増大するなど金融市場が不安定化するおそれがある場合には、上記目標にかかわらず、一層潤沢な資金供給を行う。また、資金供給に対する金融機関の応札状況などから資金需要が極めて弱いと判断される場合には、上記目標を下回ることがありうるものとする。

(2) 当面の金融政策運営方針の選択肢

選択肢 A

現状の「30～35 兆円程度」を下回る金額の当座預金残高目標を設定する。
すなわち、日本銀行当座預金残高が〇兆円程度となるよう金融市場調節を行う。なお、資金需要が急激に増大するなど金融市場が不安定化するおそれがある場合には、上記目標にかかわらず、一層潤沢な資金供給を行う。また、資金供給に対する金融機関の応札状況などから資金需要が極めて弱いと判断される場合には、上記目標を下回ることがありうるものとする。

選択肢 B

現状の金融政策スタンスを維持する。
すなわち、日本銀行当座預金残高が 30～35 兆円程度となるよう金融市場調節を行う。（なお書きは選択肢 A と同じ）

選択肢 C

現状の「30～35 兆円程度」を上回る金額の当座預金残高目標を設定する。
すなわち、日本銀行当座預金残高が〇兆円程度となるよう金融市場調節を行う。（なお書きは選択肢 A と同じ）

以 上

一覽後廃棄

要 注 意

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>

<配付先：金融政策決定会合参加者>

[福間委員・水野委員案]

金融市場調節方針の決定に関する件

(案 件)

1. 次回金融政策決定会合までの金融市場調節方針を下記のとおりとすること。

記

日本銀行当座預金残高が27～32兆円程度となるよう金融市場調節を行う。

なお、資金需要が急激に増大するなど金融市場が不安定化するおそれがある場合には、上記目標にかかわらず、一層潤沢な資金供給を行う。また、資金供給に対する金融機関の応札状況などから資金需要が極めて弱いと判断される場合には、上記目標を下回ることがありうるものとする。

2. 対外公表文は別途決定すること。

以 上

一覽後廃棄

要 注 意

<不開示情報：有（種類：審議・検討）>

<配付先：金融政策決定会合参加者>

[議長案]

金融市場調節方針の決定に関する件

(案 件)

次回金融政策決定会合までの金融市場調節方針を下記のとおりとし、別添のとおり公表すること。

記

日本銀行当座預金残高が30～35兆円程度となるよう金融市場調節を行う。

なお、資金需要が急激に増大するなど金融市場が不安定化するおそれがある場合には、上記目標にかかわらず、一層潤沢な資金供給を行う。また、資金供給に対する金融機関の応札状況などから資金需要が極めて弱いと判断される場合には、上記目標を下回ることがありうるものとする。

以 上

(別 添)

2006年2月9日

日 本 銀 行

当面の金融政策運営について

日本銀行は、本日、政策委員会・金融政策決定会合において、次回金融政策決定会合までの金融市場調節方針を、以下のとおりとすることを決定した（全員一致または賛成○反対○）。

日本銀行当座預金残高が30～35兆円程度となるよう金融市場調節を行う。

なお、資金需要が急激に増大するなど金融市場が不安定化するおそれがある場合には、上記目標にかかわらず、一層潤沢な資金供給を行う。また、資金供給に対する金融機関の応札状況などから資金需要が極めて弱いと判断される場合には、上記目標を下回ることがありうるものとする。

以 上

要 注 意

不開示情報：有（種類：審議、検討）
＜配付先：金融政策決定委員会関係者限り＞
＜作成局における保管期間満了時期：2003年12月＞

2006年2月
調査統計局
企画局

金融経済月報「基本的見解」の前月との比較

2006年2月

2006年1月

(現 状) わが国の景気は、着実に回復を続けている。

輸出や生産は増加を続けており、企業収益が高水準で推移するも、設備投資も引き続き増加している。雇用者所得も、雇用と賃金の改善を反映して、緩やかな増加を続けており、そのもとで個人消費は底堅く推移している。住宅投資も、強含みの動きとなっている。この間、公共投資は減少傾向にある。

わが国の景気は、着実に回復を続けている。

輸出は増加を続けており、生産も増加の動きが明確になってきている。また、企業収益が高水準で推移するも、設備投資は引き続き増加している。雇用者所得も、雇用と賃金の改善を反映して、緩やかな増加を続けており、そのもとで個人消費は底堅く推移している。住宅投資も、強含みの動きが続いている。この間、公共投資は基調としては減少傾向にある。

(先行き) 先行きについても、景気は着実に回復を続けていくとみられる。

すなわち、海外経済の拡大を背景に、輸出は増加を続けていくとみられる。国内民間需要も、企業の過剰債務などの構造的な調整圧力が概ね払拭されたもとで、高水準の企業収益や雇用者所得の緩やかな増加を背景に、引き続き増加していく可能性が高い。こうした内外需要の増加を背景に、生産も増加基調をたどるとみられる。この間、公共投資は、減少基調を続けると考えられる。

先行きについても、景気は着実に回復を続けていくとみられる。

すなわち、海外経済の拡大を背景に、輸出は増加を続けていくとみられる。国内民間需要も、企業の過剰債務などの構造的な調整圧力が概ね払拭されたもとで、高水準の企業収益や雇用者所得の緩やかな増加を背景に、引き続き増加していく可能性が高い。こうした内外需要の増加を背景に、生産も増加基調をたどるとみられる。この間、公共投資は、減少基調を続けると考えられる。

(物 価) 物価の現状をみると、国内企業物価は、国際商品市況高や昨年後半における円安などを背景に、上昇を続けている。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、若干のプラスで推移している。

物価の先行きについて、国内企業物価は、当面は国際商品市況高の影響などから、上昇を続けるとみられる。消費者物価の前年比は、需給環境の緩やかな改善が続く中、電話料金引き下げの影響が剥落していくこととあわせて、プラス基調になっていくと予想される。

物価の現状をみると、国内企業物価は、国際商品市況高や昨年後半における円安などを背景に、上昇を続けている。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、若干のプラスに転じている。

物価の先行きについて、国内企業物価は、当面は国際商品市況高の影響などから、上昇を続けるとみられる。消費者物価の前年比は、需給環境の緩やかな改善が続く中、電話料金引き下げの影響が剥落していくこととあわせて、プラス基調になっていくと予想される。

(金 融) 金融面をみると、企業金融を巡る環境は、総じて緩和の方向にある。CP・社債の発行環境は良好な状況にあるほか、民間銀行の貸出姿勢は緩和してきている。企業からみた金融機関の貸出態度も引き続き改善している。また、民間の資金需要は下げ止まりつつある。こうしたもとで、民間銀行貸出は増加幅が拡大しており、CP・社債の発行残高も前年を上回る水準で推移している。マネタリーベースの伸び率は前年比1%台で推移しており、マネーサプライは前年比2%程度の伸びで推移している。金融市場の動きをみると、日本銀行による潤沢な資金供給のもとで、短期金利はきわめて緩和的な状況が続いている。為替・資本市場では、前月と比べ、長期金利および株価は上昇しているが、円の対ドル相場は下落している。

金融面をみると、企業金融を巡る環境は、総じて緩和の方向にある。CP・社債の発行環境は良好な状況にあるほか、民間銀行の貸出姿勢は緩和してきている。企業からみた金融機関の貸出態度も引き続き改善している。また、民間の資金需要は減少トレンドがかなり緩やかになっている。こうしたもとで、民間銀行貸出は増加幅が拡大しており、CP・社債の発行残高も前年を上回る水準で推移している。マネタリーベースの伸び率は1%となったっており、マネーサプライは前年比2%程度の伸びで推移している。金融市場の動きをみると、日本銀行による潤沢な資金供給のもとで、短期金利はきわめて緩和的な状況が続いている。為替・資本市場では、円の対ドル相場および長期金利は前月と概ね同じ水準となっている。この間、株価は、1月中旬にかけて大幅に上昇したが、その後下落し、足もとでは前月を上回る水準となっている。

要注意

- <不開示情報：有（種類：審議・検討）>
- <配付先：金融政策決定会合関係者限り>
- <作成局における保管期間満了時期：2036年12月>

(案)

公表時間
2月10日(金) 14時00分

2006年2月10日
日 本 銀 行

金融経済月報

(2006年2月)

本稿は、2月8日、9日に開催された政策委員会・金融政策決定会合の時点で利用可能であった情報をもとに記述されている。

【基本的見解¹】

わが国の景気は、着実に回復を続けている。

輸出や生産は増加を続けており、企業収益が高水準で推移するもとで、設備投資も引き続き増加している。雇用者所得も、雇用と賃金の改善を反映して、緩やかな増加を続けており、そのもとで個人消費は底堅く推移している。住宅投資も、強含みの動きとなっている。この間、公共投資は減少傾向にある。

先行きについても、景気は着実に回復を続けていくとみられる。

すなわち、海外経済の拡大を背景に、輸出は増加を続けていくとみられる。国内民間需要も、企業の過剰債務などの構造的な調整圧力が概ね払拭されたもとで、高水準の企業収益や雇用者所得の緩やかな増加を背景に、引き続き増加していく可能性が高い。こうした内外需要の増加を背景に、生産も増加基調をたどるとみられる。この間、公共投資は、減少基調を続けると考えられる。

物価の現状をみると、国内企業物価は、国際商品市況高や昨年後半における円安などを背景に、上昇を続けている。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、若干のプラスで推移している。

物価の先行きについて、国内企業物価は、当面は国際商品市況高の影響などから、上昇を続けるとみられる。消費者物価の前年比は、需給環境の緩やかな改善が続く中、電話料金引き下げの影響が剥落していくこともあって、プラス基調になっていくと予想される。

金融面をみると、企業金融を巡る環境は、総じて緩和の方向にある。CP・社債の発行環境は良好な状況にあるほか、民間銀行の貸出姿勢は緩和してきている。企業からみた金融機関の貸出態度も引き続き改善している。また、民間

¹ 本「基本的見解」は、2月8日、9日開催の政策委員会・金融政策決定会合で決定されたものである。

の資金需要は下げ止まりつつある。こうしたもとの、民間銀行貸出は増加幅が拡大しており、CP・社債の発行残高も前年を上回る水準で推移している。マネタリーベースの伸び率は前年比1%台で推移しており、マネーサプライは前年比2%程度の伸びで推移している。金融市場の動きをみると、日本銀行による潤沢な資金供給のもとで、短期金融市場ではきわめて緩和的な状況が続いている。為替・資本市場では、前月と比べ、長期金利および株価は上昇しているが、円の対ドル相場は下落している。

【背景説明】

1. 実体経済

公共投資は、減少傾向にある（図表4）。工事進捗を反映する公共工事出来高は、7～9月に幾分増加したが、10～11月は再び減少した。発注の動きを示す公共工事請負金額も、7～9月にほぼ横ばいとなった後、10～12月は減少している。先行きについても、国・地方の厳しい財政状況を背景に、公共投資は減少基調を続けると考えられる。

実質輸出は（図表5(1)、6）、海外経済の拡大を背景に、増加を続けている（7～9月の前期比+3.3%、10～12月の前期比+2.8%）。

実質輸出の動きを地域別にみると（図表6(1)）、米国向けは、着実な増加を続けており、10～12月については、自動車関連を中心に高い伸びとなっている。また、昨年央まで伸び悩んでいた中国向けは、7～9月に大幅に増加した後、10～12月も、情報関連や自動車関連を中心に堅調な増加となっている（図表9）。EU向けも、緩やかな増加基調にある。この間、NIEs向けについては、台湾向けが減少しているが²、全体としては緩やかな増加を続けている。

財別にみると（図表6(2)）、消費財は、デジタル家電を中心に堅調な増加を続けている。また、情報関連（半導体等電子部品）は、7～9月に続き10～12月も堅調な伸びとなったほか、資本財・部品（半導体製造装置）も、しっかりした増加を続けている（図表7(1)、8(1)）。この間、自動車関連は、7～9月は小幅の減少となったが、10～12月は、船待ちの解消もあって、高めの伸び

² 台湾向けの減少については、台湾新幹線関連工事の一服が主な背景とみられるが、台湾企業による中国への生産移管も影響している可能性がある。

となっている（図表7(3)）。

実質輸入は、足もとは横ばい圏内の動きとなったが、国内需要の増加や、中国などとの国際分業の進行から、基調的には増加を続けている（図表5(1)、11）。財別にみると、10～12月は振れの大きい航空機や食料品が減少したほか、情報関連も7～9月の大幅増加の反動から、微増程度にとどまった。一方、資本財・部品（除く航空機）は引き続き増加傾向にあるほか、消費財も、振れを伴いつつ、増加基調をたどっている。

純輸出の動きを表す実質貿易収支をみると、上記の輸出入の動きを反映して、10～12月はかなり増加した（図表5(2)）。名目貿易・サービス収支は、輸入原材料価格の上昇から黒字幅が縮小してきたが、足もとは、上述した実質貿易収支の動きを受けて、黒字幅がはっきりと拡大している。この間、経常収支については、海外子会社からの配当金受け取り増など、所得収支の改善傾向が続いていることから、貿易・サービス収支と比べて、趨勢的にやや強めの推移となっている。

先行きの輸出については、海外経済が米国、東アジアを中心に拡大を続けるもとで（図表10(2)）、増加を続けていくとみられる。

すなわち、輸出を巡る環境をみると、米国経済は、10～12月の成長率は幾分減速したが、基調としては国内民間需要を中心に着実な景気拡大が続いており、今後も潜在成長率並みの拡大基調を続けるとみられる。中国経済についても、部門ごとの需給の不均衡は引き続きみられるものの、全体として高成長が続いている。この間、為替相場について、物価上昇率の内外格差も勘案した実質実効レートでみると、昨年円安が進んだことを受けて、最近では85年以来約20年

振りの円安水準となっている（図表 10(1)）。こうした為替相場の動向も、輸出の増加を支える方向に作用すると考えられる。

先行きの輸入については、国内景気が回復を続ける中で、増加傾向が続くと予想される。

設備投資は、引き続き増加している。機械投資の同時指標である資本財出荷（除く輸送機械）は、振れを伴いつつも増加傾向を続けており、10～12月は半導体製造装置が強めの動きとなっている（図表 12(1)）。先行指標である機械受注（船舶・電力を除く民需）も、着実な増加基調をたどっている（図表 13(1)）。また、建設投資の先行指標である建築着工床面積（民間非居住用）をみると、7～9月は大幅に減少したが、10～12月は再び大きく増加するなど、振れを伴いつつも基調としては増加傾向にある（図表 13(2)）。

先行きの設備投資については、内外需要の増加や高水準の企業収益が続く見込みのもとで、引き続き増加すると予想される。

個人消費は、指標ごとのばらつきは引き続きみられるが、全体としては底堅く推移している。個別の指標をみると（図表 14、15）、乗用車の新車登録台数は、昨年後半以降、需要喚起につながる新型車投入が少なかったことなどから、弱い動きが続いてきたが、1月は小型車や軽自動車を中心に反発した。一方、家電販売額は、順調な増加が続いている。全国百貨店の売上高は、12月は降雪の影響もあって幾分減少したが、均してみれば、衣料品や身の回り品（バック等）、宝飾品などを中心に底堅い動きを続けている。スーパーの売上高も、基調としては弱めの動きが続いてきたが、足もとは、衣料品を中心に幾分増加し

ている³。ただし、昨年前半まで緩やかな増加傾向を続けてきたコンビニエンスストアについては、7～9月、10～12月と2四半期連続で減少している。この間、サービス消費をみると、外食産業売上高は着実な増加傾向をたどっており、とくに昨年後半は、居酒屋やレストランを中心に、増加テンポが幾分速まった。一方、旅行取扱額は、11月は海外旅行がやや持ち直したが、均してみれば、横ばい圏内の動きとなっている。

これら財、サービスの代表的な販売統計の動きを合成した販売統計合成指数（実質ベース）をみると⁴、衣料品の販売好調などから、10～12月はしっかりした動きとなっている（図表16）。財について生産者段階で包括的に捉えた消費財総供給も、7～9月は乗用車を中心に小幅減少となったが、10～12月は、デジタル家電や暖房器具などを中心に増加している（図表17）。この間、需要側から個人消費を捉えた家計調査の消費水準指数（全世帯、実質ベース）をみると、7月に大きく減少したが、その後は持ち直しており、均してみれば底堅く推移している（図表14）⁵。

この間、消費者コンフィデンスは、雇用環境の改善や株価の上昇などを背景に、改善傾向にある（図表18）。

先行きの個人消費については、雇用者所得の緩やかな増加等を背景に、着実

³ ただし、12月の増加については、一部大手スーパーによる不採算店舗の閉店が、店舗調整後の計数を押し上げている面もあるとみられる。

⁴ 販売統計合成指数は、各種の販売統計を加重平均して算出したものである。なお、12月については、指数作成時点で未公表であった12月の旅行取扱額について、季節調整済み計数を11月と同水準と仮定して作成している。

⁵ 勤労者世帯については、12月の計数が出ており、防寒衣料や暖房器具などを中心に増加した。

な回復を続ける可能性が高いと考えられる。

住宅投資を新設住宅着工戸数で見ると、強含みの動きとなっている（図表 19(1)）。すなわち、住宅着工戸数は、分譲や貸家を中心に、7～9月、10～12月と高めの水準となっている⁶。良好な金融環境のもとでの供給側の積極的な姿勢が、団塊ジュニアやシニア層を中心とした潜在需要の掘り起こしにつながっている模様である。先行きについても、耐震強度偽装問題の影響に関する不確実性はあるが、基調的には底堅く推移するものとみられる。

鉱工業生産は、昨年央まで統計上の振れもあって一進一退を繰り返してきたが、秋口以降は増加が続いている。12月の生産は、5か月連続の増加となり、10～12月は前期比+2.7%と高めの伸びとなった（図表 20）。10～12月の生産を業種別にみると、電子部品・デバイスが7～9月に続き大幅な増加となっているほか、一般機械（半導体製造装置）や輸送機械（輸出向け自動車）も増加している。

出荷も、10～12月は高めの伸びとなっている。財別にみると（図表 21）、生産財は、電子部品・デバイスを中心に、増加基調が鮮明になっている。資本財はこのところかなり振れが大きいですが、基調としては増加を続けている。この間、消費財は、夏場にかけて幾分弱含んでいたが、足もとは耐久財（輸出向け自動車、デジタル家電）を中心に、しっかりした増加となっている。

在庫は、素材業種の一部や輸送機械で高めとなっているが、全体としては概

⁶ ただし、12月単月で見ると、分譲と貸家が比較的はっきりと減少した。これまでの好調の反動や降雪の影響が出たとみられるが、耐震強度偽装問題を受けて、建築確認手続きに時間を要するようになってきている可能性も考えられる。

ね出荷とバランスしている。在庫循環図をみると(図表 22)、鉱工業全体では、在庫の伸びが出荷の伸びをなお幾分上回っている。しかし、振れの大きい輸送機械を除けば、在庫の前年比は出荷の前年比をはっきりと下回っており、在庫・出荷バランスは概ね良好である。内訳をみると、電子部品・デバイスは、出荷が大幅に増加するもとで在庫は減少しており、はっきりとした回復局面にある。一方、その他生産財では、石油製品の在庫は気温低下による灯油需要の増加などから減少しているが、鉄鋼や化学、紙などを中心に、全体としてはなお軽度の在庫調整局面にある。もっとも、素材でも、IT関連向けや自動車向けなどの高付加価値品は、引き続き良好な需給環境にある。この間、耐久消費財については、足もとの在庫の前年比がかなり高くなっているが、これには乗用車国内販売の減少に加え、輸出船待ち在庫の増加や前年同時期の在庫の低さなど、一時的な要因もかなり影響している。

先行きの生産については、海外経済の成長が続き、内需の回復基盤もしっかりしていることから、増加基調を続けると考えられる。企業からの聞き取り調査でも、1～3月の生産は増加を続ける見込みである⁷。

雇用・所得環境をみると、労働需給を反映する諸指標が改善傾向を続ける中、雇用と賃金の改善を反映して、雇用者所得は緩やかな増加を続けている(図表 23)。

労働需給面では、所定外労働時間は、横ばい圏内ながら高水準で推移している(図表 25(3))。新規求人数をみると、伸び率は幾分鈍化しているが、前年比

⁷ ちなみに、1、2月の生産予測指数(3月は前月比横ばいと仮定)をもとに計算すると、1～3月の生産は、前期比+1.3%の増加となる。

増加が続いている（図表 24(3)）。こうしたもとで、有効求人倍率は緩やかな上昇傾向にあり、12 月は 1.00 倍と、92 年 9 月以来の水準まで改善した。完全失業率は、10～11 月にかけて自発的離職者の増加からやや上昇した後、12 月は幾分低下した（図表 24(1)）。

雇用面についてみると、労働力調査の雇用者数は、前年同時期が弱めであったこともあって、このところの前年比は比較的大きめのプラスとなっている。また、毎月勤労統計の常用労働者数は、前年比+0.5%程度の安定的なペースで増加を続けている（図表 25(1)）。内訳をみると、昨年春以降、パートタイム労働者だけでなく、一般労働者（フルタイム労働者）も増加しており、その結果、パート比率の前年差は、ゼロ近傍で推移している（図表 25(2)）⁸。

賃金の前年比をみると、所定内給与は、一般労働者の給与を中心に、ごく緩やかに増加している。また、冬季賞与の大半を占める 11～12 月の特別給与は、昨冬および昨夏並みの前年比+1.8%となった⁹。これらを反映して、一人当たり名目賃金は、緩やかな増加を続けている（図表 23(2)）。

先行きについては、雇用不足感が出てきていることや、企業収益が高水準を続けるとみられることなどから、雇用者所得は緩やかな増加を続ける可能性が高い。

⁸ 直近 12 月のパート比率はやや低めになっているが、これは 12 月の計数が速報であることによる面が大きいとみられる。毎勤統計のパート比率は、速報段階では低めに出る傾向があり、約半月後の確報で上方修正されることが多い。

⁹ 昨冬（特別給与の 11～1 月の合計）は前年比+1.8%、昨夏（同 6～8 月の合計）は同+1.7%であった。

2. 物価

輸入物価（円ベース、以下同じ）を3か月前比で見ると、国際商品市況の上昇や、昨年後半の円安から、上昇を続けている（図表 27）。

国内企業物価（夏季電力料金調整後、以下同じ）を3か月前比で見ると¹⁰、国際商品市況高や昨年後半における円安などを背景に、上昇を続けている（図表 28）。内訳をみると、非鉄金属が大幅に上昇しているほか、石油・石炭製品も引き続き上昇している。その他の素材（化学）も、コスト高の転嫁が徐々に進んでいることを背景に上昇している。鉄鋼・建材関連は、スクラップが上昇している一方、鋼材はほぼ横ばい圏内となっているため、ごく小幅の上昇にとどまっている。この間、機械類は、マイナス幅が緩やかな縮小傾向にある。需要段階別にみると、中間財の価格は上昇を続けているが、最終財については、横ばい圏内の動きとなっている。

企業向けサービス価格（除く海外要因、以下同じ）は¹¹、前年比マイナス幅の緩やかな縮小傾向が続いている（図表 29）。10～12月についても、リース・レンタル（物件価格）のマイナス幅縮小などから、7～9月と比べて前年比下落幅が縮小した。

消費者物価（除く生鮮食品、以下同じ）の前年比は、若干のプラスで推移している（図表 30）。12月の前年比は、前月と同じ+0.1%となった。

¹⁰ 「夏季電力料金調整後」とは、国内企業物価の基調的な動きをみるために、7～9月期における電力料金の季節的上昇を取り除いた系列である。電力使用量が膨らむ7～9月期については、産業用・業務用の電力料金が通常の時期に比べ高めに設定されている。

¹¹ 「除く海外要因」とは、総平均から、国際航空旅客輸送、定期船、不定期船、外航タンカー、外航貨物用船料、国際航空貨物輸送を除いたものである。

先行きの国内企業物価は、当面は国際商品市況高の影響などから、上昇を続けるとみられる。先行きの消費者物価の前年比については、需給環境の緩やかな改善が続く中、電話料金引き下げの影響が剥落していくこともあって、プラス基調になっていくと予想される。

3. 金融

(1) 金融市況

金融面をみると、日本銀行が潤沢な資金供給を行った結果、日本銀行当座預金は、32～34兆円台で推移した（図表 33）。

短期市場金利についてみると、無担保コールレート（オーバーナイト物）は（図表 31(1)）、引き続きゼロ%近辺で推移している。ターム物金利も（図表 32(1)）、総じて低位で安定的に推移している。ユーロ円金利先物レート（図表 32(2)）は、ほぼ横ばい圏内で推移している。

長期国債の流通利回り（10年新発債、図表 31(2)）は、米国金利の上昇や堅調なわが国経済指標などを受けて上昇し、最近では1.5%台後半で推移している。

民間債（銀行債、事業債）と国債との流通利回りスプレッド（図表 36、37）をみると、総じて横ばい圏内で推移している。

株価は（図表 38）、一部企業の業績発表やわが国経済指標を眺めた景気回復期待の高まりを背景に上昇し、最近では、日経平均株価は16千円台後半で推移している。

為替相場をみると（図表 39）、円の対米ドル相場は、全般的に堅調な米国経

済指標を受けた海外投資家によるドル買いなどから下落し、最近では117～118円台で推移している。

(2) 企業金融と量的金融指標

資金需要面では、景気が着実に回復を続けている中で、設備投資など企業の支出が増加を続けていることから、民間の資金需要は下げ止まりつつある。

一方、資金供給面をみると、民間銀行は、全体として貸出姿勢を緩和してきている。企業からみた金融機関の貸出態度も、中小企業を含め、引き続き改善している(図表40)。

貸出金利は、このところ弱含んでいる。新規貸出約定平均金利は、月々の振れを均してみれば、幾分低下している(図表41)。

民間銀行貸出(銀行計・月中平均残高、特殊要因調整後¹²)は、増加幅が拡大している(10月+0.9%→11月+0.9%→12月+1.3%、図表42)。

CP、社債など市場を通じた企業の資金調達環境は、良好な状況にある。社債発行金利は、発行スプレッドが低水準で安定的に推移する中、横ばい圏内の動きとなっている。CP発行金利は、引き続き低水準にある。CP・社債発行残高は、前年を上回る水準で推移している(10月+3.0%→11月+4.1%→12月+4.4%、図表44)。

こうした中、企業の資金繰り判断は、引き続き改善傾向にある。

¹² 「特殊要因調整後」とは、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、および③貸出債権の償却による変動分などを調整した計数である。

この間、銀行券発行残高の伸び率は、前年比2%程度となっている。マネタリーベース（流通現金＋日銀当座預金）の伸び率は、前年比1%台で推移している（11月＋1.5%→12月＋1.0%→1月＋1.4%、図表45）。

マネーサプライ（M2＋CD）は、前年比2%程度の伸びで推移している（10月＋2.0%→11月＋2.1%→12月＋2.0%、図表46）。

企業倒産件数は、12月は1,149件、前年比＋3.6%となった（図表47）。

以 上

金融経済月報（2006年2月） 参考計表

- | | | | |
|---------|----------------|---------|------------------|
| (図表 1) | 国内主要経済指標 (1) | (図表 31) | 市場金利等 |
| (図表 2) | 国内主要経済指標 (2) | (図表 32) | 短期金融市場 |
| (図表 3) | 実質GDP | (図表 33) | 日銀当座預金残高 |
| (図表 4) | 公共投資 | (図表 34) | 日本銀行の資金供給オペレーション |
| (図表 5) | 輸出入 | (図表 35) | 長期金利の期間別分解 |
| (図表 6) | 実質輸出の内訳 | (図表 36) | 銀行債流通利回り |
| (図表 7) | 財別輸出の動向 | (図表 37) | 社債流通利回り |
| (図表 8) | 情報関連の輸出入 | (図表 38) | 株価 |
| (図表 9) | 中国との貿易 | (図表 39) | 為替レート |
| (図表 10) | 実質実効為替レート・海外経済 | (図表 40) | 企業金融 |
| (図表 11) | 実質輸入の内訳 | (図表 41) | 貸出金利 |
| (図表 12) | 設備投資一致指標 | (図表 42) | 民間銀行貸出 |
| (図表 13) | 設備投資先行指標 | (図表 43) | その他金融機関貸出 |
| (図表 14) | 個人消費関連指標 (1) | (図表 44) | 資本市場調達 |
| (図表 15) | 個人消費関連指標 (2) | (図表 45) | マネタリーベース |
| (図表 16) | 販売統計合成指数 | (図表 46) | マネーサプライ |
| (図表 17) | 消費財総供給 | (図表 47) | 企業倒産 |
| (図表 18) | 消費者コンフィデンス | (図表 48) | 量的金融指標と経済活動 |
| (図表 19) | 住宅投資関連指標 | | |
| (図表 20) | 鉱工業生産・出荷・在庫 | | |
| (図表 21) | 財別出荷 | | |
| (図表 22) | 在庫循環 | | |
| (図表 23) | 雇用者所得 | | |
| (図表 24) | 労働需給 (1) | | |
| (図表 25) | 労働需給 (2) | | |
| (図表 26) | 物価 | | |
| (図表 27) | 輸入物価と国際商品市況 | | |
| (図表 28) | 国内企業物価 | | |
| (図表 29) | 企業向けサービス価格 | | |
| (図表 30) | 消費者物価 | | |

国内主要経済指標 (1)

(指標名欄の〈〉内に指示されている場合を除き、季調済前期(月)比、%)

	2005/4-6月	7-9月	10-12月	2005/10月	11月	12月	2006/1月
消費水準指数(全世帯)	0.4	-1.7	n. a.	-0.3	-1.2	n. a.	n. a.
全国百貨店売上高	1.0	-0.7	p 0.8	-0.3	3.6	p -3.1	n. a.
全国スーパー売上高	-1.2	-1.2	p 0.8	-0.9	2.3	p 1.4	n. a.
乗用車新車登録台数(除軽) 〈季調済年率換算、万台〉	〈345〉	〈332〉	〈320〉	〈325〉	〈320〉	〈316〉	〈340〉
家電販売額 (実質、商業販売統計)	-0.3	2.3	p 5.8	1.9	2.0	p 3.0	n. a.
旅行取扱額(主要50社)	0.8	-2.1	n. a.	-2.5	3.2	n. a.	n. a.
新設住宅着工戸数 〈季調済年率換算、万戸〉	〈120〉	〈128〉	〈125〉	〈128〉	〈130〉	〈117〉	〈n. a.〉
機械受注 (民需、除〈船舶・電力〉)	0.8	2.1	n. a.	4.8	2.3	n. a.	n. a.
製造業	7.5	0.4	n. a.	-5.4	11.7	n. a.	n. a.
非製造業 (除〈船舶・電力〉)	-1.9	1.0	n. a.	6.0	7.7	n. a.	n. a.
建築着工床面積 (民間、非居住用)	-0.5	-10.3	10.2	25.1	-8.4	2.9	n. a.
鉱工業	27.8	-24.2	4.7	57.4	-27.5	9.2	n. a.
非製造業	-8.5	-3.9	10.5	14.3	-0.1	0.7	n. a.
公共工事請負金額	1.9	0.2	-3.1	-6.0	0.3	-5.5	n. a.
実質輸出	1.5	3.3	2.8	0.7	-0.1	1.7	n. a.
実質輸入	2.0	2.2	0.1	-2.0	0.9	3.1	n. a.
生産	-0.4	-0.2	p 2.7	0.6	1.5	p 1.4	n. a.
出荷	1.0	0.2	p 2.9	1.9	0.6	p 1.1	n. a.
在庫	-0.1	2.5	p 0.1	-1.7	1.5	p 0.3	n. a.
在庫率 〈季調済、2000年=100〉	〈96.2〉	〈101.3〉	〈p 101.1〉	〈99.3〉	〈101.4〉	〈p 101.1〉	〈n. a.〉
実質GDP	1.2	0.2	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.
全産業活動指数	0.2	0.2	n. a.	0.9	0.3	n. a.	n. a.

国内主要経済指標 (2)

(指標名欄の〈〉内に指示されている場合を除き、前年比、%)

	2005/4-6月	7-9月	10-12月	2005/9月	10月	11月	12月
有効求人倍率 〈季調済、倍〉	<0.94>	<0.97>	<0.99>	<0.97>	<0.98>	<0.99>	<1.00>
完全失業率 〈季調済、%〉	<4.3>	<4.3>	<4.5>	<4.2>	<4.5>	<4.6>	<4.4>
所定外労働時間 (事業所規模5人以上)	1.6	1.0	p 0.9	1.0	1.9	0.0	p 0.9
雇用者数(労働力調査)	0.7	0.9	1.2	1.9	1.8	0.9	1.0
常用労働者数(毎勤統計) (事業所規模5人以上)	0.5	0.5	p 0.5	0.5	0.6	0.5	p 0.5
一人当り名目賃金 (事業所規模5人以上)	1.0	0.4	p 1.0	0.8	0.6	0.1	p 1.6
国内企業物価 〈夏季電力料金調整済、 前期(3か月前)比、%〉	1.7 <0.8>	1.6 <0.5>	p 2.1 <p 0.8>	1.7 <0.8>	2.0 <0.9>	1.9 <0.7>	p 2.2 <p 0.7>
全国消費者物価 (除く生鮮食品)	-0.1	-0.1	0.1	-0.1	0.0	0.1	0.1
企業向けサービス価格	-0.4	-0.6	p -0.4	-0.6	-0.6	-0.4	p -0.4
マネーサプライ(M ₂ +CD) (平残)	1.7	1.8	p 2.0	2.1	2.0	2.1	p 2.0
企業倒産件数 〈件〉	<1,075>	<1,054>	<1,145>	< 987>	<1,171>	<1,114>	<1,149>

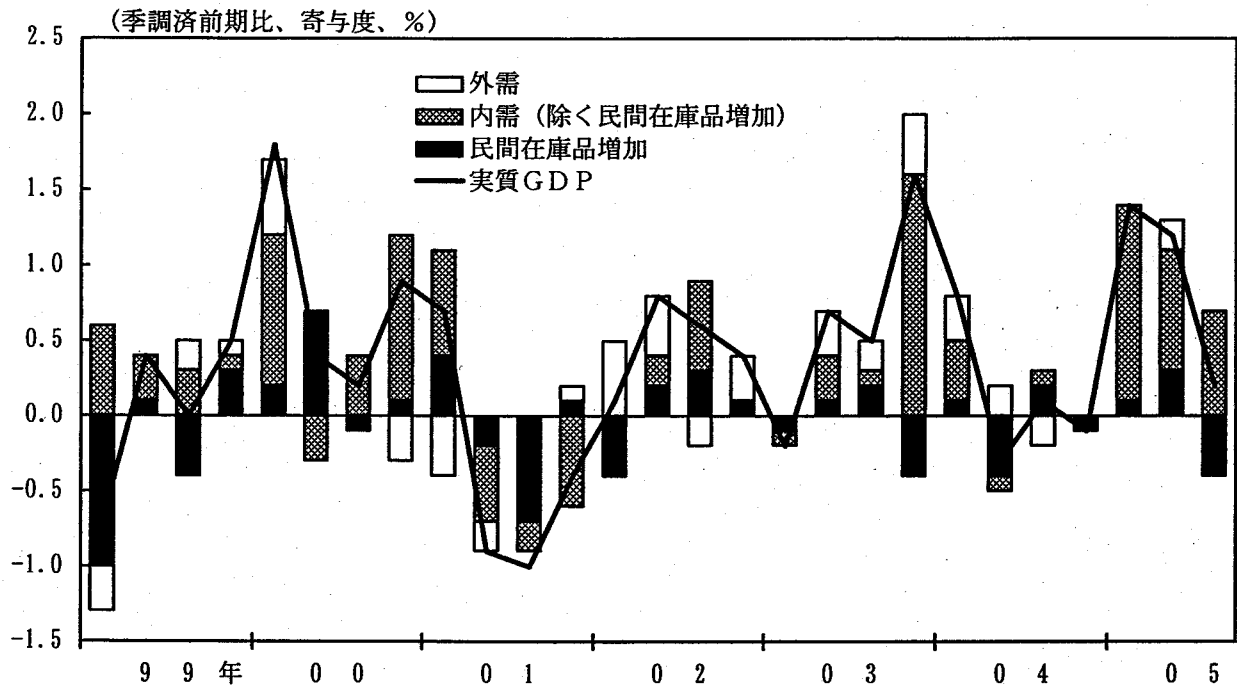
(注) 1. p は速報値。

2. 日本銀行が季節調整を施している指標の季節調整方法及び、日本銀行が作成・加工している指標の算出方法については、該当図表の脚注を参照。

(資料) 総務省「家計調査報告」「労働力調査」「消費者物価指数」、
 経済産業省「商業販売統計」「鉱工業指数統計」「第3次産業活動指数」、
 日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、
 国土交通省「建築着工統計」「旅行取扱状況」、内閣府「機械受注統計」「国民経済計算」、
 東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、財務省「外国貿易概況」、
 厚生労働省「職業安定業務統計」「毎月勤労統計」、
 日本銀行「企業物価指数」「企業向けサービス価格指数」「マネーサプライ」、
 東京商工リサーチ「倒産月報」

実質GDP

(1) 実質GDPの前期比



(2) 需要項目別の動向

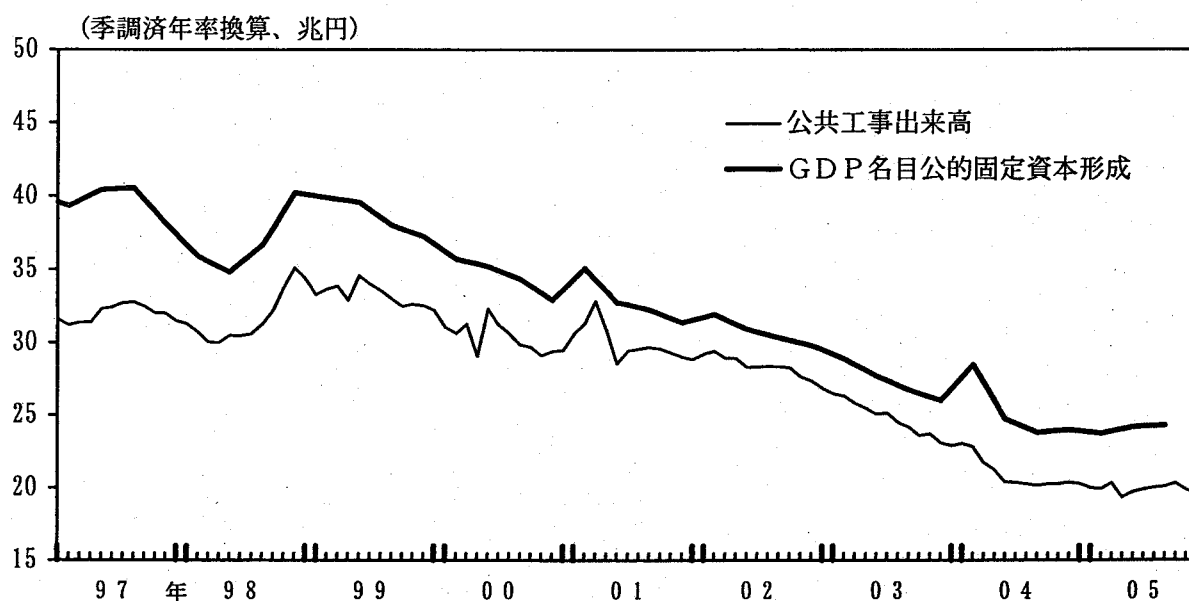
(季調済前期比%、()内は寄与度%)

	2004年		2005年		
	7~9月	10~12	1~3	4~6	7~9
実質GDP	0.1	-0.1	1.4	1.2	0.2
国内需要	0.3	-0.1	1.4	1.1	0.3
民間最終消費支出	0.3	-0.3	1.2	0.7	0.4
民間企業設備	0.5	0.7	3.3	2.4	1.6
民間住宅	0.1	0.5	-1.2	-2.1	1.6
民間在庫品増加	(0.2)	(-0.1)	(0.1)	(0.3)	(-0.4)
公的需要	-0.8	0.3	0.6	0.4	0.5
公的固定資本形成	-3.8	-0.1	-0.5	1.1	0.3
純輸出	(-0.2)	(-0.0)	(-0.0)	(0.2)	(-0.0)
輸出	0.3	1.6	-0.1	3.1	2.7
輸入	1.9	2.1	-0.0	2.2	3.3
名目GDP	-0.1	0.0	0.7	0.9	-0.2

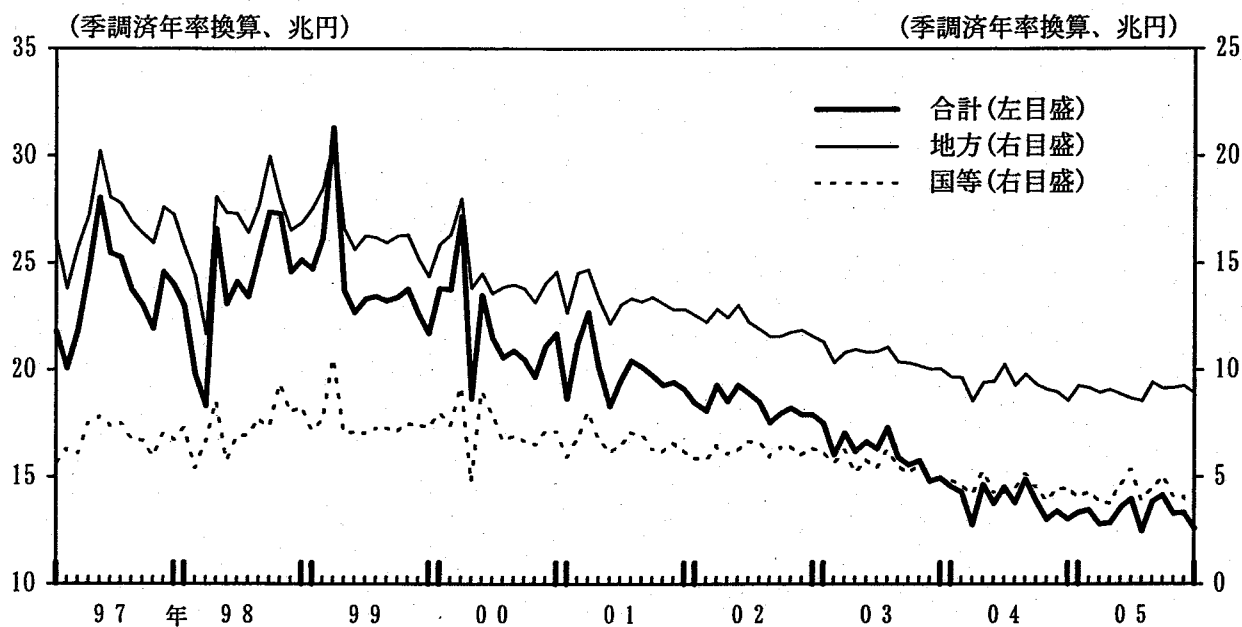
(資料) 内閣府「国民経済計算」

公共投資

(1) 公共工事出来高とGDP名目公的固定資本形成



(2) 公共工事請負金額

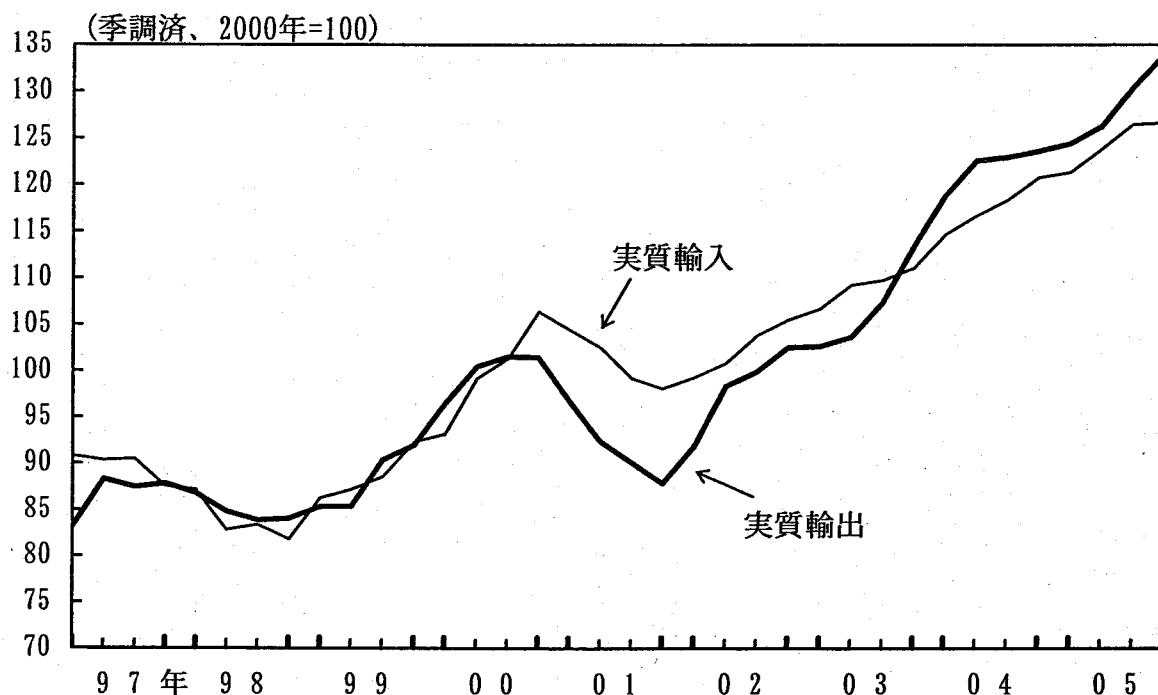


- (注) 1. GDP名目公的固定資本形成は、四半期の値を中心月にプロット。
2. 公共工事出来高は、国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。なお、2000/3月以前の計数については、総合表の旧分類による時系列の前年比の伸び率を用いて遡及した。
3. 公共工事請負金額の「地方」は、「都道府県」・「市区町村」・「地方公社」の合計。「国等」は「国」・「公団・事業団等」・「その他」の合計。
4. 公共工事請負金額及び公共工事出来高は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

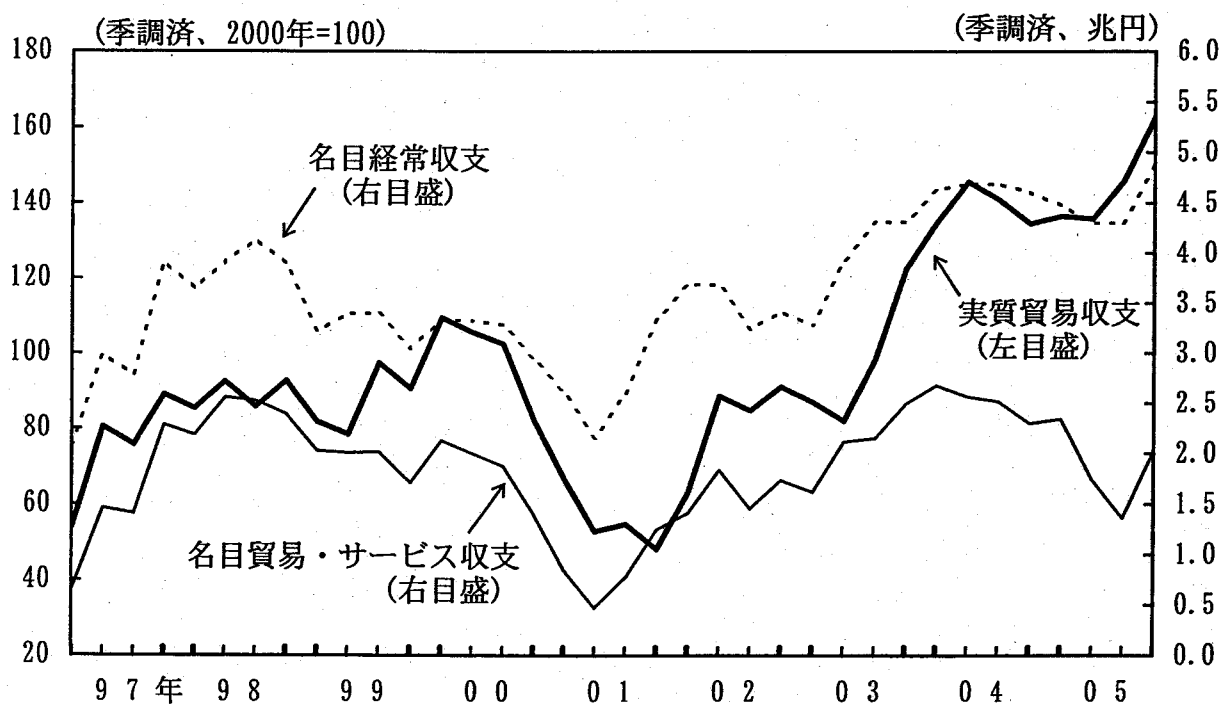
(資料) 内閣府「国民経済計算」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、国土交通省「建設総合統計」

輸出入

(1) 実質輸出入



(2) 対外収支



- (注) 1. 実質輸出(入)は、通関輸出(入)金額を輸出(入)物価指数で各々デフレートし、指数化したもの。
実質貿易収支は、実質輸出入の差を指数化したもの。
2. 実質輸出入及び実質貿易収支は、X-12-ARIMAによる季節調整値。
3. 2005/4Qの名目経常収支、名目貿易・サービス収支は10~11月の四半期換算値。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」「国際収支統計月報」

実質輸出の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2004年	2005	2004年 4Q	2005年 1Q	2Q	3Q	4Q	2005年 10月	11	12
米国	<22.6>	6.8	7.3	2.3	2.0	1.3	1.0	5.6	5.8	-0.4	1.8
EU	<14.7>	18.7	3.3	2.0	-0.7	0.2	1.5	1.8	1.9	-3.7	3.9
東アジア	<46.7>	19.1	6.1	-0.5	3.2	-0.0	4.7	1.6	-1.4	0.8	-1.9
中国	<13.5>	22.2	9.6	2.8	1.3	-1.6	11.8	4.0	-1.7	3.8	-3.7
NIEs	<24.3>	20.3	5.0	-2.8	4.4	0.6	3.3	0.2	-2.6	-1.6	-1.1
韓国	<7.8>	19.1	4.4	-6.9	7.9	-1.4	7.6	2.1	4.2	-5.5	-6.5
台湾	<7.3>	26.9	4.4	-1.7	3.2	3.1	-3.4	-5.2	-5.2	-7.7	7.1
ASEAN4	<9.0>	12.3	4.4	1.2	2.8	0.6	-1.0	1.6	2.5	2.7	-1.1
タイ	<3.8>	16.8	11.0	5.6	5.2	-0.4	-0.9	1.4	2.1	-1.8	1.6
実質輸出計		14.5	5.4	0.5	0.7	1.5	3.3	2.8	0.7	-0.1	1.7

- (注) 1. < >内は、2005年通関輸出額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4は、タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2004年	2005	2004年 4Q	2005年 1Q	2Q	3Q	4Q	2005年 10月	11	12
中間財	<17.3>	5.5	1.8	-0.0	1.4	0.9	2.5	1.4	-0.4	-2.4	2.1
自動車関連	<22.7>	8.3	8.2	1.2	1.7	4.3	-0.5	4.7	6.0	-3.6	4.2
消費財	<5.6>	14.9	5.3	4.5	-2.0	3.0	5.4	3.0	2.0	-2.4	0.5
情報関連	<12.5>	17.3	5.6	-0.6	2.2	0.4	3.9	3.5	2.9	0.9	-1.3
資本財・部品	<29.5>	23.5	7.1	0.3	1.3	1.1	3.6	2.9	0.3	1.5	1.2
実質輸出計		14.5	5.4	0.5	0.7	1.5	3.3	2.8	0.7	-0.1	1.7

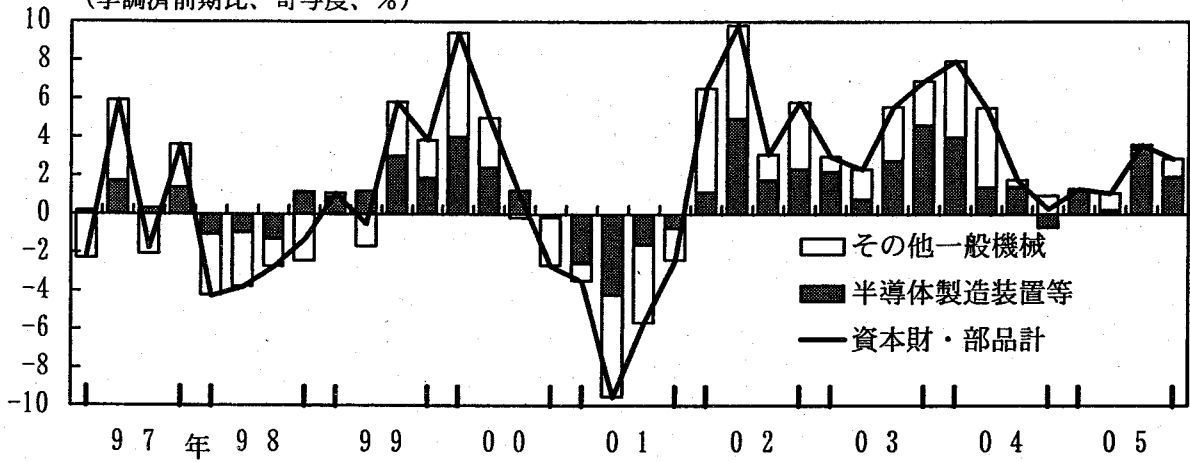
- (注) 1. < >内は、2005年通関輸出額に占める各財のウェイト。
 2. 「消費財」は、自動車を除く。
 3. 「情報関連」は、電算機類、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 4. 「資本財・部品」は、情報関連、原動機、自動車部品を除く。
 5. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

財別輸出の動向

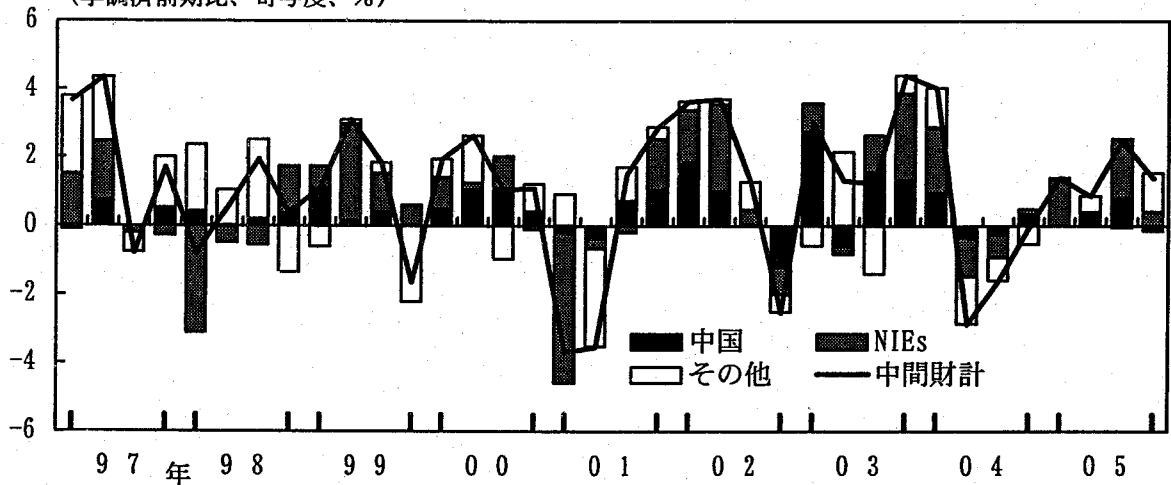
(1) 資本財・部品 (実質、財別)

(季調済前期比、寄与度、%)



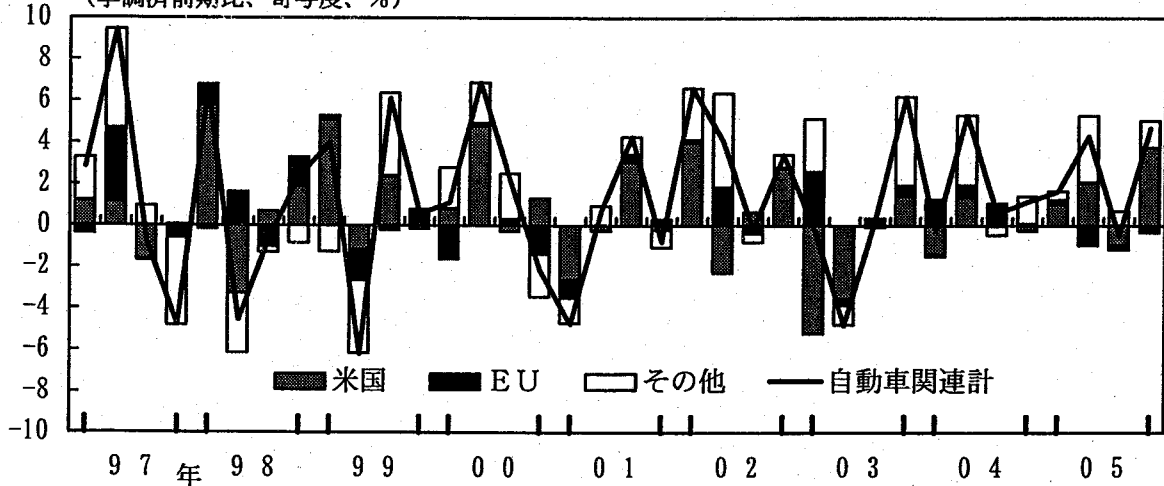
(2) 中間財 (実質、地域別)

(季調済前期比、寄与度、%)



(3) 自動車関連 (実質、地域別)

(季調済前期比、寄与度、%)



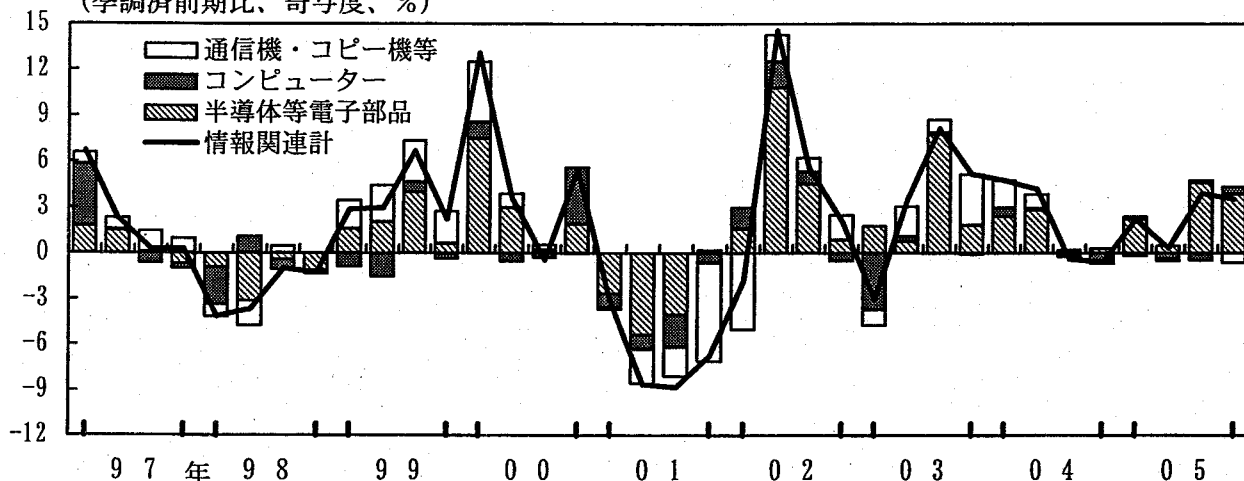
(注) 各計数ともX-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

情報関連の輸出入

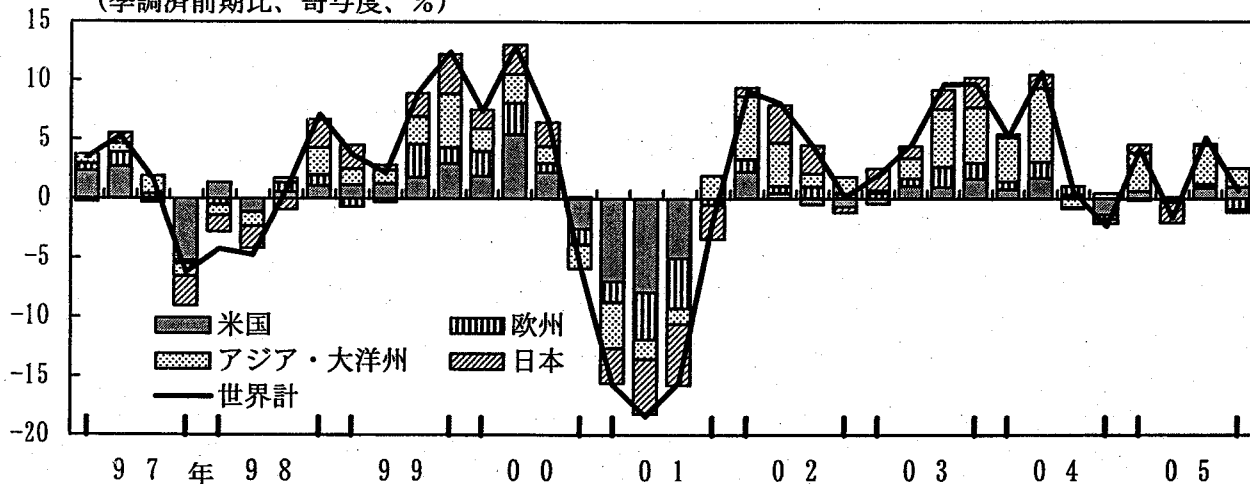
(1) 情報関連輸出 (実質、品目別)

(季調済前期比、寄与度、%)



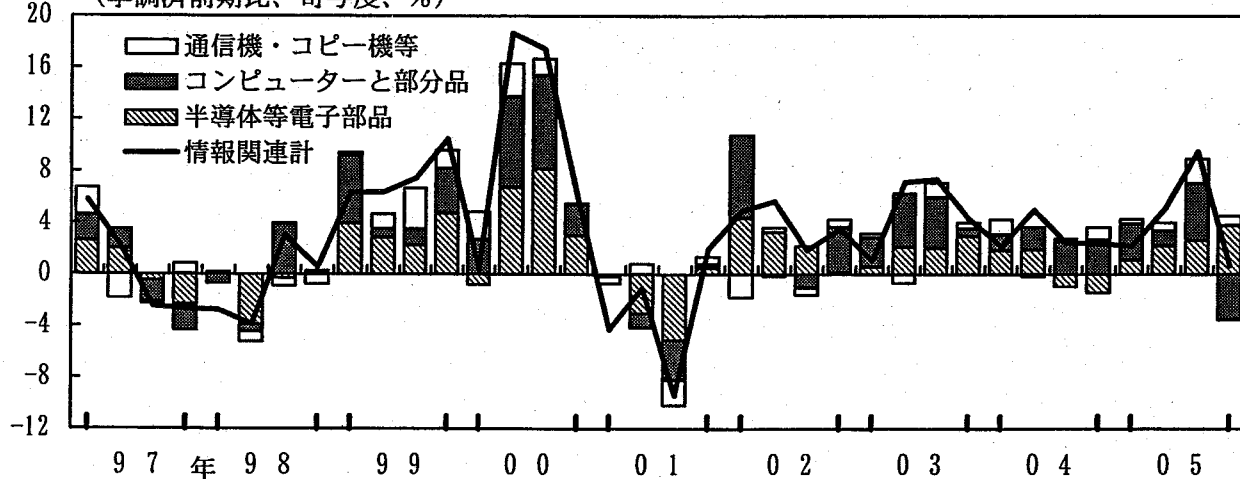
(2) 世界半導体出荷 (名目、地域別)

(季調済前期比、寄与度、%)



(3) 情報関連輸入 (実質、品目別)

(季調済前期比、寄与度、%)

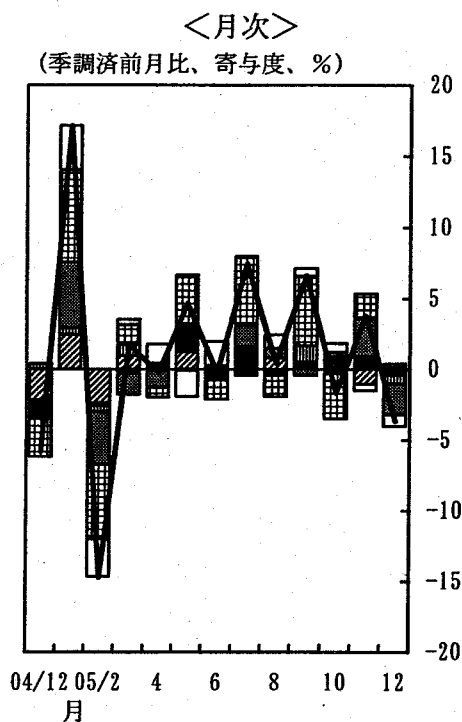
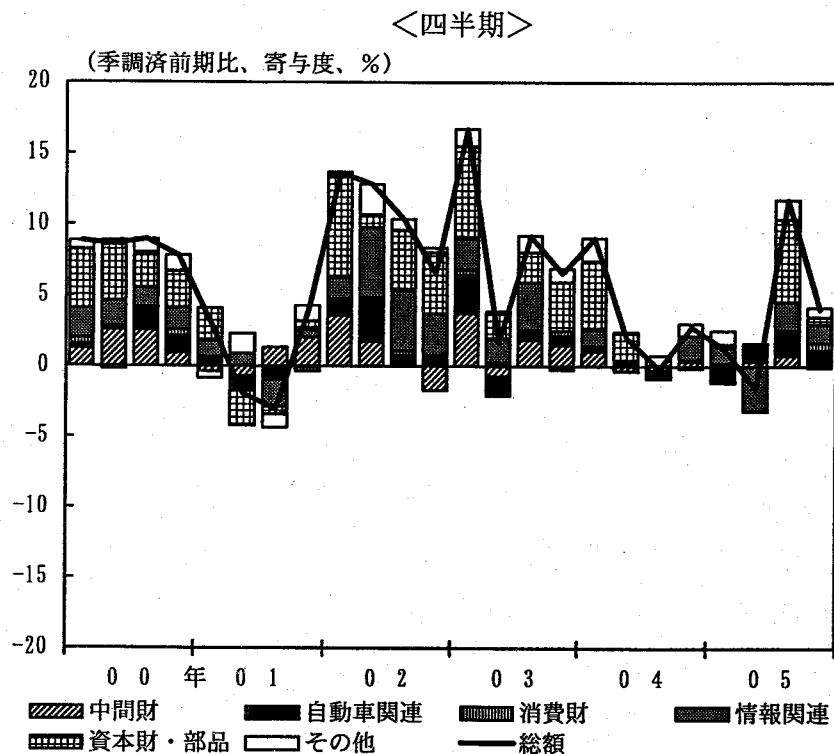


(注) 1. (1) および (3) の各計数はX-12-ARIMAによる季節調整値。
2. (2) の計数はX-11による季節調整値。

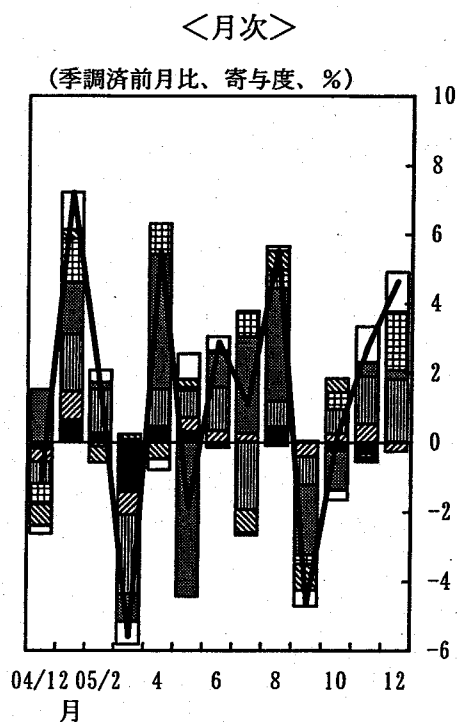
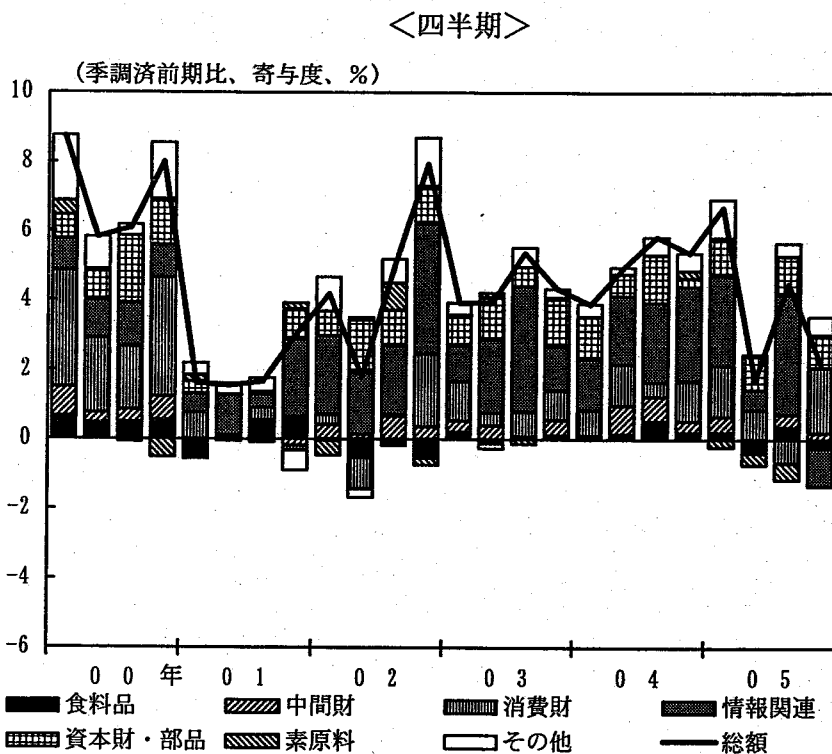
(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」、WSTS「世界半導体市場統計」

中国との貿易

(1) 中国向け財別実質輸出



(2) 中国からの財別実質輸入

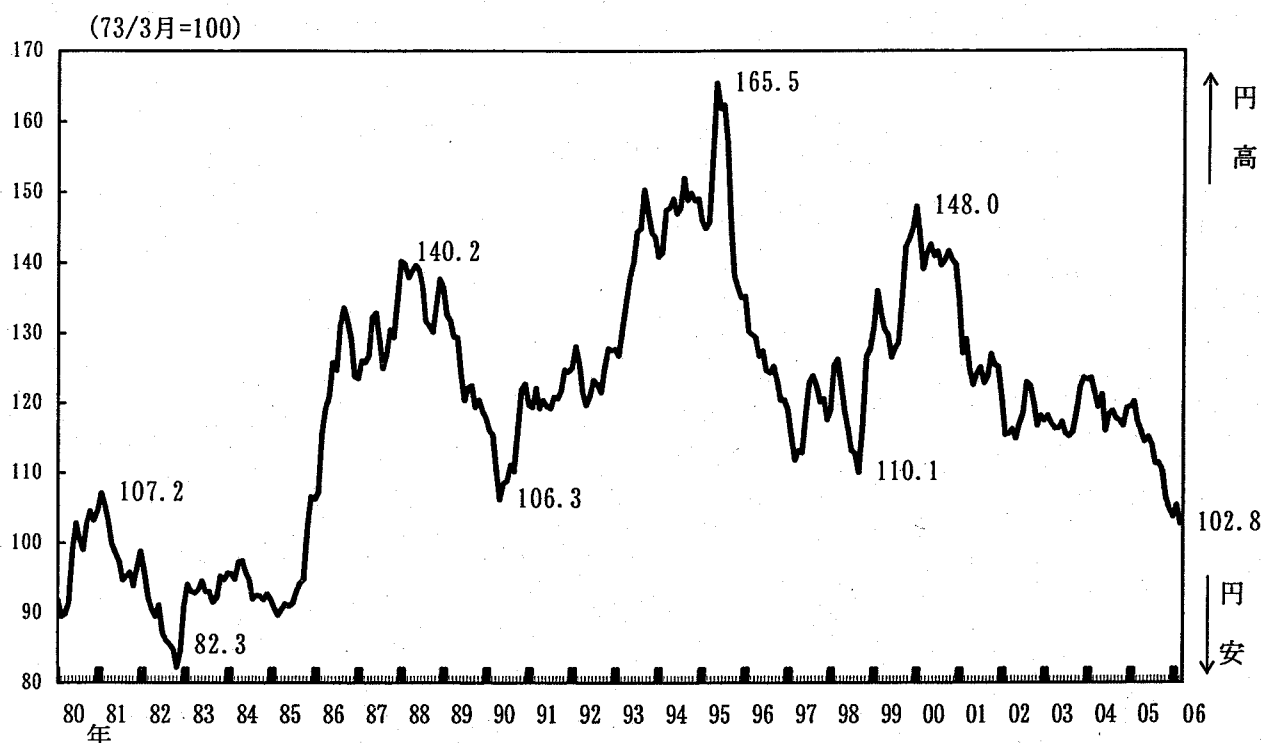


(注) 1. 各財の分類については図表6、11を参照。
2. 各計数はX-12-ARIMAによる季節調整値。

(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

実質実効為替レート・海外経済

(1) 実質実効為替レート (月中平均)



- (注) 1. 日本銀行試算値。直近2月は2日までの平均値。
 2. 主要輸出相手国通貨 (15通貨、26か国・地域) に対する為替相場 (月中平均) を、当該国・地域の物価指数で実質化したうえ、通関輸出金額ウェイトで加重平均したもの。

(2) 海外経済 — 実質GDP

(欧米は前期比年率、東アジアは前年比、%)

		2003年	2004年	2005年	2005年 1Q	2Q	3Q	4Q
米	国	2.7	4.2	3.5	3.8	3.3	4.1	1.1
欧 州	E U	1.2	2.2	n. a.	1.4	1.9	2.6	n. a.
	ドイ ツ	-0.2	1.6	0.9	2.4	0.9	2.5	n. a.
	フ ラ ン ス	0.9	2.1	n. a.	1.3	0.5	2.8	n. a.
	英 国	2.5	3.2	1.8	0.9	1.9	1.7	2.6
東 ア ジ ア	中 国	10.0	10.1	9.9	9.9	10.1	9.8	9.9
	N 韓 国	3.1	4.6	4.0	2.7	3.3	4.5	5.2
	I 台 湾	3.4	6.1	n. a.	2.5	3.0	4.4	n. a.
	E 香 港	3.1	8.2	n. a.	6.2	7.3	8.2	n. a.
	S シンガポール	1.4	8.4	5.7	2.7	5.2	7.2	7.7
	A S E ン 4	7.0	6.2	n. a.	3.2	4.6	5.3	n. a.
	イ ン ド ネ シ ア	4.9	5.1	n. a.	6.1	5.8	5.3	n. a.
マ レ ー シ ア	5.4	7.1	n. a.	6.2	4.4	5.3	n. a.	
	フィリピン	4.5	6.0	5.1	4.6	5.2	4.5	6.1

(注) 計数は、各国政府または中央銀行、欧州委員会による。

(図表11)

実質輸入の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2004年	2005	2004年 4Q	2005年 1Q	2Q	3Q	4Q	2005年 10月	11	12
米国	<12.4>	0.4	3.6	2.0	-4.2	5.8	4.3	-0.2	-5.4	-3.6	17.0
EU	<11.4>	9.6	2.0	2.1	-1.3	5.3	-1.4	-2.1	-3.1	5.8	-5.5
東アジア	<42.3>	14.7	11.1	1.8	4.7	0.4	4.3	2.1	0.8	0.6	5.1
中国	<21.0>	20.9	18.7	5.4	6.7	1.7	4.5	2.2	0.2	2.8	4.6
NIEs	<9.8>	12.8	9.4	-2.1	3.9	1.4	9.3	3.9	2.9	-1.5	3.7
韓国	<4.7>	14.5	8.3	-2.3	5.0	3.2	5.2	8.9	6.6	1.7	4.2
台湾	<3.5>	12.0	11.2	-1.2	2.6	0.8	14.8	-1.0	-2.0	-3.4	8.9
ASEAN4	<11.4>	7.1	0.1	-0.9	1.8	-3.0	-0.5	0.2	-0.2	-1.6	7.6
タイ	<3.0>	14.3	12.8	3.9	5.1	0.0	2.4	2.9	-0.4	3.0	1.7
実質輸入計		8.1	5.3	2.1	0.4	2.0	2.2	0.1	-2.0	0.9	3.1

- (注) 1. < >内は、2005年通関輸入額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

(2) 財別

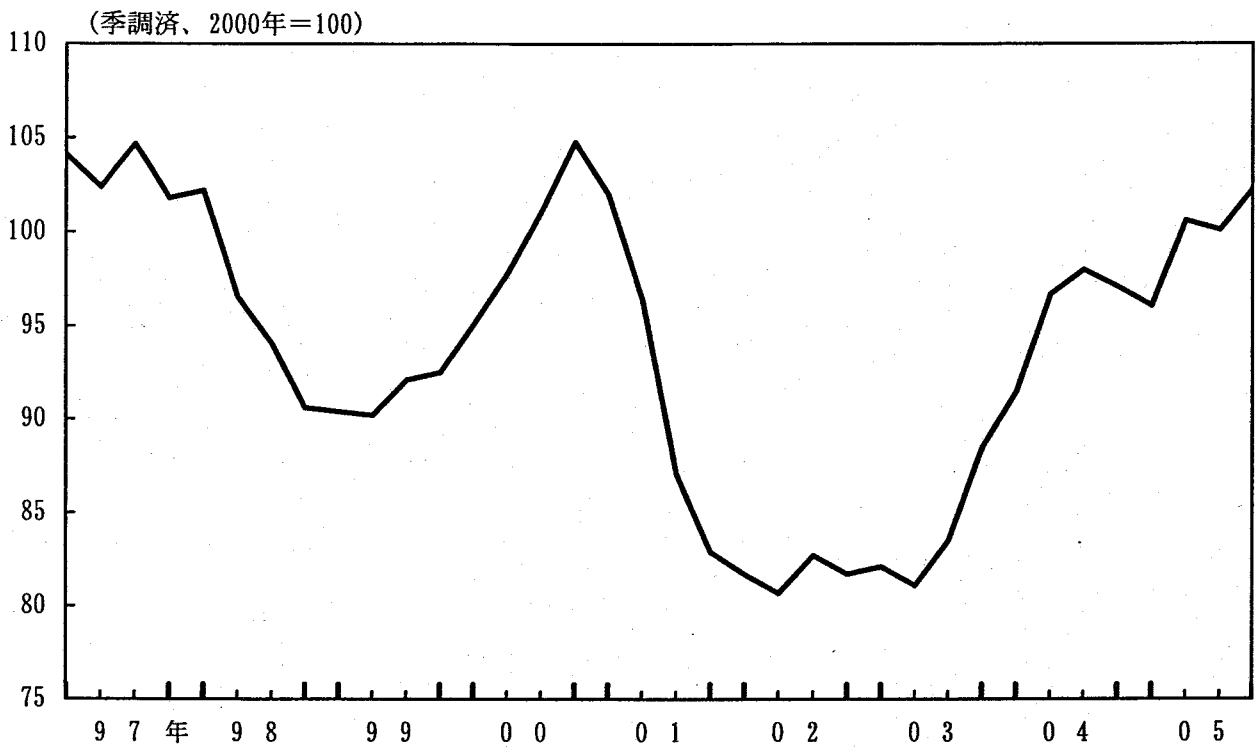
		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2004年	2005	2004年 4Q	2005年 1Q	2Q	3Q	4Q	2005年 10月	11	12
素原料	<31.7>	1.3	-4.1	1.7	-3.4	-3.5	0.8	-0.6	-1.6	-4.4	2.1
中間財	<14.0>	8.7	4.6	0.1	2.4	1.9	0.1	0.3	0.3	0.7	-3.1
食料品	<9.8>	0.4	2.6	0.2	3.3	2.0	-0.8	-4.5	-2.4	-4.4	2.5
消費財	<9.9>	12.5	8.6	4.4	2.2	8.0	-6.7	4.6	5.1	2.7	4.6
情報関連	<12.6>	17.6	15.4	2.4	2.2	5.1	9.5	0.7	-1.9	-2.9	7.5
資本財・部品	<12.2>	17.4	13.6	5.6	-1.4	6.3	6.8	2.0	0.1	2.4	5.8
うち除く航空機	<11.2>	19.2	13.6	1.1	2.0	6.9	3.8	4.0	3.4	-3.4	8.8
実質輸入計		8.1	5.3	2.1	0.4	2.0	2.2	0.1	-2.0	0.9	3.1

- (注) 1. < >内は、2005年通関輸入額に占める各財のウェイト。
 2. 「素原料」は、原料品、鉱物性燃料。
 3. 「消費財」は、食料品を除く。
 4. 「情報関連」は、電算機類・部分品、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 5. 「資本財・部品」は、情報関連を除く。
 6. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

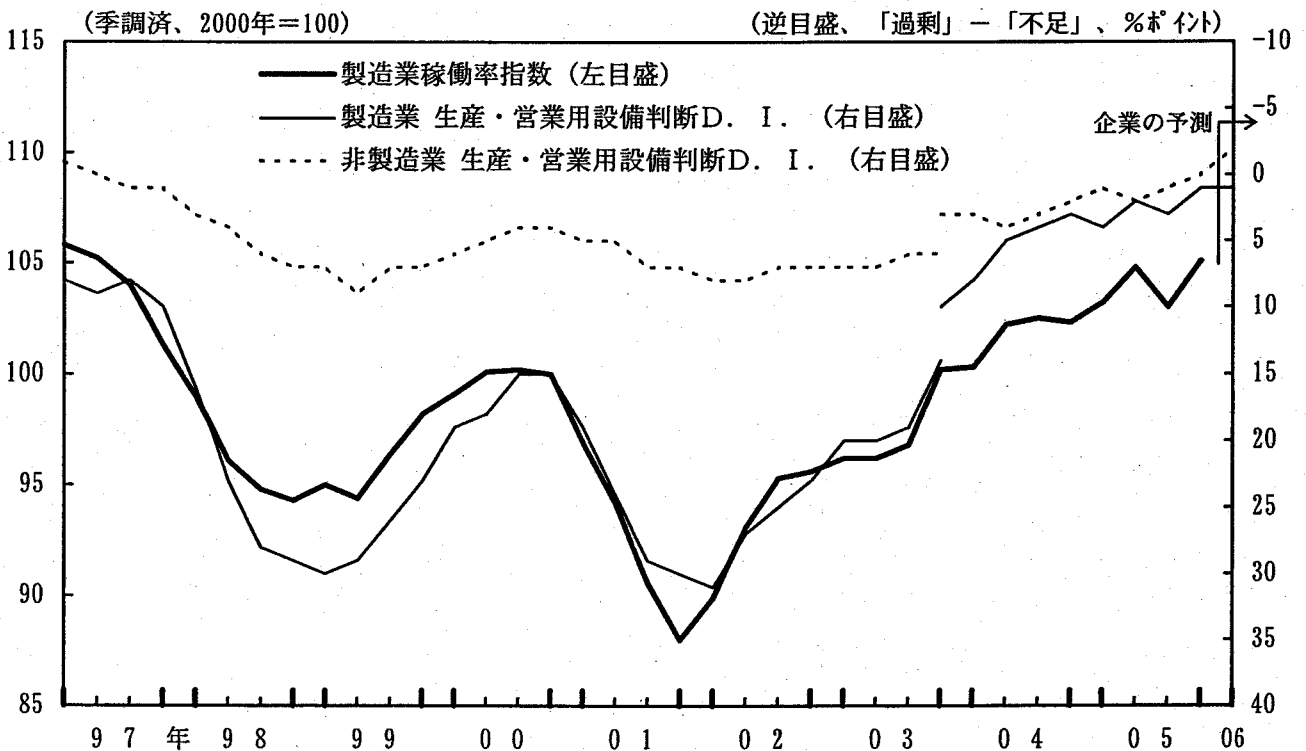
(資料) 財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

設備投資一致指標

(1) 資本財出荷 (除く輸送機械)



(2) 稼働率と設備判断D. I.

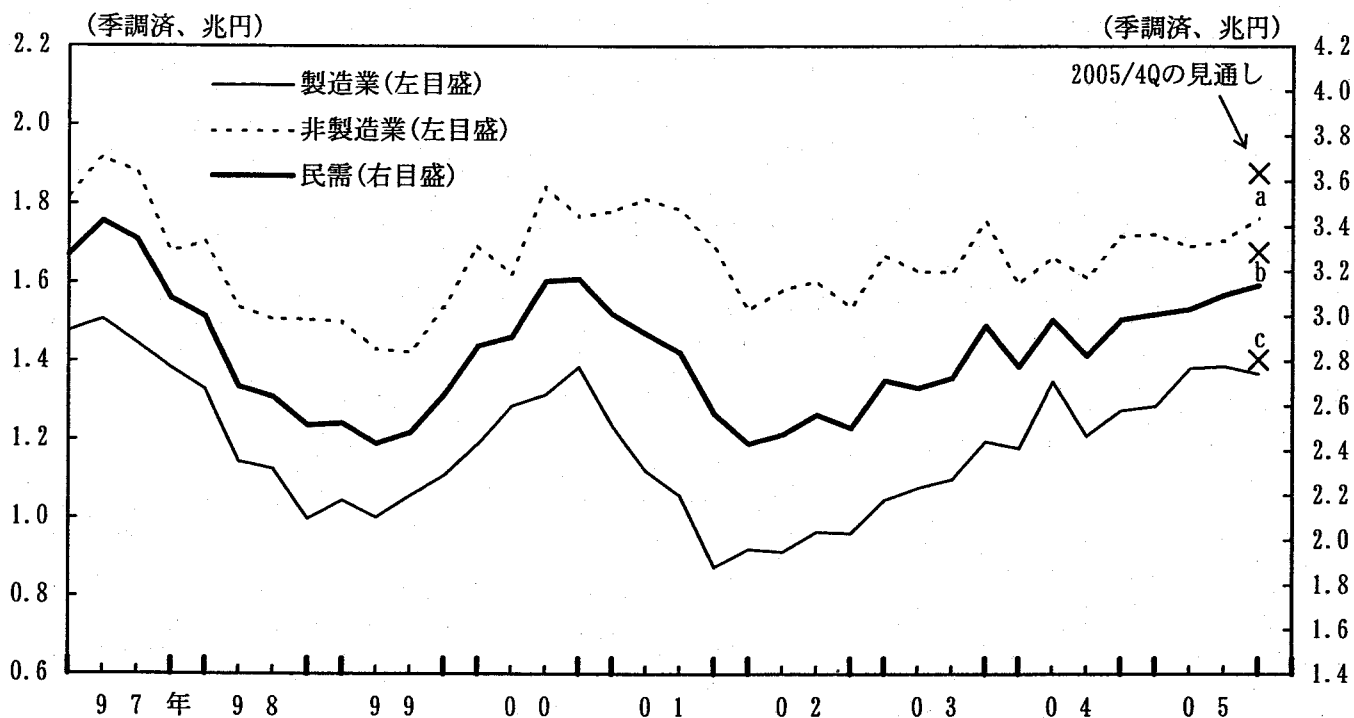


- (注) 1. 生産・営業用設備判断D. I. は全規模合計。
- 2. 生産・営業用設備判断D. I. は、2004年3月調査より見直しを実施。旧ベースは2003年12月調査まで、新ベースは2003年12月調査から。
- 3. 製造業稼働率指数の2005/4Qは10~11月の計数。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」、日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

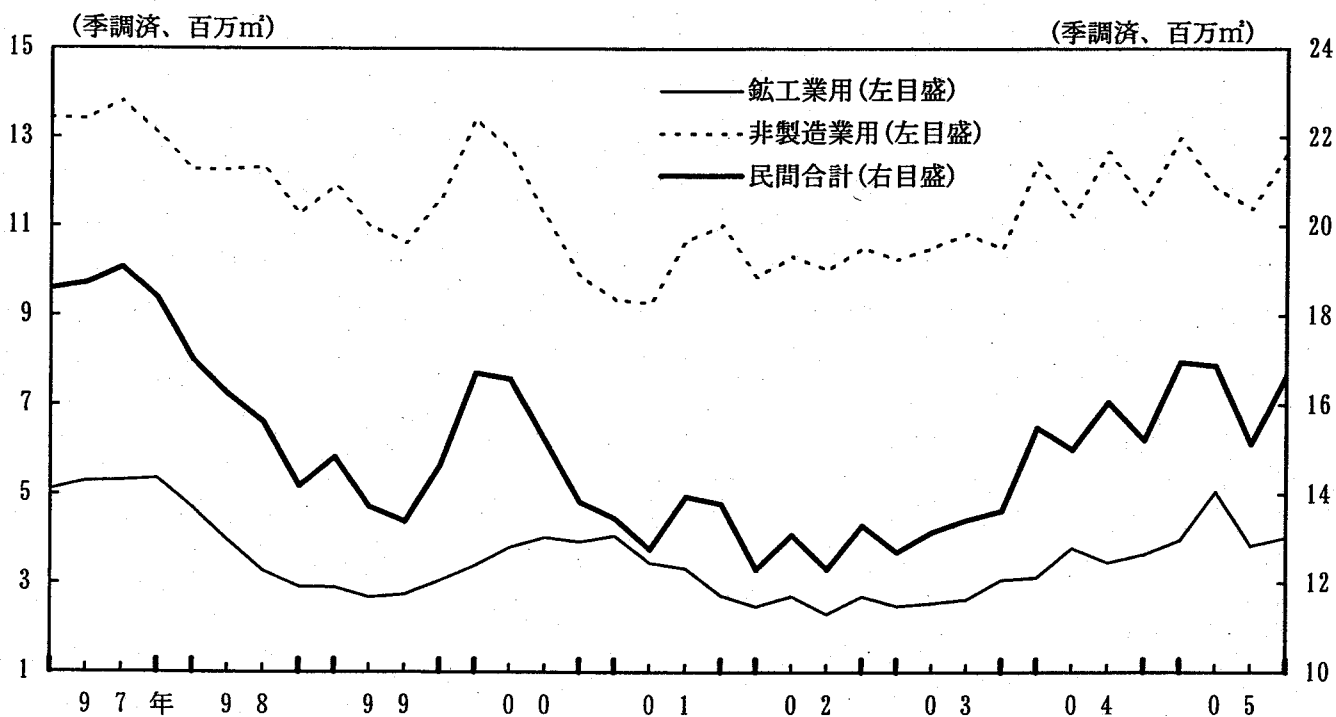
設備投資先行指標

(1) 機械受注



- (注) 1. 民需と非製造業は、それぞれ船舶・電力を除く。
 2. 2005/4Qの見通しは、aは非製造業、bは民需、cは製造業の見通し。
 3. 2005/4Qは、10~11月の計数を四半期換算。

(2) 建築着工床面積(非居住用)

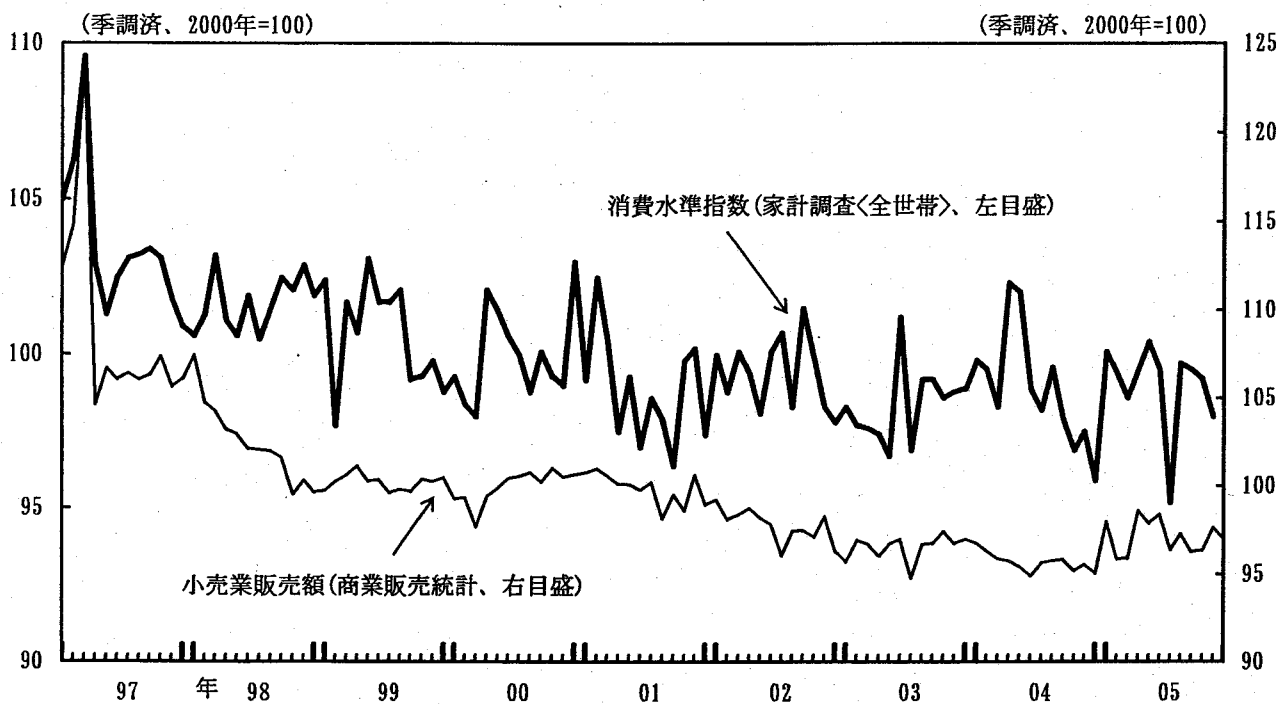


- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。
 2. 新産業分類に対応し、2003年度以降、新聞・出版業が鉱工業から非製造業に分類変更となった。そのため、リンク係数を算出のうえ、2002年度以前を水準調整している。

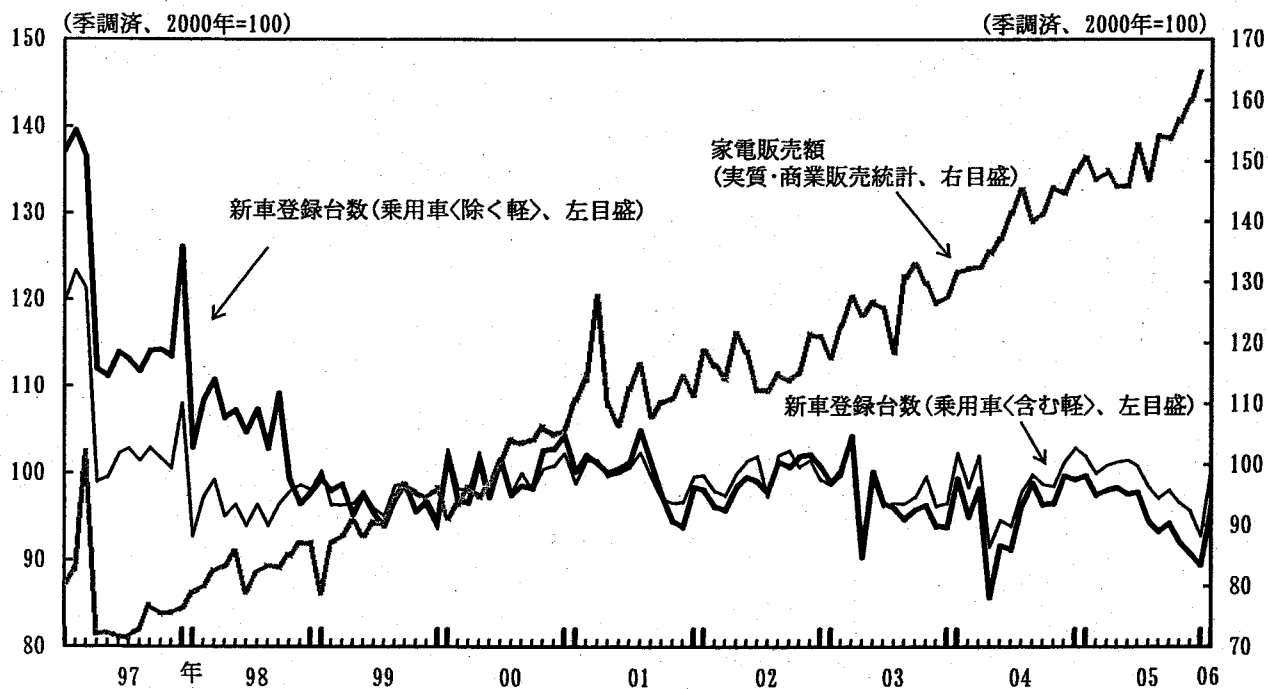
(資料) 内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」

個人消費関連指標 (1)

(1) 家計調査・商業販売統計 (実質)



(2) 耐久消費財

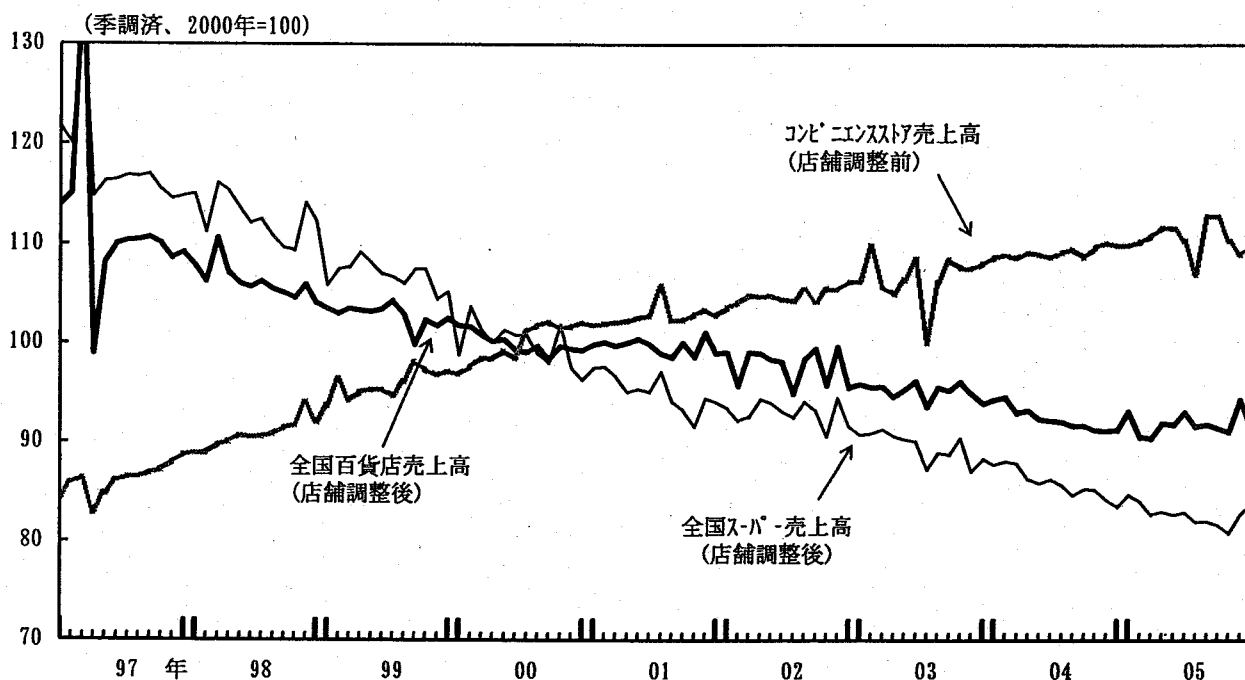


- (注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。但し、消費水準指数は総務省による季節調整値。
 2. 小売業販売額は、CPI(「財」から「電力・都市ガス・水道」を除いたもの)で実質化。
 家電販売額は、商業販売統計の機械器具小売業販売額指数を、各種家電関連商品のCPI(但し、99年以前のパソコンと94年以前の通信機器はWPIで代用)を幾何平均して算出したデフレーターで実質化。

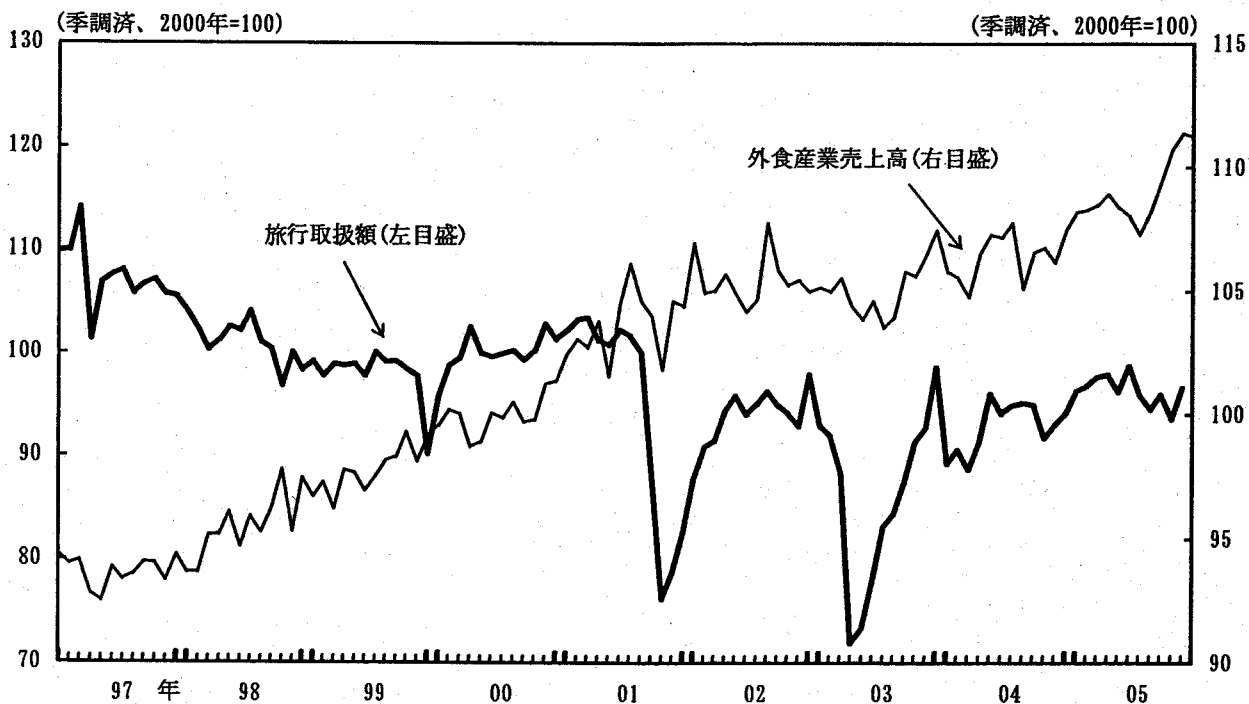
(資料) 総務省「家計調査報告」「消費者物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、経済産業省「商業販売統計」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」、日本銀行「卸売物価指数」

個人消費関連指標 (2)

(3) 小売店販売 (名目・除く消費税)



(4) サービス消費 (名目・除く消費税)



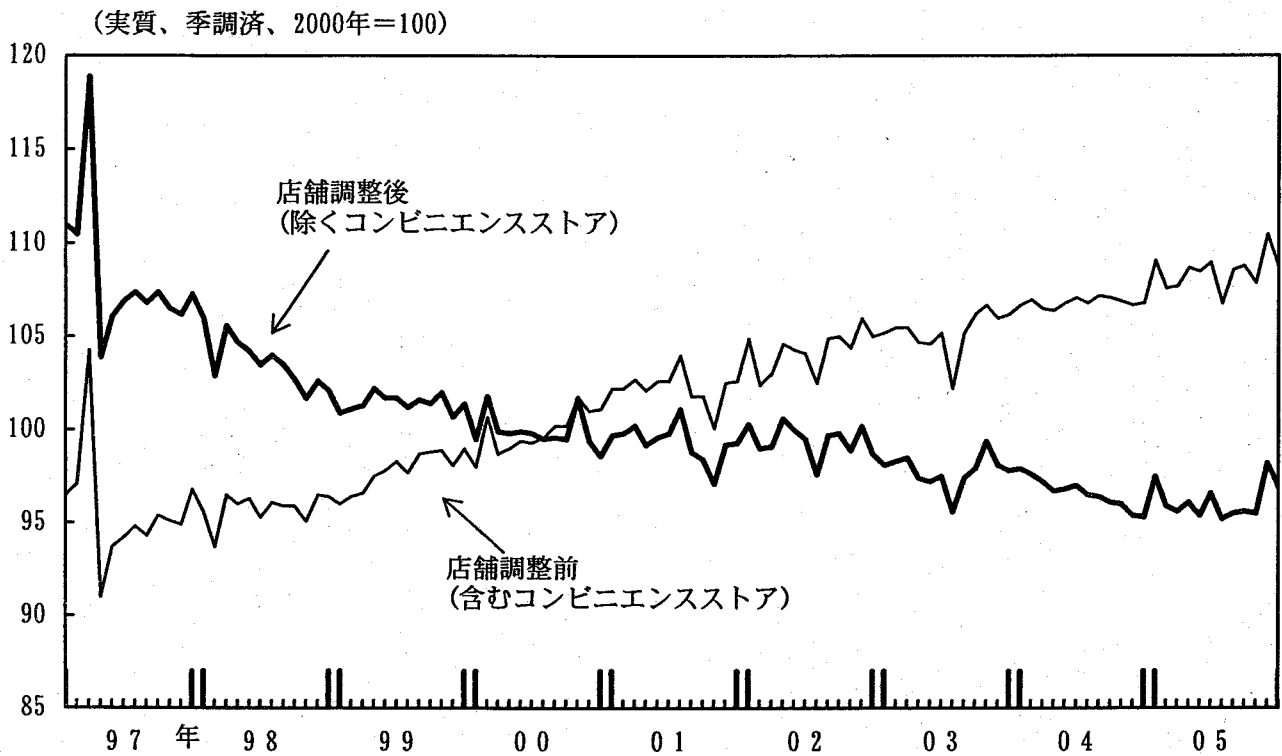
(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. コンビニエンスストア売上高は、97/3月以前は、日本銀行におけるヒアリング集計ベース。97/4月以降は経済産業省ベース。

3. 外食産業売上高は、93年の外食総研のデータを基準とし、日本フードサービス協会の前年比で延長。

(資料) 経済産業省「商業販売統計」、国土交通省「旅行取扱状況」、
外食総研「月次売上動向調査」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

販売統計合成指数

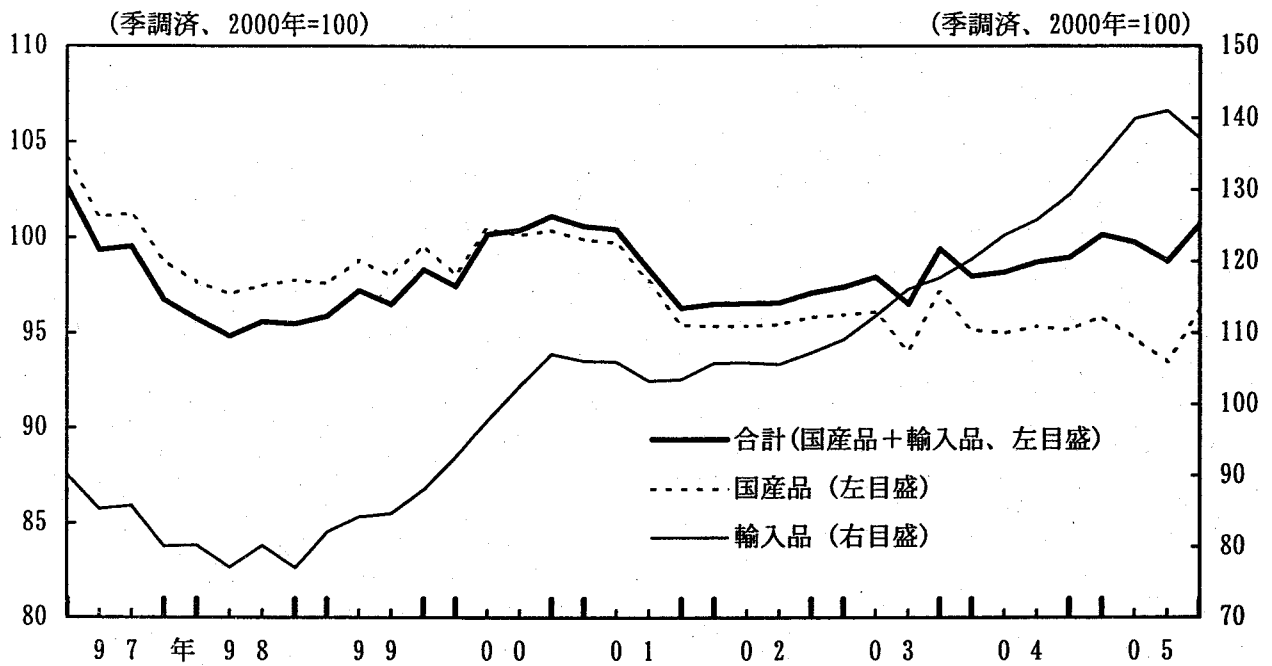


- (注) 1. 販売統計合成指数は、全国百貨店・スーパー売上高、新車登録台数、家電販売額、旅行取扱額、外食産業売上高の各統計を、家計調査の支出額ウェイトをもとに合成したものである。同指数には、店舗調整前と店舗調整後の2系列が存在する。
「店舗調整前」は、出店や閉店といった店舗数の変化に伴う売上高の変動も反映される指数である（店舗調整前の指数には、コンビニエンスストア売上高を含めている）。
他方、「店舗調整後」は、継続的に売上高を把握できる店舗分だけで消費動向を捉えようとしたものである。
2. 名目額で公表されているものについては、それぞれ該当の物価指数を用いて実質化している。
3. X-12-ARIMAによる季節調整値。

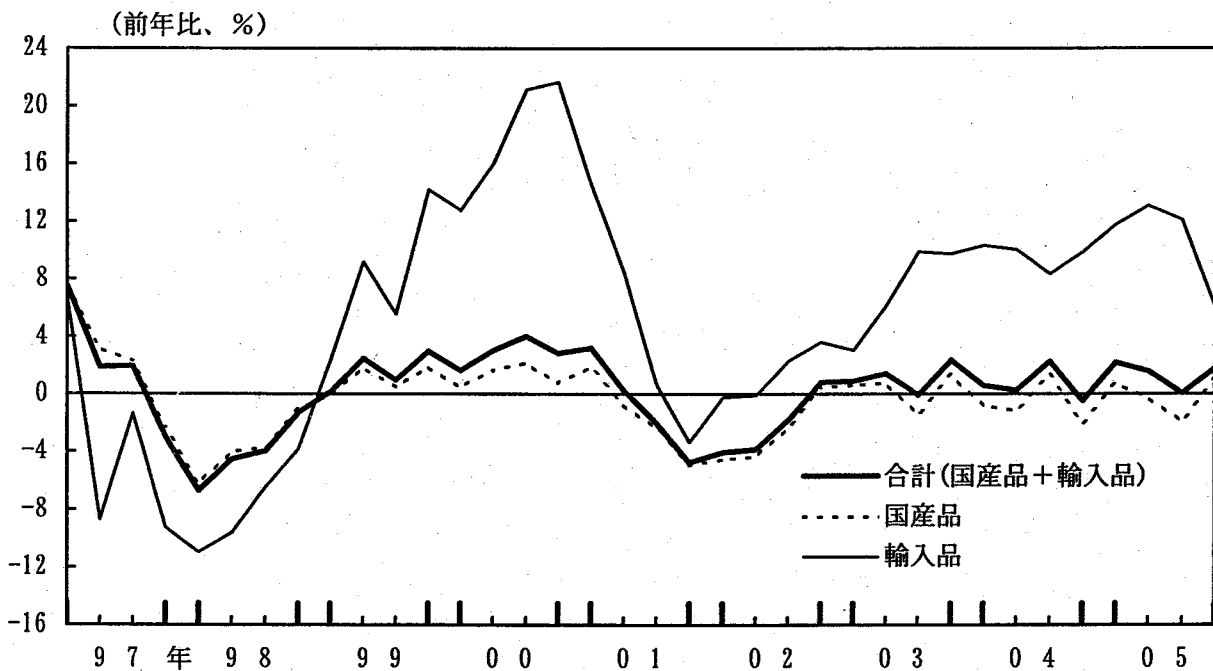
(資料) 日本銀行「販売統計合成指数」

消費財総供給

(1) 水準



(2) 前年比

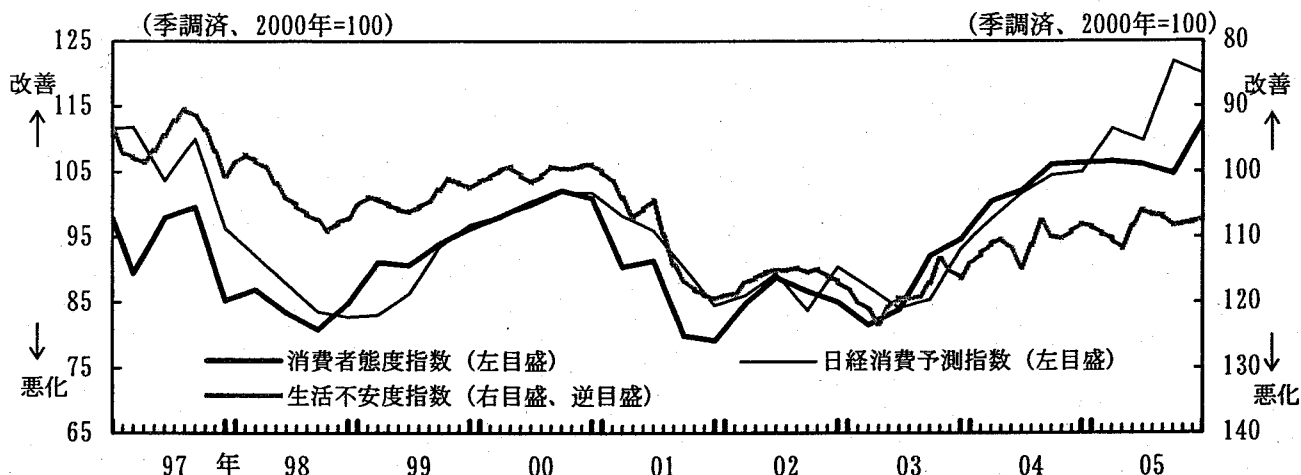


- (注) 1. 消費財総供給は、鉱工業指数統計における消費財出荷と、消費財の実質輸出入から日本銀行が算出している。算出の際のウェイトは鉱工業総供給表のウェイトを使用。
 2. 「輸入品」の値は、通関統計から作成した実質輸入のうち、自動車、電算機類・部分品、音響映像機器、食料品、繊維用糸・繊維製品、衣類・同付属品を合成したもの。
 3. 前年比は、季節調整済系列より算出。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、財務省「外国貿易概況」、日本銀行「企業物価指数」

消費者コンフィデンス

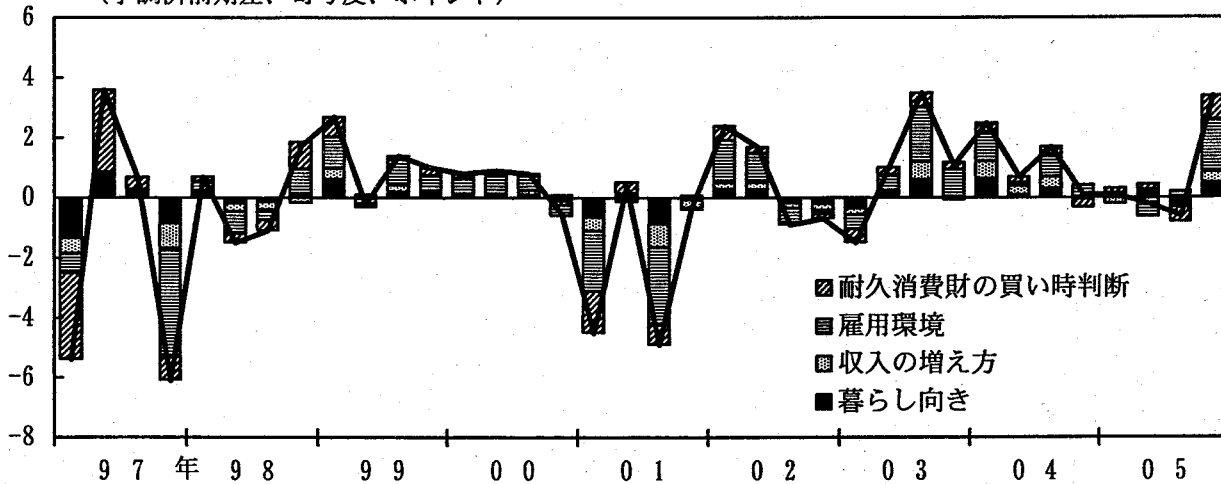
(1) 各種コンフィデンス指標



- (注) 1. X-11による季節調整値。但し、消費者態度指数は、内閣府による季節調整値。なお、日経消費予測指数は、2004年まで四半期調査であったため、四半期の値で季節調整を実施。
2. 消費者態度指数(調査客体：全国一般 5,040世帯)、日経消費予測指数(同：首都圏 600人<2004年9月までは1,500人、2004年12月は880人>)、生活不安度指数(同：全国 2,200人)はいずれも消費者意識を尋ねたアンケート調査。
3. 生活不安度指数とそれ以外とは調査月が異なるため、計数を各々の調査月にプロット。

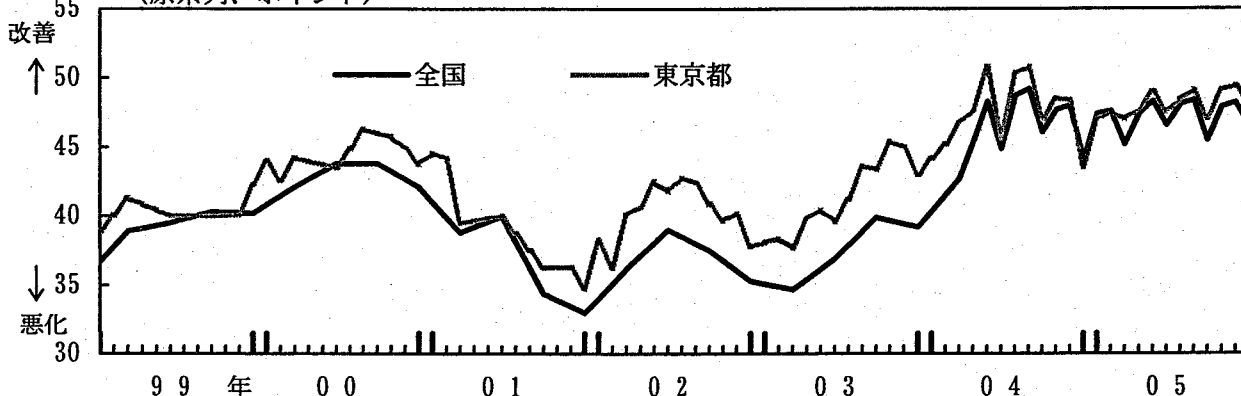
(2) 消費者態度指数の項目別寄与

(季調済前期差、寄与度、ポイント)



(3) 消費者態度指数 (月次)

(原系列、ポイント)

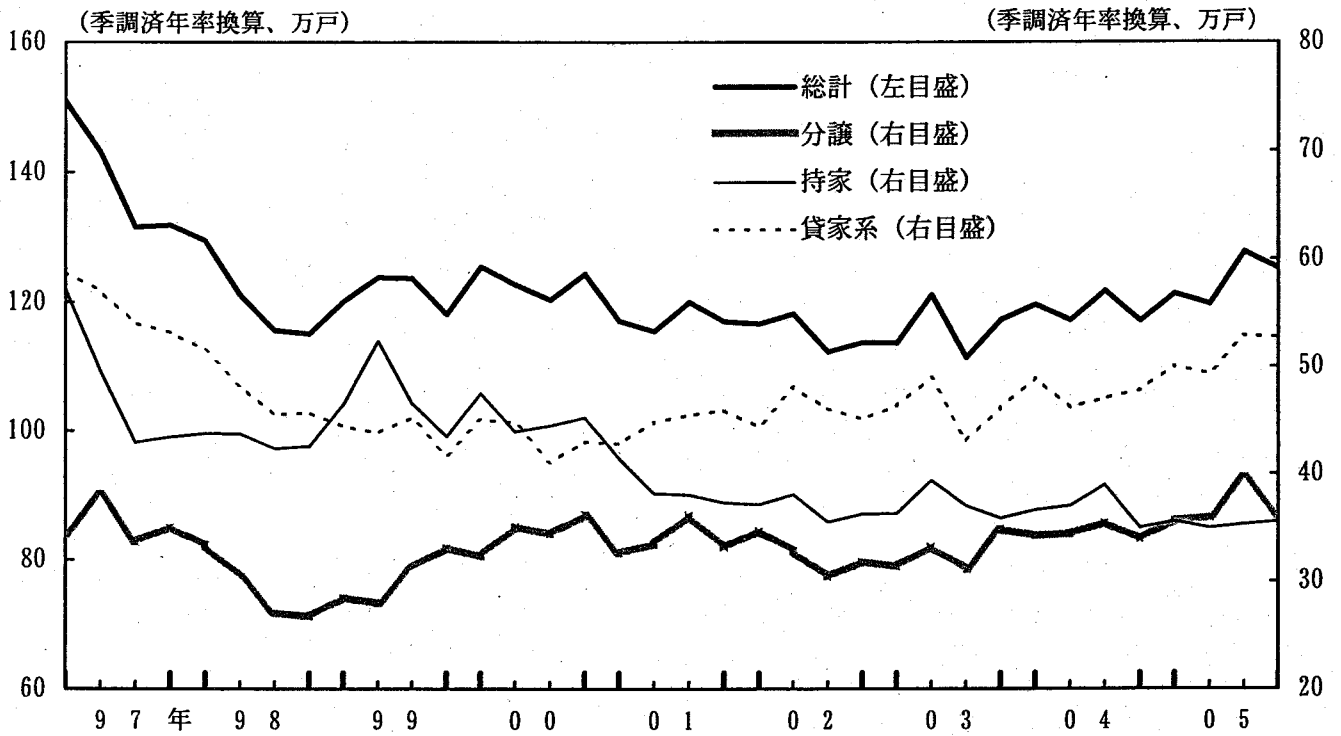


- (注) 消費者態度指数(東京都)は、2001年以前で、調査が実施されていない月については線形補間を行い、消費者態度指数(全国)は、2004年3月以前の計数に関しては、計数を各々の調査月にプロットして線形補間を行った。

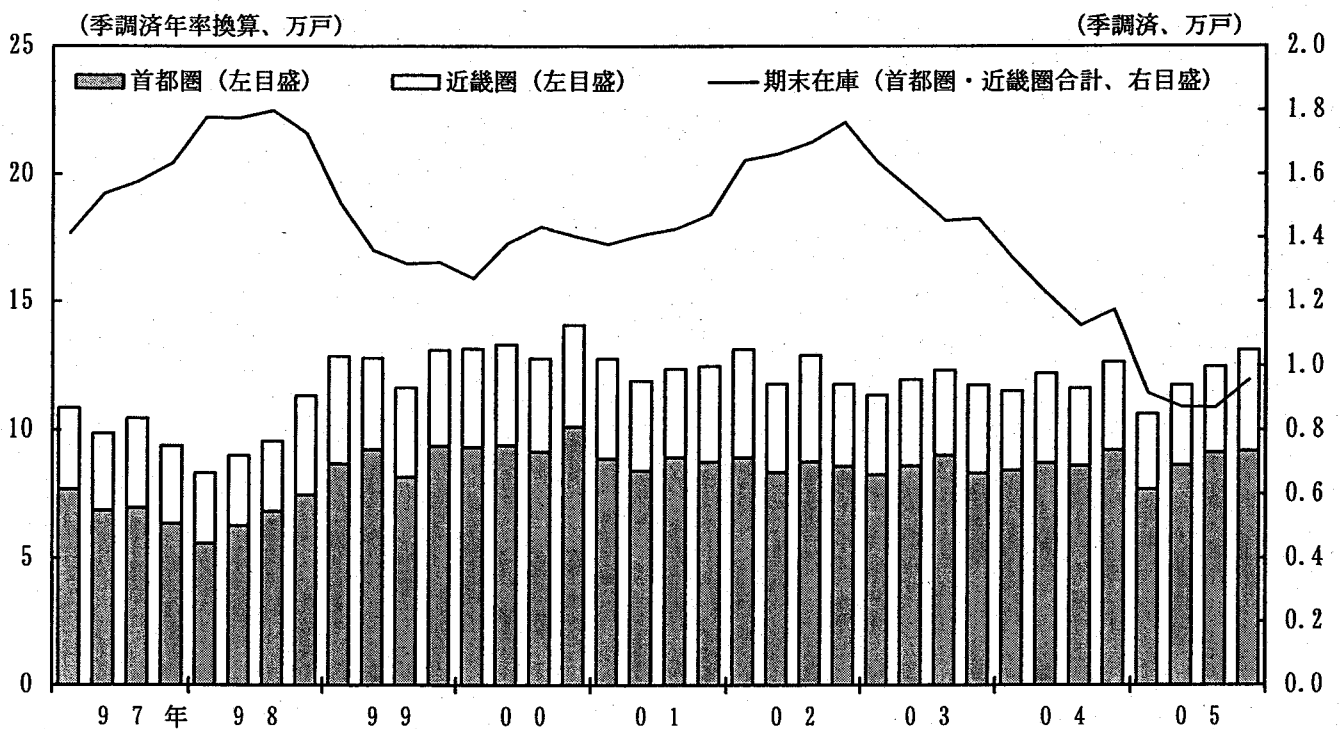
(資料) 内閣府「消費動向調査」、日経産業消費研究所「日経消費予測指数」、日本リサーチ総合研究所「消費者心理調査」

住宅投資関連指標

(1) 新設住宅着工戸数



(2) マンション販売動向 (全売却戸数)

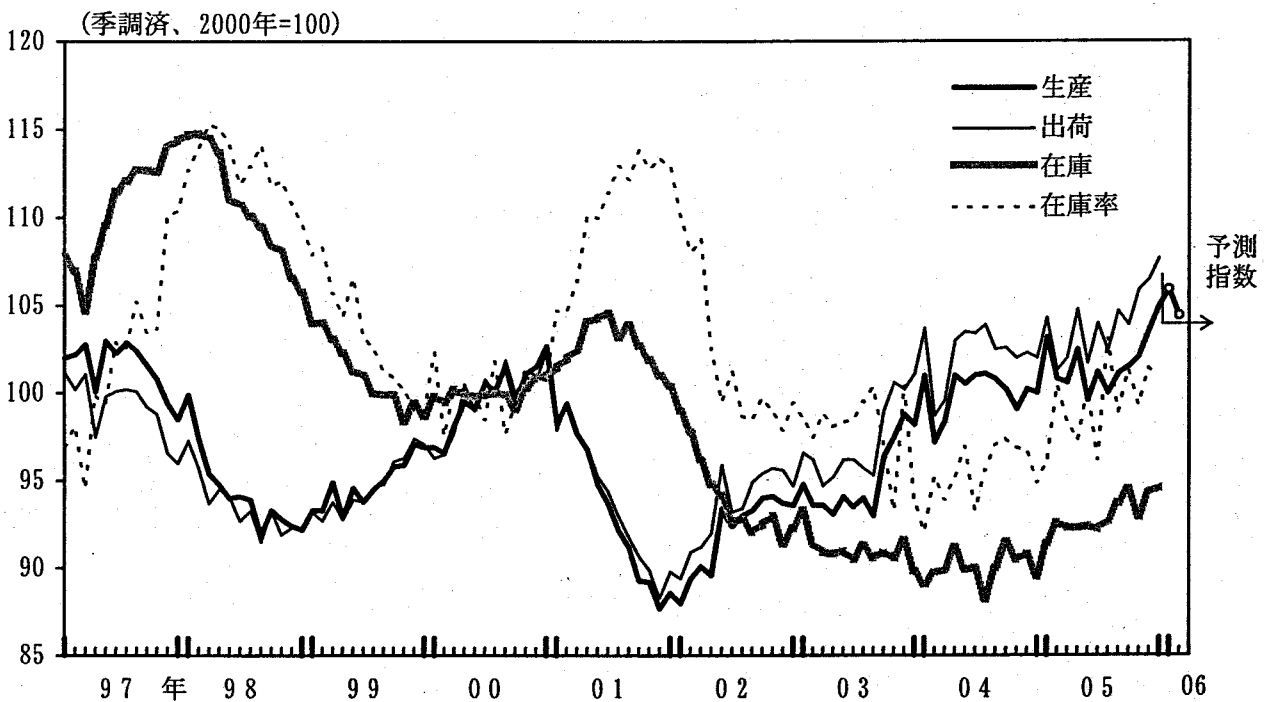


(注) X-12-ARIMAによる季節調整値。

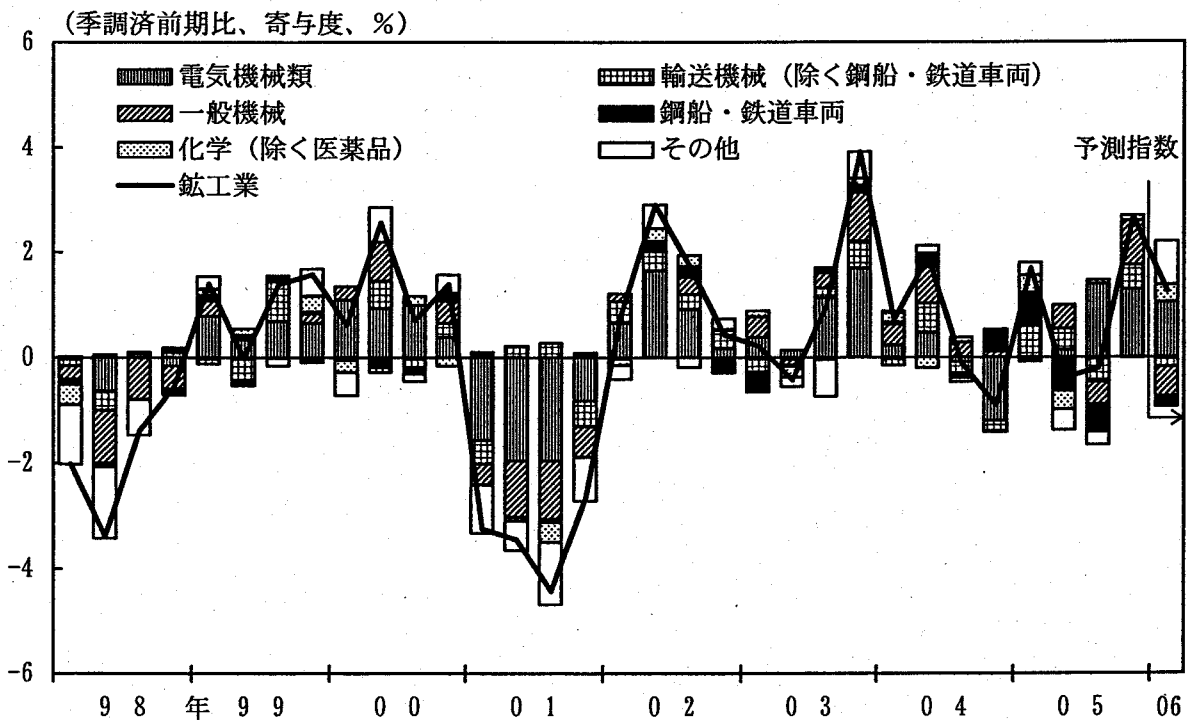
(資料) 国土交通省「建築着工統計」、不動産経済研究所「不動産経済調査月報」

鋳工業生産・出荷・在庫

(1) 鋳工業生産・出荷・在庫



(2) 生産の業種別寄与度

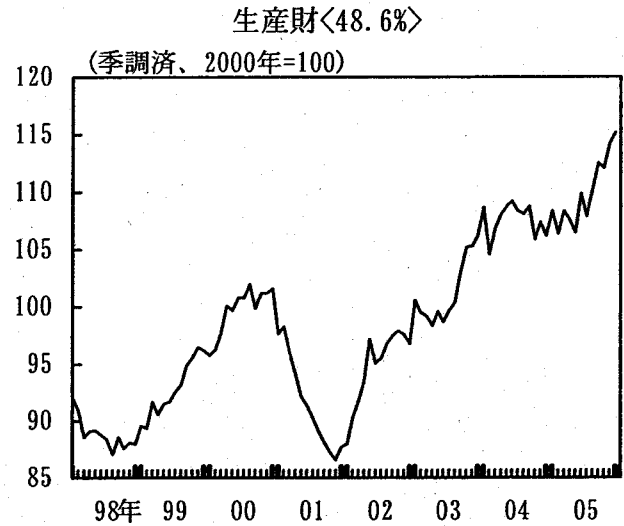
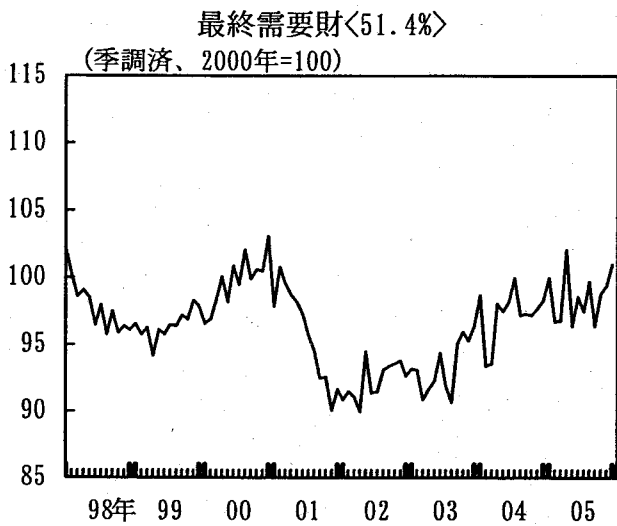


(注) 1. 電気機械類は電気機械、情報通信機械、電子部品・デバイスを合成したもの。
2. 2006/1Qは、3月を2月と同水準と仮定して算出した値。

(資料) 経済産業省「鋳工業指数統計」

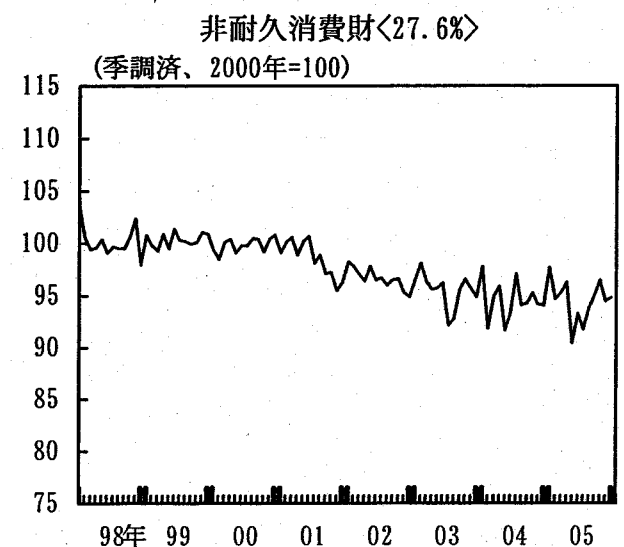
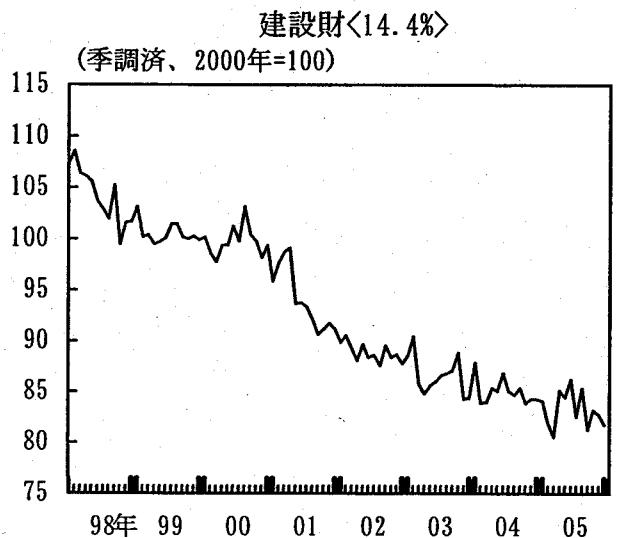
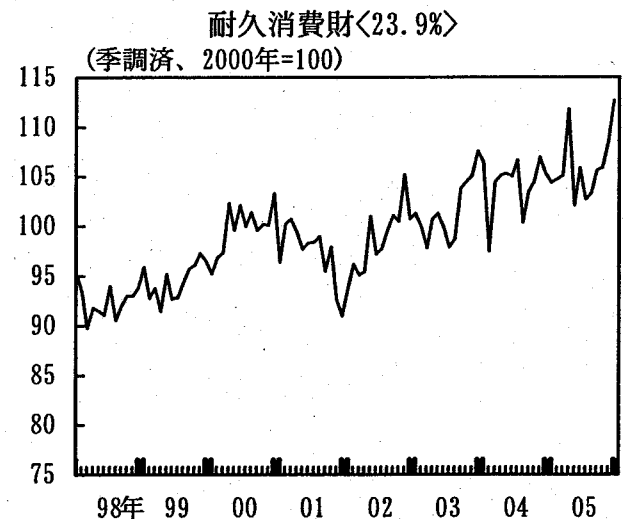
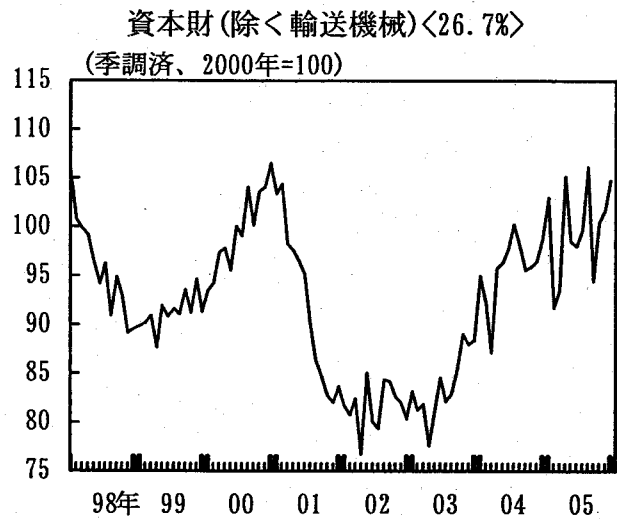
財別出荷

(1) 最終需要財と生産財



(注) <>内は鉱工業出荷に占めるウェイト。

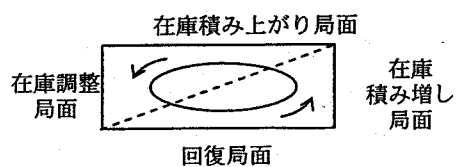
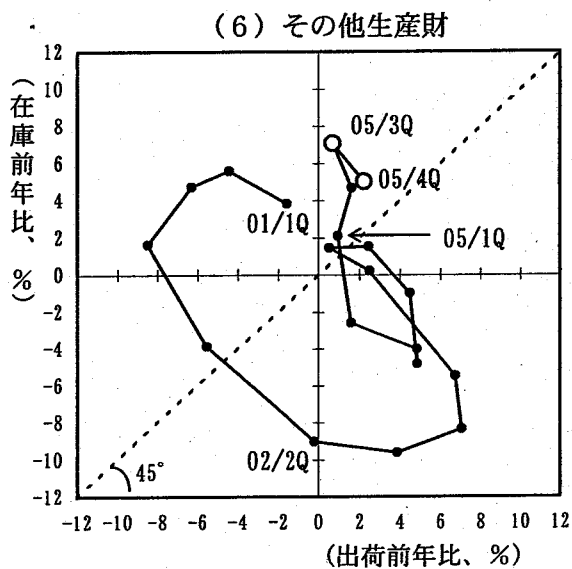
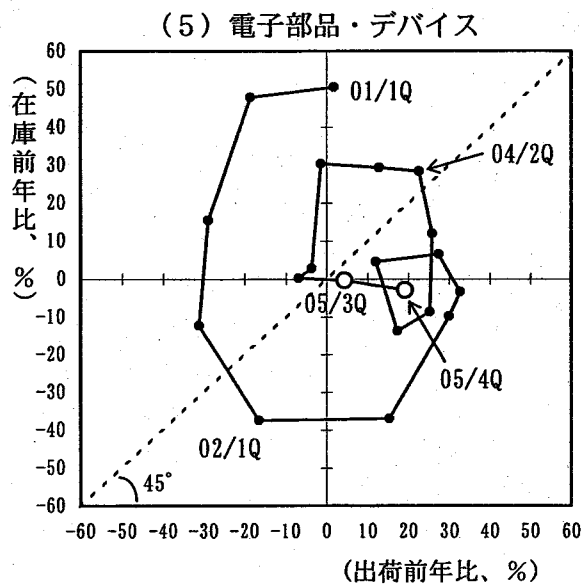
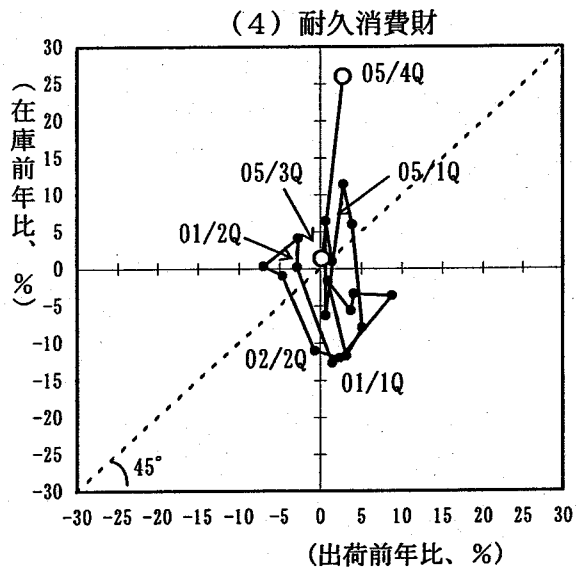
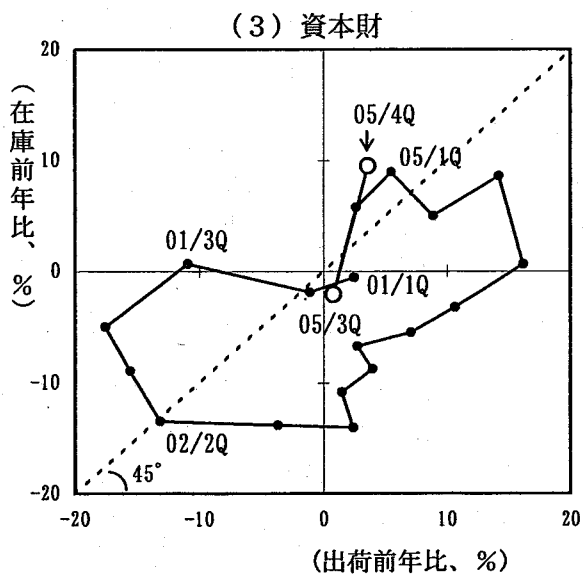
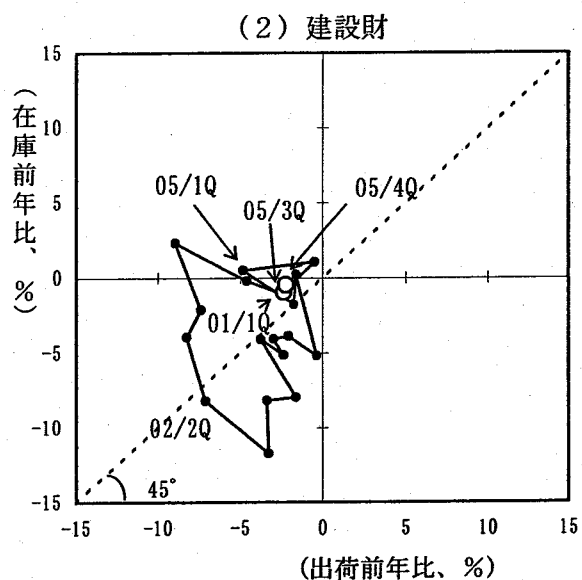
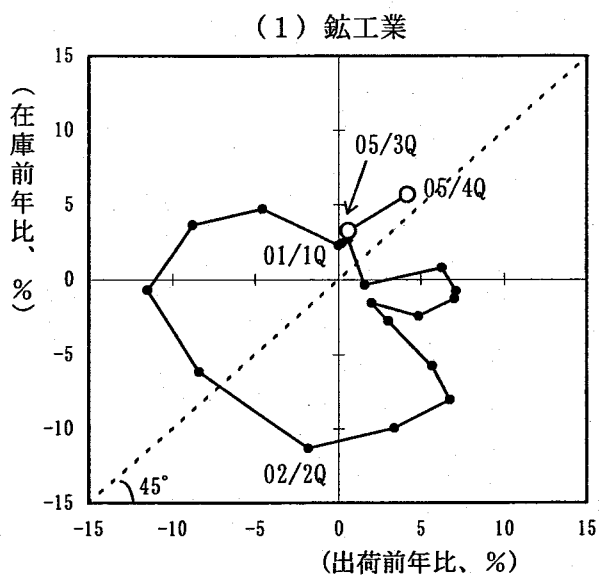
(2) 最終需要財の内訳



(注) <>内は最終需要財に占めるウェイト。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

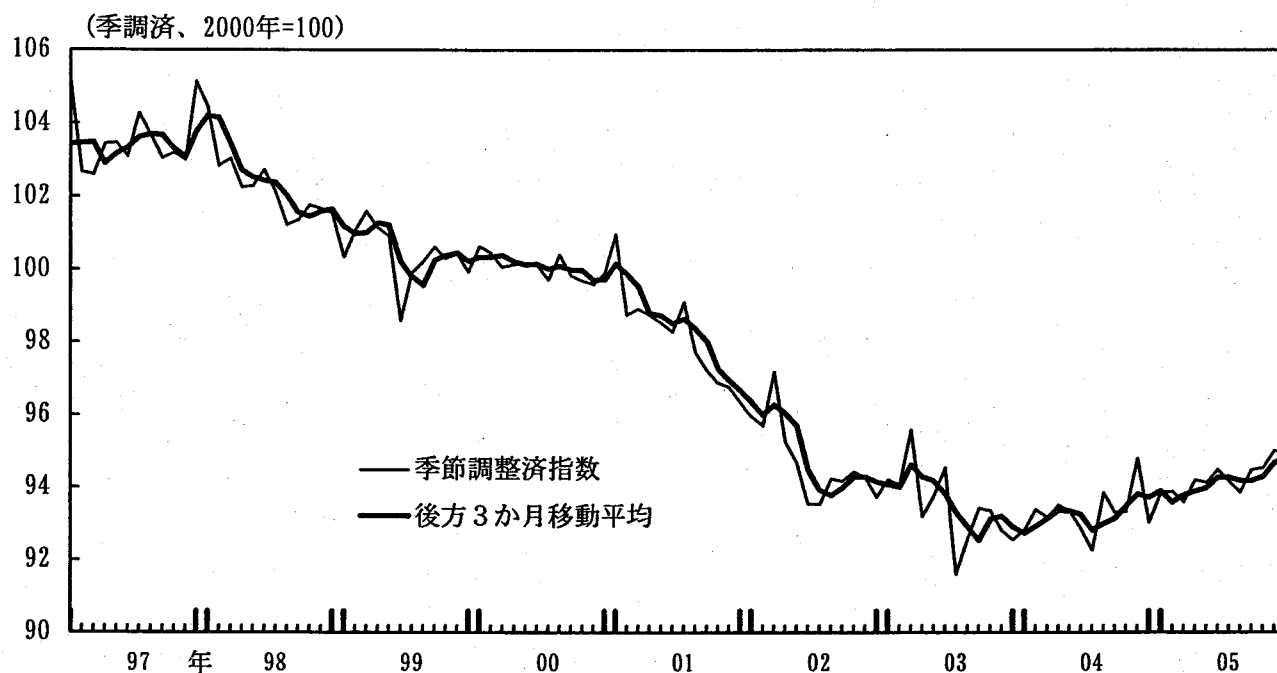
在庫循環



(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

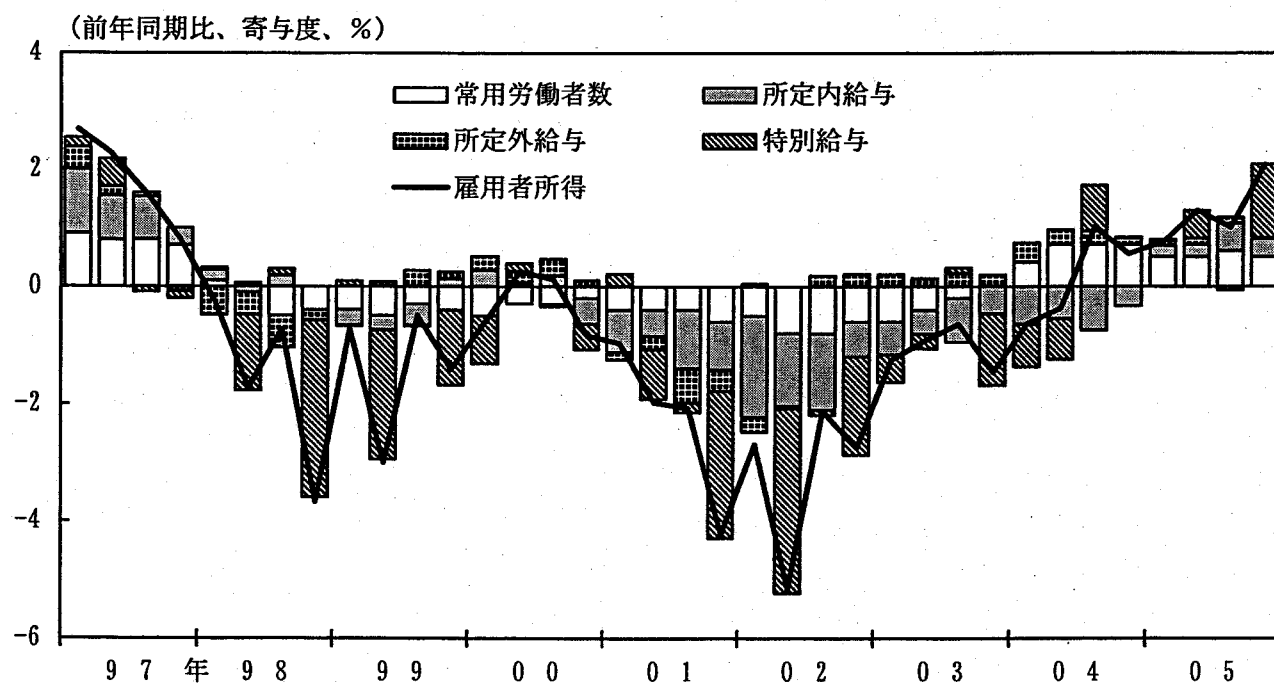
雇用者所得

(1) 所得の推移



- (注) 1. 賃金指数(現金給与総額)×常用雇用指数/100とし、日本銀行が算出。
2. X-12-ARIMAによる季節調整値。毎月季節調整替えを行なうため、計数は過去に遡って毎月改訂される。
3. 事業所規模5人以上(下の図表も同じ)。

(2) 所得の内訳

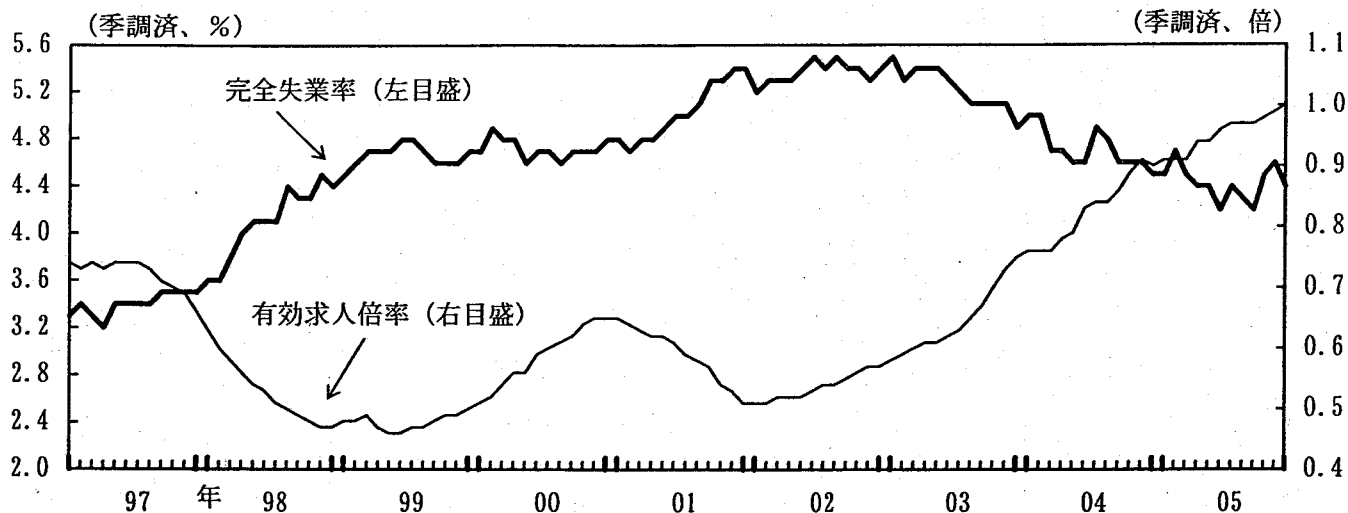


- (注) 1. 第1四半期: 3~5月、第2: 6~8月、第3: 9~11月、第4: 12~2月。
2. 2005/4Qは、12月の前年同月比。

(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」

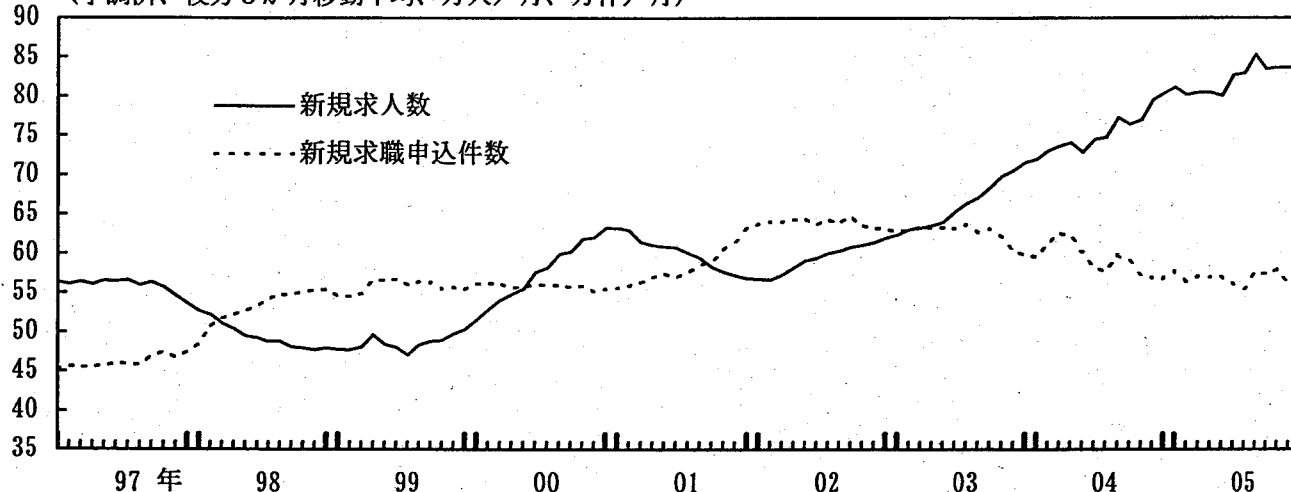
労働需給 (1)

(1) 失業率と有効求人倍率



(2) 新規求人と新規求職

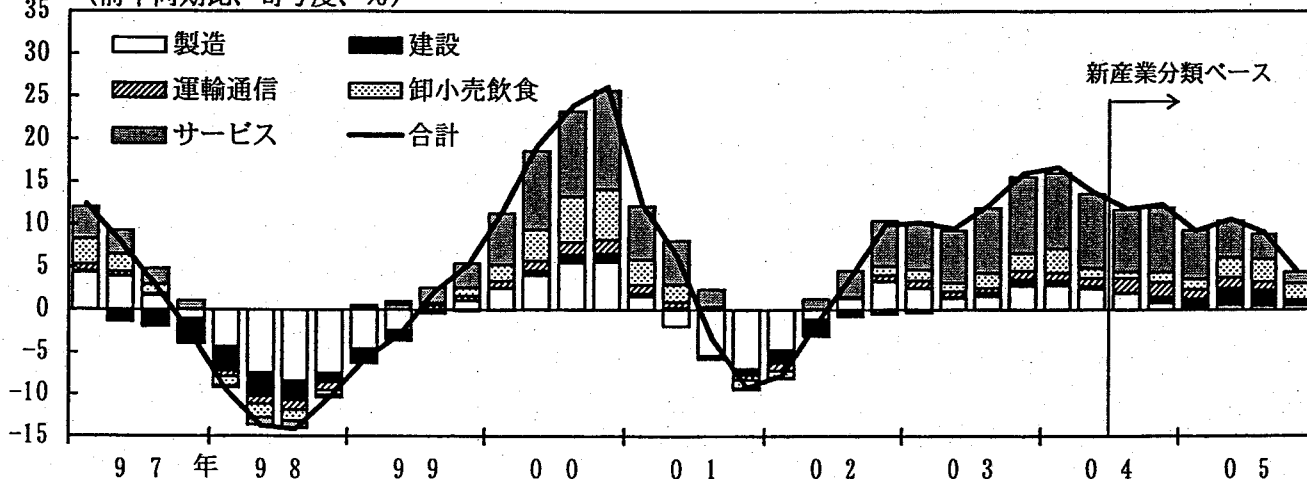
(季調済、後方3か月移動平均、万人/月、万件/月)



(注) 新規求人数、新規求職申込件数は、新規学卒者を除きパートタイムを含む(下の図表も同じ)。

(3) 新規求人の内訳

(前年同期比、寄与度、%)

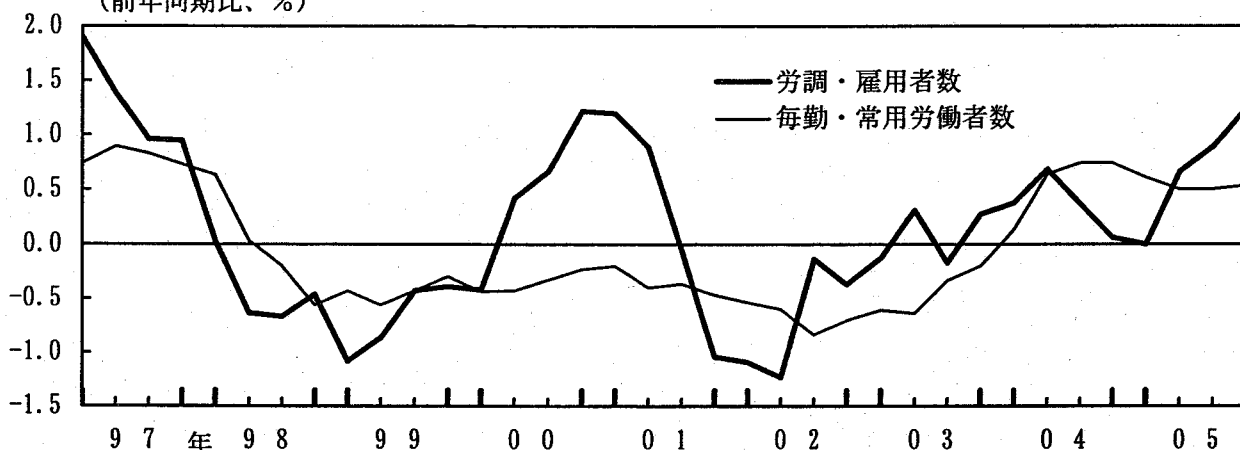


(注) 04/2Q以前は旧産業分類ベース、04/3Q以降は新産業分類ベースのもの。なお、旧ベースとの連続性を保つ観点から、図中の新産業分類ベースにおける「運輸通信」は「電力・ガス+情報通信+運輸業」として、「卸小売飲食」は「卸小売+飲食・宿泊業」として、「サービス」は「医療福祉+教育学習支援+複合サービス事業+その他サービス業」として算出。

(資料) 総務省「労働力調査」、厚生労働省「職業安定業務統計」

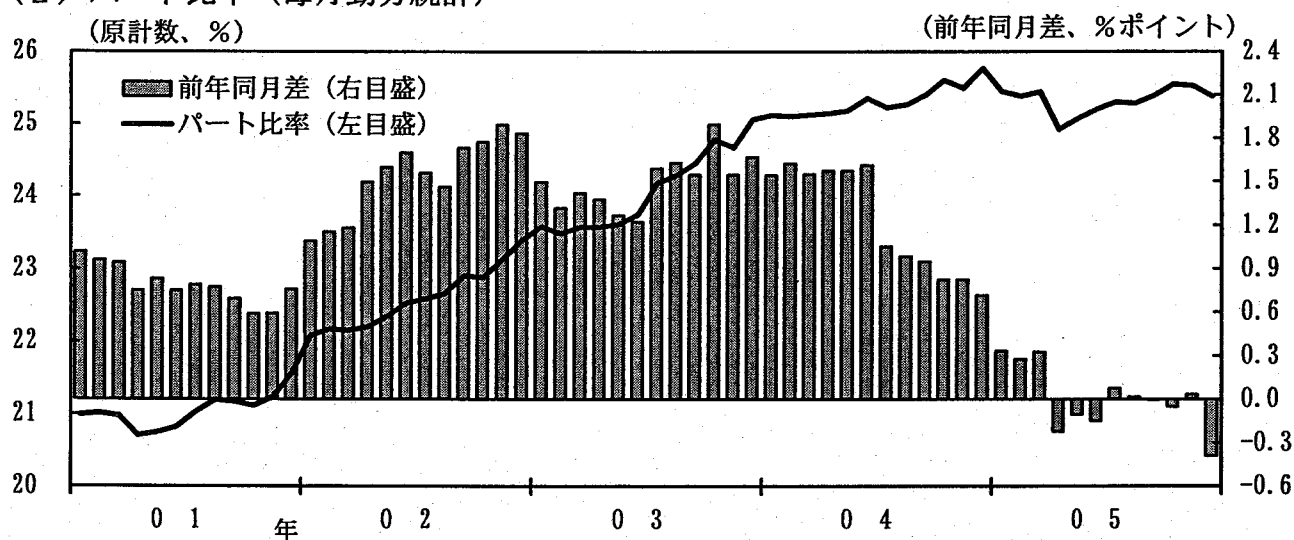
労働需給 (2)

(1) 労調・雇用者数と毎勤・常用労働者数
(前年同期比、%)



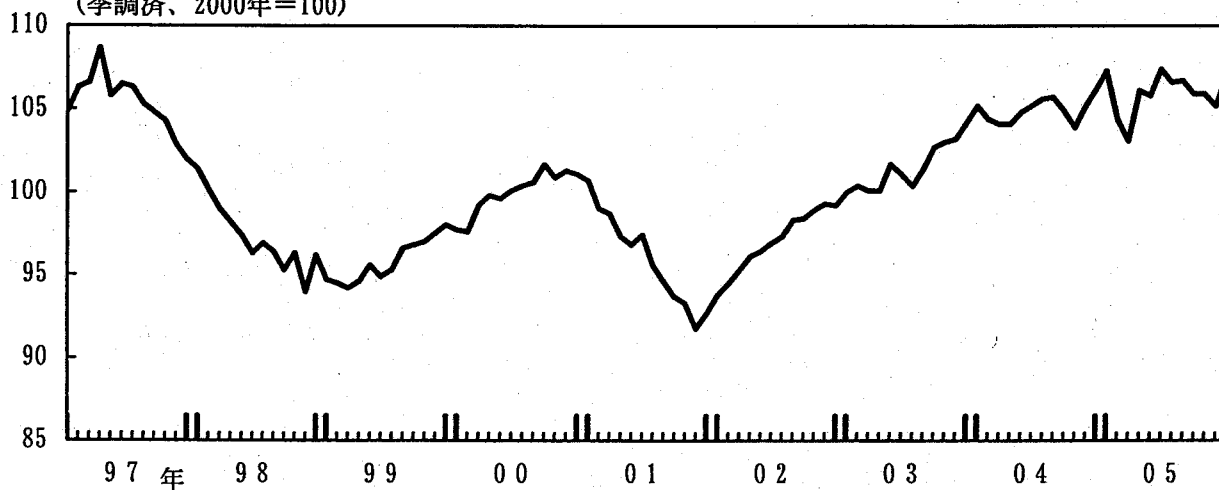
(注) 毎月勤労統計の計数は事業所規模5人以上 (下の図表も同じ)。

(2) パート比率 (毎月勤労統計)
(原計数、%)



(注) パート比率=パート労働者数/常用労働者数×100として算出。

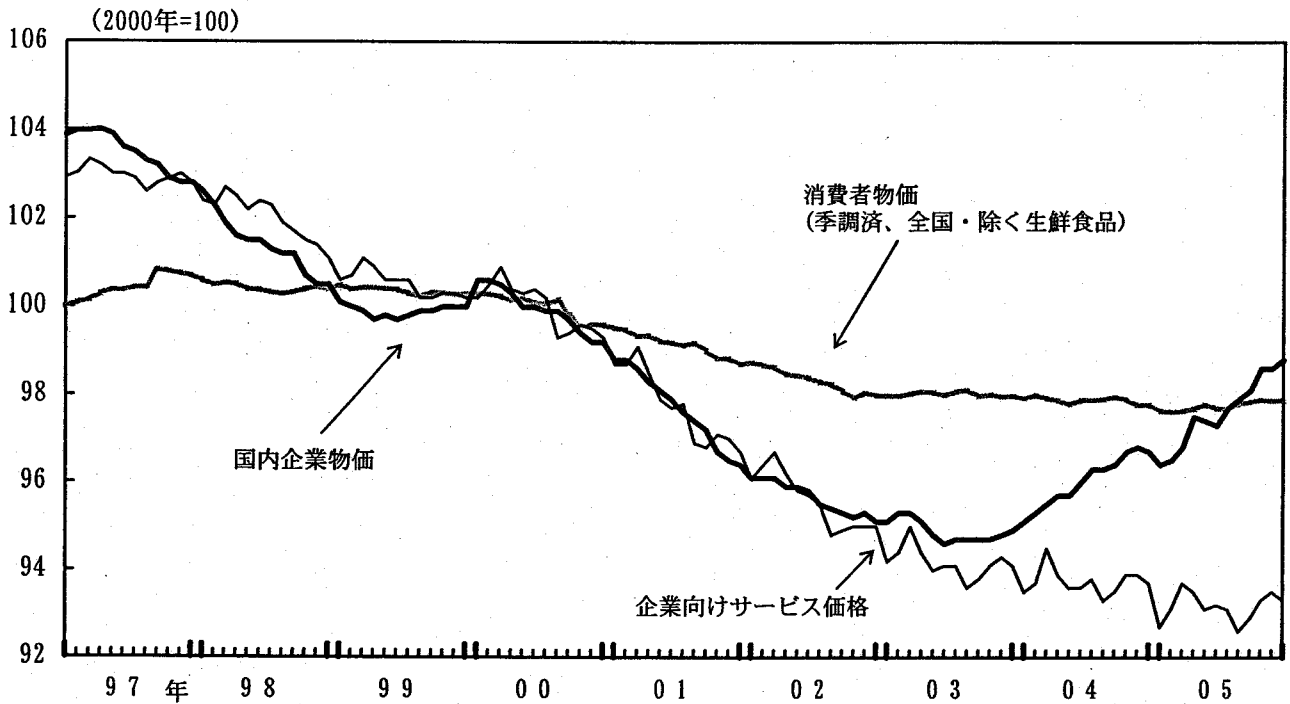
(3) 所定外労働時間 (毎月勤労統計)
(季調済、2000年=100)



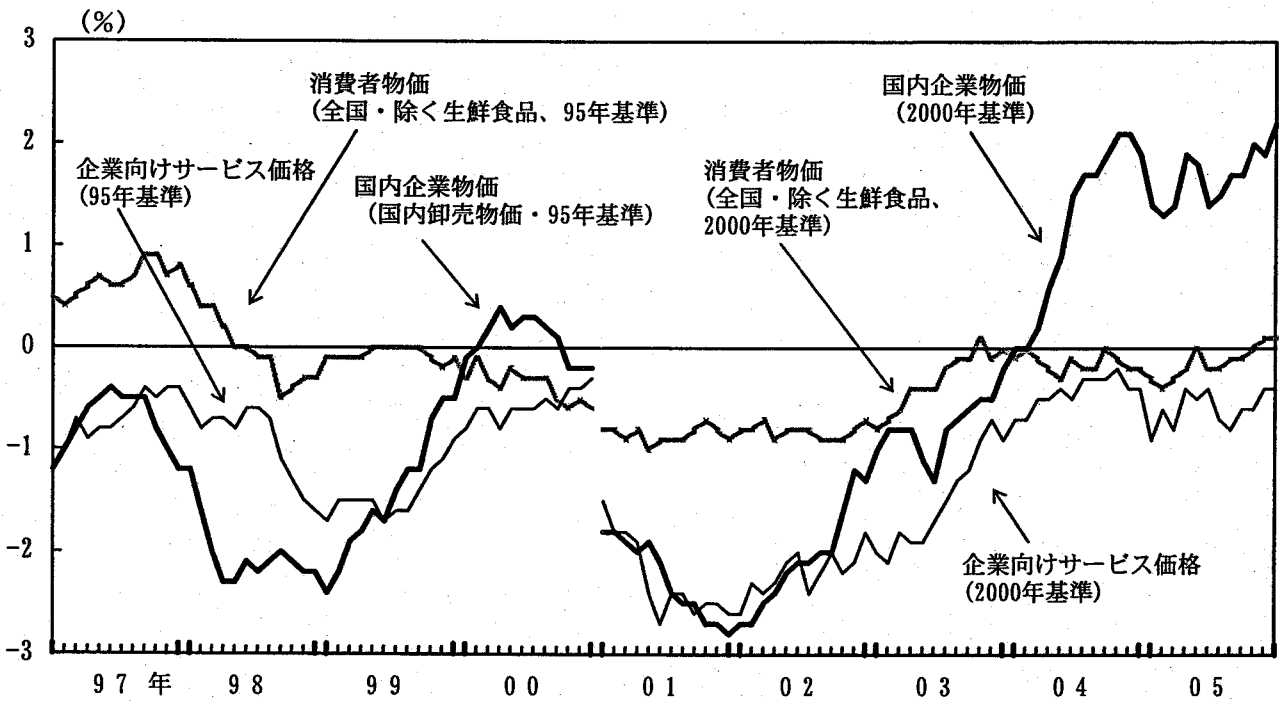
(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

物 価

(1) 水準



(2) 前年比

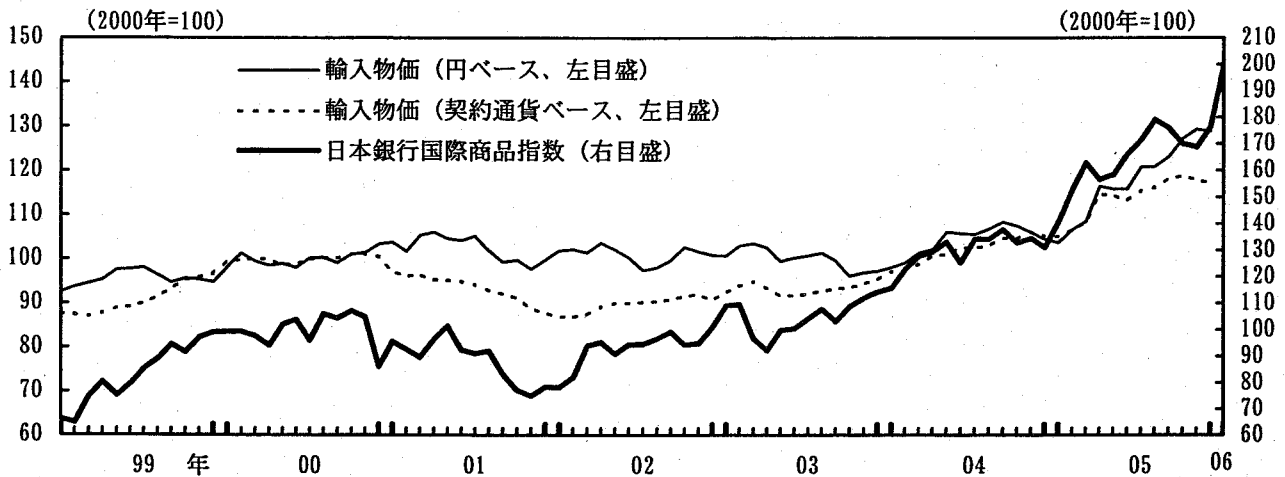


- (注) 1. 消費者物価の(1)の季調済系列は、X-12-ARIMAにより算出している。
 2. (1)の国内企業物価は、毎年7~9月にかけて適用されている夏季割り増し電力料金の影響を除いている。
 3. 97/4月以降は消費税率引き上げの影響を除いている(課税品目のすべてについて完全に転嫁されたと仮定して試算)。

(資料) 総務省「消費者物価指数」、日本銀行「企業物価指数」「卸売物価指数」「企業向けサービス価格指数」

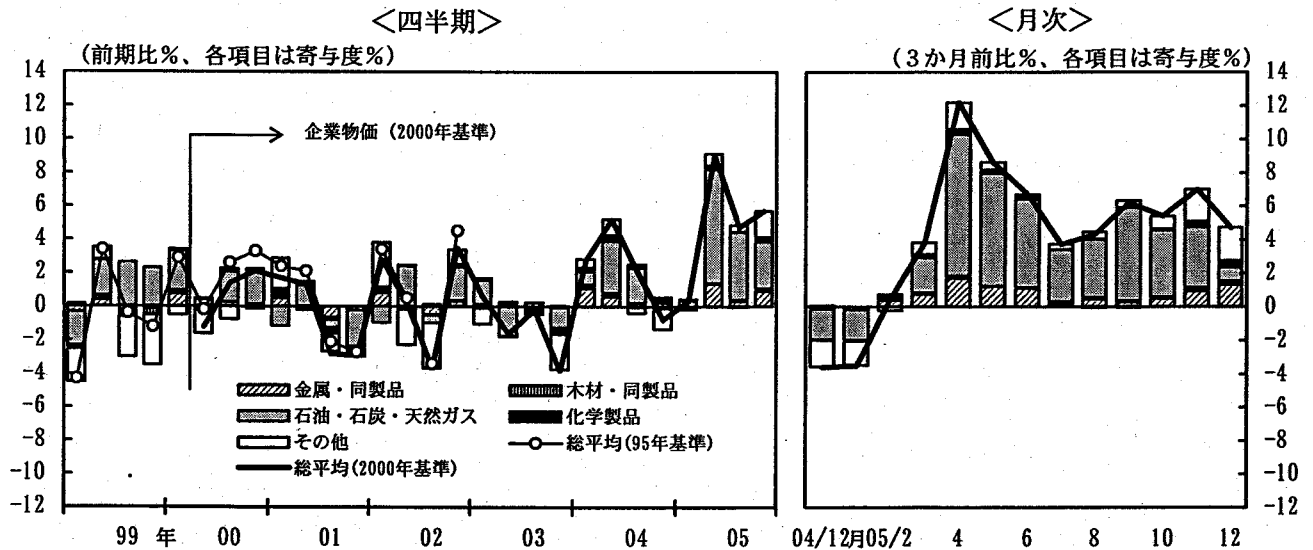
輸入物価と国際商品市況

(1) 輸入物価と国際商品指数



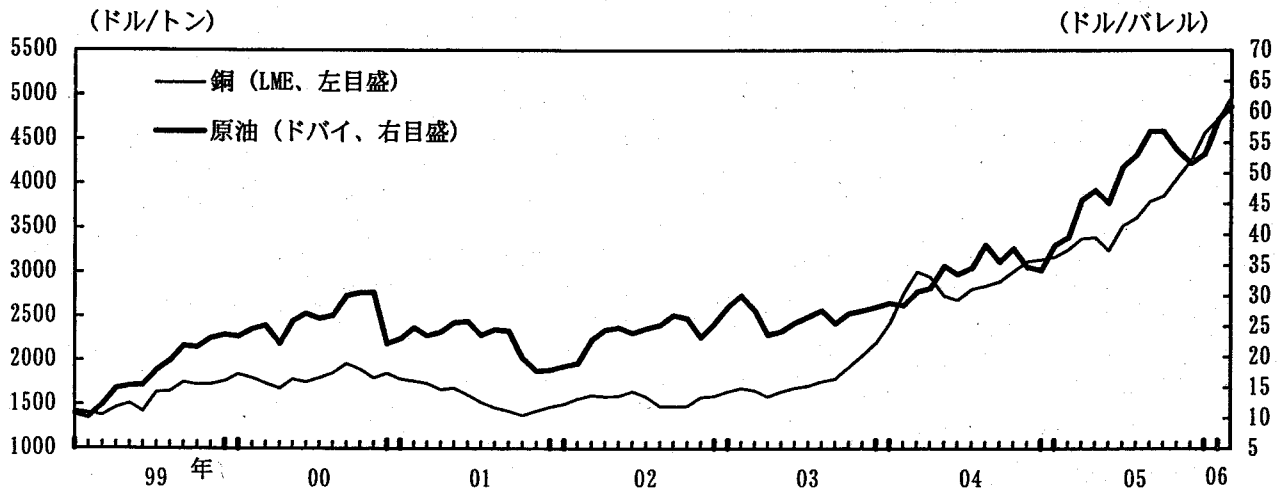
(注) 日本銀行国際商品指数の計数は月末値。

(2) 輸入物価 (円ベース：前期比、3か月前比)



(注) 95年基準の2002/4Qは、10～11月の平均値。

(3) 原油と銅の国際市況



(注) 計数は月中平均。なお、直近2月は2日までの平均値。

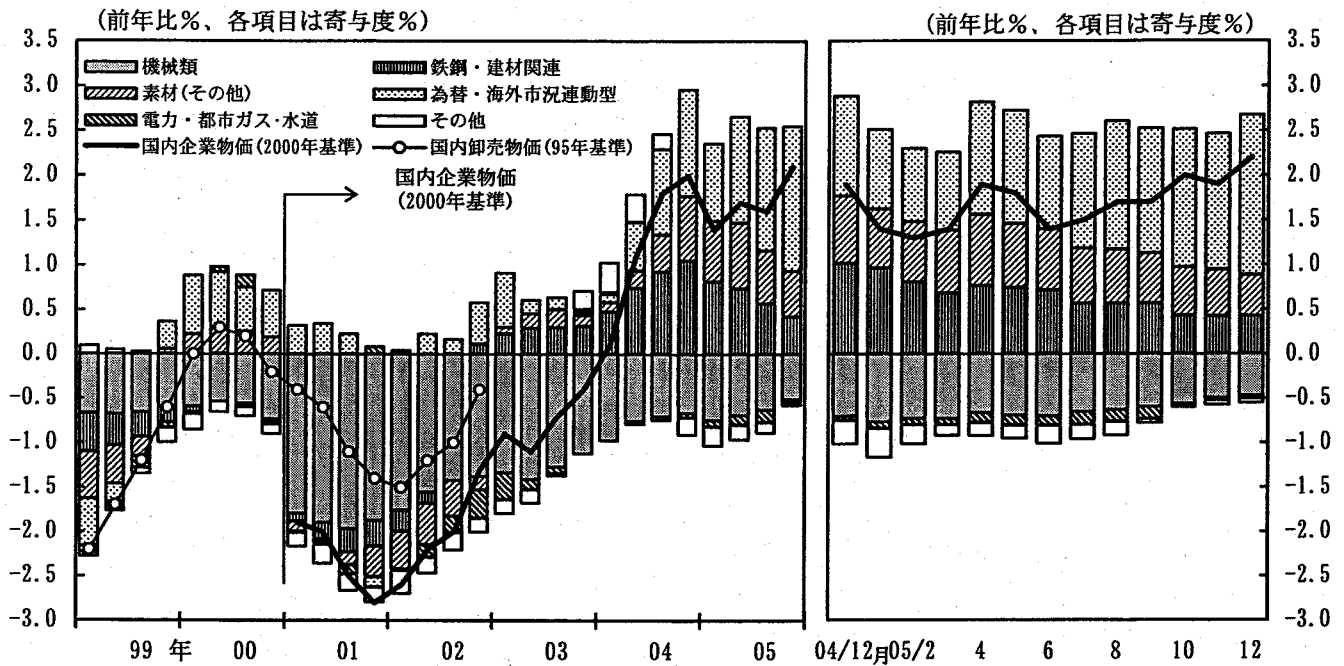
(資料) 日本銀行「企業物価指数」「卸売物価指数」「日本銀行国際商品指数」等

国内企業物価

(1) 前年比

<四半期>

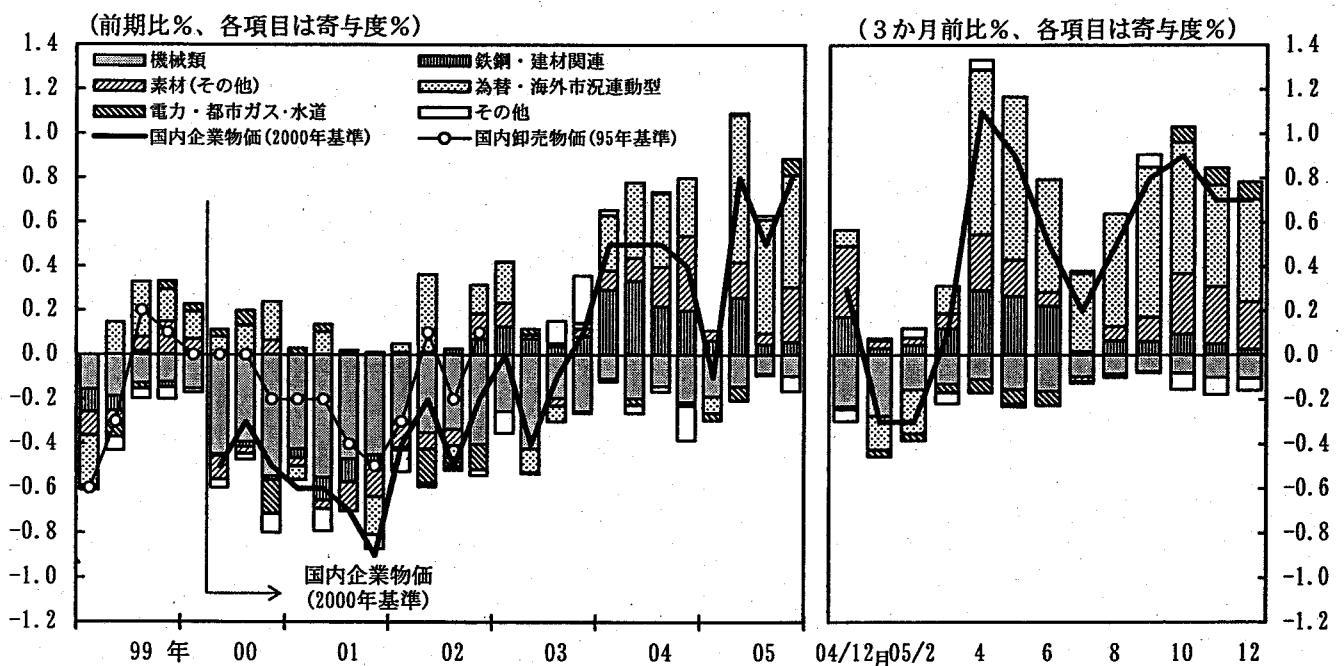
<月次>



(2) 前期比、3か月前比 (夏季電力料金調整後)

<四半期>

<月次>



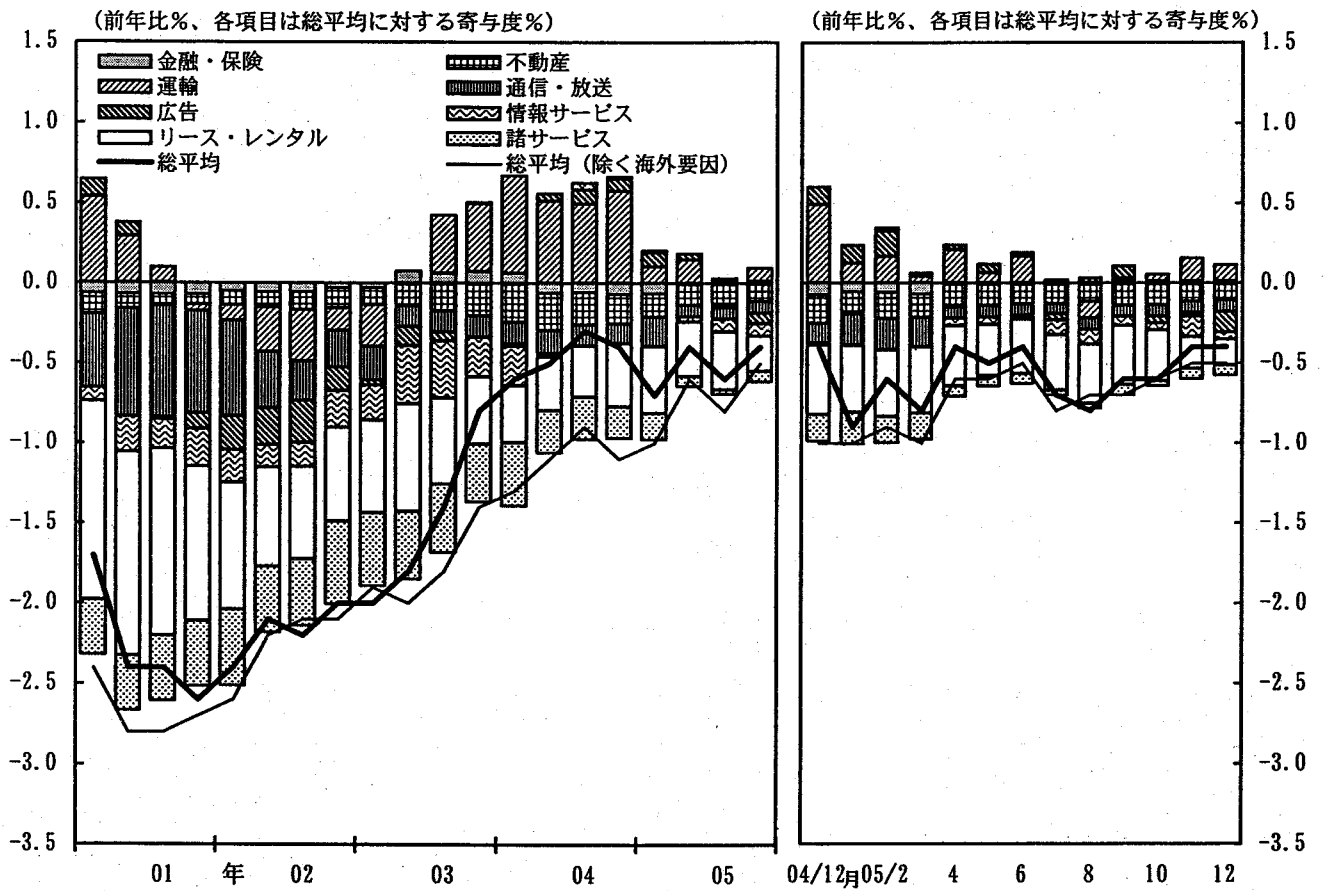
- (注) 1. 機械類：電気機器、一般機器、輸送用機器、精密機器
 2. 鉄鋼・建材関連：鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
 3. 素材(その他)：化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
 4. 為替・海外市況連動型：石油・石炭製品、非鉄金属
 5. その他：加工食品、その他工業製品、農林水産物、鉱産物
 6. (2)は、毎年7~9月にかけて適用されている夏季割り増し電力料金の影響(国内企業物価に対する寄与度は0.2%程度)を除いている。
 7. 国内卸売物価(95年基準)の2002/4Qは、10~11月の平均値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」「卸売物価指数」

企業向けサービス価格

<四半期>

<月次>

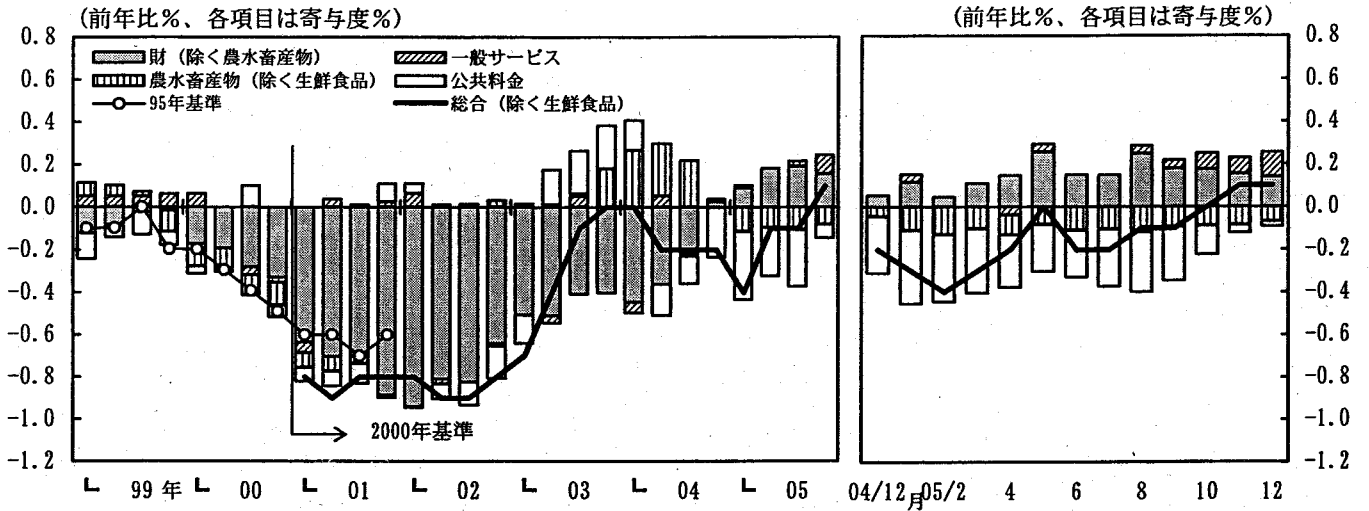


(注) 海外要因：国際航空旅客輸送、定期船、不定期船、外航タンカー、外航貨物用船料、国際航空貨物輸送

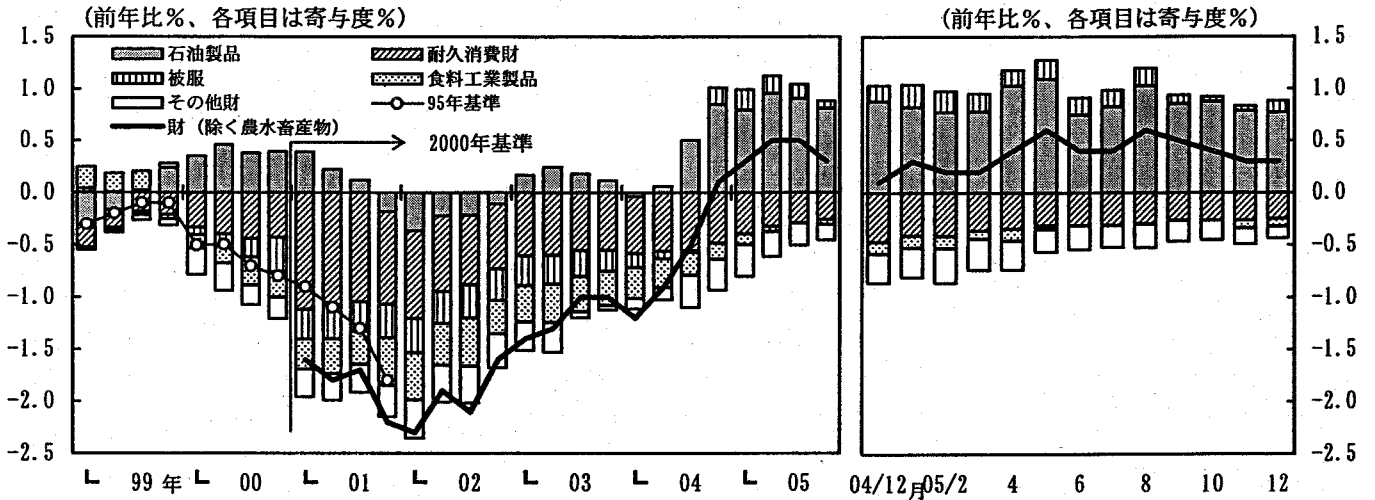
(資料) 日本銀行「企業向けサービス価格指数」

消費者物価

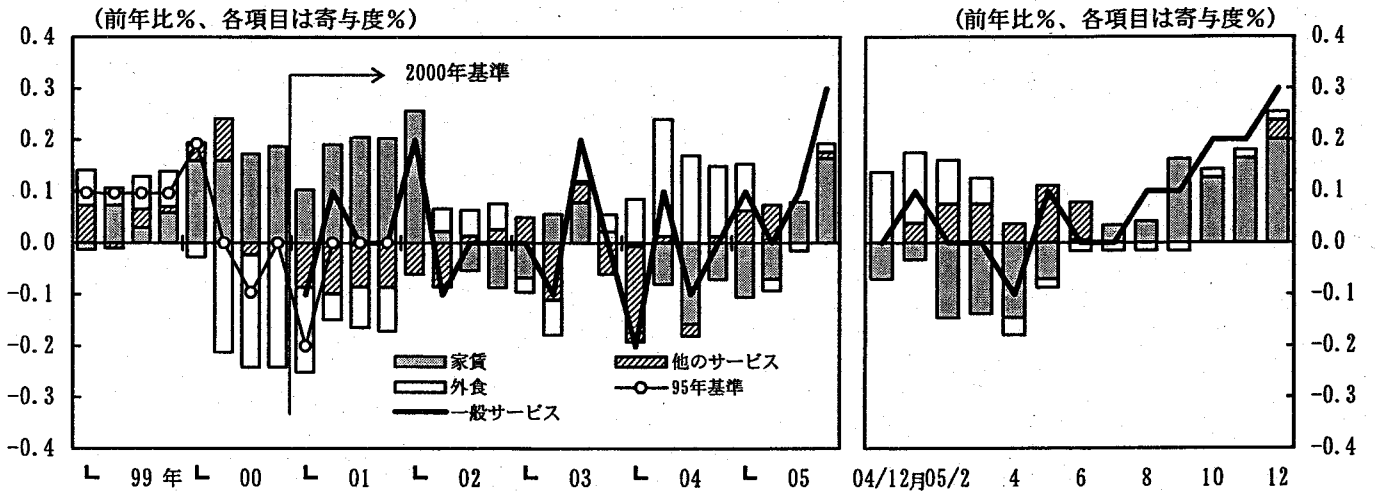
(1) 総合 (除く生鮮食品)



(2) 財 (除く農水畜産物) の要因分解



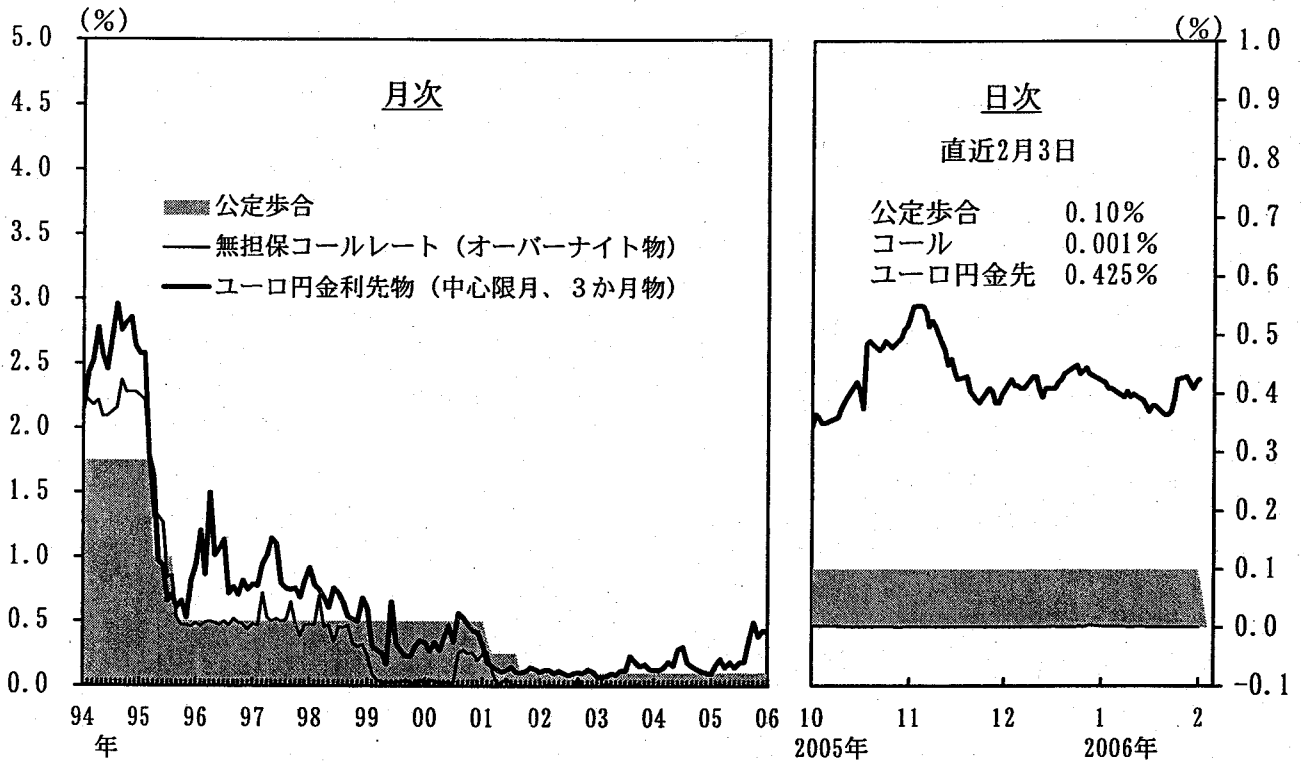
(3) 一般サービスの要因分解



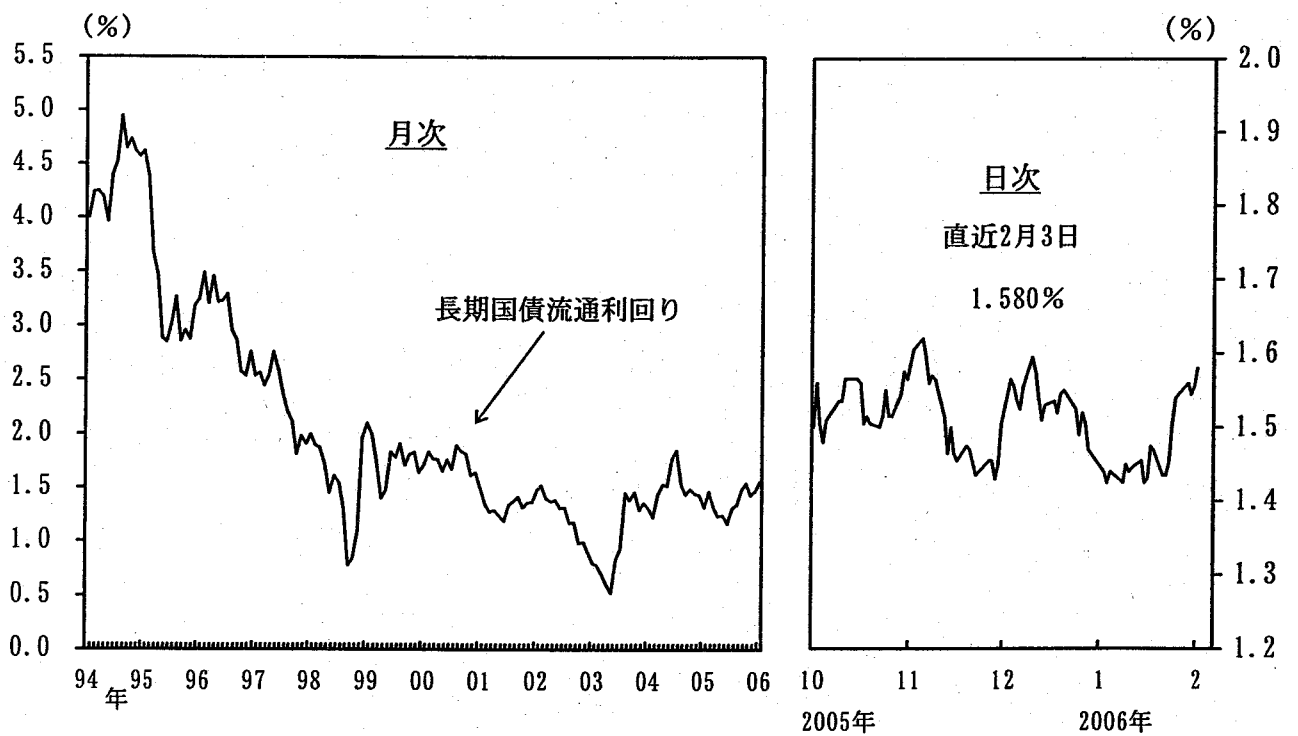
(注) 分類は、原則、総務省に則している。
 ただし、以下の分類については、組み替えて定義している(「」内は総務省公表ベース)。
 財 = 「財」 - 「電気・都市ガス・水道」
 公共料金 = 「公共サービス」 + 「電気・都市ガス・水道」
 被服 = 「衣料」 + 「シャツ・セーター・下着類」
 家賃 = 「民営家賃」 + 「持家の帰属家賃」

市場金利等

(1) 短期



(2) 長期

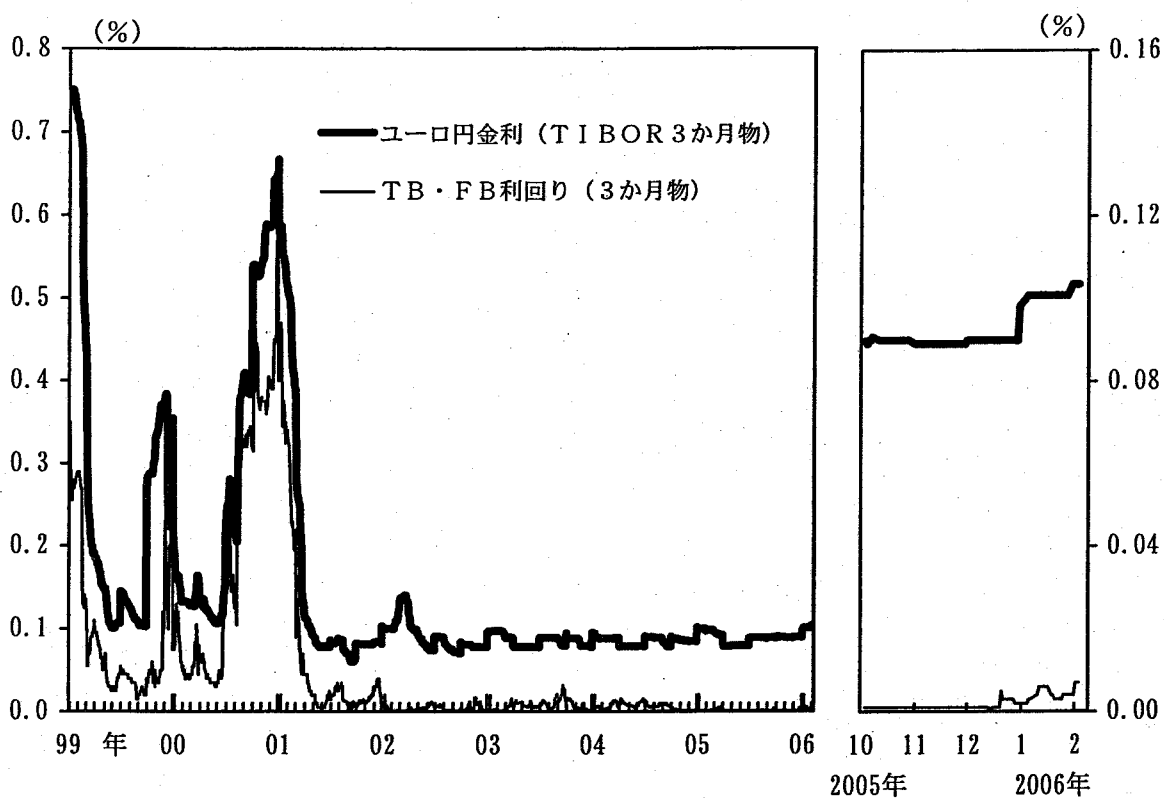


(注) 1. 長期国債流通利回りは10年新発債。ただし、98年11月以前は10年上場最長期物。
2. 無担保コールレート(オーバーナイト物)の直近は速報値。

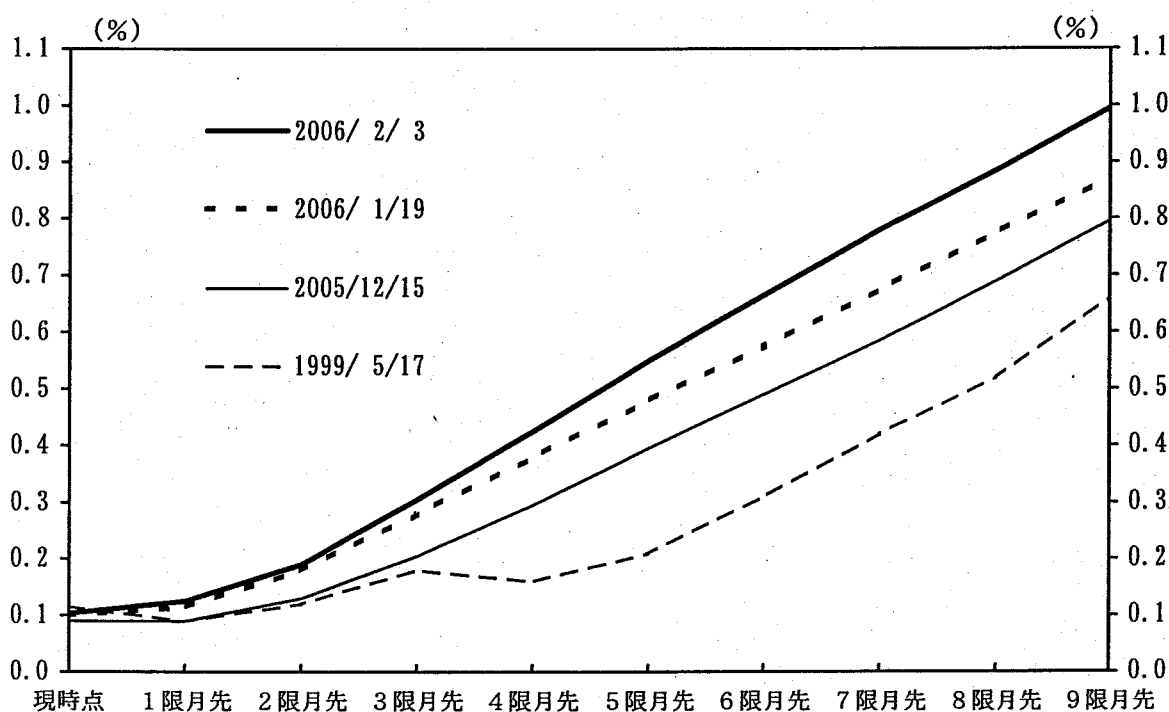
(資料) 日本銀行、東京金融先物取引所、日本相互証券

短期金融市場

(1) ターム物金利



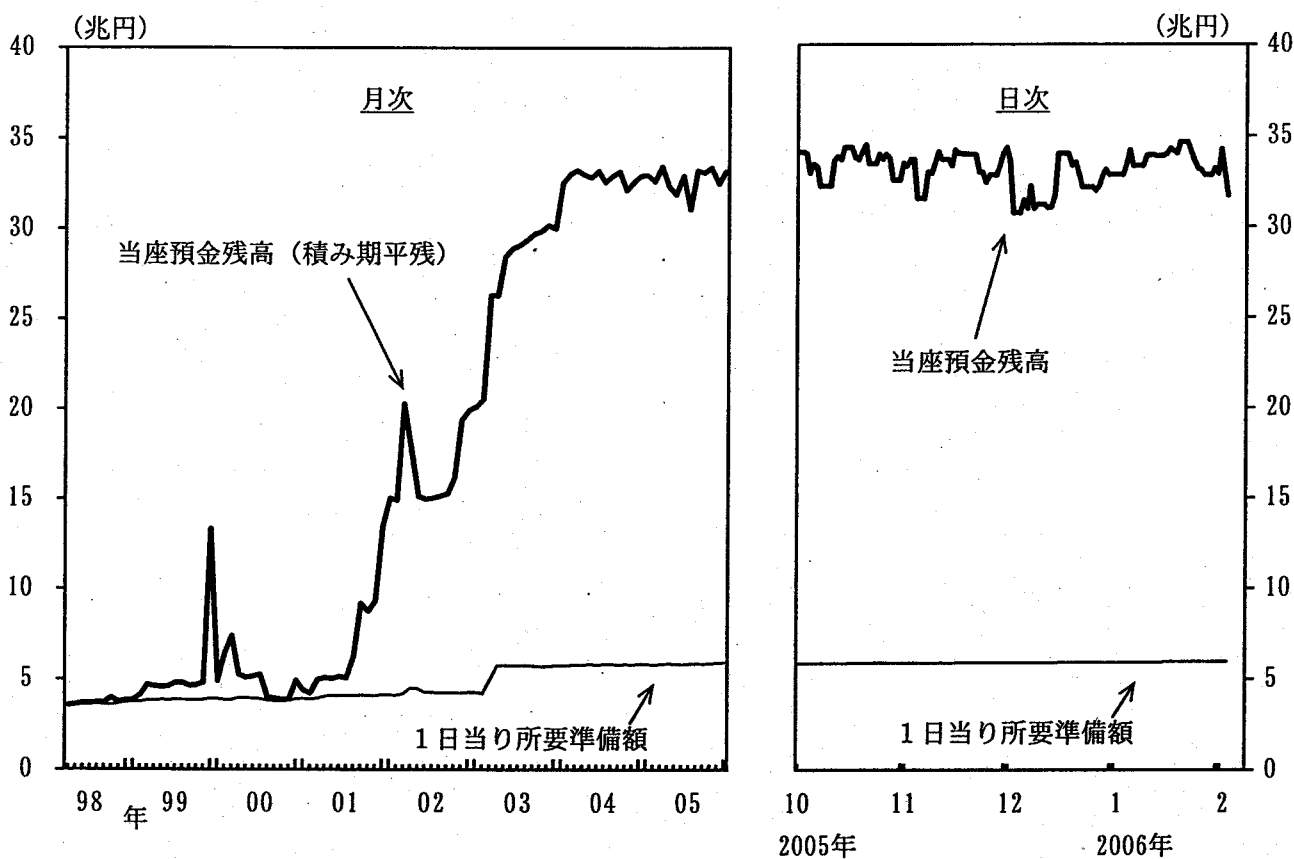
(2) ユーロ円金利先物 (3か月)



(注) 限月には、3月、6月、9月、12月のみを採用。

(資料) 全国銀行協会、日本相互証券、東京金融先物取引所

日銀当座預金残高



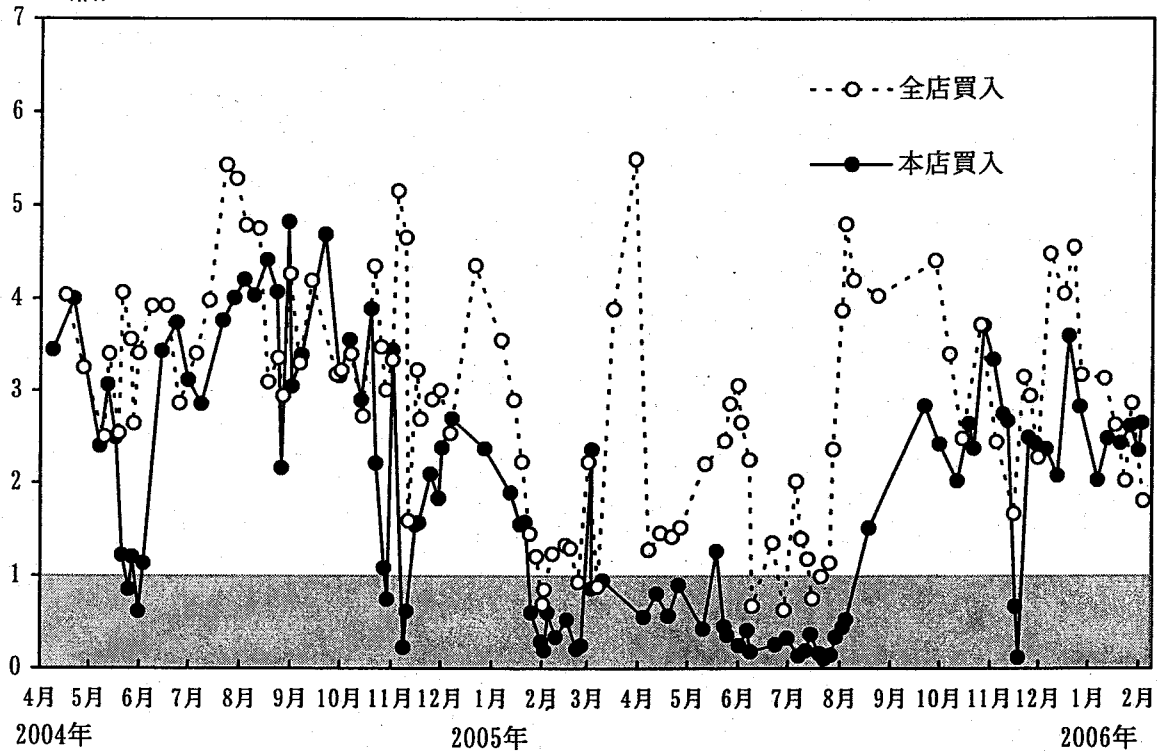
(注) 2003年4月1日以降の当座預金残高・所要準備額は、日本郵政公社の預け金に関する計数を含む。

(資料) 日本銀行

日本銀行の資金供給オペレーション

(1) 応札倍率 (手形買入オペレーション)

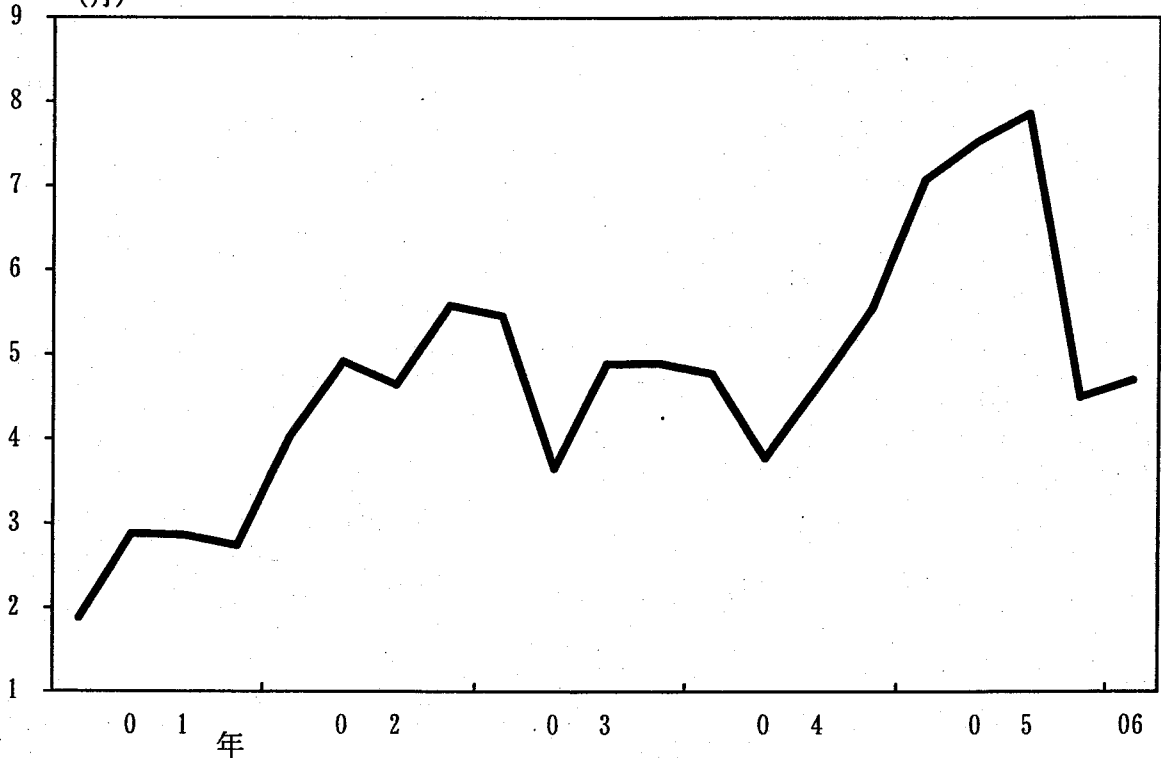
(倍)



(注) オファー日ベース。

(2) 手形買入オペレーション期間

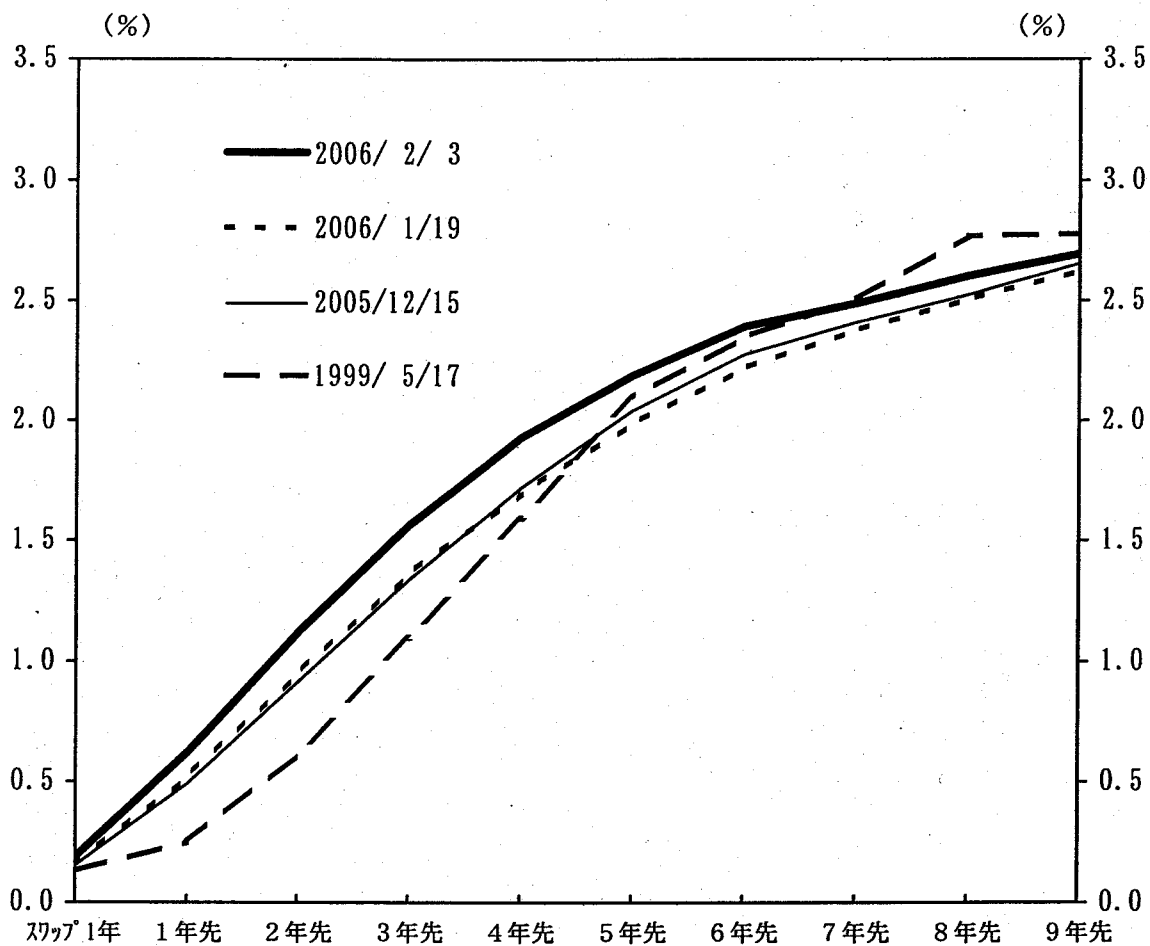
(月)



(注) 各四半期中にオファーされた、手形買入オペレーションの期間の供給金額による加重平均。

(資料) 日本銀行

長期金利の期間別分解

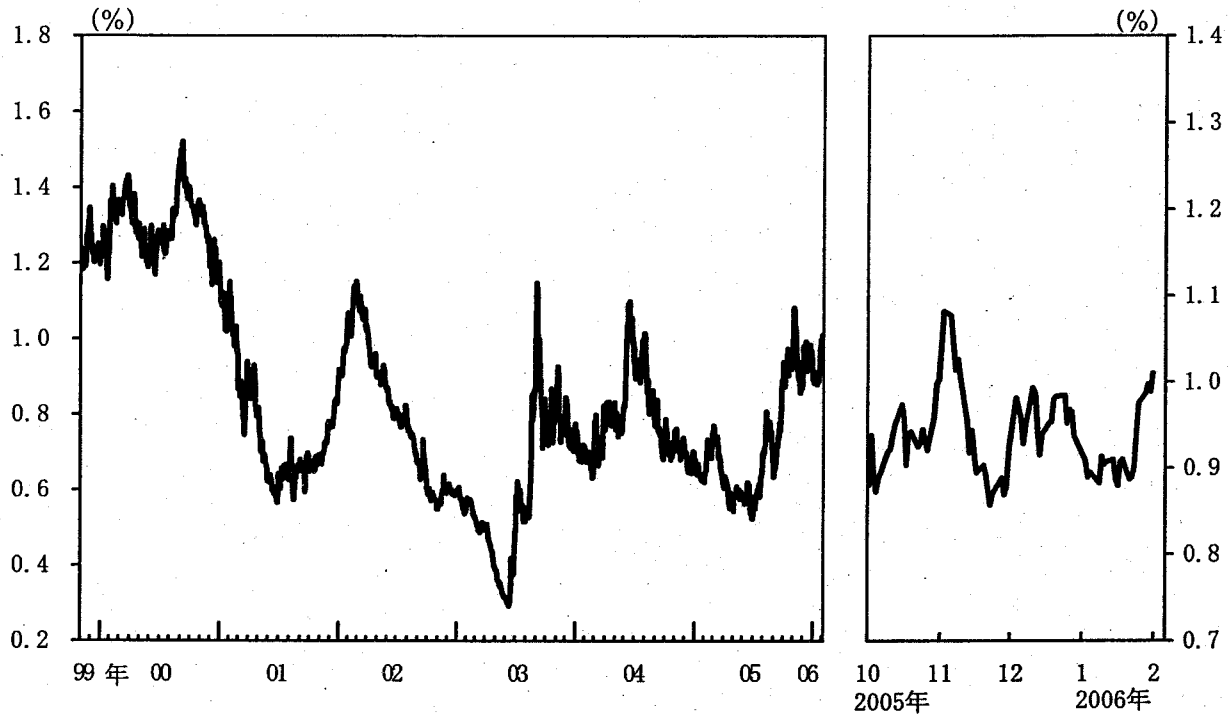


(注) 1年物インプライド・フォワード・レート。円-円スワップ・レートから算出。

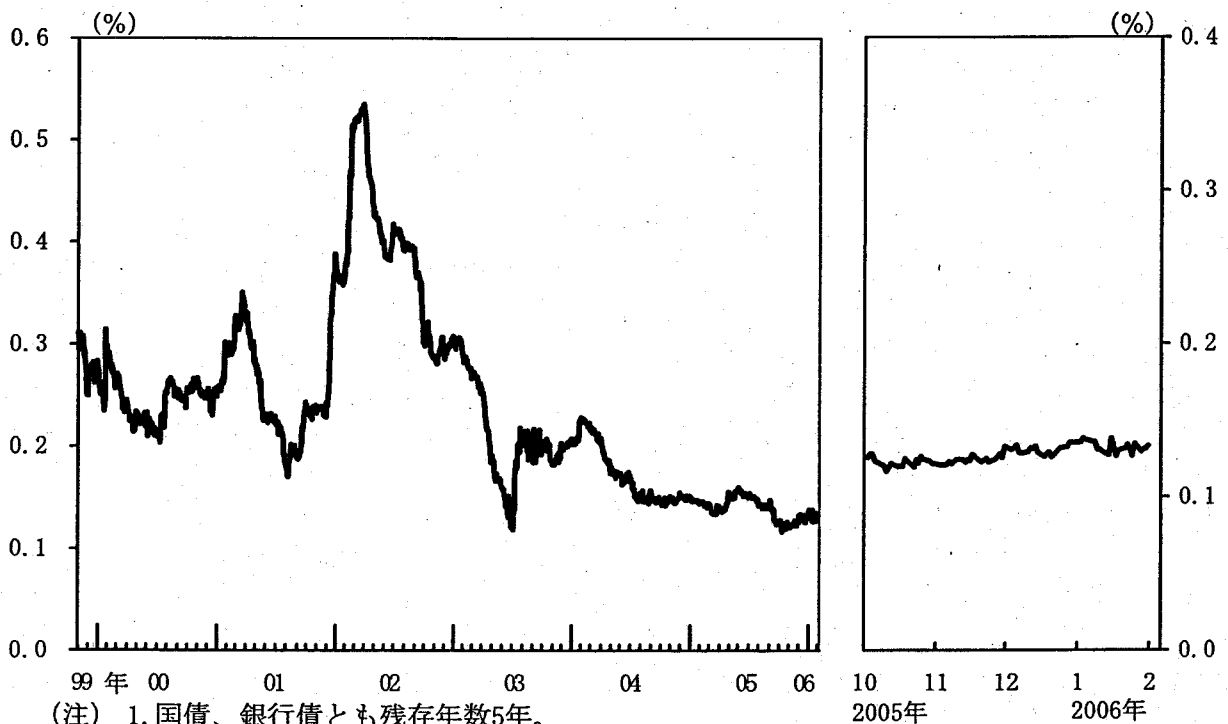
(資料) ロイター

銀行債流通利回り

(1) 銀行債流通利回り (5年新発)



(2) 利回り格差 (銀行債流通利回り - 国債流通利回り)



(注) 1. 国債、銀行債とも残存年数5年。

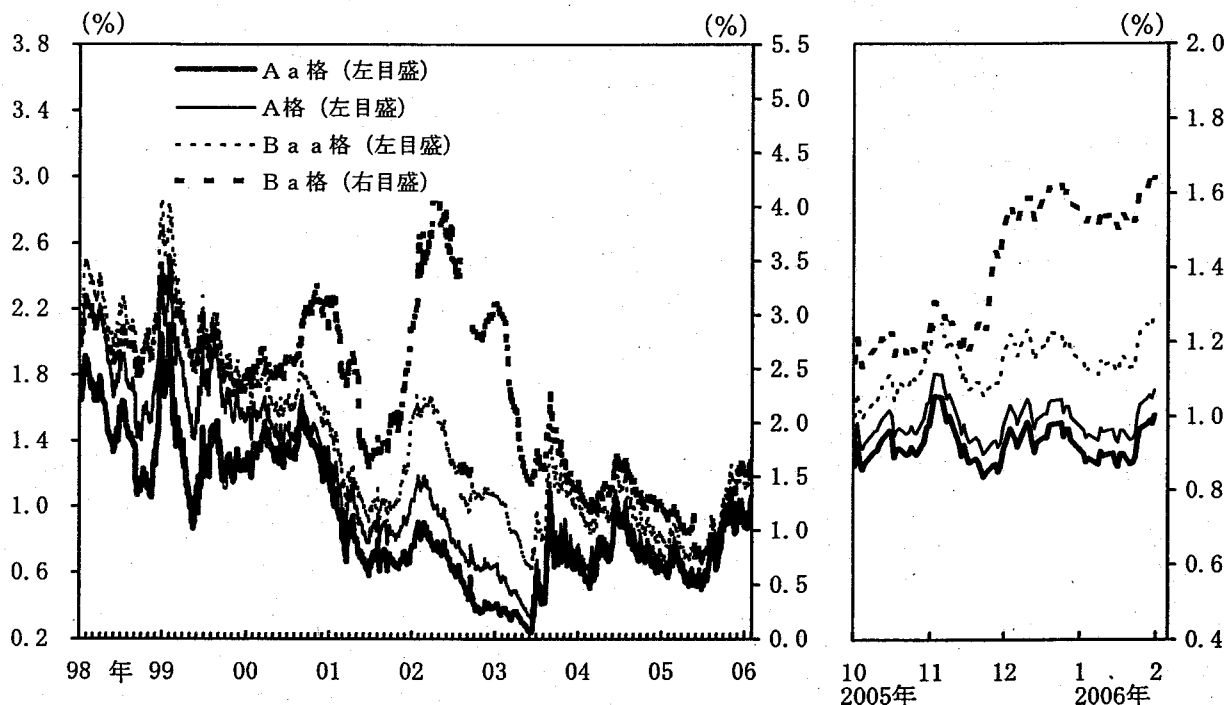
2. 銀行債は、みずほコーポレート債・三菱東京UFJ債・三井住友債の平均。

(資料) 日本証券業協会「公社債店頭(基準)気配表」「公社債店頭売買参考統計値」

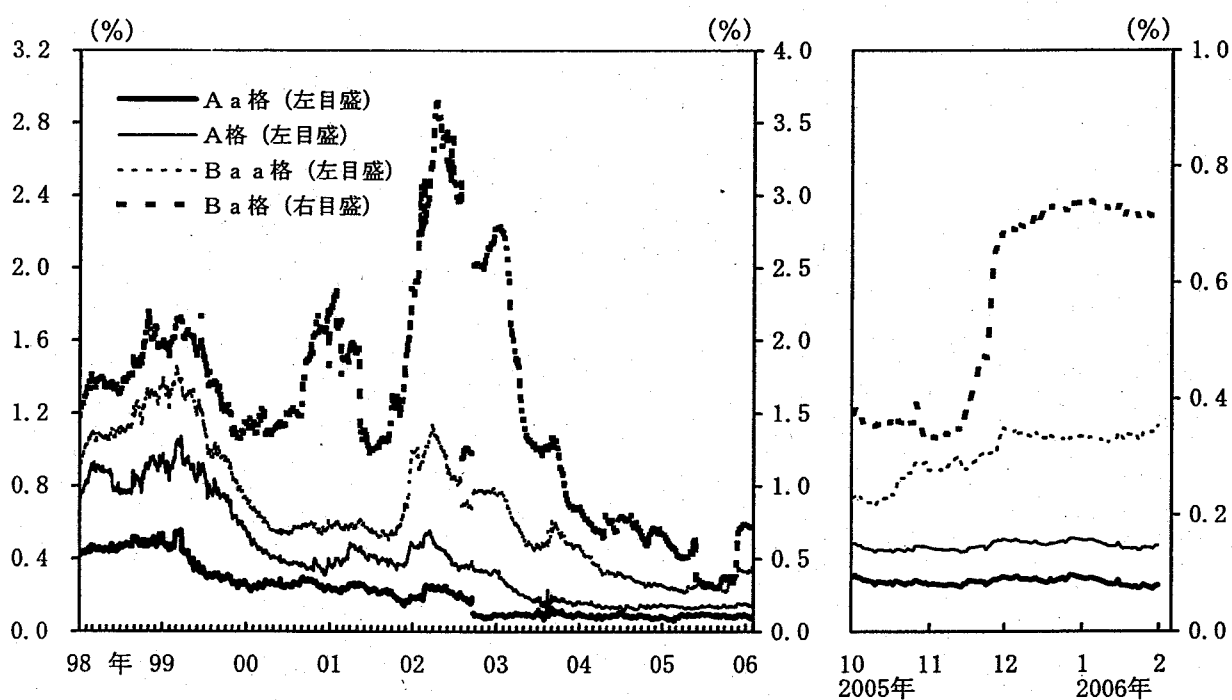
(図表 37)

社債流通利回り

(1) 社債流通利回り



(2) 利回り格差 (社債流通利回り - 国債流通利回り)



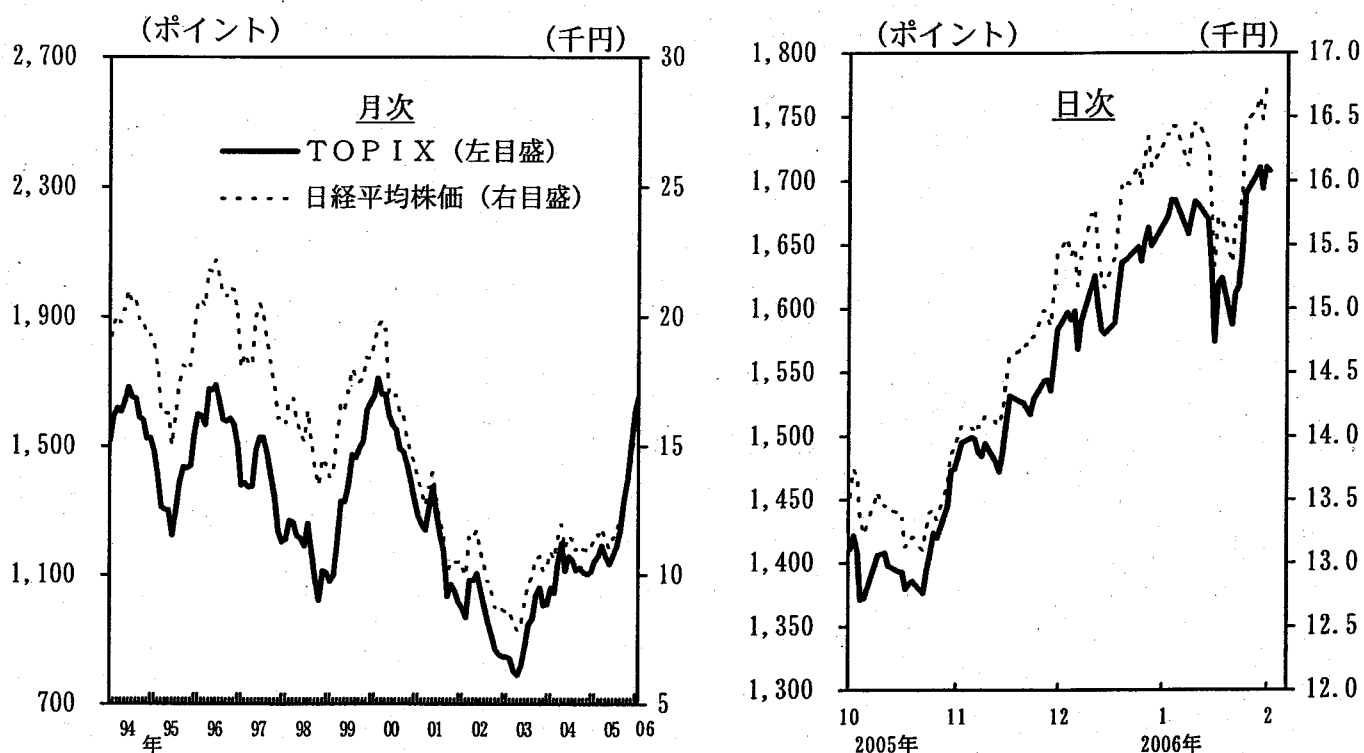
(注) 1. 社債、国債とも残存年数は5年。ただし、社債は、2002年9月24日以降の計数につき、残存年数4年以上6年未満の銘柄より平均流通利回りを算出。

2. 社債利回りは日本証券業協会公表の気配値、格付けはムーディーズによる。

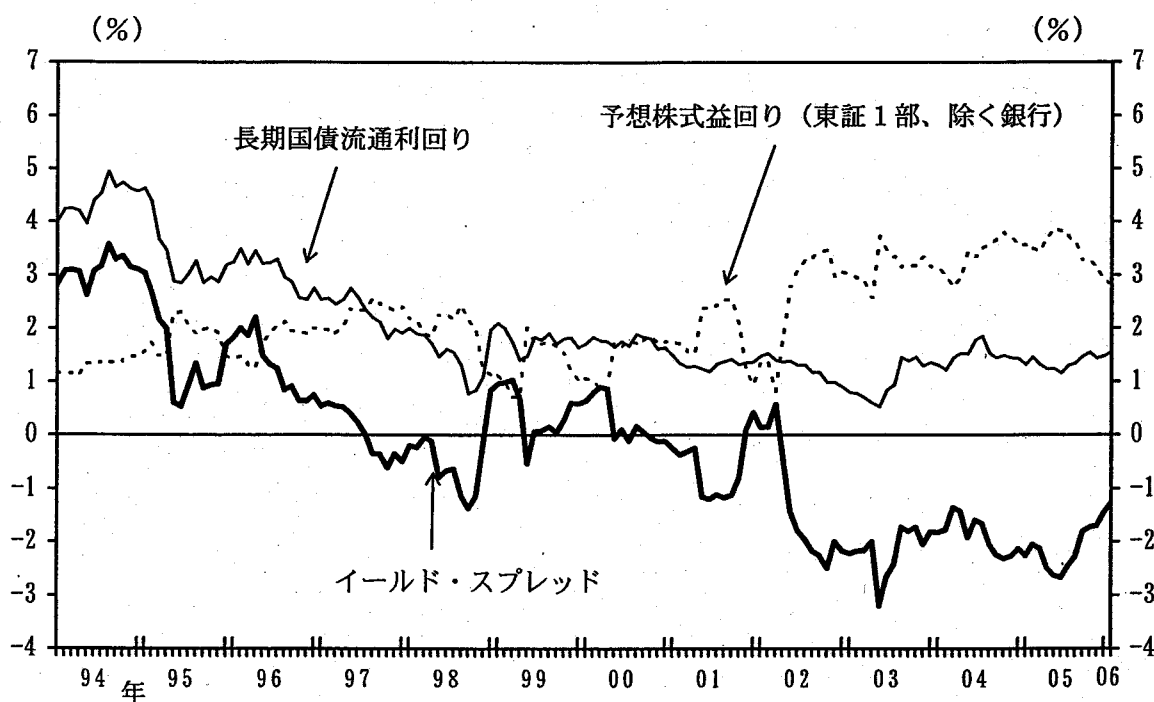
(資料) 日本証券業協会「公社債店頭(基準)気配表」「公社債店頭売買参考統計値」

株 価

(1) 株式市況



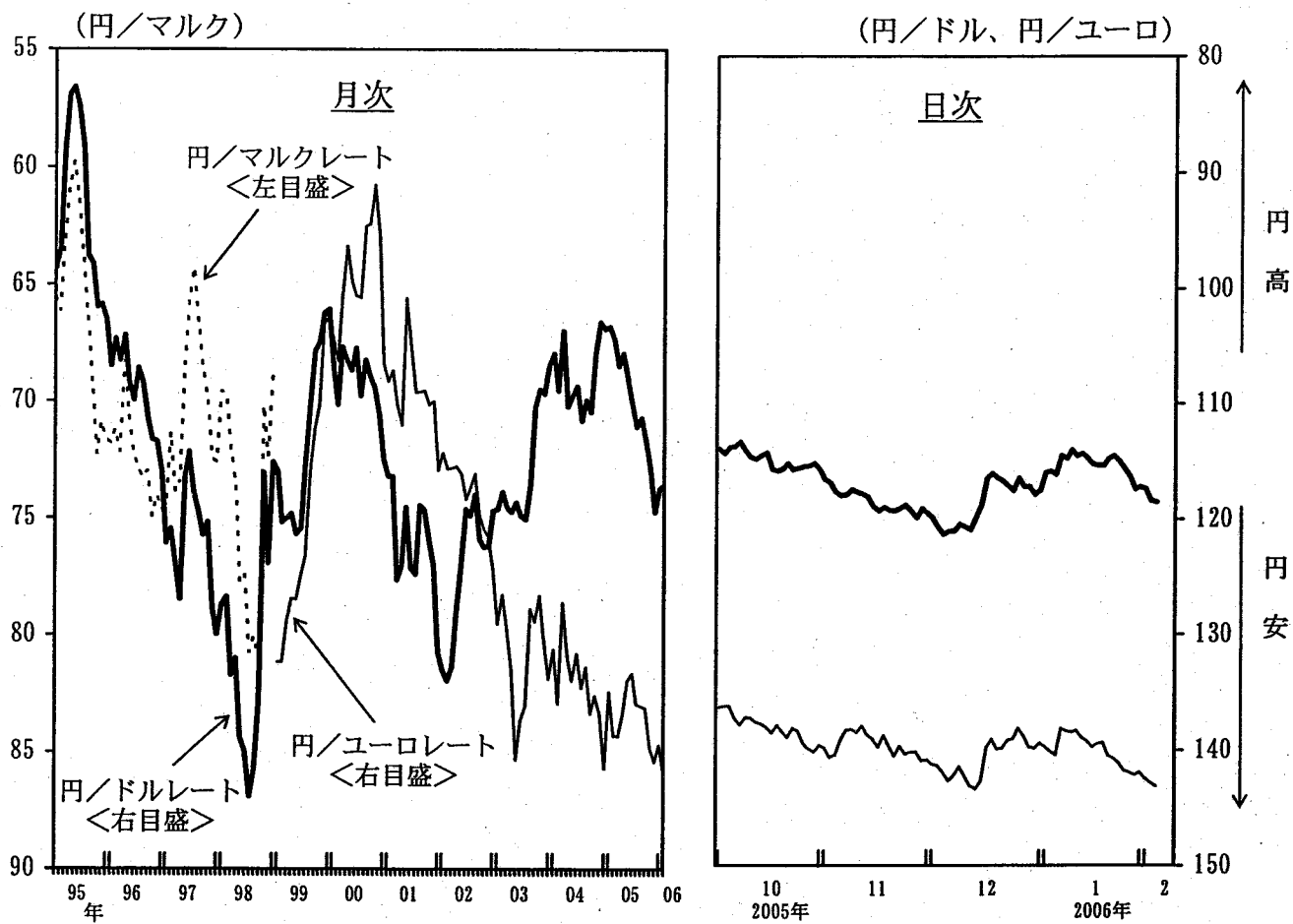
(2) イールド・スプレッド



- (注) 1. イールド・スプレッド = 長期国債流通利回り - 予想株式益回り
 予想株式益回り = $1 / \text{予想PER}$
 2. 予想株式益回り (単体ベース) は大和総研調べ。
 3. 長期国債流通利回りは10年新発債。ただし、98年11月以前は10年上場最長期物。

(資料) 日本経済新聞社「日本経済新聞」、大和総研「大和投資資料」

為替レート

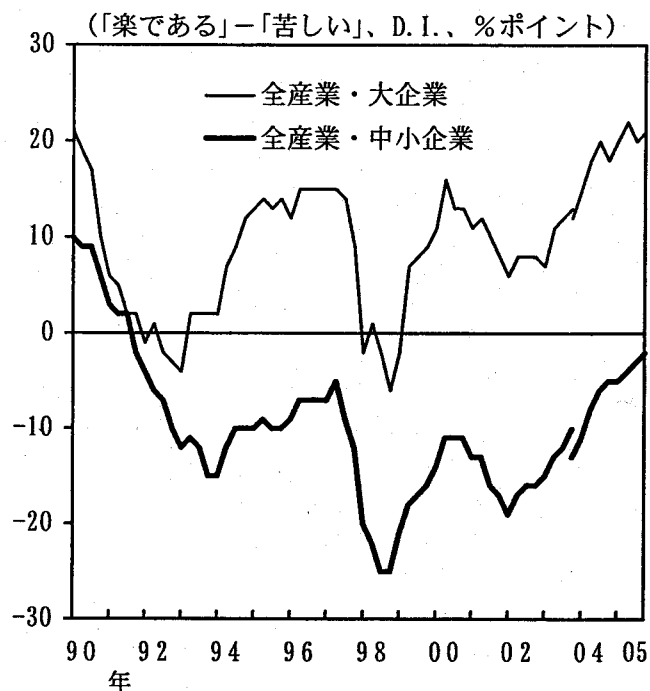


(資料) 日本銀行

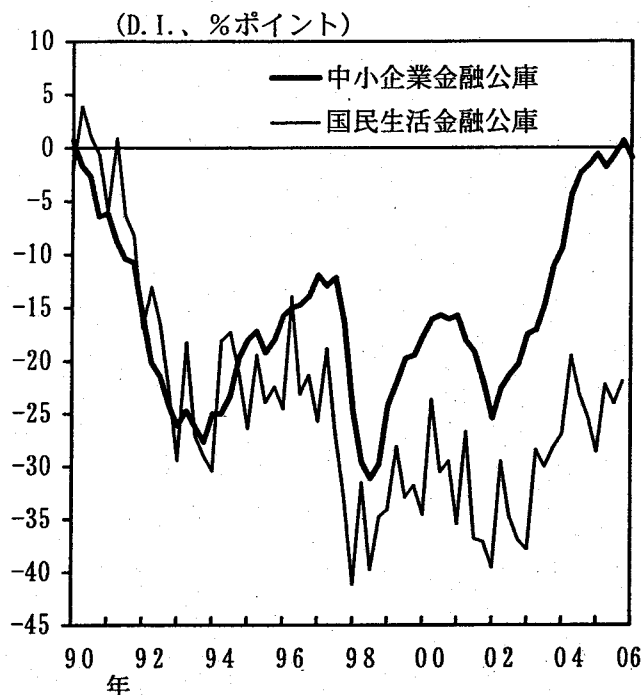
企業金融

(1) 資金繰り

<短観>



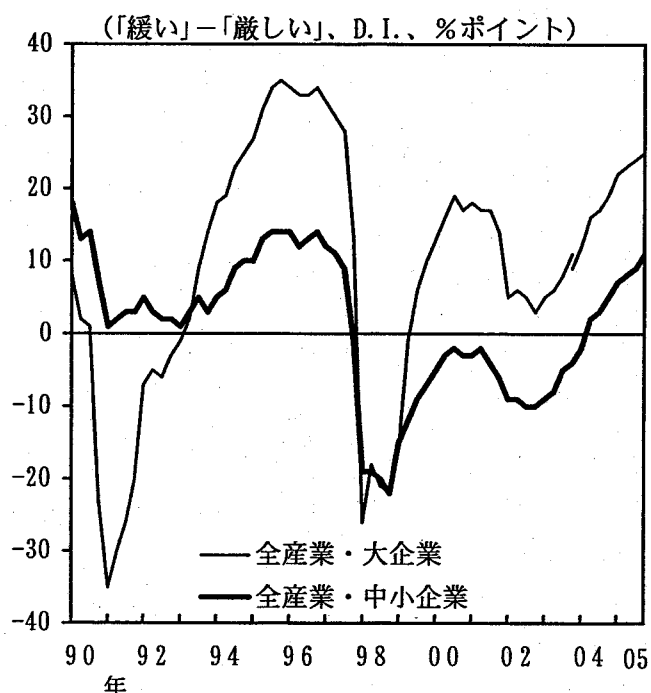
<中小公庫・国民公庫調査>



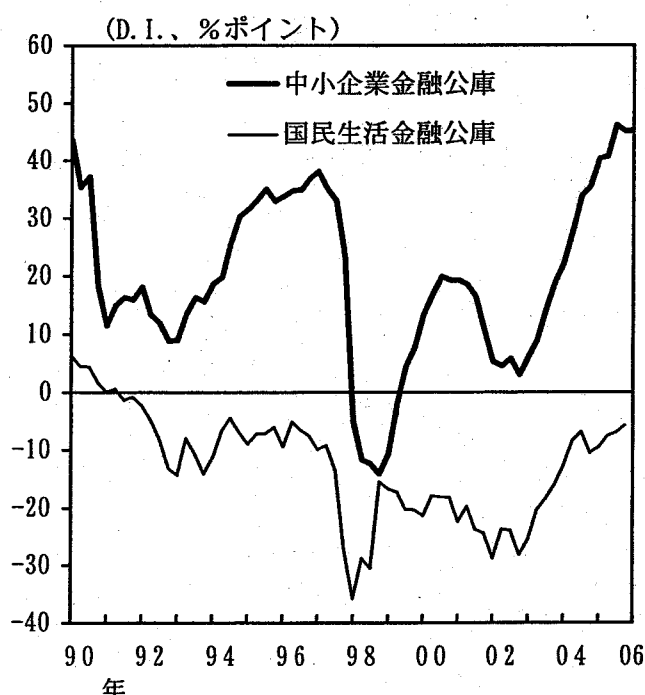
- (注) 1. 短観は2004/3月調査より見直しを実施。旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から(下の(2)も同じ)。
 2. 中小企業金融公庫のD. I. の定義は「余裕」-「窮屈」、国民生活金融公庫のD. I. の定義は「好転」-「悪化」。
 3. 中小企業金融公庫の計数は四半期平均値、2006/1Qは1月の値(下の(2)も同じ)。

(2) 企業からみた金融機関の貸出態度

<短観>



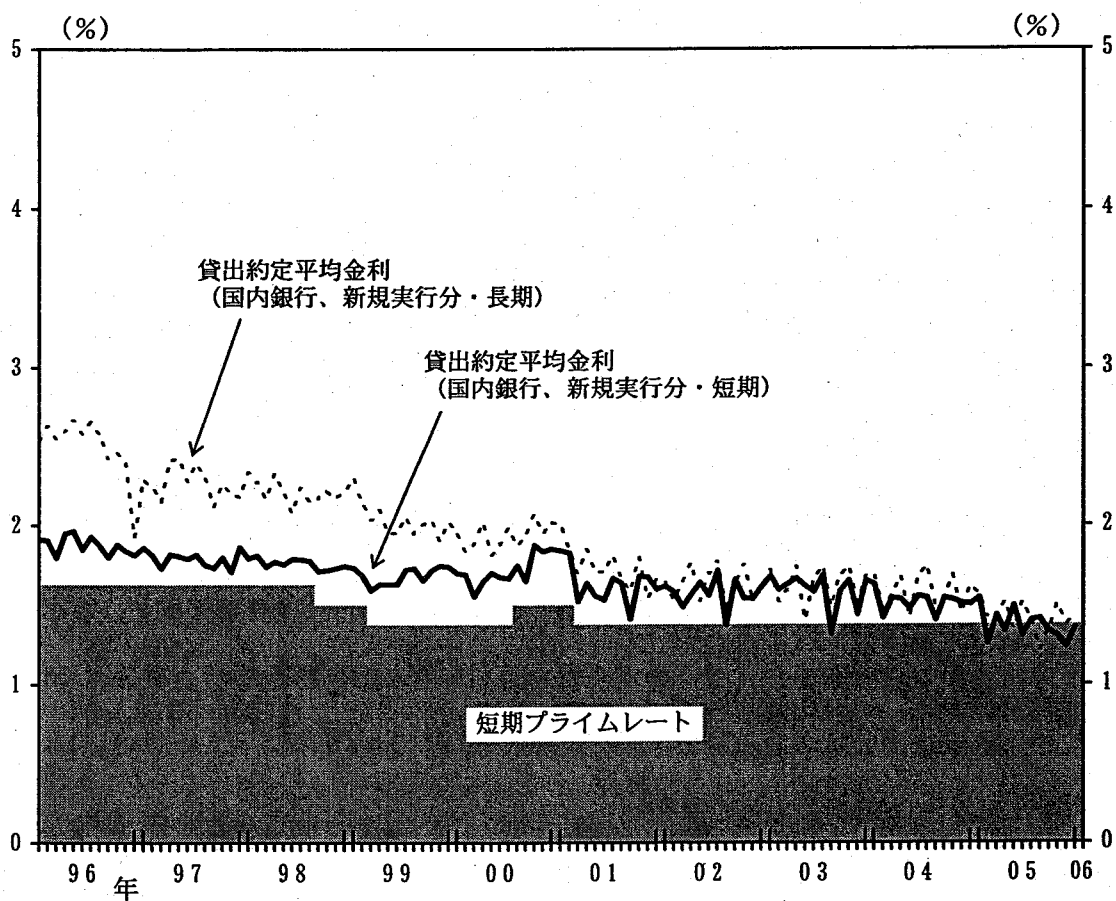
<中小公庫・国民公庫調査>



- (注) 中小企業金融公庫のD. I. の定義は「緩和」-「厳しい」、国民生活金融公庫のD. I. の定義は「容易になった」-「難しくなった」。

(資料) 日本銀行「企業短期経済観測調査」、中小企業金融公庫「中小企業景況調査」、国民生活金融公庫「全国小企業動向調査結果」

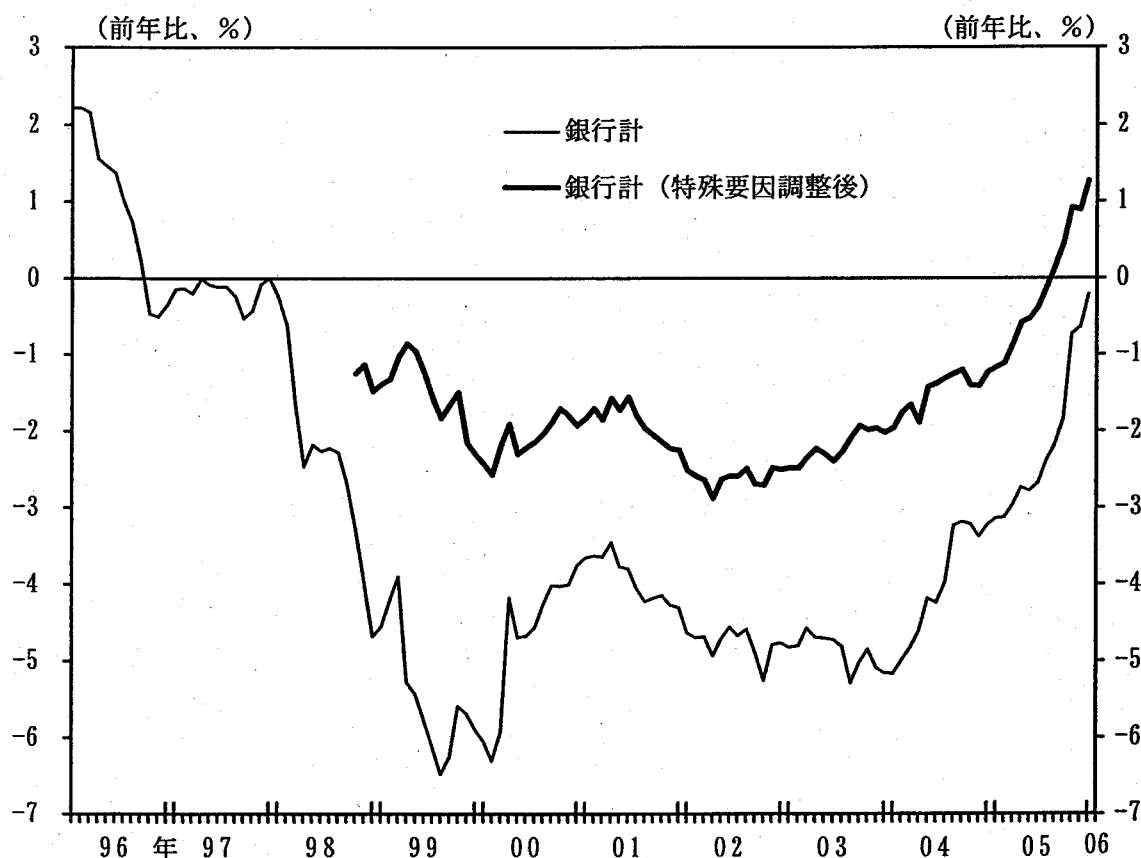
貸出金利



(注) 短期プライムレートは月末時点。

(資料) 日本銀行

民間銀行貸出

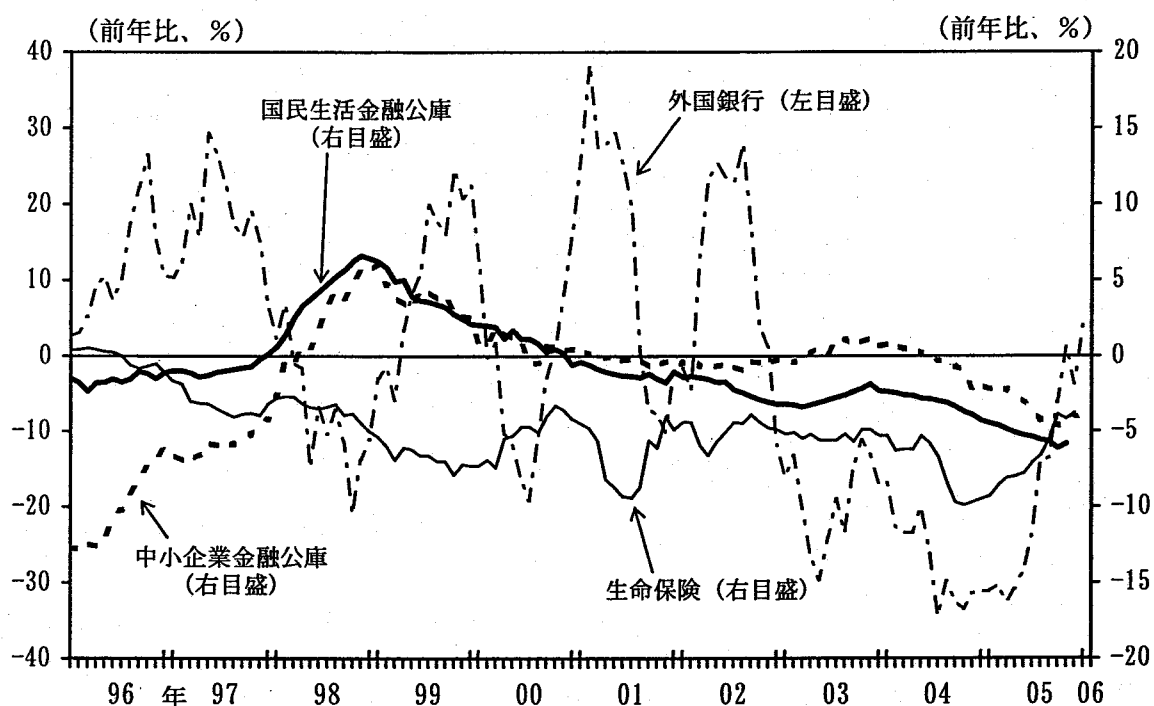


- (注) 1. 総貸出平残ベース。
2. 銀行計は、都銀等、地方銀行、地方銀行Ⅱの合計。
3. 特殊要因調整後計数は、貸出の実勢をみるため、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、③貸出債権の償却による変動分、④旧国鉄清算事業団向け貸出の一般会計への承継分、および⑤旧住宅金融債権管理機構向け貸出の整理回収機構向け貸出への振り替わり分を調整したもの。あくまでも種々の前提に基づく試算であり、試算結果については幅を持ってみる必要がある。

(資料) 日本銀行「貸出・資金吸収動向等」

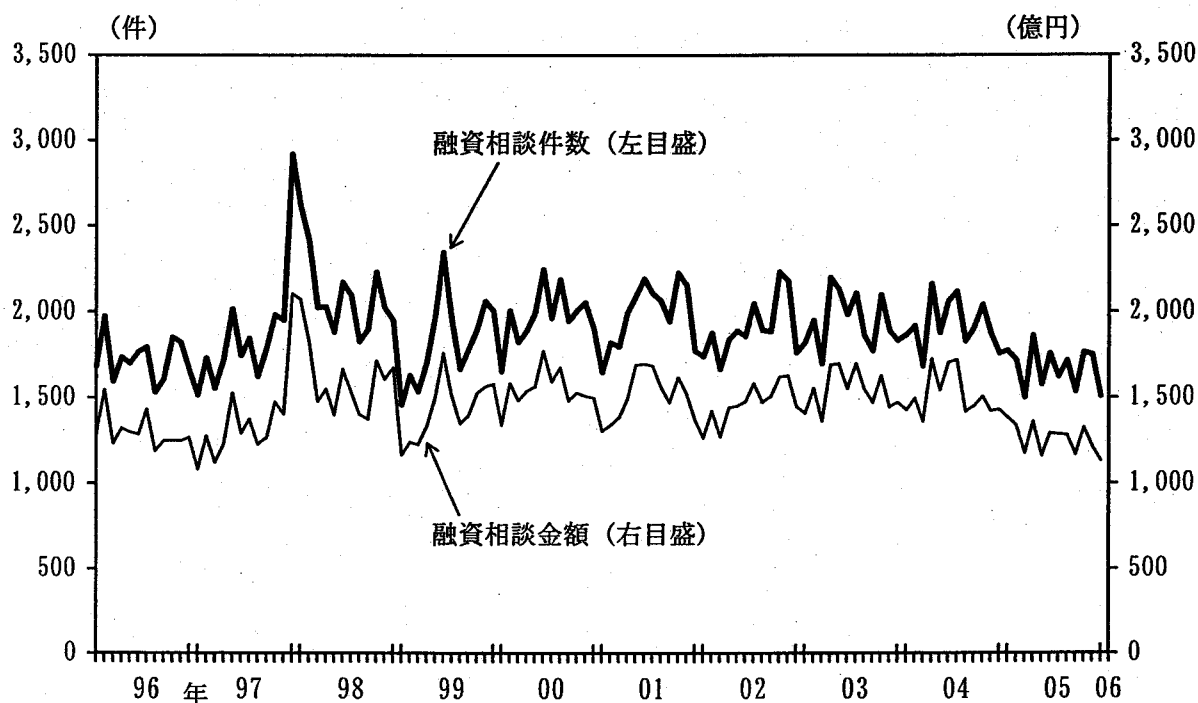
その他金融機関貸出

(1) その他金融機関貸出



- (注) 1. 外国銀行は平残ベース。その他は末残ベース。
2. 中小企業金融公庫の2004/7月～2005/6月の計数は、旧中小企業総合事業団の中小企業信用保険事業を継承したことの影響を調整している。

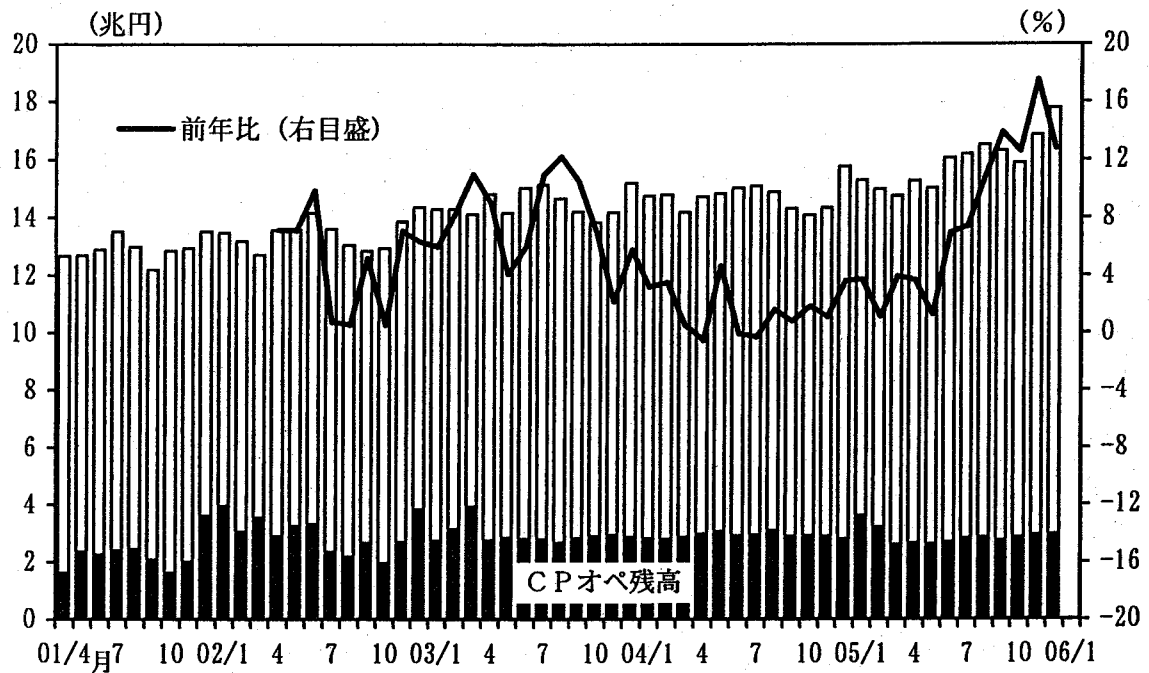
(2) 中小企業金融公庫の融資相談件数・金額 (直貸分)



(資料) 日本銀行「金融経済統計月報」、中小企業金融公庫「業務概況」

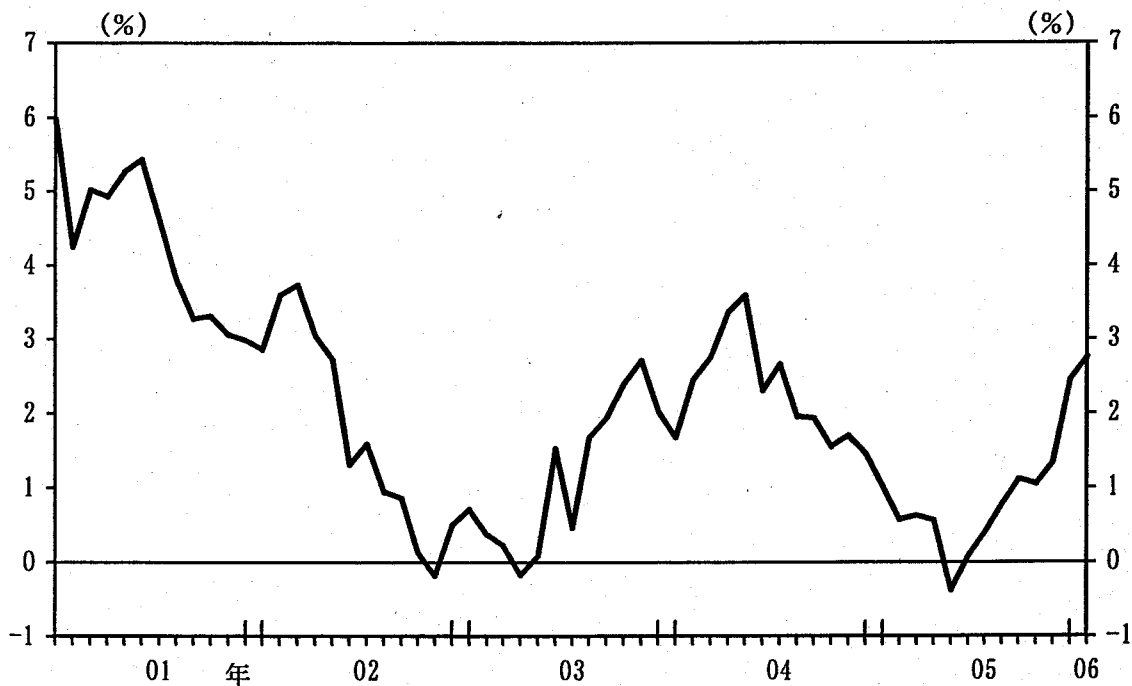
資本市場調達

(1) CP発行残高(未残)



(注) 1. 日本銀行と当座勘定取引のある銀行・証券会社の引受けによるもの。
2. 銀行発行分を含まない。

(2) 社債発行残高(未残前年比)

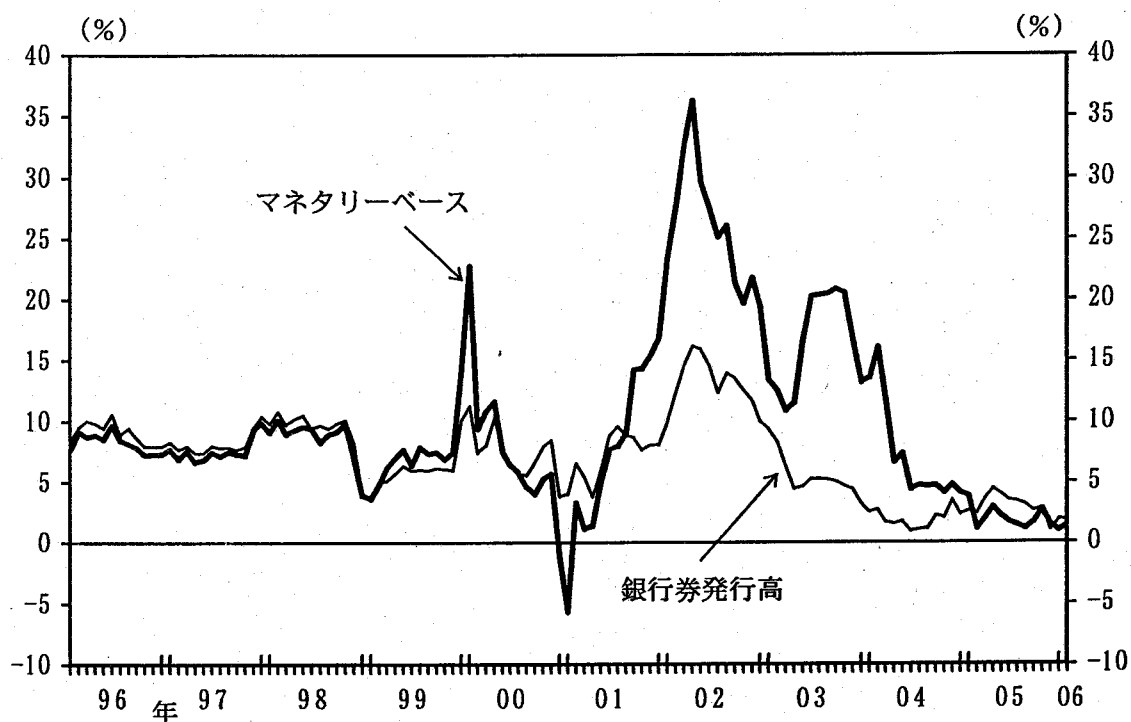


(注) 社債発行残高の前年比は以下の前提のもとで計算している。なお、今回、計数の確度をより高める観点から、計算の前提の見直しを行った。
① 国内、海外で発行された普通社債の合計値。
② 銀行発行分を含む。
③ 直近月分は、国内私募分に推定値を用いているなど、速報値。

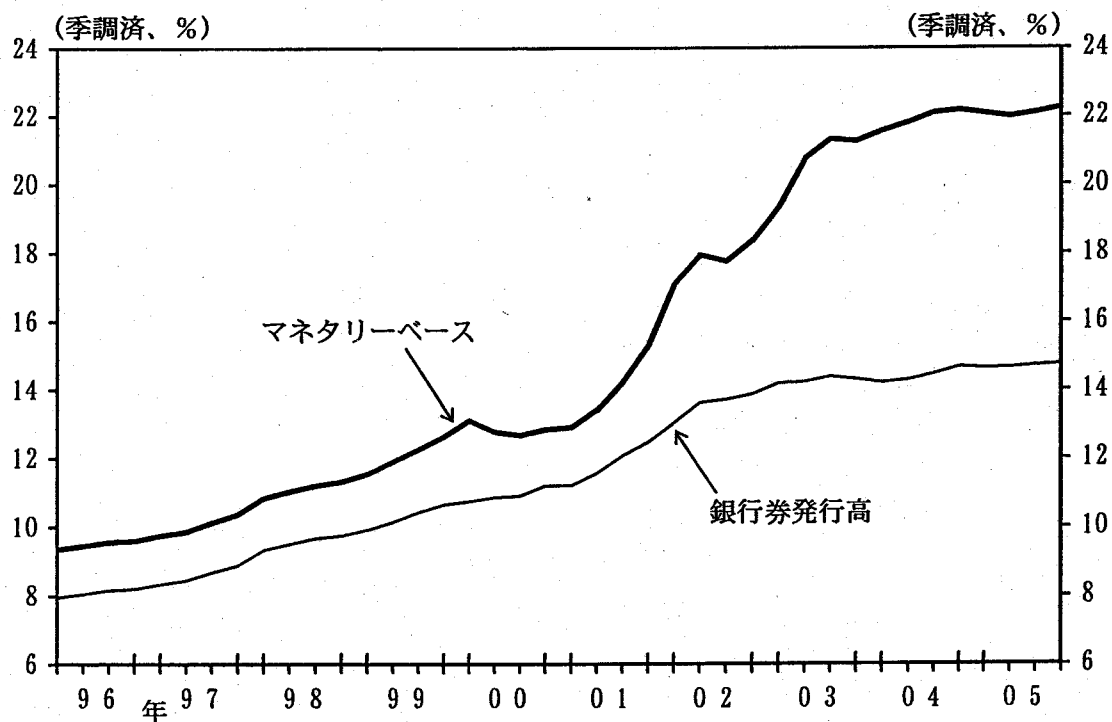
(資料) 日本銀行「貸出・資金吸収動向等」、日本証券業協会「公社債発行額・償還額」、「起債情報」、アイ・エヌ情報センター「Funding Eye」

マネタリーベース

(1) 前年比



(2) 対名目GDP比率

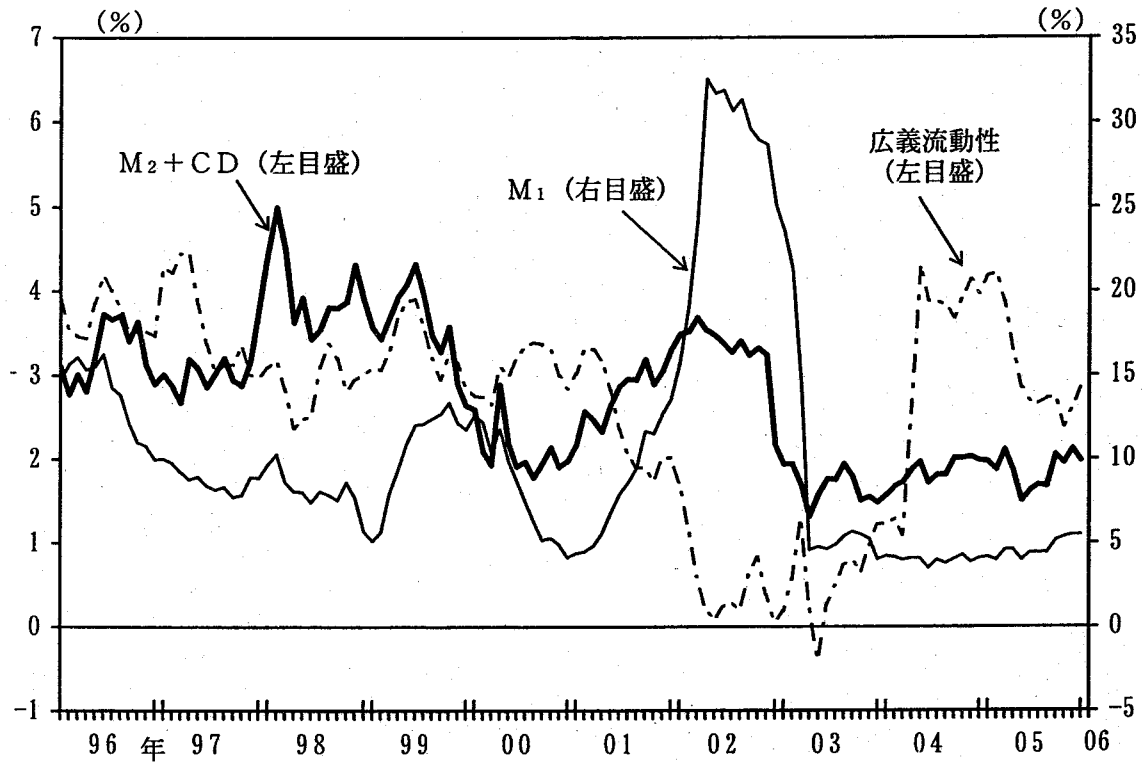


(注) 1. マネタリーベース=流通現金(銀行券および貨幣とともに金融機関保有分を含む)+日銀当座預金
2. 2005/4Qの名目GDPは、2005/3Qから横這いと仮定。

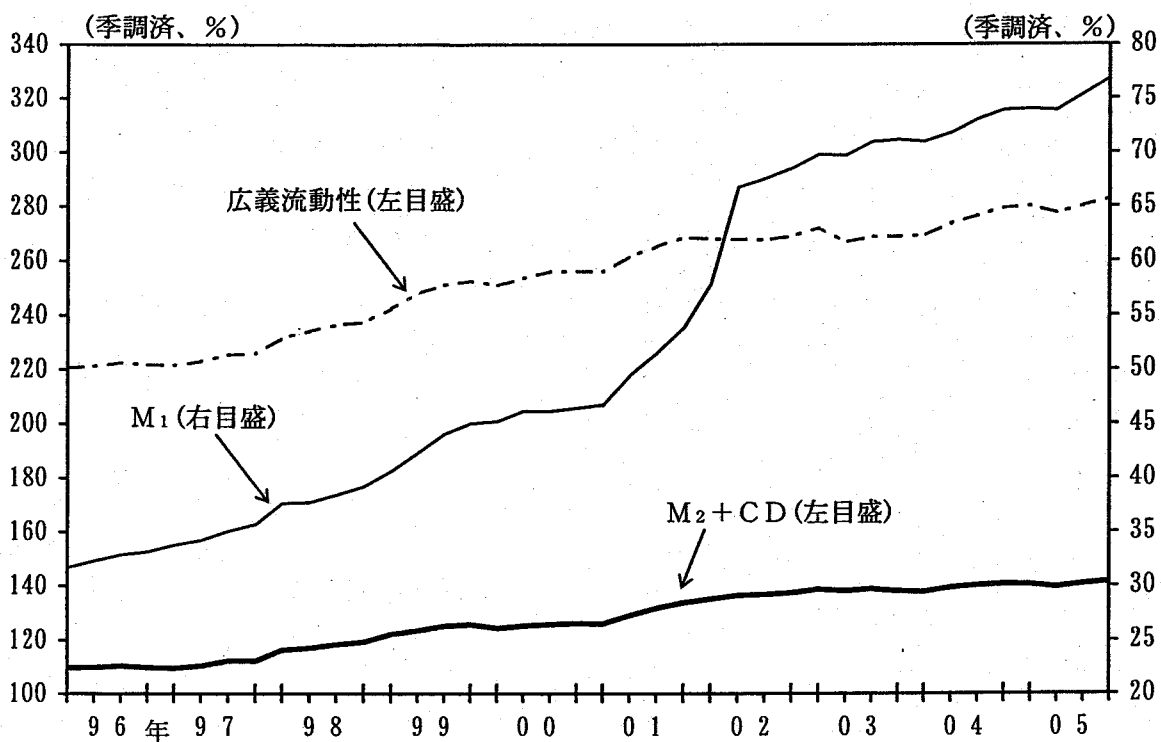
(資料) 内閣府「国民経済計算」、日本銀行

マネーサプライ

(1) 前年比



(2) 対名目GDP比率

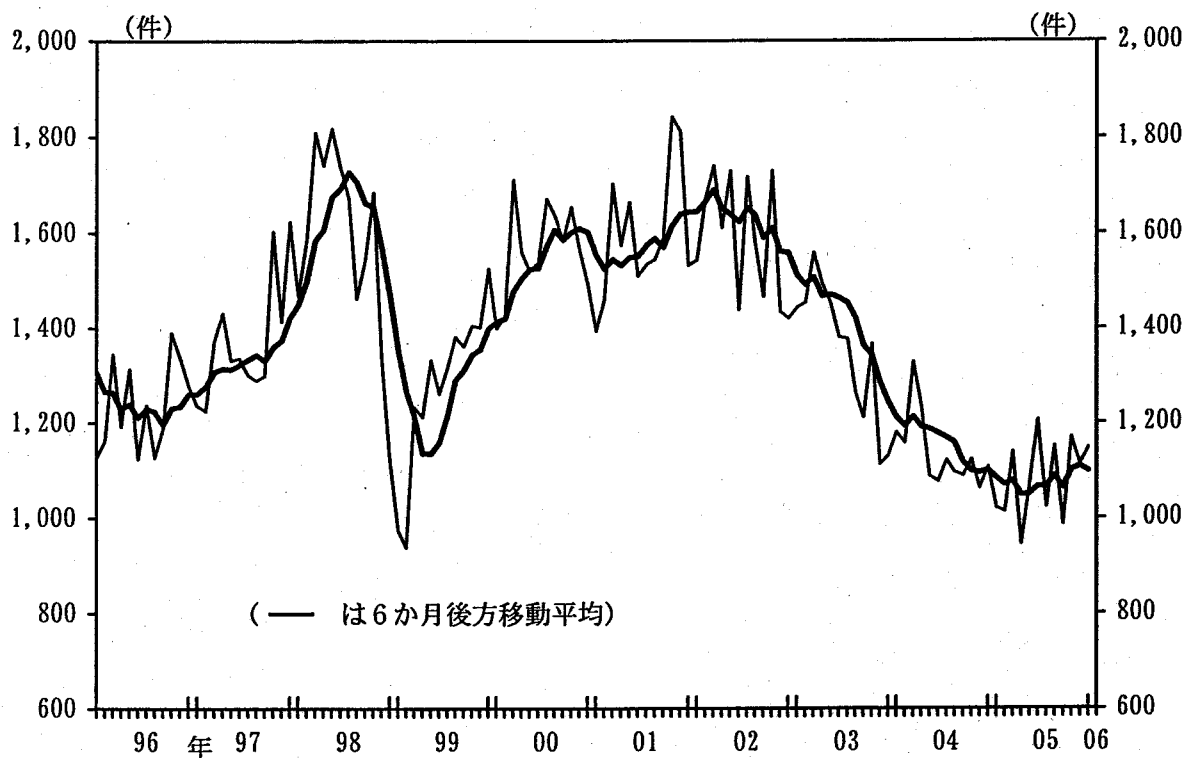


(注) 2005/4Qの名目GDPは、2005/3Qから横這いと仮定。

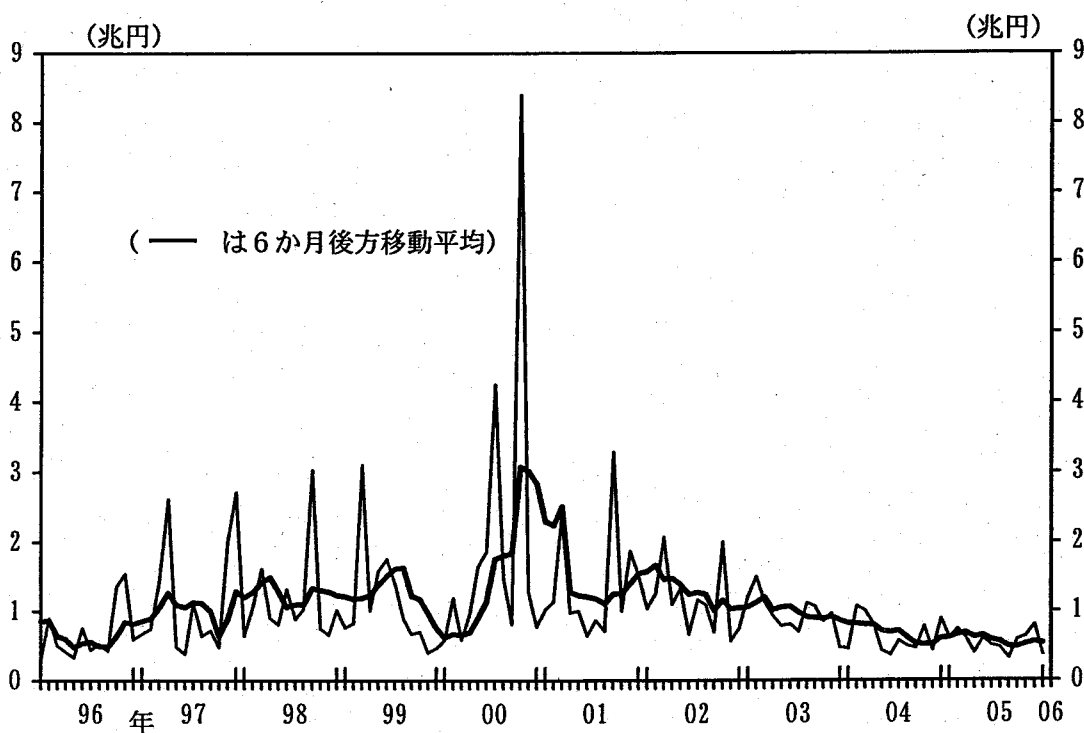
(資料) 内閣府「国民経済計算」、日本銀行

企業倒産

(1) 倒産件数



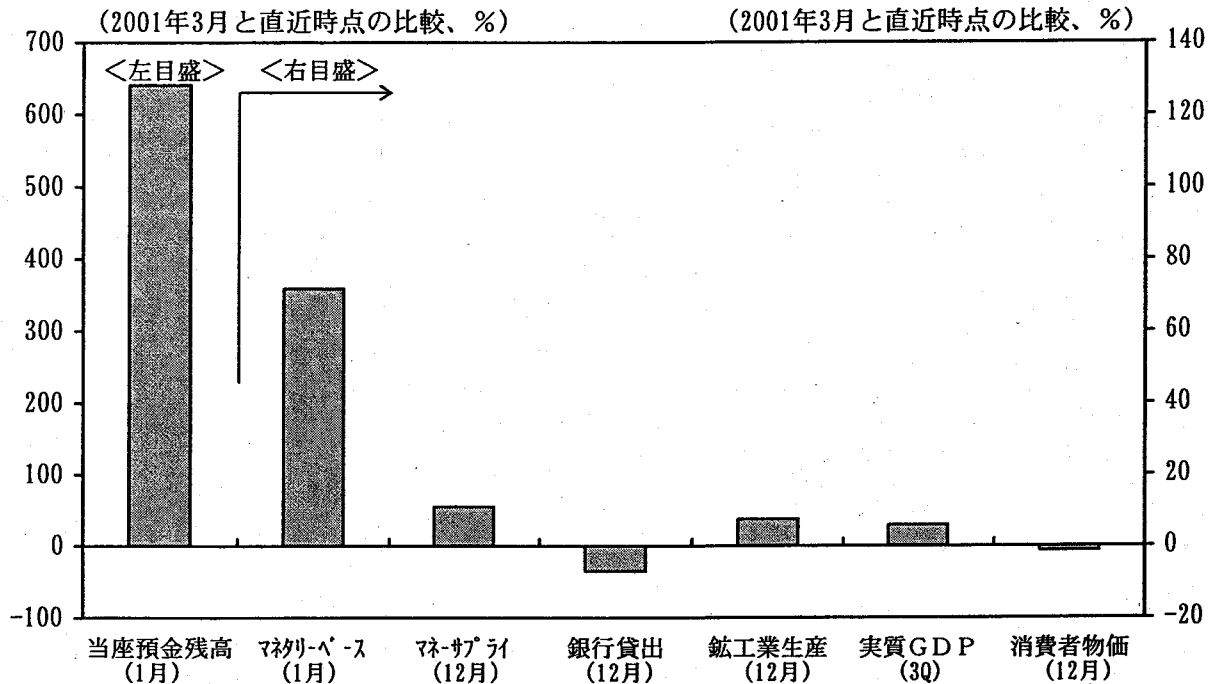
(2) 倒産企業負債金額



(資料) 東京商工リサーチ「倒産月報」

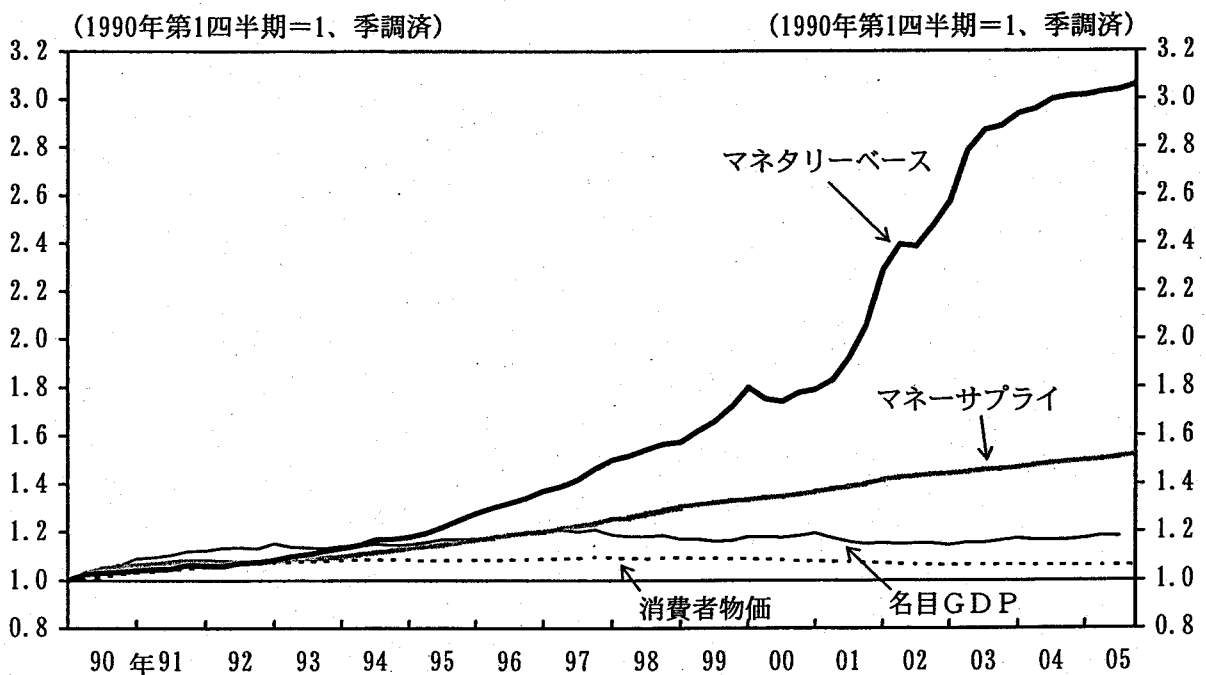
量的金融指標と経済活動

(1) 2001年3月以降の推移



- (注) 1. 当座預金残高と銀行貸出は原計数、その他は季節調整値。
 2. 実質GDPの基準時点は、2001/1Qを採用。
 3. 銀行貸出は、特殊要因調整後の計数。
 4. 消費者物価は、総合除く生鮮ベース。

(2) 量的金融指標と名目GDP (90年代以降)



- (注) 1. マネタリーベースは、準備率調整後の値。
 2. 消費者物価は、総合除く生鮮ベース (消費税率引き上げの影響は除いている)。

(資料) 内閣府「国民経済計算」、総務省「消費者物価指数」、経済産業省「鉱工業指数統計」、日本銀行